昭和五十年一月二十日印刷　昭和五十年二月一日発行（第二十九巻第二号）毎月一回一日発行　昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月十一日関西大会特別資本誌雑誌第二〇号

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

2 一月号

1975・2

奇譚クラス
1975・2

奇譚クラス
昭和五十年一月二十日印刷　昭和五十年二月一日発行（第二十九巻第二号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月十一日関西大会特別資本誌雑誌第二〇号

1975・2

定価六〇〇円

雑誌 2805－2

THE KITAN CLUB

Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan

2

¥600

団鬼六作

花と蛇

瞠目のサディズム小説の
総集篇、決定版
全一冊正、続篇総収録

奇譚クラブ臨時増刊号　定価一〇〇〇円（送料50円）方負担）

第1章　発端
第2章　恐ろしい陥穽
第3章　美人探偵登場
第4章　華麗な浣腸図
第5章　救援者来たる
第6章　救援への失敗
第7章　餓狼への好餌
第8章　悪魔の地下室
第9章　恐怖の笑い
第10章　翻弄される美女
第11章　淫蛇の執念
第12章　美姉妹の危うし
第13章　色事師の調教
第14章　落花微塵
第15章　美津子受難
第16章　密室の秘密ショー
第17章　脱走への饗宴
第18章　華やかな新顔
第19章　地獄の屋敷へ
第20章　一千万円の身代金
第21章　翻弄されるカップル
第22章　身代金奪取の失敗
第23章　涙の宣誓文
第24章　運命の逆転
第25章　奇妙な三々九度

第26章　飼育される白い動物
第27章　悪魔と悪女の悪業
第28章　悪魔の地獄図絵
第29章　逃走の恐怖
第30章　悪魔連の残忍な所業
第31章　落花無残の修羅場
第32章　淫さすなまめかしき美女の調教
第33章　すさまじいショーの展開
第34章　汚水にまみれた宝石の屈伏
第35章　華々しき美女の屈伏
第36章　あくまで対峙する陥穽
第37章　美女と美女
第38章　蓋恥図絵の展開
第39章　清純な令嬢の屈服
第40章　深人身令嬢と公開調教
第41章　小窓の美少女と公開
第42章　変性色事師の軌拗
第43章　京子の登場
第44章　京子へのスタート訓練
第45章　生れかわるスタート
第46章　低激しい男をと調教する令夫人の結婚
第47章　愛脳弟子を縛る
第48章　悪蓋恥と屈辱の日本婦人
第49章　悪室の汚辱
第50章　地獄の珍責を開陳するショー
第51章　淫靡な時代劇ショーの展開
第52章　華々しき美女の結末
第53章　清純な令嬢の屈服
第54章　あくまで対峙する陥穽
第55章　華々しき美女の屈伏
第56章　すさまじい水責の開陳
第57章　淫さすなまめかしき美女の調教
第58章　亀甲縛りの幻想
第59章　M女二輪の花
第60章　開股縛りの放恣
第61章　鏡前の開股縛りのひととき
第62章　愉悦のひととき
第63章　ハリツケ晒し
第64章　苦痛か快楽か
第65章　美肉吊り
第66章　一筋縄ではいかぬ女
第67章　逆エビ縛りに入る
第68章　責め撮影
第69章　愛撫の修羅
第70章　責めの俯瞰撮影
第71章　黒縄と白肌
第72章　身動き出来ぬ
第73章　ボリウムを縛る
第74章　浮上した女体
第75章　汚辱の縄
第76章　高手小手本式縛り
第77章　責めの陶酔境
第78章　責めたマゾ女
第79章　柱の彼方の天国
第80章　荒縄の海老責め
第81章　なぶられた猿ぐつわ
第82章　美しがなぶられた目の天使
第83章　海老縛りの妙味

……その他多数……

◎御注文は暁出版株式会社へ前金にて、お申込み願います。

奇ク臨時増刊号＝〈縛られた女ばかりの特集〉

女体緊縛写真集

定価一〇〇〇円（送料50円）

（カメラ・ハント楽我記……辻村　隆
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本　鉄三

カラー・フォト・セクション　柔肌に喰い込む麻縄（前田真知子）
グラビア―女体緊縛の華　金髪碧眼の美女（シーラ・ケニー）
笹打ちの痛苦（関谷富佐子）
浣腸責めの序曲（長井葉津子）
猫責めの美態（左近麻里子）
亀甲縛りの対照（梨花悠紀子）
麻縄と白肌の放心（座間明子）
責め疲れの虚脱（佐々木真弓）
沖縄美人の緊縛（川路むら子）
刺青玉子の縛り（渡部好美）
紅毛の白人責め（シーラ・ケニー）
狂変する裸の狂態（川路むら子）
海老責めの挑戦（座間明子）
鞭打ちの身悶え（関谷富佐子）
ボリウムに供て（渡部好美）
祭壇の生贄（金原加奈子）
稚妻は縄を知りぬ（中河恵子）
開股の正面と背面（長井葉津子）
非情の終末（川路むら子）
柱縛りの責めの完了（三浦純子）
処女縛りに途惑う（中河恵子）
麻縄に身をゆだねる（佐々木真弓）
盗緊縛の光と影
両手挙げ女体責め（長井葉津子）
柱宙縛りに浮く（中河恵子）
後手吊りに苦しむ（佐々木真弓）
鞭のこの法悦（関谷富佐子）
花柱をはんだ連縛（渡部好美）
蛇の静子で頂戴（中河恵子）
針つき折りの女体（長井葉津子）
二つ折りの哀歓（中河恵子）
猿ぐつわの白人（シーラケニー）
日本式縛りの女王にムチ（金原加奈子）
柱縛りに恥らう（関谷富佐子）

◎御注文は暁出版株式会社へ前金にて、お申込み願います。

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の方々の告白の投稿やモデルによって数多くの貴重な作品が誌上を賑わし、風俗文献誌としての絢爛たる金字塔を、打ち樹てました。真摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待に応えて写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるよう、お待ちしております。

○本誌愛読の女性の方でしたら、国籍、未既婚の別、年齢など一切問いません。採用させて頂いた方には、謝礼として一回につき壱万円以上拾万円まで、即金にてお払い致します。

○応募されました方々の個人的な秘密の漏洩は、御本人の許しが無い限り絶対致しません。

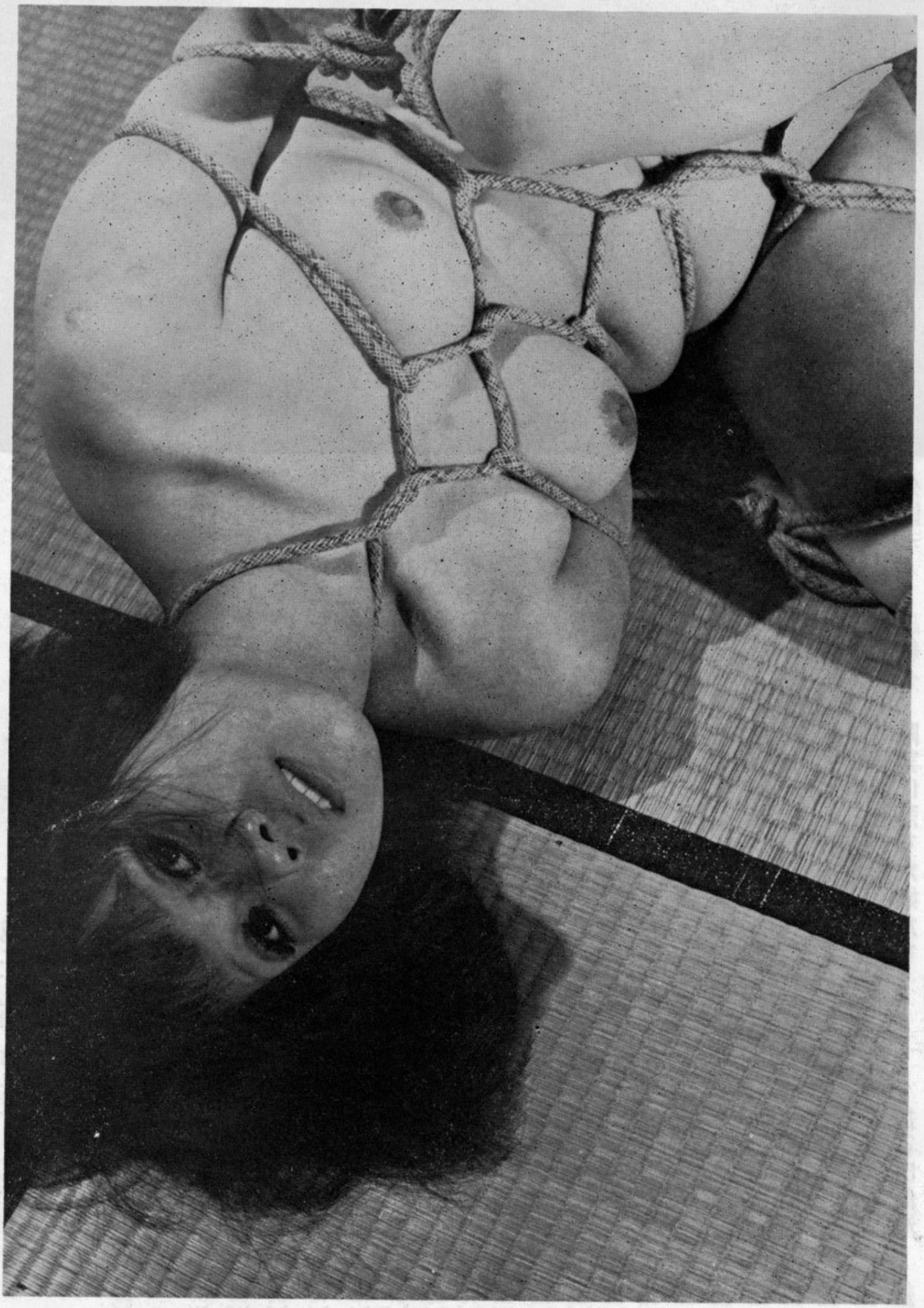
○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願います。写真があれば同封下されば好都合ですが、お手元に適当なものがなければ結構です。

●申込先。大阪市住吉区大領町四の六八　暁出版株式会社　編集部

○撮影いたしましたが、若しお書きになりたい場合は、そして御都合によって発表をとはご遠慮なく申し出て下さいませ。尚、お申込みの節、お好みの傾向、お支払いの方法、お書き添え下されば幸甚に存じます。

捨身の女、深田菊子

塚本鉄三・撮影



開股縛りのいたぶり

△深田さん▽

昭和五十年　**二月号目次**　〈第二十九巻　第二号〉〈通刊第三百二十四号〉

フォト「**猥らな悪戯の前兆**」
〈**モデル・江口淑子**〉……井上幸太郎…(29)
〔カメラ〕と〔ペン〕のルポルタージュ〈**深田菊子の巻**〉
『捨身の女・菊子のすべて』……塚本　鉄三…(30)
妄想譜　**わが青春と奇クとの出合い**……水上　伸…(60)
連載小説　**縄の命題**（SとMの交錯）……柏木はじめ…(66)
体験手記　**緋牡丹慕情**……瞳　耀太郎…(78)
告白　**わかめ酒異聞**……橘　内男…(87)
随想　**女・その謎の部分**……利根川五郎…(92)
論稿　**覗きの美学**（続）……舟橋　一郎…(98)
体験手記　**切腹の体験**……吉矢　和子…(108)
連載・Mグループ作品**『女の虜囚』**（12）……佐治　麻造…(114)
論評　**三麗花に贈るソネット**……朱知　好春…(128)
論稿　**さるぐつわ**（4）……新川　裕夫…(132)
論評　**縛りの美学**（最終回）……ロマン派生…(142)
青春の告白　**年上の女とのSM情事**……青山　健一…(148)
連載時代S小説**『紫蘭の門』**……風流極道軒…(152)
手記　**悩ましいゴム合羽**……梅川　幸子…(165)
体験告白　**鼻孔撮影会**……佐藤　光保…(170)
告白　**肛紋蒐集**……名古屋　誠…(178)
連載・M派交友録　**「流血から死へ」**……鬼山　絢策…(184)
外国ポルノ誌紹介　**陥穽に落ちた娘たち**……長谷田亀治…(200)
読者通信……編集部…(260)

カラー・フォト・コレクション

「羞恥の足挙げ・あどけなきM女」深田菊子☆「陶酔のひととき・縄に溺れた女」前田真知子☆「手吊りの拘束・初縛りの表情」堀 貴代子☆「白豚の悶え」山口艶子「首縄股間縛り」矢島靖子☆「ゴム衣裳責め」渡部 好美☆「菱縄乳房緊縛」荒尾 慶子☆「晒された人形」玉木章子☆「強烈な縄の味」笠井奈保子☆「消えない縄目」藤田明子

捨身の女・深田菊子（塚本鉄三・撮影）「縄に抵抗・棒縛りの羞恥・縄目の衣裳・開股縛りのいたぶり・寝位開股縛り」深田菊子☆「縄に耽溺・惑溺の猿ぐつわ」笠井奈保子☆「若々しき肢体」堀 貴代子 ☆「次の責めを待つ・足吊りの変型・諦観」前田 真知子☆「大の字の女体」富田 由美子☆「裸身の羞らい」佐々木真弓☆「股間縛り哀感・円形ベッドにて」中河恵子☆「後手吊りの序曲」長井葉津子☆「羞恥責めの陶酔」高村浩子☆「妊孕美鑑賞」木戸悦子☆「乳房をくびる」山原清子☆「仰向けをさらす・狂態」山口艶子☆「悦虐」矢島靖子

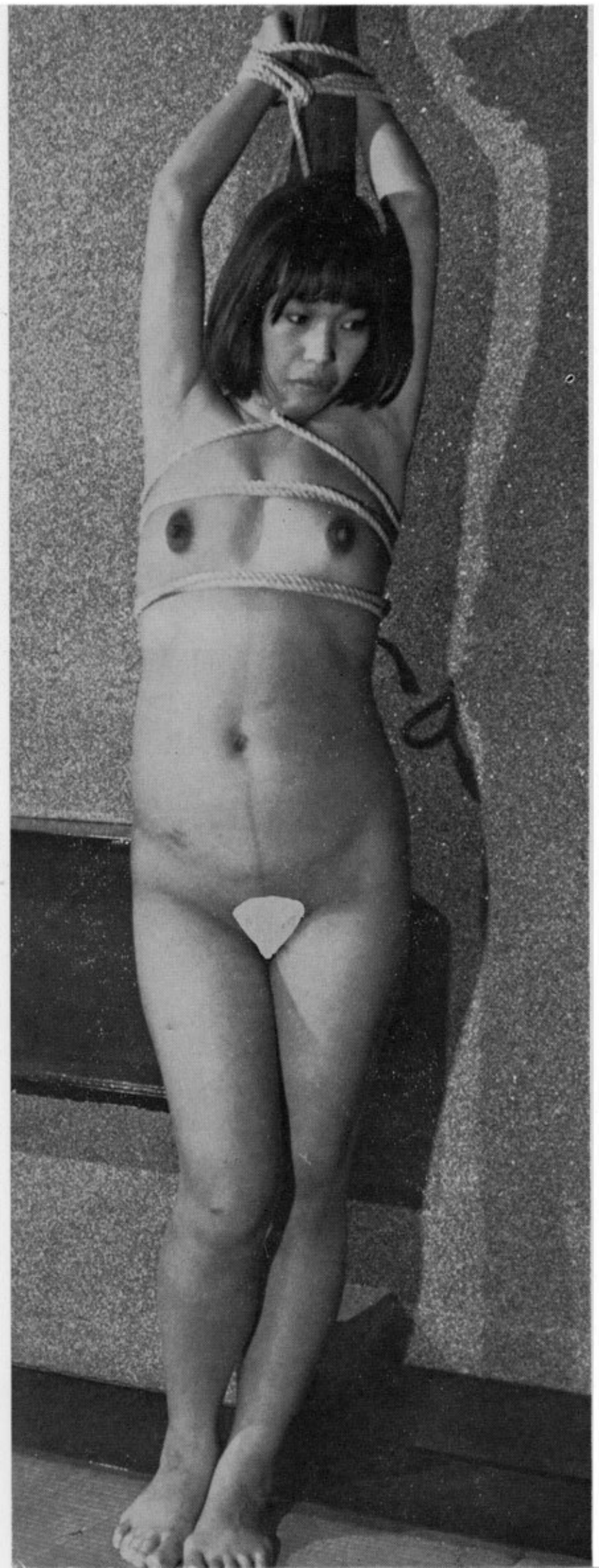
目次フォト……矢島 靖子・富田由美子

イメージギャラリー

「豊臀侍従・愛の渇き・責めの開幕」……水江 伸

「清拭の賜物・芸者藤江と隆三・奥様おやすみなさい・ワンワンお頂戴」……岡 たかし

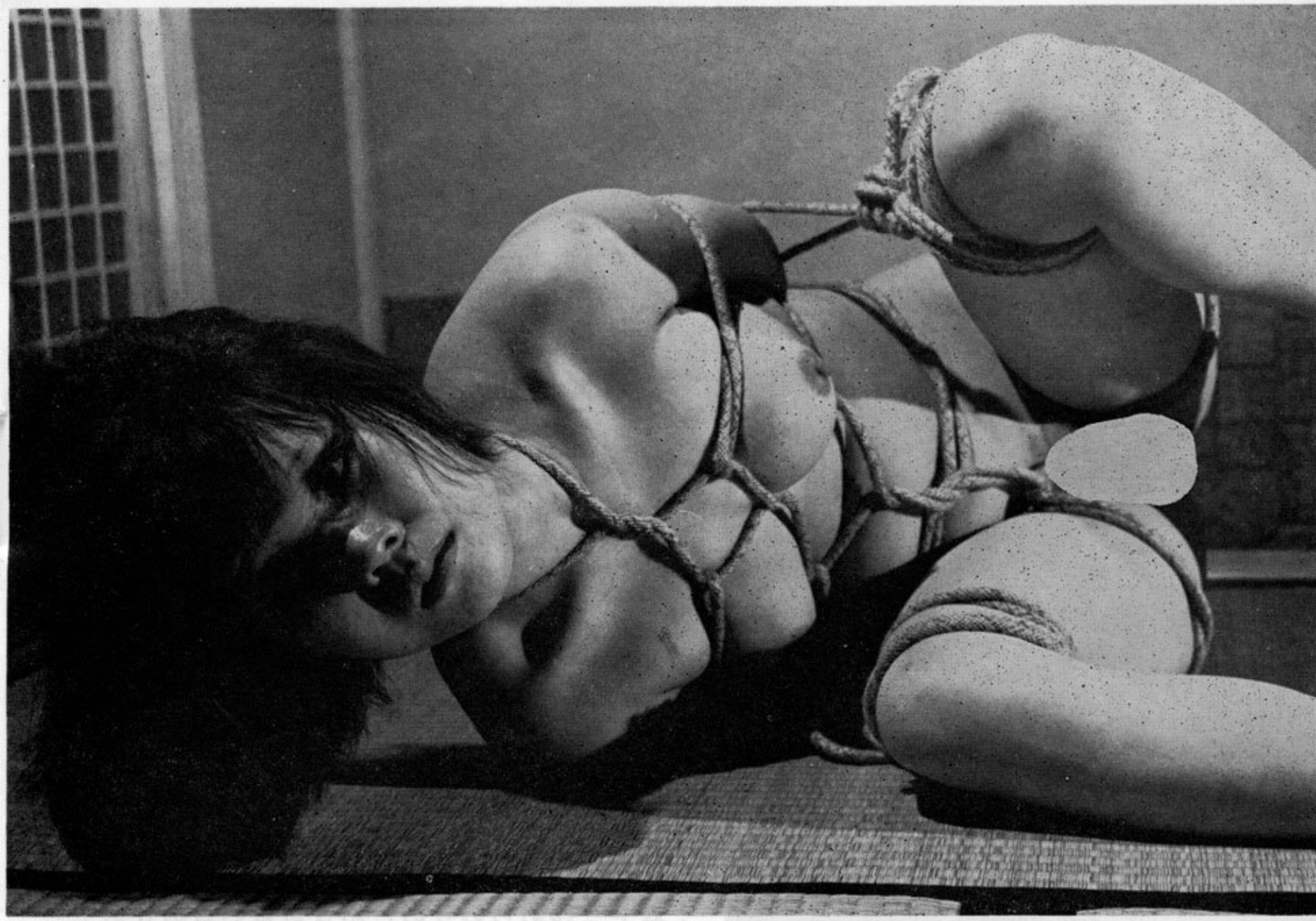
「八月の思い出・S子の夢・私と七人のドレイ」……春日田春夫

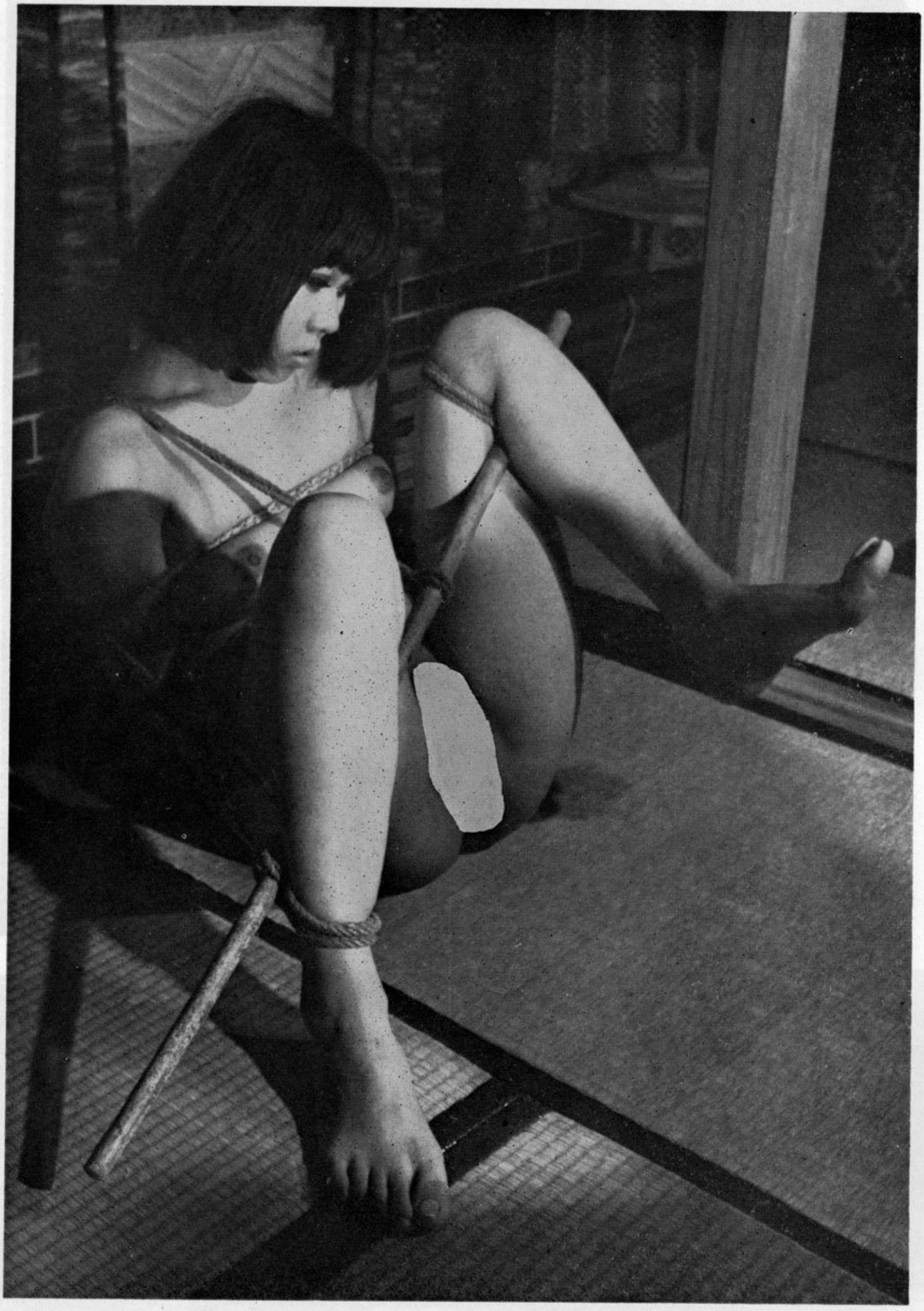


奇クサロン (208)

私の想い出と奇ク概観録……阪東 太郎
七色のフェチ……赤黄 紫茶
土田純一氏のプレイ礼賛……磨矢 圭太
妄想の中のヒロコ……高村 浩夫
マゾに、この世の極楽をみた……石原 糞夫
素晴しきゴムカバー……沖 洋
女の舌についての関心……荒尾 三郎
排尿と羞恥責めと乳房責め……門守 貪婪
秋野英子の近況……坂本 信三
深秋雑感 SM讃美……秋野 美水
深田菊子さんに憧れた小生……小島 真憲
お浣腸と私との出合い……早川美知子
拝啓、奇クの読者です……海野 秋子
露出狂の独り言……榊 三平
妊婦マニアの希望……古井 新也
SMに魅せられた二人……光本 洋子
女の煙草責めの構想……太箱牟世男
笠井奈保子抄……新田 妙夫
女体緊縛の三原則……嵐 竜児
ペンフレンドへの招待……島 圭一郎
振袖花嫁、衣裳責め……高橋 英樹

前田真知子嬢の眼……渋谷 晴男
女王様の出現を望む……宇津木 実
最近号の奇クとモデル嬢たち……毛利 雪男
褌裸女の刃一閃……室井亜砂路
被虐の映像・黒崎麗子……高原 三佳
みんなで浣腸のできる処を……高山 吉夫
マニアのたわごと……藤田 公一
SMセックスのアイデア集……根本 頑丈
またまた白豚姫出現……山田 春夫
SMエンマ帖……団 隆
VARIA・SADISM……小沢 準一
おしおきの浣腸……東野 桂子
セックス・ペット八重子のユニホーム……橋本 二郎
五官とサド・マゾプレイ……鴛谷 一郎
ライオンと犬とうさぎに
燃える千恵子……甲斐千恵子
真曽美夫人責めの構図……桜島 生
愛妻フォト通信……舟橋 一郎
晩秋の冷たき風
一人身にしむ高山の町……塚本 鉄三



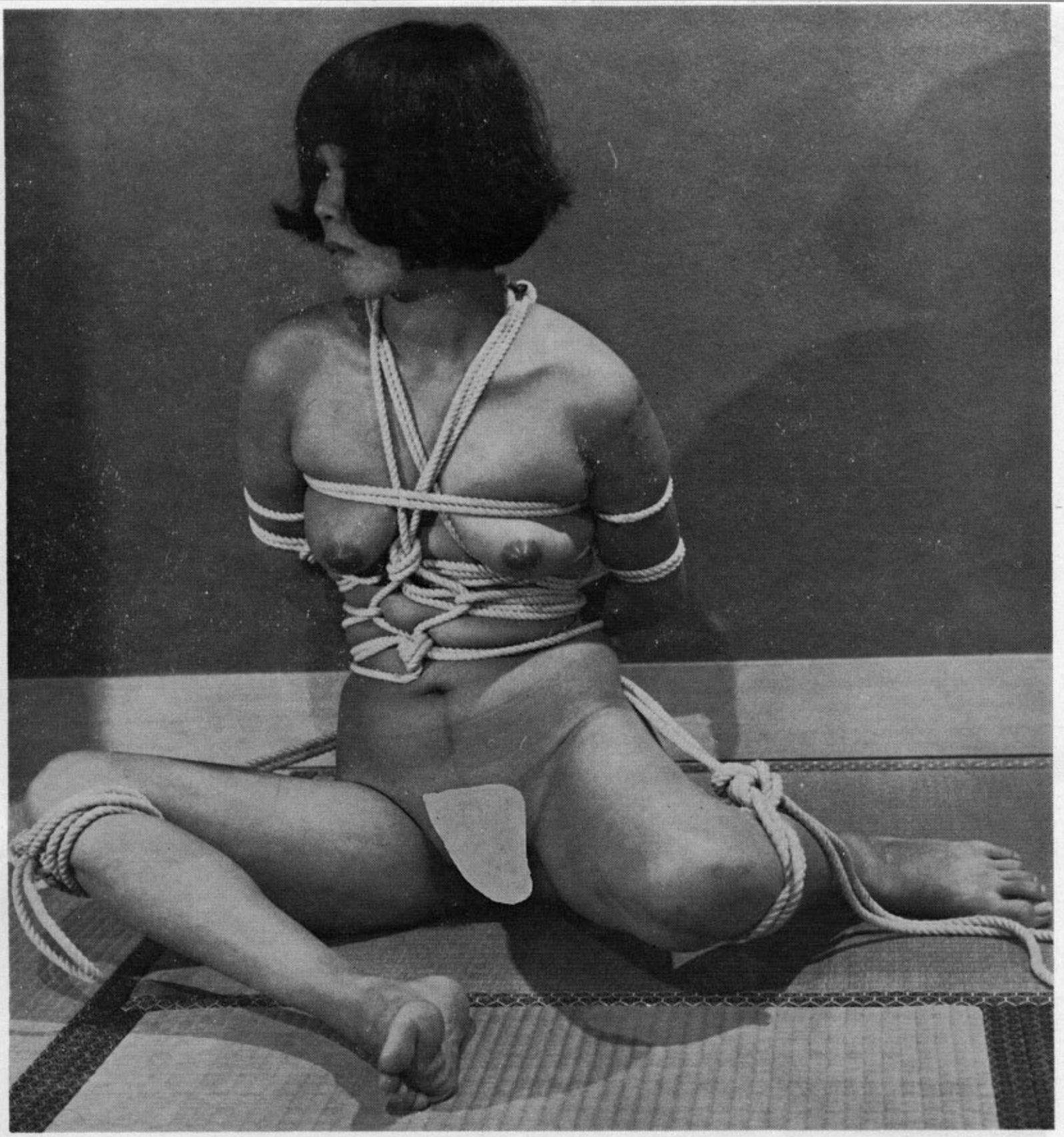


棒縛りの羞恥　≪深田菊子≫

縄に抵抗　≪深田菊子≫

縄に耽溺　≪立井奈保子≫

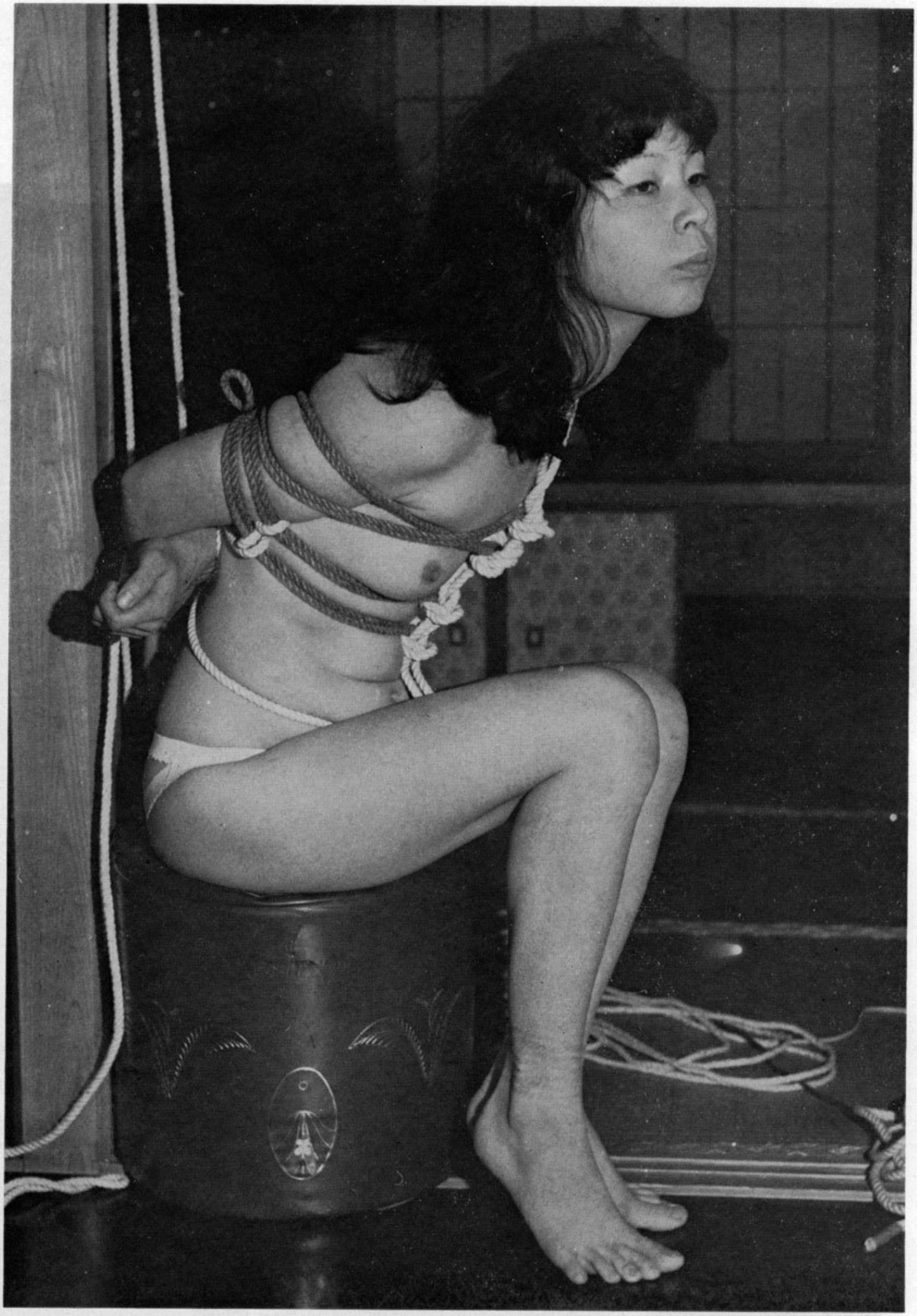
縄目の衣裳



≪深田菊子≫

若々しき肢体

≪堀貴代子≫



次の責めを待つ

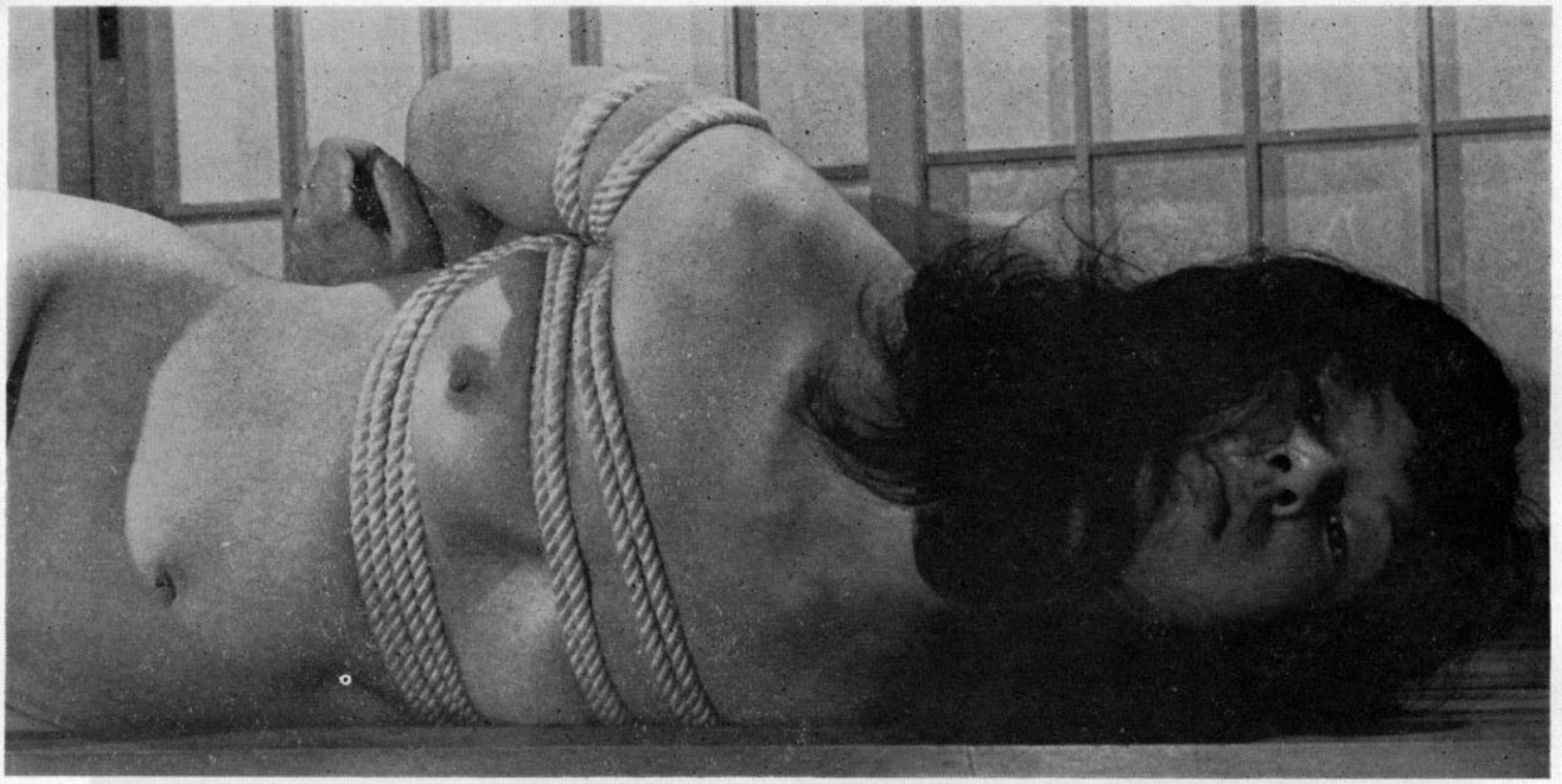
≪前田真知子≫

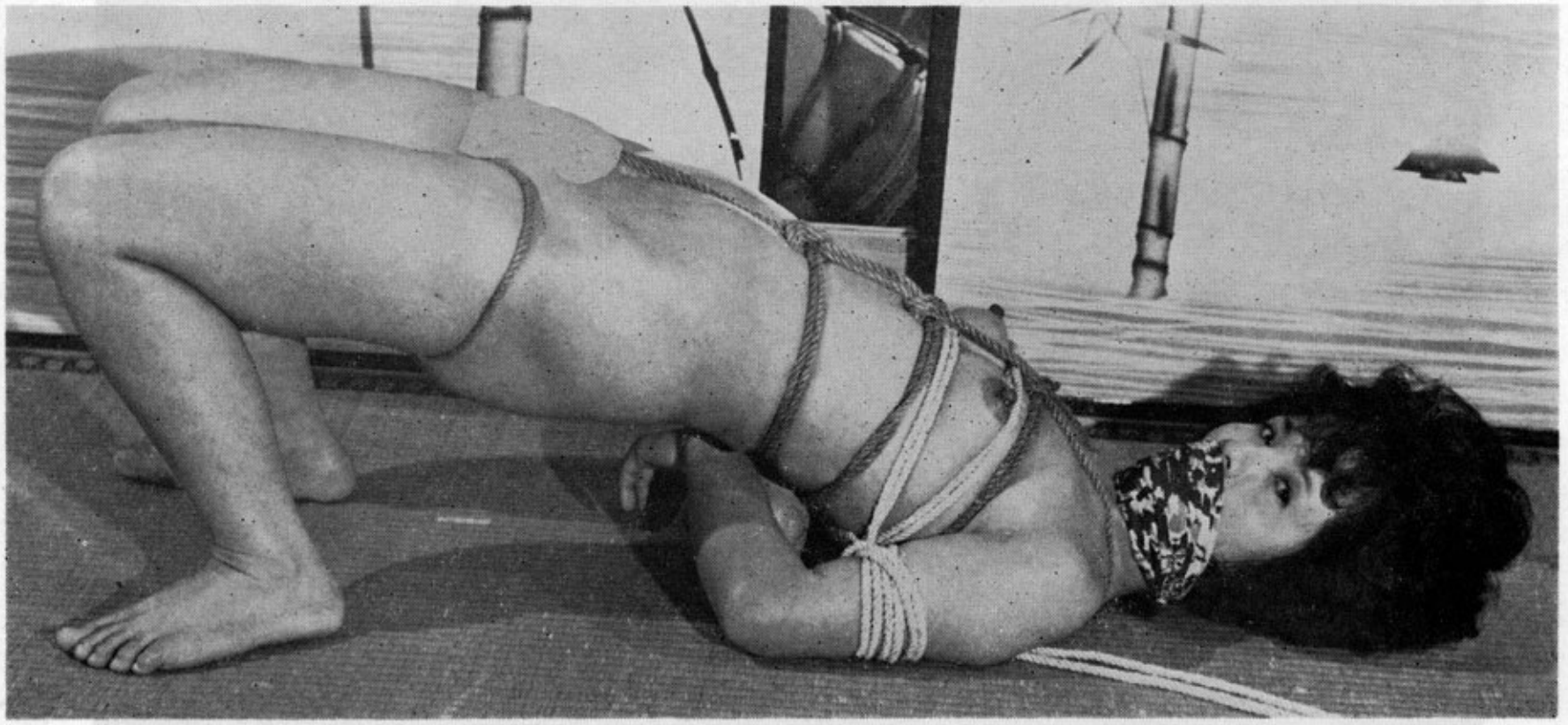
諦観　≪前田真知子≫

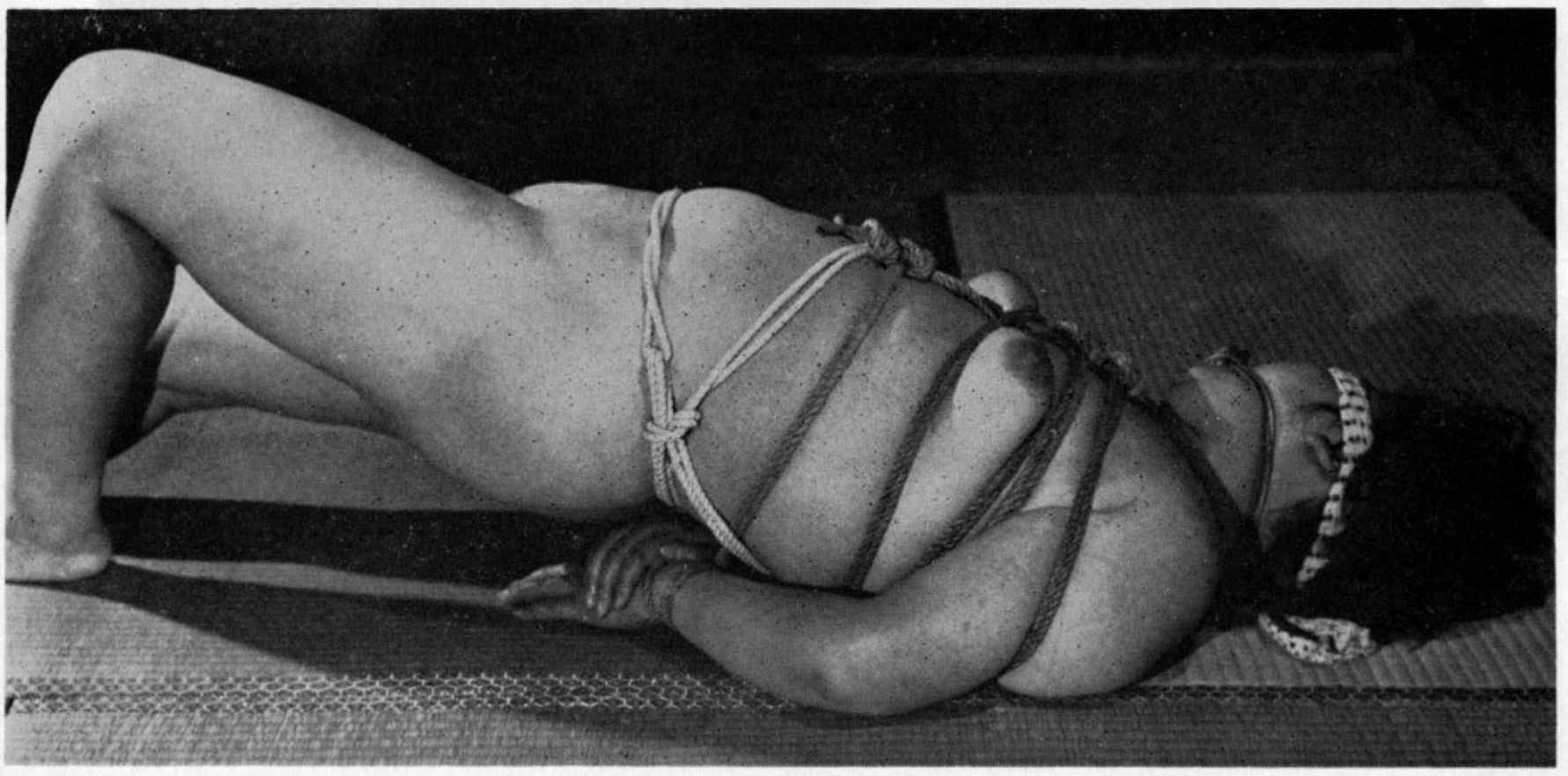
悦虐　≪矢島靖子≫

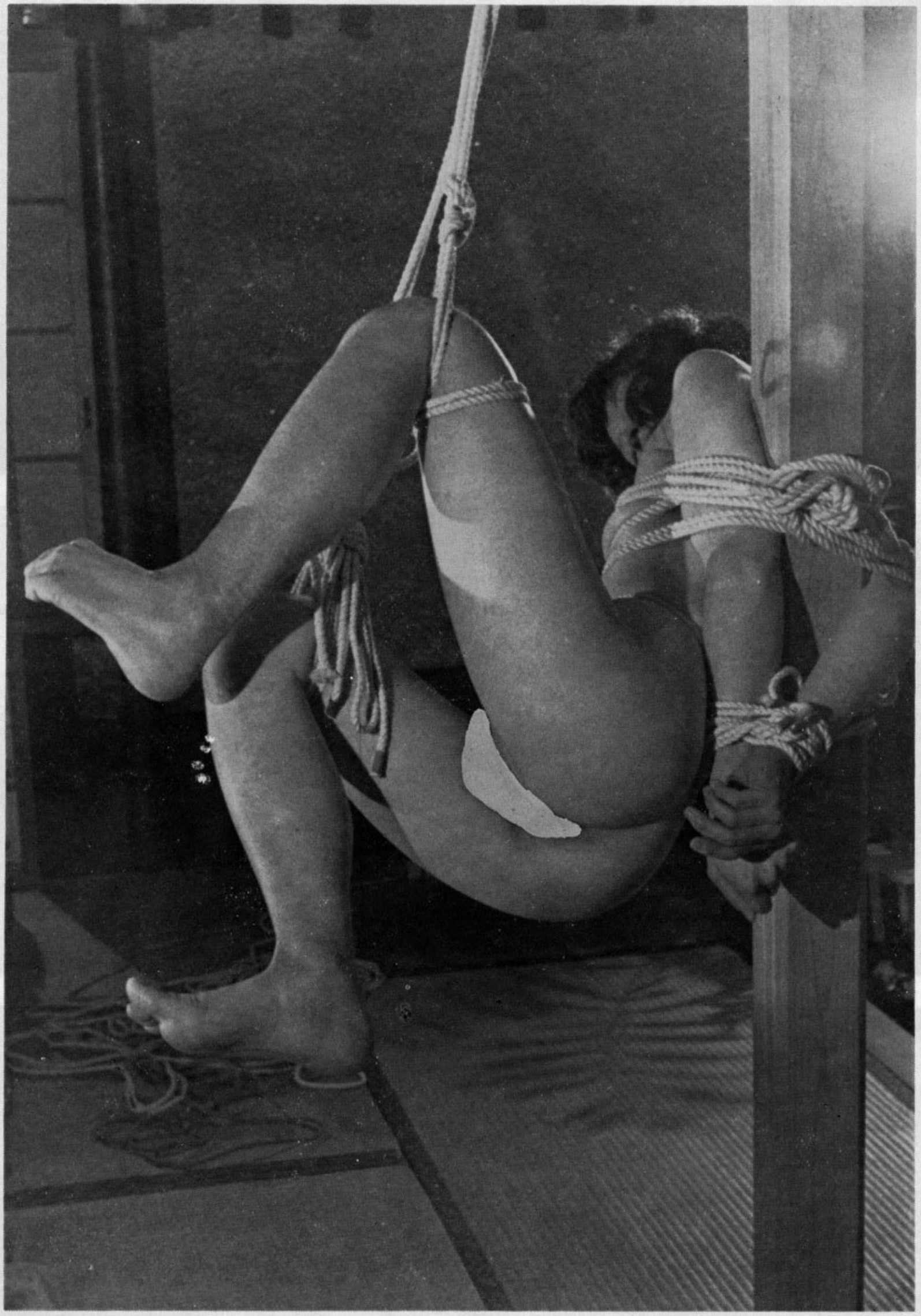
狂態　≪山口艶子≫

大の字の女体　≪富田由美子≫







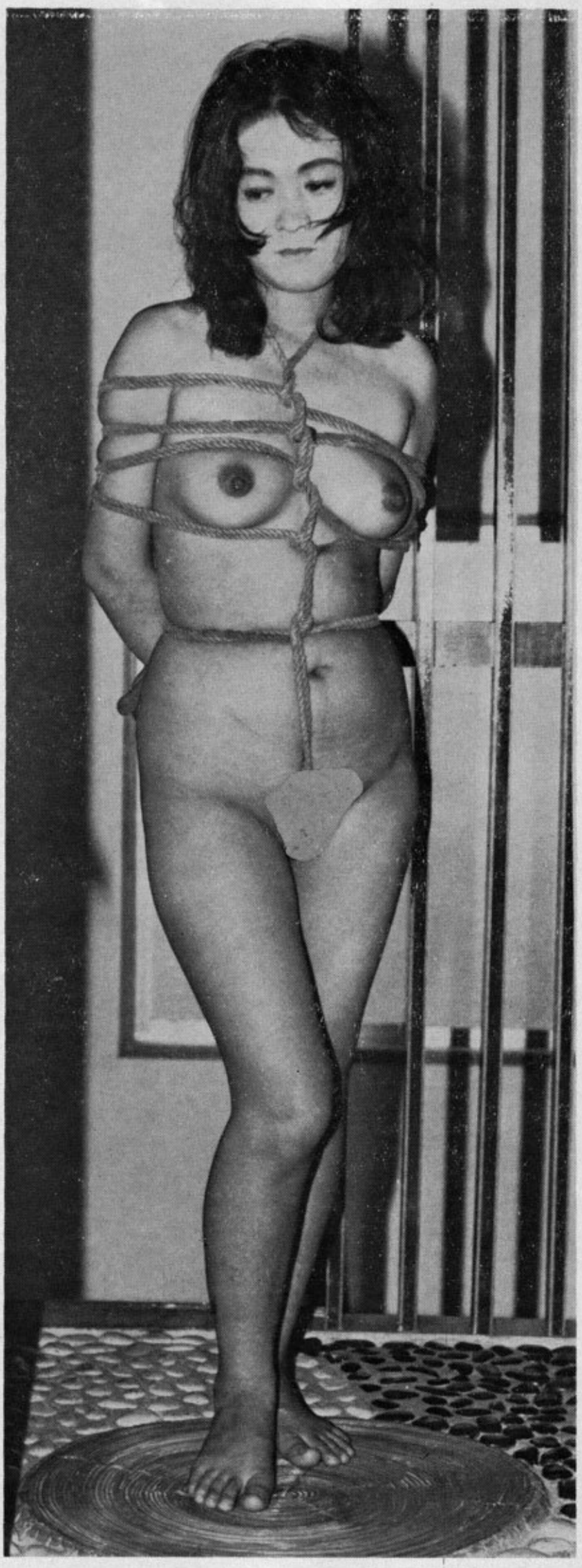


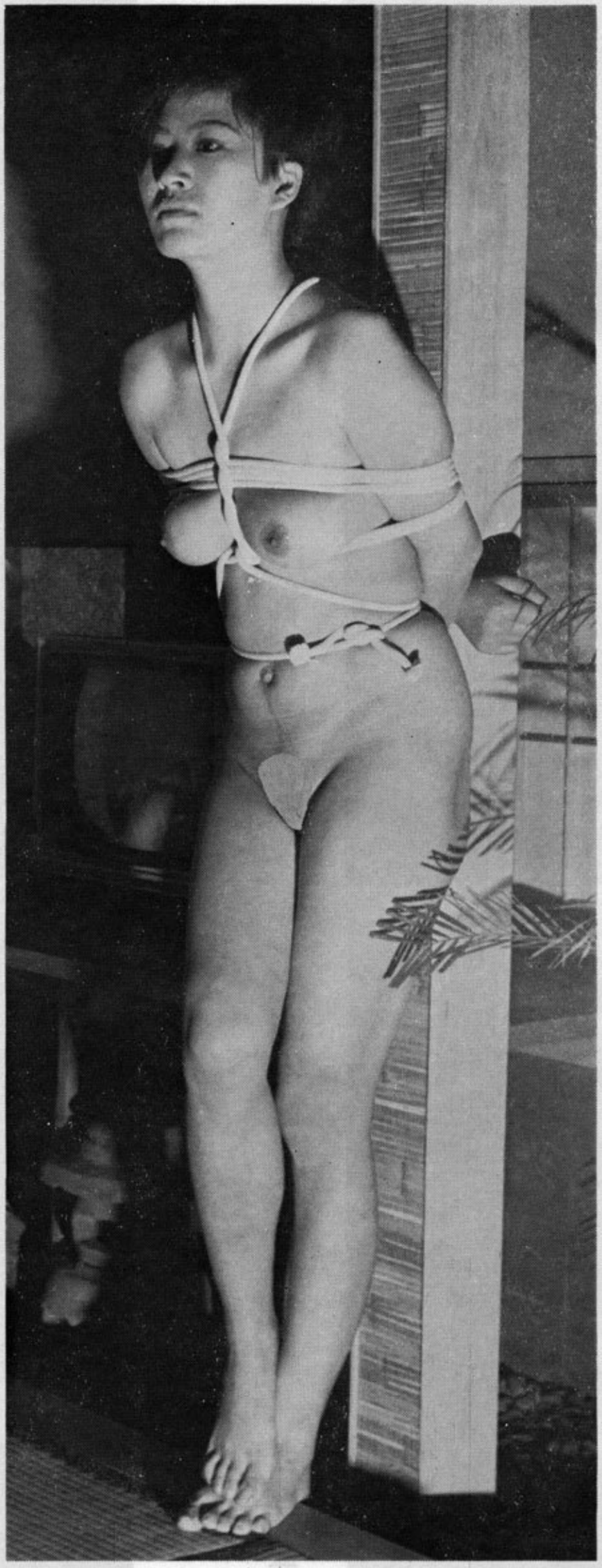
足吊りの変型

≪前田真知子≫

股間縛り哀感

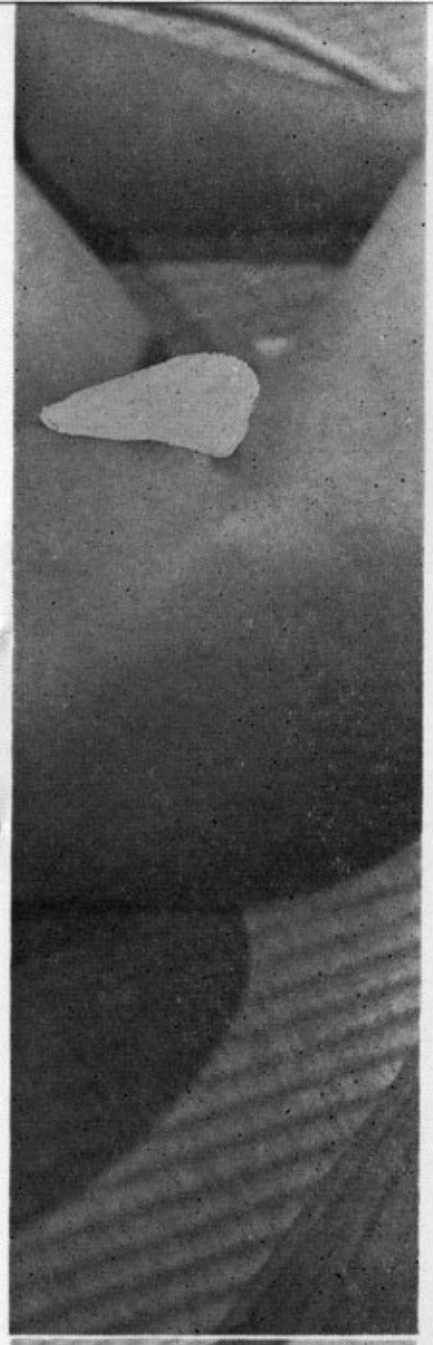
≪中河恵子≫





裸身の羞らい

≪佐々木真弓≫



後手縛りの序曲

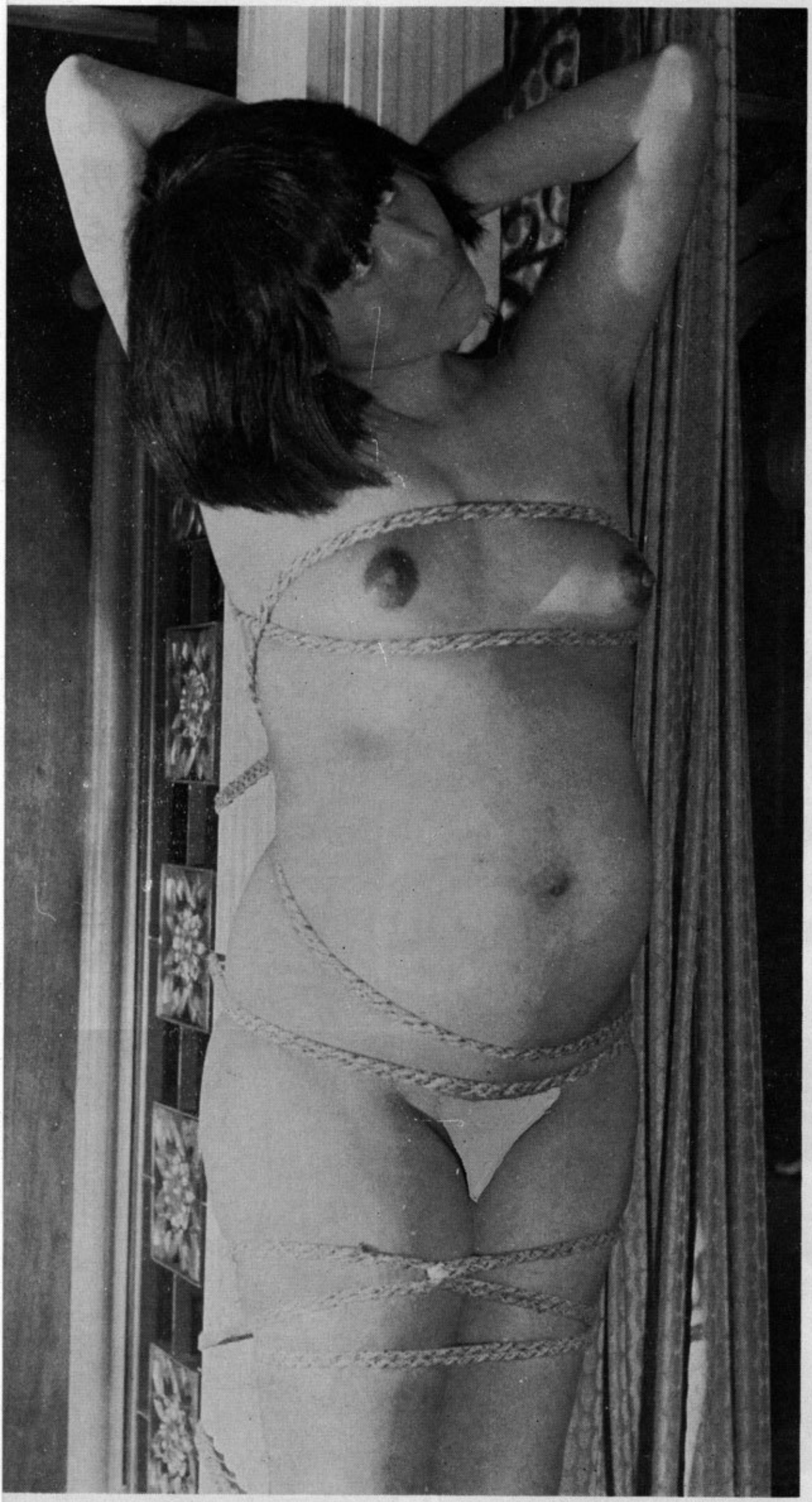
《高村浩子》

羞恥責めの陶酔

《長井葉津子》

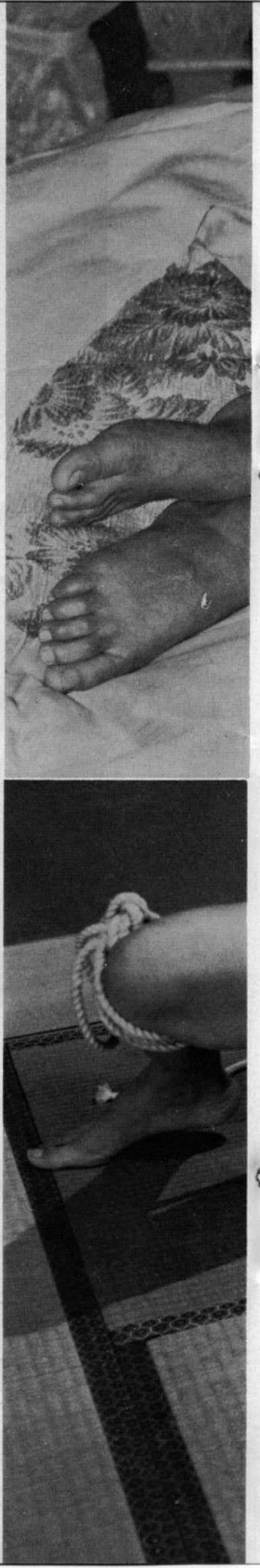
惑溺の猿ぐつわ

《笠井奈保子》



妊孕美鑑賞

≪木戸悦子≫



円形ベッドにて

≪中河恵子≫

寝位開股縛り

≪深田菊子≫

乳房をくびる

≪山原清子≫

仰向けをさらす

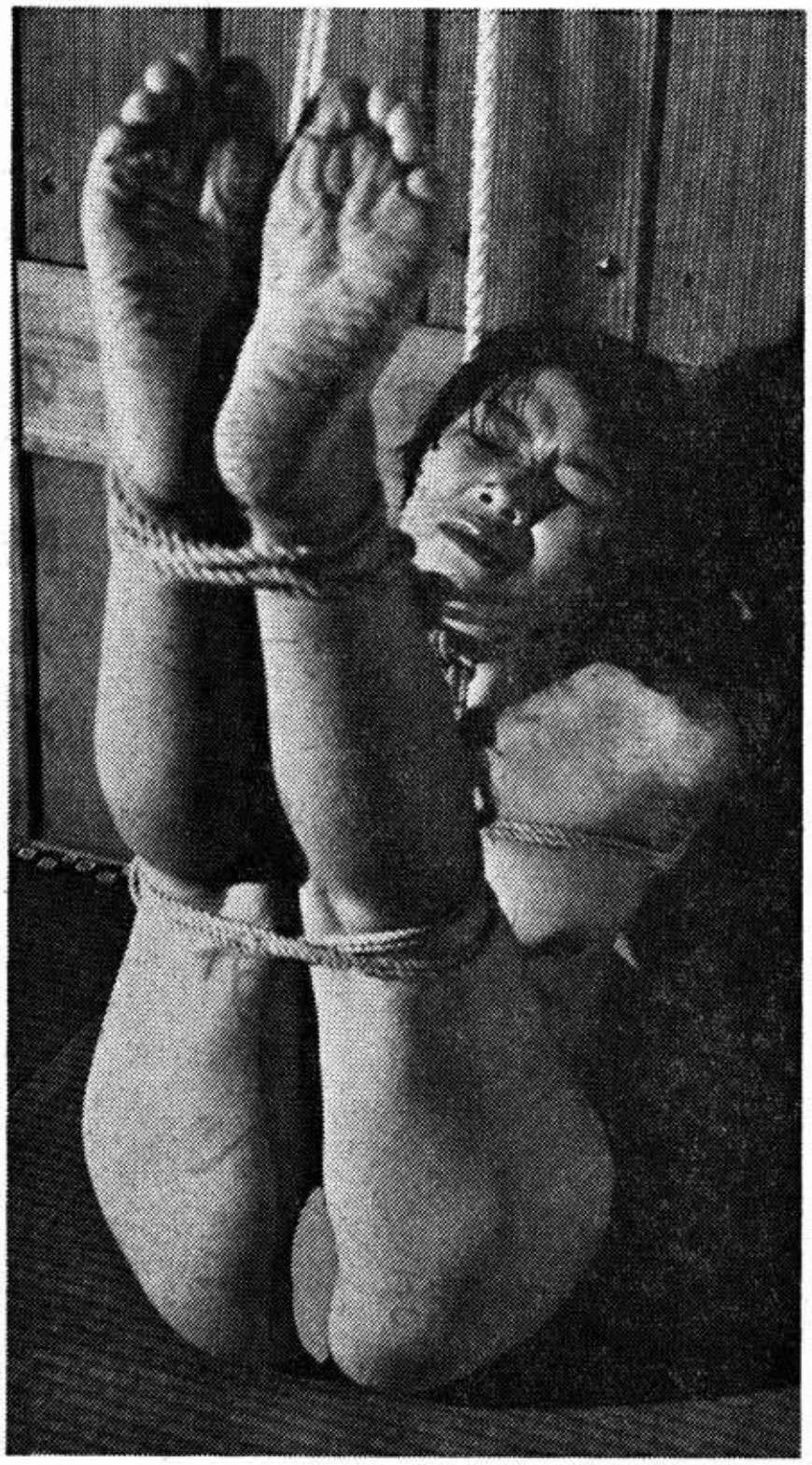
≪山口艶子≫

奇譚クラブ

1975

2月号

<第29巻 第2号 通刊第324号>



猥らな悪戯の前兆

……モデル……江口 淑子……

男心の酸いも甘いも、噛み分けた肉感的な女の縄で縛られた姿が、この一枚の写真である。首と、胸と、太腿と、足首とを、きっちりと縛られ、足首と後手とを吊られている、むごたらしい責められ方である。

少しの身動きも出来ないという苦悶の表情が、ありありと、この女の顔にあらわれている。後手首も、きっと厳重に背後で縛られ、自由気ままにならないよう、無理無体に吊られているのだろう。下手に悪あがきすると、首に掛かった縄が締まって、更に一層、彼女の自由な行動を奪ってしまうのだ。

肉づきのよい臀部を、殊更らしく前につき出して、男の好色にギラギラと光る目の前に晒しているのは、これから起るであろう猥らで、悪どい責めの前兆のように、私には思えてならない。この一枚の写真を見て、私は、そんな横しまな妄想を楽しむのだ。

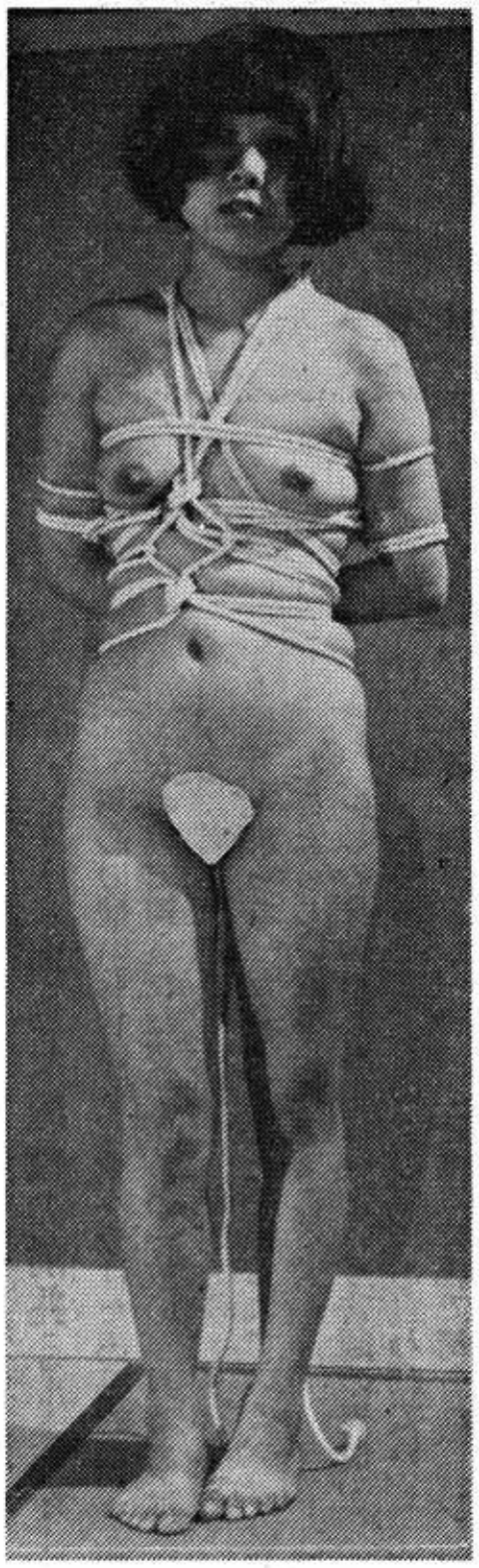
（井上幸太郎・記）

〔カメラ〕と〔ペン〕のSMルポルタージュ

捨身の女、菊子のすべて

△深田菊子の巻▽

塚本鉄三



十一月末に結婚することに決まったので、それまでに一度だけ、思いっきりプレイをしたいと深田菊子から言ってきたとき、私は、いずれ近いうちに他の男の持物になってしまう彼女の肉体を、その日一日だけ、自分の思いのままに翻弄してやりたいと思った。畳の上に俯伏せに押えつけて、後に捻じ曲げた両腕に縄を掛けていると、顧った菊子の瞳が怨ずるような目ざなしを私の方へ向けた。これが灼熱の今日のプレイの序曲だった。『この女が結婚してしまったら、もうプレイが出来ないのだ』という切なる思いが、私をして狂暴なふるまいに馳りたてていった。

☆結婚する深田菊子

十月八日の昼すぎのことだった。

深田菊子から、突然、電話があった。

例の鼻にかかった甘ったれ声が、電話口から流れてくると、私には直ぐに彼女からだということがわかった。

今年になってから数回、時折り、思い出したように電話をしてきて、勤め先でのこと、他の男とプレイをしたことなどについて、隠しだてすることなく、ざっくばらんに、話しかけてくるのが彼女、深田菊子の常だった。

しかし、その日の彼女からの電話は、いつもと違っていて、軽口を叩くということもな

く、至って真面目であった。

彼女の話を総合すると、勤めていたレストランに、よく来るお客の青年と春ごろから知り合いになり、五月の末に婚約、そして十一月二十四日に結婚式を挙げることになったというのである。

「いやあ、とうとう、菊子も結婚することになったか。そりゃ、お目出とう」

私は深田菊子の新しい人生の門出に対して心から祝いの言葉を述べた。それと共に、今までに彼女と重ねてきたSMプレイの数々が走馬燈のように胸の中をよぎっていった。

奈良から京都へドライブして、日が暮れてから訪れた山峡のモーテルで激しいSMプレイに溺れたこと。琵琶湖でモーターボートを走らせて、沖合で素裸になって泳いだこと。水車小屋のあるホテルで爛熟したプレイに耽ったことなどが、一瞬、目先にちらついた。

「菊子が結婚してしまうと、もう、SMプレイも出来なくなるね」

私の口から、思わず、そうした悔恨めいた言葉が洩れてしまった。今まで、彼女から誘いのような電話を幾度も貰っていながら、忙しいとか、なんとかいって言葉を濁していたのが、今更のように悔まれたのだ。

「そうね、結婚してしまったら、もう当分はプレイも出来そうにありませんものね。それで、私、お願いがあるんですけれど、結婚をするまで、一度、今までの思い出に残るようなプレイをして頂けないでしょうかしら。お忙しいとは思いますが……」

プレイをしたい——という彼女の言葉を聞いたとき、私は年甲斐もなく忽ちにしてエレクトしてしまった。彼女と繰り返した幾多のセックス・シーンを回想したからだ。

電話口で女の声を聞いて、こんなになるなんて、私にしても久々のことだ。

私は一も二もなく承諾したのは勿論だ。

「十月十七日っていう日、知ってる?」

「ええっ、十七日って、それ何?」

「ははーん、もう忘れたかナ。昨年の十月十七日、雨の日、菊子と逢ったじゃないか。真っ赤なレインコートに真っ赤なレインシューズ、それにワンピースも赤色だったネ」

「まあ、よく覚えていらっしゃるのね。驚い

たわ。うふふ、私、あのときのこと、思い出したら、とても、恥かしくって……」

そこで、彼女は絶句した。

赤面しているか、思い出し笑いしているのか、間をおいている間、電話口から彼女の吐息が聞えてきそうな気がした。

「だから、今年も都合が悪くなかったら、十七日に、しようじゃないか」

「ええ、私は九月から、お仕事はやめていますから、いつでも結構なんです」

「じゃあ、決めた。十七日にしよう」

それから二人で、時間と待合せ場所とを相談して決めた。

深田菊子が結婚する。

それは若い女性としては当然のことなのだが、私は花嫁衣裳を纏った彼女の姿を念頭に思い浮かべると奇異な感がした。

新婚旅行、そして新婚初夜を迎える深田菊子。相手の男性って、一体、どんなタイプの青年なんだろう。五月に婚約したと言っていたが、彼女のことだから、きっと激しい婚前交渉も、幾度となく持ったに違いない。

そんなことを考えると、私の胸は柄にもなく嫉妬心に灼け焦がれた。

菊子が結婚する。

嫉妬の心が私の心も身も快く揺すぶる。

そして、彼女の放った尿(ゆばり)の臭いが、ほのかに鼻先に匂ってくるような気がした。

全裸のままで、手摺りに開股縛りにして目の前で排尿させた、あの日のことが、まざまざと私の目に蘇ってきたのだ。

更に、オシメを当てて、生ゴムのオシメカバーを穿かせて、布団の中で放尿させたときのことも、ありありと目の前に想い出した。

ジュ、ジュ、ジューと、布団の中に篭った音と、オシメカバーに響くような、あのときの放尿の手ごたえが忘れられない。

尿でベトベトになったオシメを投げすてた後で掌で触った、彼女のお尻のべっとりと、へばりつくような濡れた肌の感触。ムッと鼻をつく、甘酸っぱいような臭気——。

その、どれ一つを取ってみても、私の官能を揺すぶらないものはない。

男の目の前で放尿するということ、いや、排尿させられることに、異常なまでに興味と関心と、執着とを見せる深田菊子。こんな女って、果たして、この世に、あるだろうか。

洋服を着ているときは、明るくて、無邪気で、虫も殺さぬ可愛いい顔をしていながら、洋服を脱いだら、その真っ白いなかには、男心を狂わす奔放な血が、煮えたぎっているのだ。

何の脈絡もなく、私は深田菊子と初めて逢った日のことを、ゆくりなくも想い起こしていた。その頃、彼女は大阪の北区に住んでいたので終点に近い地下鉄の駅前を待合わせ場所に指定したのだが、彼女は、その地下鉄を利用せずに、タクシーを乗りつけてきた。

タクシーから降りてきた深田菊子を見て、私は先ず、その若くて、可愛いいのに、驚いた。

一メートル六三センチの長身を、横縞のワンピースで、ぴったりと包み、お合羽にした顔立ちは、むしろ、あどけないくらいなのだ。

満開のツツジの公園で、スナップを十数枚撮っていると、そこにいた若い男たちが彼女を見て、ビュービューと口笛を吹いて冷やかすのだ。大柄で色白、真っ白い素足にサンダル・シューズという格好は、どう見ても目立ちすぎるのだ。それでも彼女は、私の言った通りポーズをとった。そんな人目を少しも意識した風のない落着いた態度だった。

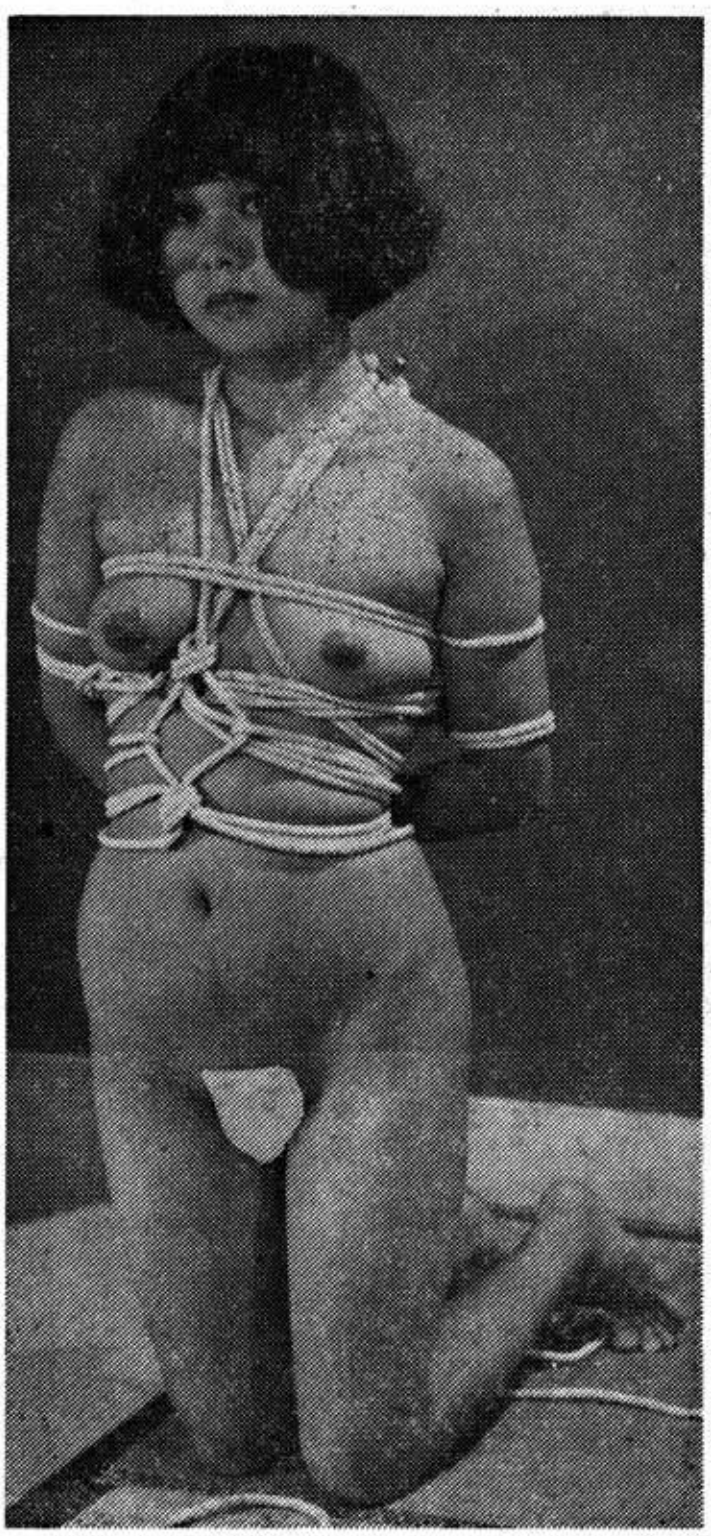
それが、私の車に乗り移って、しばらく走ってからだった。彼女は、オシッコがしたいと言い出したのだ。

もう三年も以前になるのに、そのオシッコがしたいと言い出した彼女の言葉が、今でも特に私の印象に強く残っている。

ひよっとしたら、彼女は、そのとき、草むらの中へでも連れて行かれて、私の見ている前で放尿させられたかった——のかも知れない。モーターインも近くには急に見つからなかったし、それは野外放尿をさせる絶好のチャンスだったかも知れない。

だが、しかし、初対面のその日、私は、そこまで悪魔的にはなれなかった。

十二月号で、彼女が奇クサロンに載せてい



た。それに、いつ来ても空いていて、どちらかが先に来たとしても、コーヒなんかを啜りながら、ゆっくりと待っておれた。

私がソファーに腰をおろして、コーヒを注文し、おシボリで手を拭いてからスポーツ新聞に目をやっているとき、深田菊子がドアを排して入ってきた。

目のさめるようなグリーンのテーラード・スーツを長身に、ぴったりと着こなして洋服と同じ色の小さなクラッチ・バッグを提げて入ってきた彼女は、誰の目にも、はっと目に止まる、あでやかさだった。

入口の方へ視線を向けている私に気づくと軽く会釈してから、すうっと前に坐った。

「お待たせしました」

彼女が坐ると急にあたりが明るくなった。

相変わらずの短くカットした髪の毛に、パッチリとした明眸。しかし、暫く見ない間に一入、妖艶さが増したような気がする。

「お目出とう。結婚するんだってネ」

「ええ、私も、もう二十三才になるんですもの。うろうろしてたら、売れ残ってしまうでしょう。だから、思いきって……フフフ」

彼女は含み笑いをして、後をゴマ化す。

悪戯っ児のような、その目が、今の彼女の

る短文〈被虐の悦び〉の中で、やはり「排尿責めが好きなのです」と書いているのを見ると、このときの「オシッコがしたい」と言ったのは、私に対する一種の誘いであったのかも知れないと、悔まれる気もするのだ。

真っ赤な服を着てきたり、真っ黒な服を着てきたり、時には白い服を纏ったりして、原色のよく似合う彼女。大柄で色が白いから、そんな大胆な色のとり合わせも、彼女の放つ明るいムードを一段と際立たせているのだ。

逢うたびに服装の変わっている彼女なのだが、それが皆、ぴったりと身についているのだ。

そして衣服を、すっぽりと脱いだ彼女の真っ白い裸身も、また回を追って、薔薇の蕾が次第次第に膨らみ、花弁を出してくるように鮮やかに変化していった。

素っ裸になってしまうと、壊れたような頽廃の匂いを、いっぱいに放つ彼女の身体が、妙に生々しい動物的な体臭と共に私の鼻先にチラついてきてしまうのだ。

☆秋たけなわ

十月十七日。

いつものレストランで十一時に待合せた。

ここのランチは味がよくて、気に入ってい

幸福ぶりをあらわしているようだ。

「これ、お祝いというほどの物じゃないんだけど、気にいったら使ってくれますか」

私は彼女のために、わざわざ買い求めたシルバーゴールドのペンダントを手渡した。これは深く澄んだブルーの翡翠の周りをダイヤで彩った華やかなもので、可愛いい彼女に、ぴったりだと思って選んだものだ。

「そうお、じゃあ、遠慮なく頂くわ」

彼女は包紙を破ると箱から出して掌の上にのせた。

「まあ、きれい！」

ふくよかな真っ白い掌の中で、小判型の翡翠を取り囲むようにちりばめた数個のダイヤがキラキラと眩しく輝いた。

彼女は、それを頸にかけると保証書を折り畳んで入れた革製の箱をバッグにしまった。

「有難う、うれしいわ。でも、こんなに高価なものを戴いて、いいのかしら」

「菊子が気にいって喜んで呉れさえすれば、それでいいんだよ。色が白いから、よく似合うね。気が向いたら使って下さいナ」

「ええ、大切にするわ」

そのとき、香ばしい匂いがして食欲をそそるポタージュが来た。その湯気の向う側で、彼女の白くて明るい顔が揺れていた。

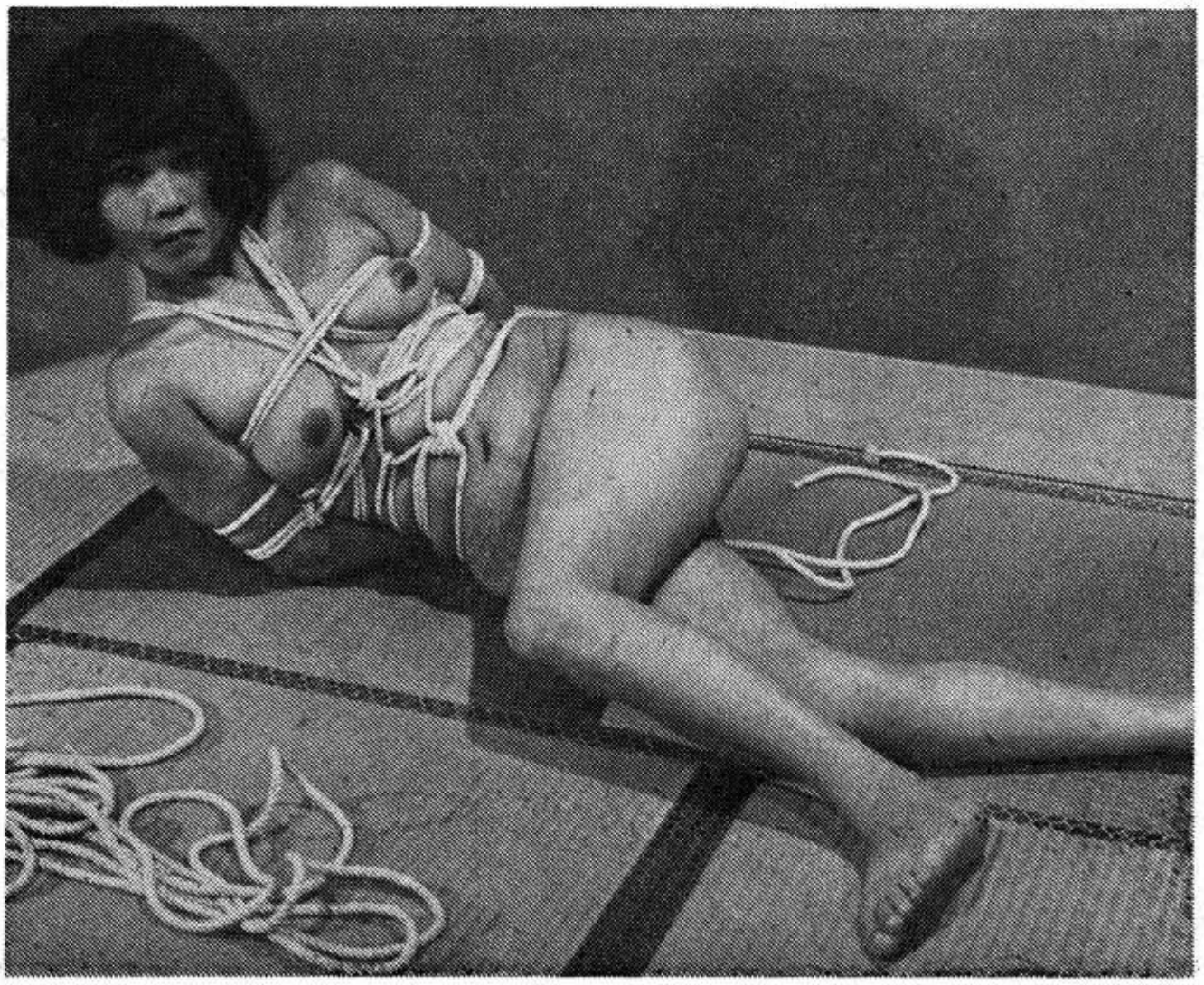
「今日は、ゆっくり出来るのかい？」

「ええ、近くまで、送って頂けるのでしたら晩くなっても構いませんわ。でも、お泊りするのは、母が心配するから出来ませんの」

そういえば、深田菊子とは、もう今までに十数度、逢っていることになるが、一度だって一緒に泊まったことはなかった。

家が近かったせいもあったが、余りにも、あどけなく若く見える彼女に対してそんな誘いをかけるのが、ためらわれたのだ。

もし誘っておれば、彼女のことだから一泊や二泊の旅だったら、きっと気軽に喜んでついてきたことだろうに——。



ポタージュを飲み終わると、柔らかくて、それでいて触ると火傷しそうに熱いパンと、キスの白身の蒸し焼きが出てきた。

「それじゃ、これから、お別れに、どこか景色のよい静かな所へでも行ってみるか。それ

とも、このままホテルへ直行して、ホラ、ねえ、この美しい菊子の身体を、責めて責めて責め抜いて、悶えさせてみるか」

「うわァ、そんな話、きいているだけで、とても、たまらないわ。その、どちらも好き」

無邪気に、大仰に言ってみせる彼女の頬が少し紅潮してきたようだ。

肉料理と野菜サラダが出てから、デザートとコーヒが運ばれてきた。

「菊子の身体が、この前のときと、どのように変化したか、今日は、とっくりと拝見したいもんだな。だが、まだ時間は早いから一走りしてから郊外のホテルへ行こうかナ」

表へ出ると都会も、すでに秋の気配が濃厚だった。ペーブメントには街路樹の落葉がカラカラと音を立てて舞いあがり、頬を撫でる風も心なしか佗しさを感じさせる。

空を仰げば青空も少しは覗けるけれど、全面に厚く雲が掩っていて、うすら寒い。

車上の人となり、阪神高速道路を空港線で豊中へ、豊中インターから名神高速道路に入って一路、西へと向かう。西宮のインターを通過して神戸線へ入ったあたりから車窓の右側に六甲の山脈が陽を受けて青々と見えはじめ、青空が一面にひろがり、左側には海面が望まれ、視界が急に明るくなった。

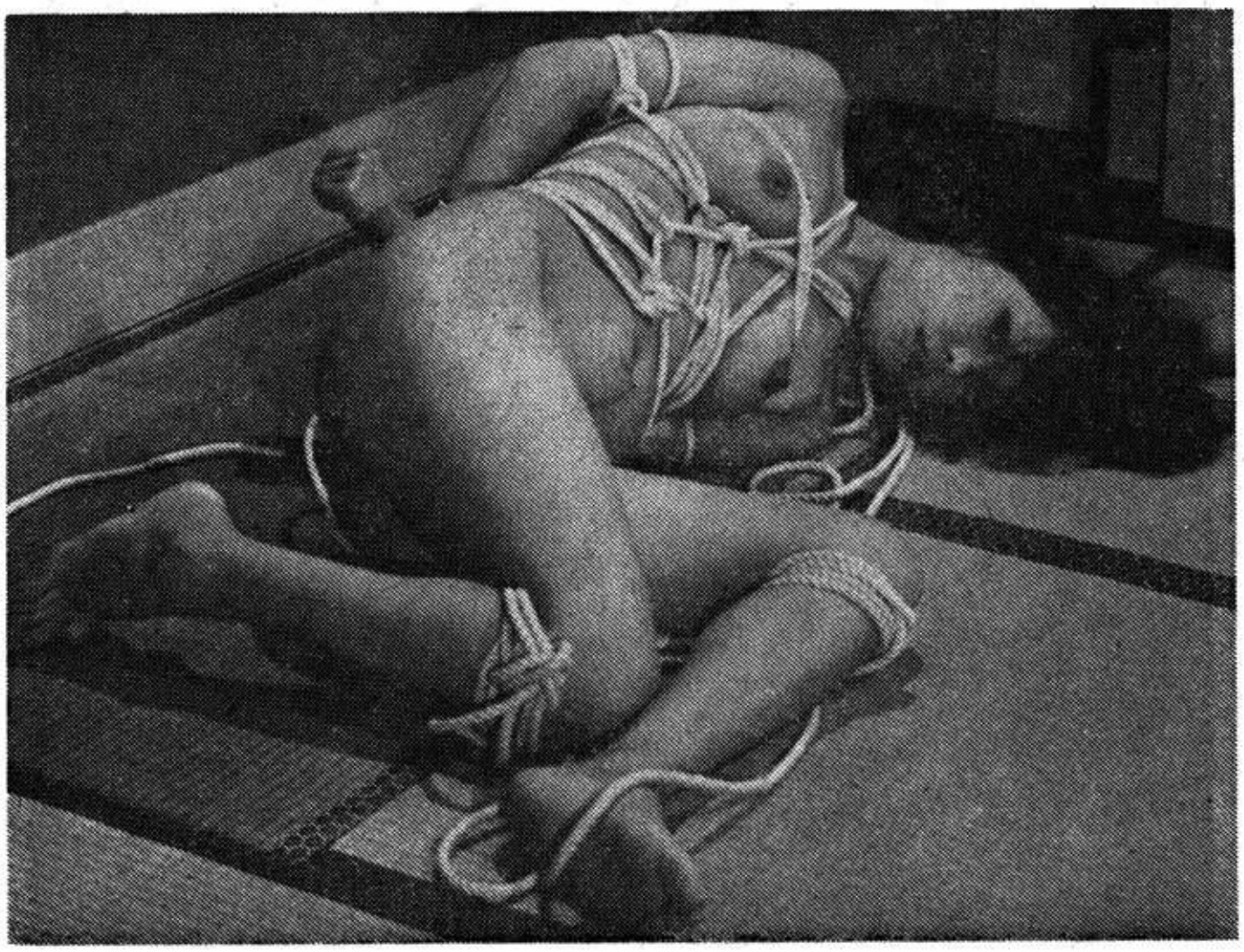
陽を受けると途端に車内の温度が高まってきた。私は片手ハンドルで背広の上衣を脱ごうとした。彼女は、すかさず手を伸ばして先ず私の左腕を脱がしてくれた。次いで頬を寄せるようにして、右腕を脱ぐのを介添えしてくれる。彼女が寄ってくると、生牛乳のような甘酸っぱい体臭がプンと鼻先に匂ってくる。

上衣をポイと後の座席に放っておいて、左手でぐっと深田菊子を抱きしめる。

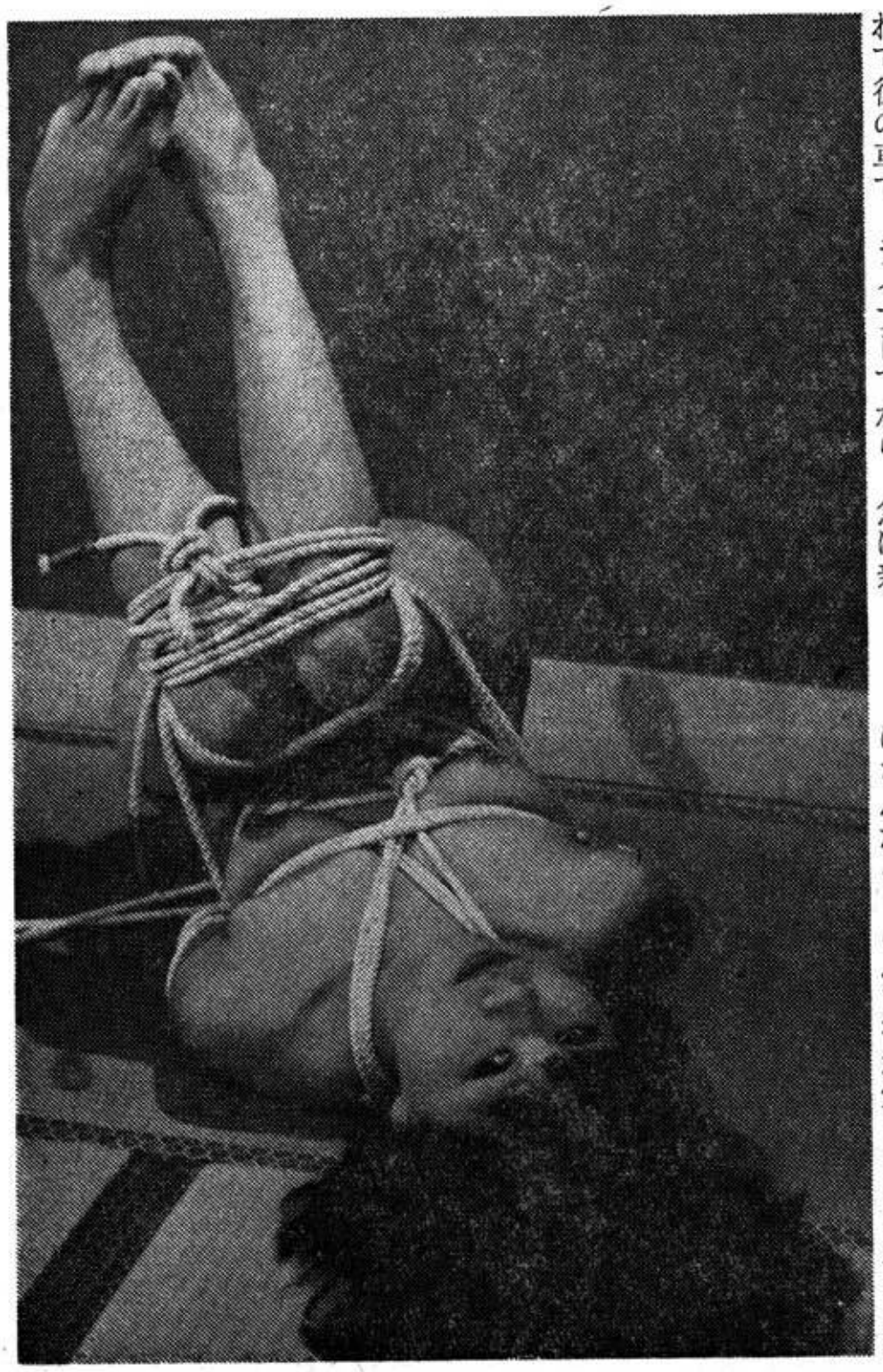
顎を突き出すようにして、彼女は上半身を私にゆだねながら、私の左手首を握った。マニキュアをしていないビンク色の爪が清潔な光を放っている。

「菊子は運転免許証を持っている筈だが、此の頃は車の運転はやらないのかい？」

「ガソリンスタンドに勤めて



いるとき、二、三度やったこと、あるんだけど、怖くって、とても街の中は走れはしない



のよ。それに、自分で車を持っていないから運転する機会もなかったの。でも、今度、結婚する彼は、車を持っているから、結婚したら、私も、運転するようになるかも、知れないわ」

「すると彼は、菊子の勤めていたレストランに来るお客さんって言うわけか？」

「そうなのよ。一度、三月頃、デートに誘われて彼の車でドライブしてから、急に親しくなってしまったの」

「菊子は、車で走っていると、とても性感が刺戟されて、たまらなくなるって言ってたけど、ドライブで参ったのと違うんかい？」

「まあ、私、そんなこと言ったかしら。ウソウソ、ウソよ。作り話だわ、ソレ。私、そんなこと、言った覚えないもの」

「だが、とにかく、彼に一目惚れしたってわけなんだろ。どんな彼か知らないけれど、こんな素晴しい菊子を独占するのかと思うと、嫉けてくるナ」

ポートタワーの赤い塔が、左に見え、右に見えしたかと思うと、若宮出口から右へ直角にカーブして山側でトンネルに入り、トンネルを出て直ぐ、第二神明道路のゲイトに達した。菊子は私の膝枕から身を起こして澄ました顔で窓側に身をもたせかけ、シューズを脱いだ足をカーペットの上に、さっと伸ばす。

すき透るように薄いストッキングをとおして、彼女の足の指や爪が、くっきりと見えている。私はゲイトでカードを受取ってから、彼女の右足を持ちあげて膝の上にのせて発進した。ほぼ直線に近い道路だが、山を切り拓いているだけに起伏が激しくて、急転直下、谷底へ向かって突っ込んでゆくような急勾配を降り、また急坂を駈け昇った。

突如、眼の前が開けたかと思うと、林立する巨大な団地がパッと視界に飛込んできた。

時々、チラッと海面に泡立つ白い波が見え隠れした。須磨、明石と忽ちに過ぎて、やがて加古川に達した。播州平野の黄金の波をかき分けるようにして車は姫路に着く。距離にしたら、百数十キロも走ったろうか。だが、時間にしたら、あっという間だった。

姫路から右折して、塩田温泉へと向かう。

数年前、ここへ来た折りは、鄙びた数軒の旅館が夢前川の畔に建っているだけの淋しい温泉だった。私の泊まった古風な旅館の前庭には直径50センチばかりの噴出孔から鉱泉が溢れるように滾々と湧き出ていたものだが、今では、その古びた和風の建物は後かたもなく、そのあたりには近代的な豪華なホテルが軒を連ねていて以前の俤は、さらさらない。

それでも、三方が山に囲まれていて、ただ夢前川の川音が、さらさらと耳につくだけの閑静さである。やはり、旅の空の仮寝の宿といったムードが濃厚である。都会の温泉マークでは、どうしても、こうした落着いた雰囲気は味わうべくもない。

建ったばかりの新しい建物、そして駐車場が広い——というだけの理由で、そのホテルを咄嗟に選んで車を滑り込ませていった。

山峡とはいえ、釣篭落としの秋にも似合わず、陽は植込みのヒマラヤ杉の枝に、赤々と照りつけていた。

私の提げている大きな鞄を見て、受付の女性は、「お泊りですか?」と訊ねた。この荷物を見ると、誰でも、相当の長期旅行の途次かと思うのも当然であろう。「いいや、夕食を摂って風呂へ入るだけだ」と私は答えた。

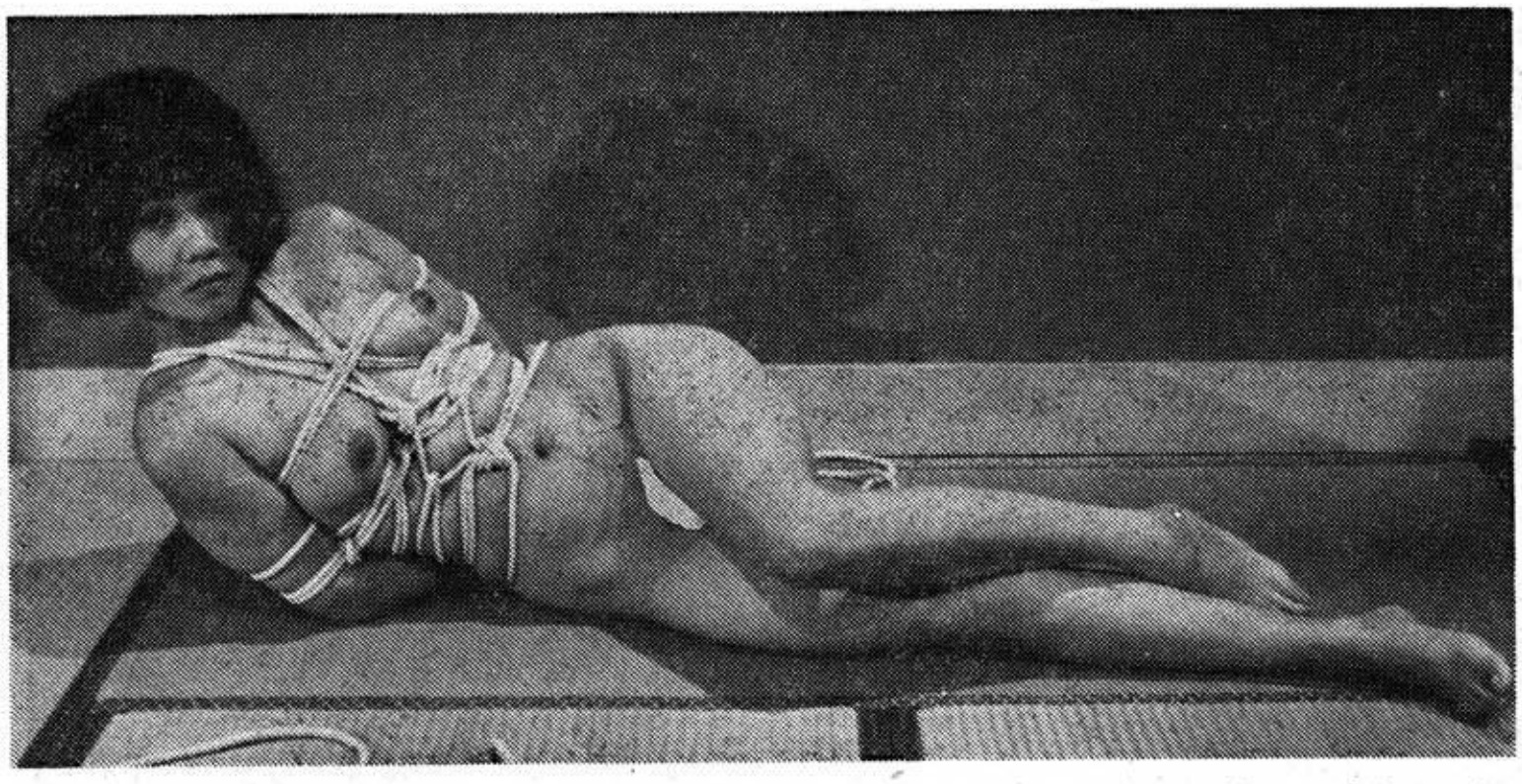
そして、「一番広い部屋を頼む」と、つけ加えた。「ここのお部屋は、皆同じようなんですけど、新婚さん向きの三部屋つづきのがありますが、そこになさいます?」と、その女は、意味あり気にニヤッと笑った。

器量は、それほど良くはないが、なんとなくコケットリーなのだ。先に立って荷物を持って歩いてゆくときの、お尻の振り方なんか何となく、思わせぶりだ。

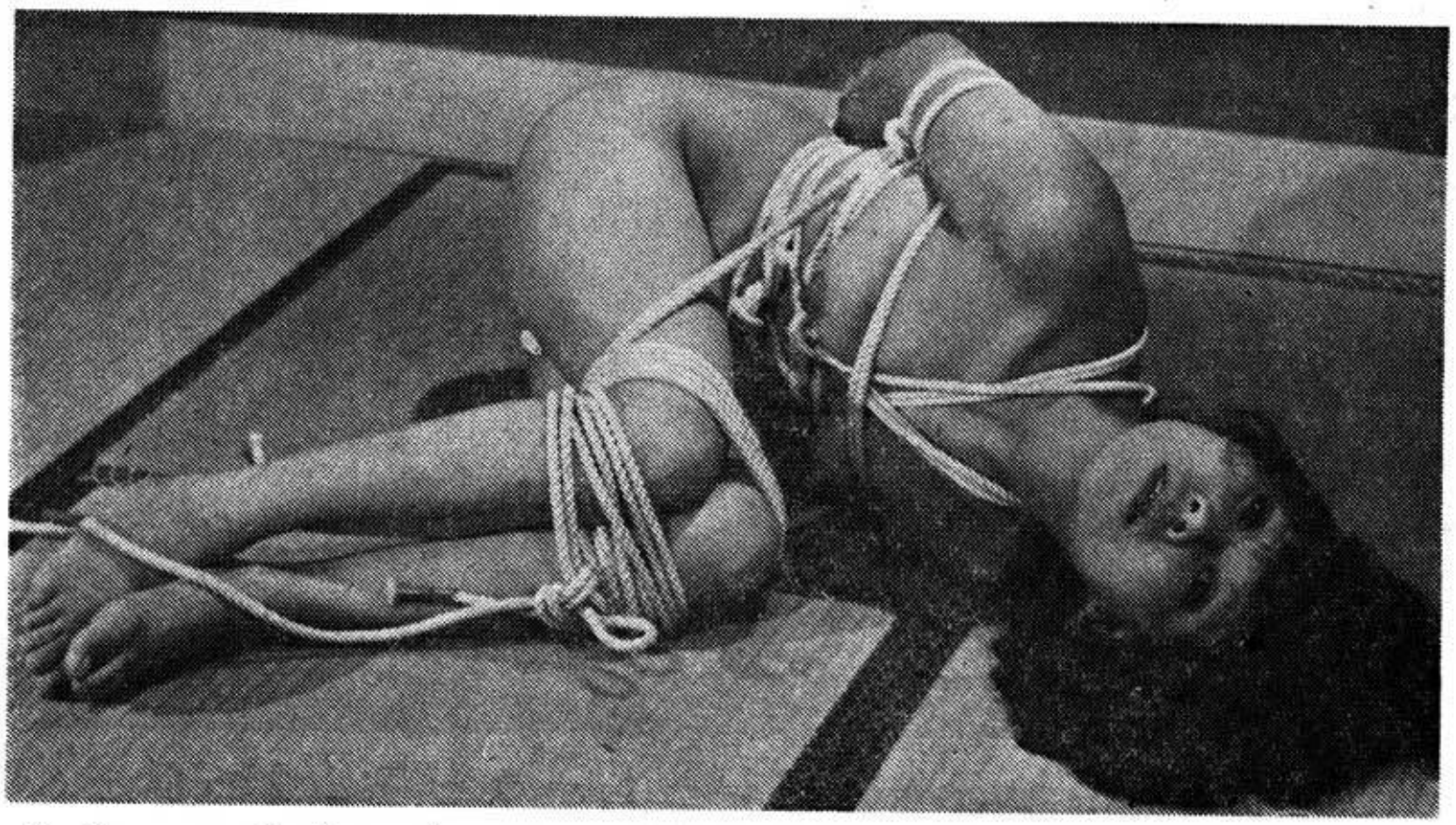
☆花電車の女

部屋に落着くと、深田菊子は長い足を左側に伸ばして横坐りになりバッグから煙草をとりだした。

「アレッ、いつから煙草をのむようになった



んだい?」
「フフフ、この間からよ。変でしょ、私が煙草を喫むなんて……」
「変じゃないが、きっと伊達タバコなんだろう? ファッションの一つなのかな」
私は彼女の左側へいざり寄って、伸ばした脚のストッキングの上から撫でさすった。
「ストッキングを透した方が足が白く見えるもんだね」
「そうお。私、今年の夏は、海へもプールへも行かなかったもの。それだからよ」
「専ら、彼氏とのデートってわけか」
「そんなことないのよ。ただ、海へ行く機会がなかっただけなの」
「菊子を水着で撮ったこともあったし、琵琶湖ではモーターボートから飛び込んで、素っ裸で泳いだこともあったナ」
「ええ、あの頃、とても楽しかったワ」
彼女は私の抱擁を快く受入れるように、グリーンのスーツの襟をはだけて胸をすり寄せてきた。そうした仕草が、わざとらしさが少しもなくて、知らず知らずのうちに強く抱きしめたくなってしまうのだ。
「ねえ、今日は、どんな責めをするの?」
「そうだね、菊子が一番、嫌がる羞恥責めをやってみたいもんだナ」
私は捻じ伏せるように、彼女を仰向けに押し倒して強引に唇を合わせた。彼女の両脚がパッと宙に舞ったかと思うと、それをシオにしなやかな両腕が、しっかりと下から私の上半身に、まっわりついてきた。
と、そのときのことだ。さっきの女が、すっと、音もなく入ってきて、「あの、お風呂どうなさいます?」と、立膝のまま訊ねて、お茶とお菓子を卓の上に置いた。
「ええっ? お風呂? 部屋には、ついていないのかい?」
私は身を起して菊子の身体から手を放す。
「お部屋にもございますが、温泉は下の大きなお風呂になっておりますので、お入りになるのでしたら、御案内しますが……」
菊子は、さっと身を翻して足早に化粧室へ走って行った。
私は仕方なく、卓の前でアグラを組んだ。
「あの、それからお夕飯は、何時に、お運び致しましょうか」
「食事は食堂へ行って摂るというわけには、いかないのかい?」
「はい、皆、お運びすることになっておりますので……」



「だったら、五時にしてもらおうか」
「お客さん遠くから、おいでですか?」
「いや、近くだよ。大阪からだ」
「でしたら、今度、お一人で、おいでになりませんか」
今まで立膝だった女が急に正座に坐り直して身をのり出してきた。
「ふふん、一人で来たら、何か、いいことでも、あるのかい?」
「そりゃ、もう、貴方、いいことばかりなんですのよ。ホホホ、それがね……」
卓に両手をつくと身体を伸ばして、私の耳に口を寄せたかと思うとものあり気に囁いた。
「へえー、キミがね」
私は思わず女の腰に目をやった。
「そうなんですのよ。是非一度、騙されたと思って、来てみて下さいナ」
馴れた物腰で、そう言うと、女は、そくさと出て行った。入れ違いに深田菊子が化粧室から戻ってくる。
「何を話してらしたの?」
「下に、大きなお風呂があるんだって。そこだけが温泉で、部屋についているバスは、普通のお湯だそうだよ。それから夕食は、五時に、さつきの人が、この部屋に運んできてくれるって言ってたよ」
私は、さっきのアノ女が、私の耳元で囁いた言葉だけは言わなかった。
深田菊子の方が、アノ女よりも、うんと若くて、うんと奇麗で、そして、うんと上品だった。いくら、私の目の前で、〝花電車〟をして見せるって言ったって、今の私に、食指の動く筈はなかった。
ここは、流石に新婚旅行に使う部屋らしく控えの間と、この部屋が廊下つづきになっていて、更に奥には、八帖の間が床の間付きの寝室になっていた。廊下の向こう側がトイレとバスの間になっている。
〝よし、食事前に、一責めしてやろうか。奥の部屋で縛っておく分には、たとえ、夕飯のお膳を運んできたって、わかる事はない〟
私は、待ちきれない思いで、そんなに考えた。
「菊子、こっちへ、おいで」
私は奥の部屋へ彼女を誘う。
「イヤ。さっきの女(ひと)が来るわよ」
「ここだったら、襖をしめておいたら、わかりやしないよ」
「でも、アノ女(ひと)、変な目で見るんですもの、

感じ悪かったワ」

「そりゃ、菊子が美人だから、嫉いているんだよ。気になんか、することないよ」

私は鞄の中から白いロープを一本だけ取り出して彼女に近づいた。

「ああ、ドアの錠を卸して。誰かが入ってくると、いけないわ。ねえ、お願いよ」

私は、それに答えず、無理矢理強引に彼女に迫ってゆく。

洋服の上からでも、はっきりと判るくらい彼女の身体が、ガタガタとふるえている。

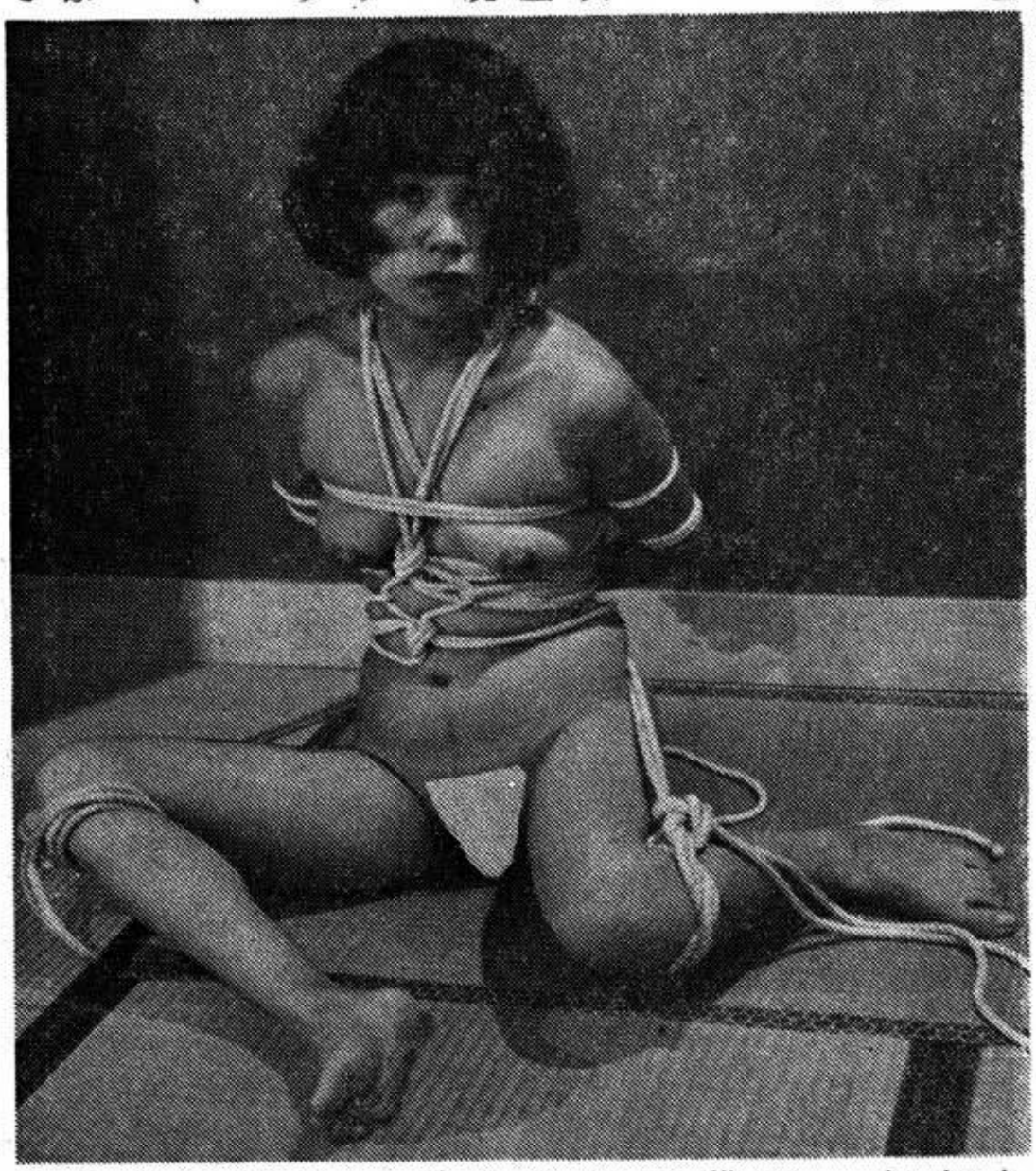
恐怖のためだ。

なんの恐怖なのか。

さっきの小股のきれあがった女が、音もなく、すーっとこの部屋に現われて、また、冷たい目に睨むからだろうか。

それとも、この塚本鉄三という男が、なにをやらかすか、わからないからか——。

私が縄を持ったままで抱きすくめると、彼女は、私の腕の中で一層激しく、ガクガクと上半身をふるわせた。いや、上半身ばかりではない。膝頭も目に見えてふるえている。



「洋服に皺がよったらいけないから、脱いでしまおうね」

そんな私の言葉も、彼女の耳には、もう入らないらしい。空ろな目つきで、ぼんやりと私の手元を見ている。

私は彼女の上衣を脱がしにかかった。

「いやいや、いやっ。怖い、怖い」

白いロープを彼女の手首に掛けようとしたとき、初めて激しく身悶えた。

手首と手首とを合せて縛ると、蚕のように白いふくよかな指がピクピク動いている。

室内のライトが消えているので欄間から洩れてくる淡い光にだけ映えて、深田菊子の手も足も、深い陰翳に包まれ、あたかも、深海の人魚のように、あえかに見えた。

嫌だ——という彼女に、嫌だということを、わざとしてみたい倒錯的な衝動が心の中に燃えさかってくると同時に、この薄暗い密室で泳いでいる美しい縛られた人魚に、審美的な目を注ぐのだった。それは、なんという心のなごむ耽美的な光景なのだろう。

両手首を縛ってしまうと、彼女は観念したように静かになった。

私は彼女の上半身を抱きしめておいてから、スカートを脱がしにかかった。さっきの身体のふるえはなんだったのだろうかと、いうようなキョトンとした目つきだ。

M女の心と体の謎は、私にとっても不可解の一語に尽きる。

今の、この、深田菊子の発作ともいうべき一連の変化も、どのように解釈したらよいのか、私にもわからない。

恐怖におののいたような深田菊子の瞳のなかに、私は解釈出来ない謎を感じた。

今までに、幾十、幾百の女性に接していながら、女性の心理に至っては、時に不可解以外の何物でもない——という感じを受けるときが、よくあった。

そこに、埋没不可能な男と女のコミュニケーションの溝が存在するのだろうか。それとも、男と女の性の違いを超越したゼネレーション・ギャップがあるというのだろうか。

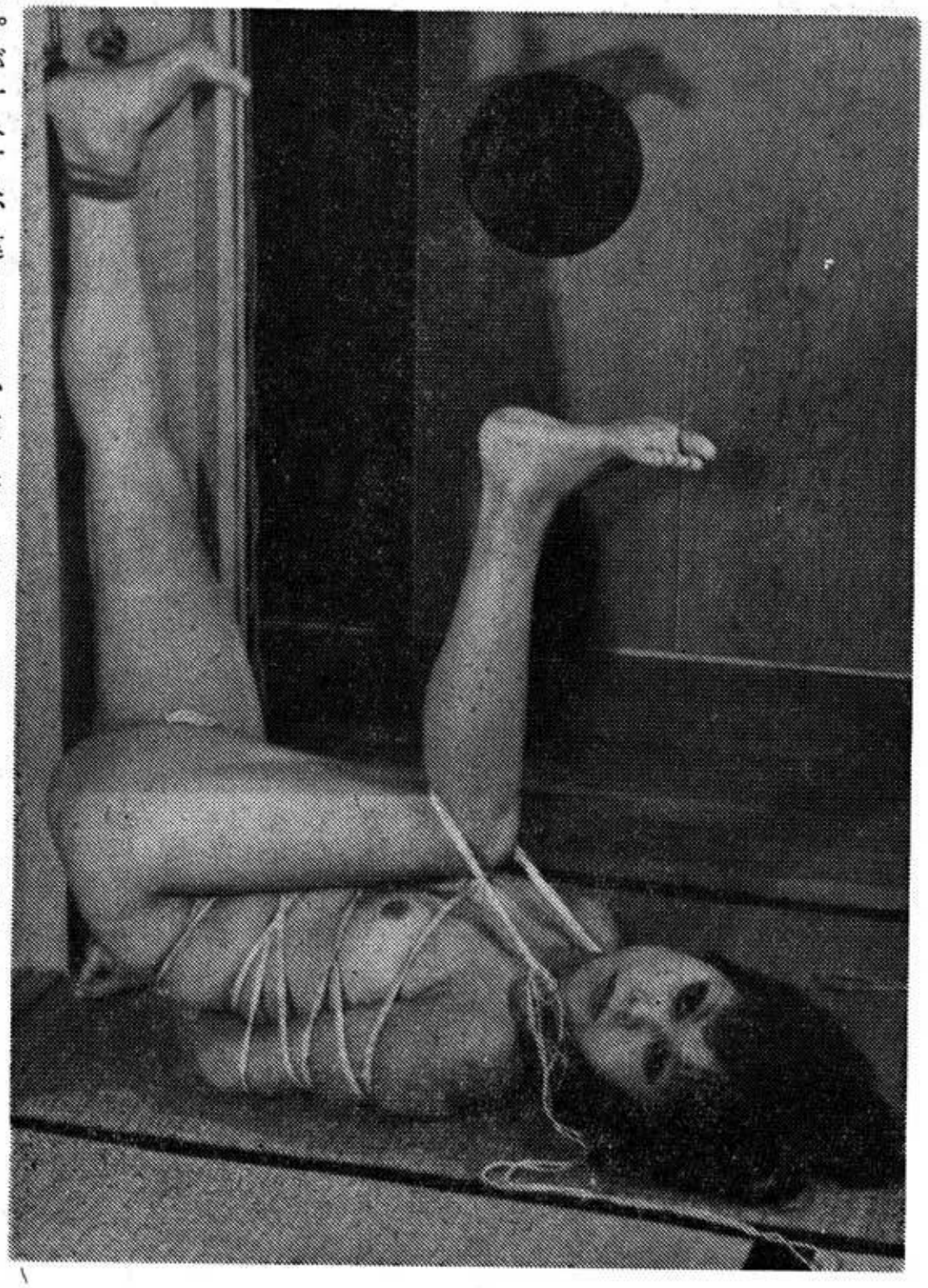
☆

私は従前、主として女性を対象として、実践的に、そうしたM女の謎に挑戦してきた。

それがS研の会合を持つ機会が多くなるにつれて、数多くのS人士と接することが出来て、側面的に男性の側からM女の謎を剔抉するのに、大いに参考になった。

M女性に対して、S男性は鏡の一面でもあるわけだからだ。M女性に、いろいろなタイプ（型）があるように、S男性にも、そのタイプが一人一人、違うさまは、実に驚く位だった。厳密にいえば、各人各様、全部、差違があるのだ。そうした数多くの種々様々な型のS男性に接しているうちに、私には、そうしたS人士の憧れるM女の一つの理想像というものが、朧げながら、わかってきた。

さて、現実のM女の方では、果たして所謂

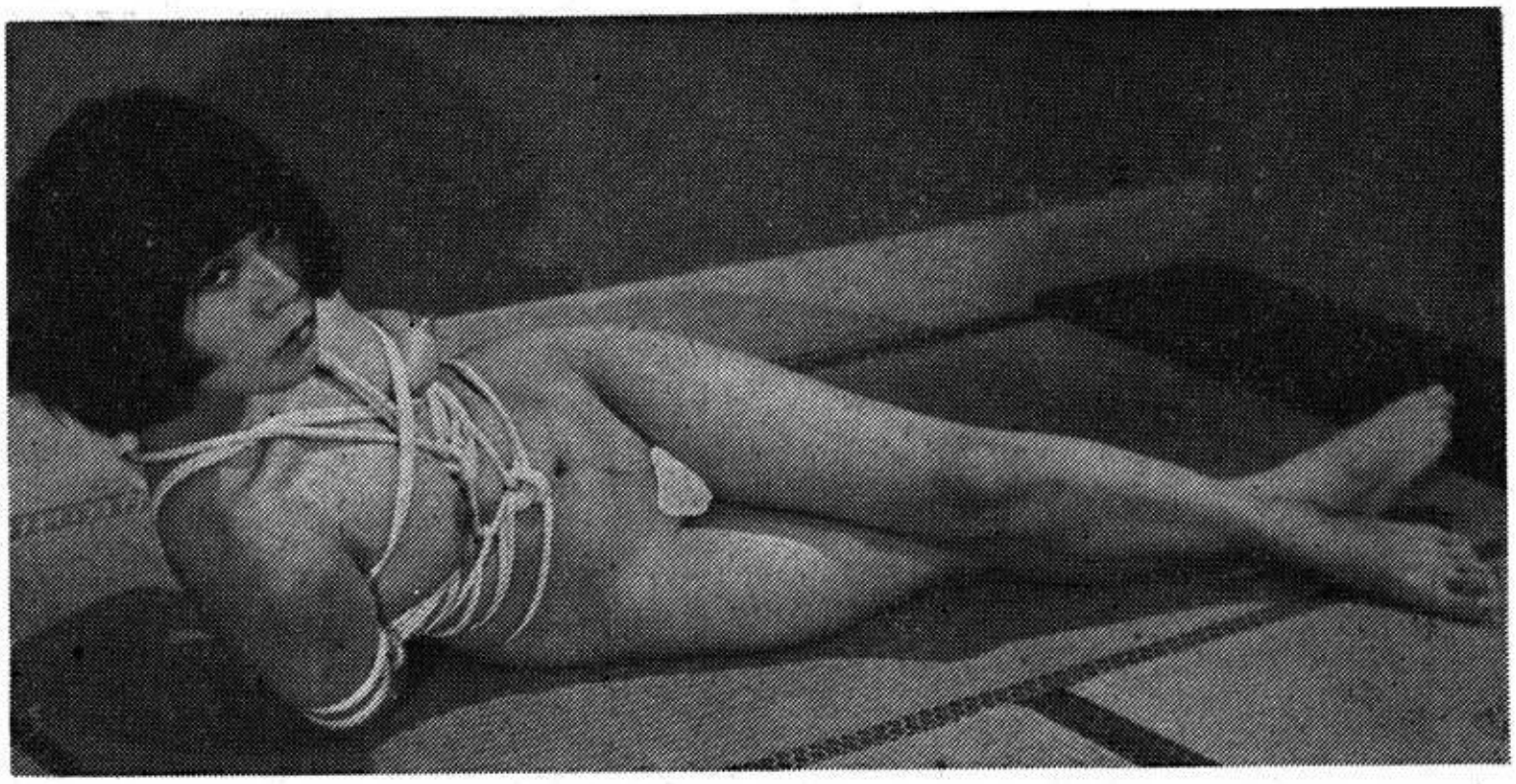


描くところの理想像に対して、どの程度、接近することが出来るだろうか。

〝水は方円の器に従う〟と言われるが、M女の方は、水ほど融通無礙、変転滑脱の妙を為し遂げられるものだろうか。

☆

大胆で奔放、快楽主義者のお手本のような



女性である深田菊子が示した今の脅えと恐怖は、一体、なんだったのだろうか。

そのときに示した彼女の、おびえたような眼は、車に乗っていたときの、あのなごやかな眼とは、まるっきり異質のものなのだ。

演技なのだろうか。

まさか、素人娘の深田菊子が、そんな絶妙の演技を演ずる筈はない。

それなのに、私の心の底まで凍らせてしまうような、あのゾッとするような、真底から恐れおののいている彼女の目の色は、どこから来たものなのか。

私は彼女の手首を後手に縛ってから、スカートを脱がせた。彼女は自ら腰を浮かして、素直に従った。若い女が、今の今まで、身につけていた体温のぬくもりを宿した、その布片は、まるで彼女の分身さながらに生きているようにウール100%の縫い取りのある裏を見せて畳の上でピンと立っていた。

このロングスカートは、最近の流行に合わせて新調したものなのだろう。彼女が親に金を出して貰ったか、自分の小遣いを貯めて買ったものか、或は婚約した彼に作って貰ったものか。とにかく、昨年から持っていたものだったとしたらミニスカートの筈だ。

「今までの短いのは、どうしたの?」と訊ねたら、「友達にあげたり、箪笥にしまったりしているわ」と事もなげに答えていた彼女。

時代遅れのものよりも、新しいファッションのものを身につける楽しさの方が強いのだろう。

超ミニもよかった。しかし、菊子のように色白で長身の娘が、長いスカートの裾を歩くたびに、ひらひらと活発に翻して颯爽と歩いているのも非常に美しいものだ。

シュミーズの裾から手を挿し入れて、ストッキングを脱がしにかかる。

「いやよ、いやよ」

彼女は遠慮勝ちに身悶える。

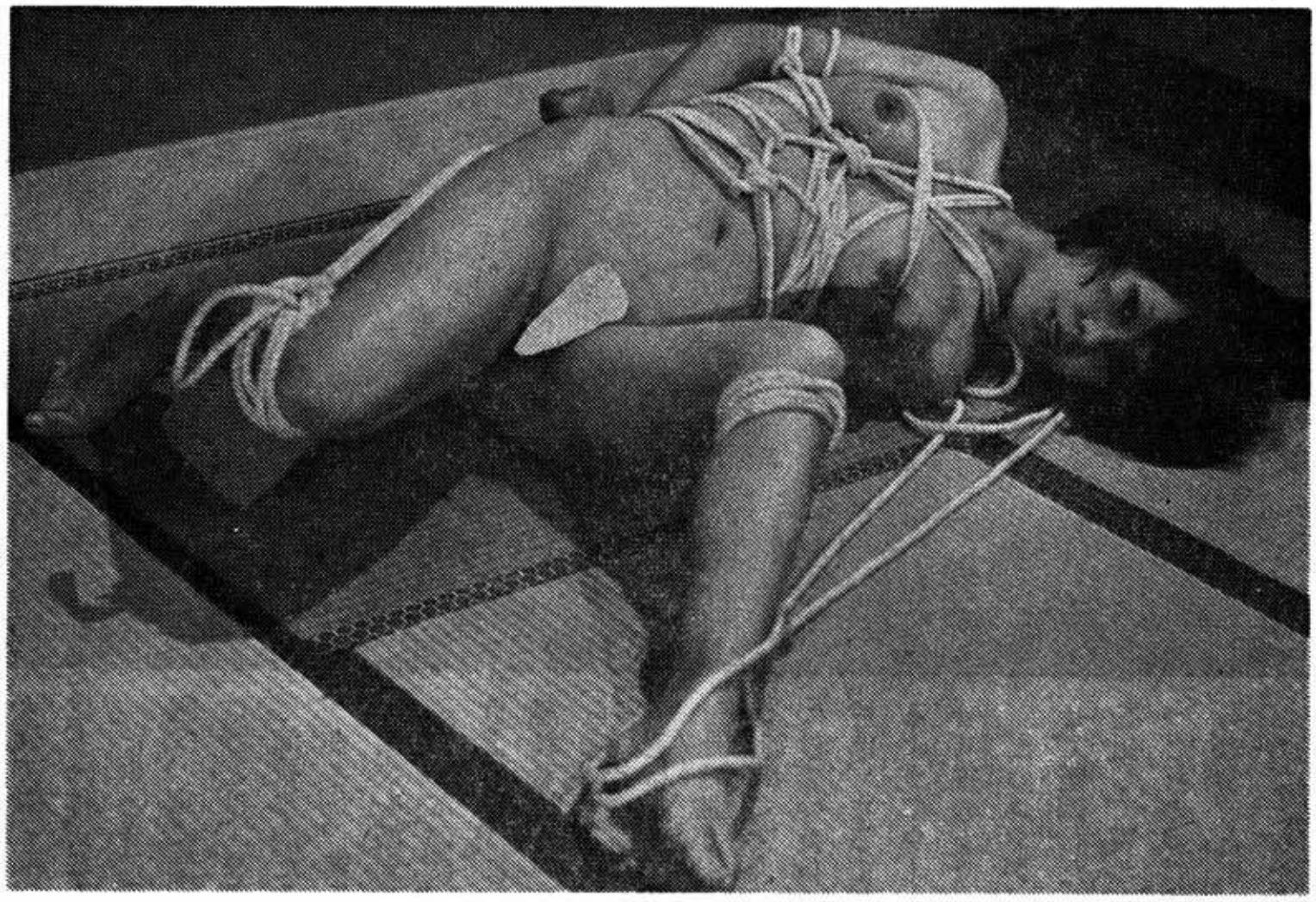
すべすべとした内股の肌ざわりだ。

「なぜ、嫌なんだ。いつも、素っ裸になって縛らせるじゃないか」

「でも、そのときは、二人きりでしょ。今、すぐに、女(ひと)が来るわよ。およしになって」

「だから、この襖を、こうして閉めておいたら、見えないじゃないか」

「そんなの、イヤよ。私が縛られて、ころがされている隣の部屋へ、夕食を運んでくるんでしょ。イヤだわ、そんなの。もし、何かの拍子に開けられたりしたら、どうするのよ」



を　顔開　まコう　コ声　コ部い　に　をら　らコいコ

「ハハハハ、そんなに怖いかい？」

「そりゃ、そうよ。見られたら困るわ」

そんなことを言い合いながら、私はストッキングを薄皮を剝ぐようにむいた。

白くて肉感的な脚が目の前に現われた。

もう片方も、スルスルとむいて、掌の中で丸めてポイと部屋の隅へ投げすてる。

「ごめん下さい」

入口の方で、さっきの女の声がした。

「ねえ、ほどいてよ」

彼女は慌てて、起きあがろうとする。

「いいから、いいから。そのままで……」

そう言い残して、私は襖を開けて飛びだし、控えの間へ顔だけを覗かせた。

三人の女が、玄関にワゴンを乗り入れて、入口から食事を運び入れている所だった。

私は奥の部屋へ戻って仕切りの襖を、ぴたりと閉めた。

「夕食を運びに来たよ」

彼女の耳元で囁いてから、あとは息を殺した。彼女も黙っている。

洋服もストッキングも脱がされ、シュミーズ一枚のままで後手に縛られているのだ。

この光景を三人の女たちが見たら、どんなに、びっくりするだろう。

襖一つ隔てた隣の部屋では、食器の触れ合う音、お膳の上に食器を置く音。それらの雑多な音に混じって、「それは、こちらよ」などと女同士の私語が洩れてくる。

まさか、襖を開けて、奥のこの部屋まで入ってくることは、まずなかろうが、私たち二人の姿が見えないので、一緒に風呂へでも入っていると思っているのかも知れない。

私は、そろそろと、右手の指を彼女の内股へ這わしていった。温かくて、そして、柔らかいマシマロのような感触だ。何度、味わっても、この感触だけは忘れられない。ピクッと、彼女のからだが、激しく反応した。

この機会に、パンティを脱がしてやろうと考えたのだ。

何という布地なのか、ふわっとしたものが私の手に触れた。

「イヤ、イヤ、イヤ、脱がさないで……」

彼女が小さな声で訴えた。

まさか、この間の山口艶子のようなブルーディじゃないだろうな。

私は掌を彼女のお腹に、ぺたりと当てた。

皮下脂肪のうすい、ぺしゃんこのお腹だ。

「なにを、するの、ねえ、やめて」

彼女は身をよじったが、私は、そのまま、掌を上へと滑らせてゆく。

ノー・ブラジャーだ。

そこには、掌いっぱいに溢れる、ふくよかな乳房があった。

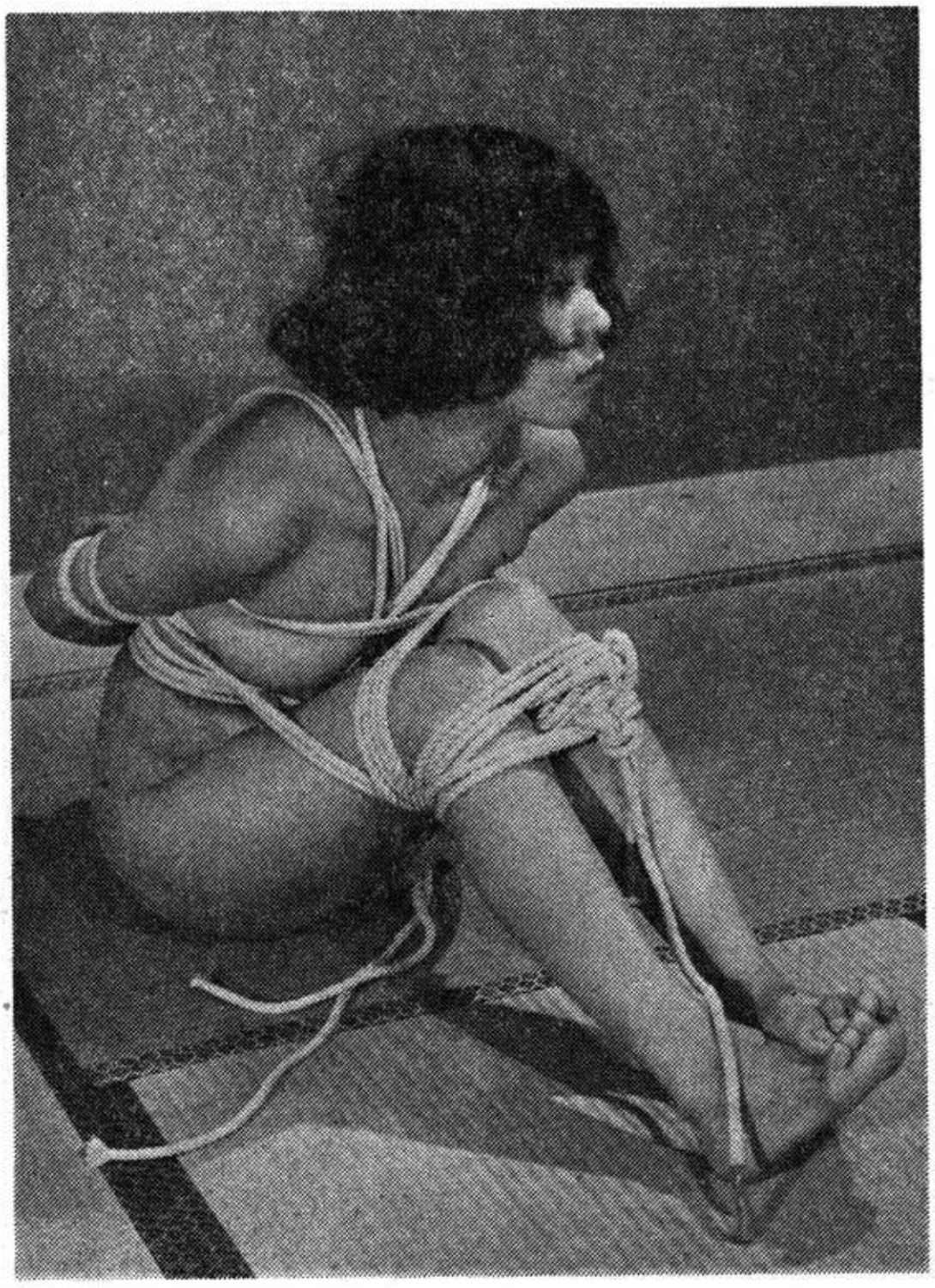
「アアア、やめて、やめて、やめて頂戴」

彼女は、もがき、そして喘いだ。

私は掌を背中へ回してから、一気に、お尻の方へ滑らせると、パンティのゴムに手を掛けて、すうっと、ずらした。

冷たい、お尻だ。

乳房や、お腹や、太腿や、それに素足なんかも、ほかほかと温かいのに、お尻だけは凄く冷たかった。ぷりん、ぷりんとした、若い女のお尻が、こんなに冷たいとは、どういうわけなのか。



パンティを、膝のところまで、ずらしたとき、襖の向こうで、さっきの女の声がした。

「お食事の仕度が出来ましたから」

なあんだ。二人が、ここにいるのを知っていたのか。

「ああ、御苦労さん」

私は嗄れたような声を出した。

パンティを足から抜いて、まだ彼女の体温のぬくもりを宿している、その一握りの布片を、鼻先に持ってきた。

むっとする、チーズのような、なんとも言えない、良い匂い。

それをポケットにしまい込んでから、私は深田菊子を、やおら抱き起こした。

「ねえ、菊子とのプレイも、今日で最後になるかも知れないから、このパンティを記念に貰っておくよ。いいだろう?」

「ええ、構いませんけど、帰りには、私、下には何もつけないで……」

「家の近くまで送って行くからサ、いいじゃないか。ノーズロだって。さあ、それより、食事にしようよ」

私は襖を細目に開けてから、そっと覗いてみた。御膳の上には、所狭ましと一杯に、器が並べてあって、鯛の造りの切身が電光に、ピカピカと光っていた。

も早、人影はない。

上衣、ズボン、ワイシャツを手早く脱いで裸になり、パンツ一つで浴衣をまとってから彼女を、しっかり抱きしめる。

唇を合わせたままで抱き回した手で、彼女の後手首のロープを解いた。抱き起こして、浴衣を着せかけてやる。

御膳に向かいあって坐った。

明るい電光の下で、こうして改って顔を見合わすと、面映い気持だ。

値段はきめずに入ってきた、この宿なのだが、並べられているのは、二十品近い豪華な色彩的に、まことに美しい日本食だ。見ただけで、とても食べきれそうにもない。

飯はやめにして、とにかく鯛の造りから箸をつけた。熱い吸物もうまい。

海老の天ぷらに、鮑の酢の物、焼魚に、山の芋の煮たもの、姫路の海が近いからか、海の幸、それに山の幸というか、山菜料理めいた煮物も、ふんだんに載っているのだ。

電話のベルが鳴った。帳場からだ。

「お飲物の御注文は?」という催促だ。

「車で来ているから」と言って断る。

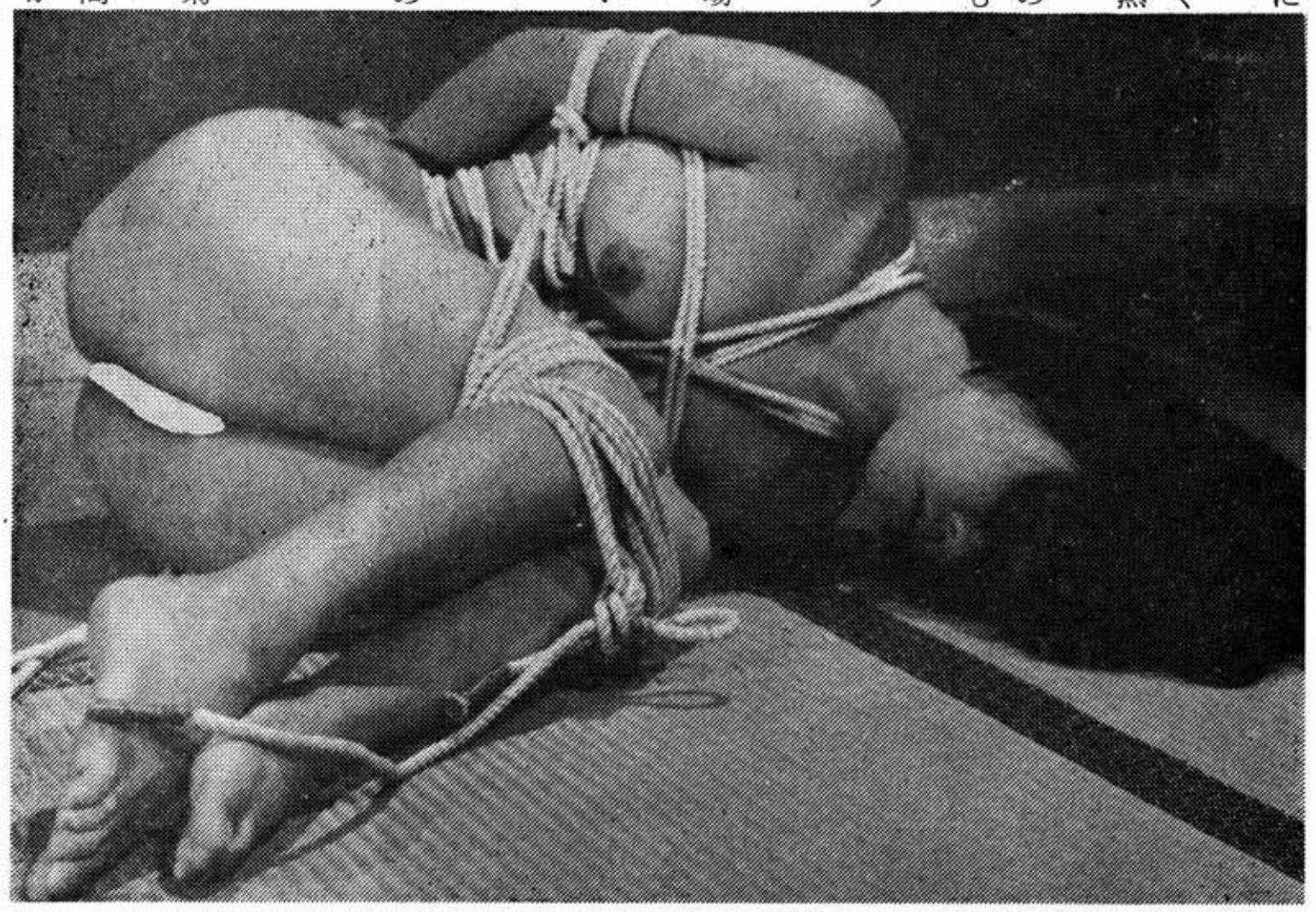
彼女はビールの一杯も飲めぬらしい。

陽は、すっかり暮れた。

恐ろしいくらい静かだ。

この部屋には、私と深田菊子の二人きりだった。

こうしている間にも、時間が、どんどん経ってゆく気が



した。

彼女は半分も食べないうちに、お腹が一杯だと言って箸を置いた。小食なことは、いつもと変わらない。そんな小食の彼女が、また可愛いいのだ。といって、私も全部、平らげるほどの大食漢ではない。腹八分目という方針からすると、野菜の煮つけたものなんかは勿体ないが、残さざるを得なかった。

食事が終わったという電話を通しておいてから、再び奥の部屋へ引き篭った。

浴衣の前の蝶結びの紐の一端を、指でちょいと摘まんで引っぱると、パラリと足下に落ちた。それをしおに、二人は、がばとお互いに力一杯、抱き合った。

それが当然であるかのように——。

浴衣を脱がせて畳の上に敷き、更にシュミーズを脱がそうとした。

「ねえ、片付けに人が来るわよ」

そう言って彼女は軽く拒否したが、結局、私の強引な手に促されて、シュミーズの肩紐を肩から、はずした。

その下には、もう何もつけていない。

しなやかな両腕を背中で交叉させて、両手首をガッチリと縄で縛った。

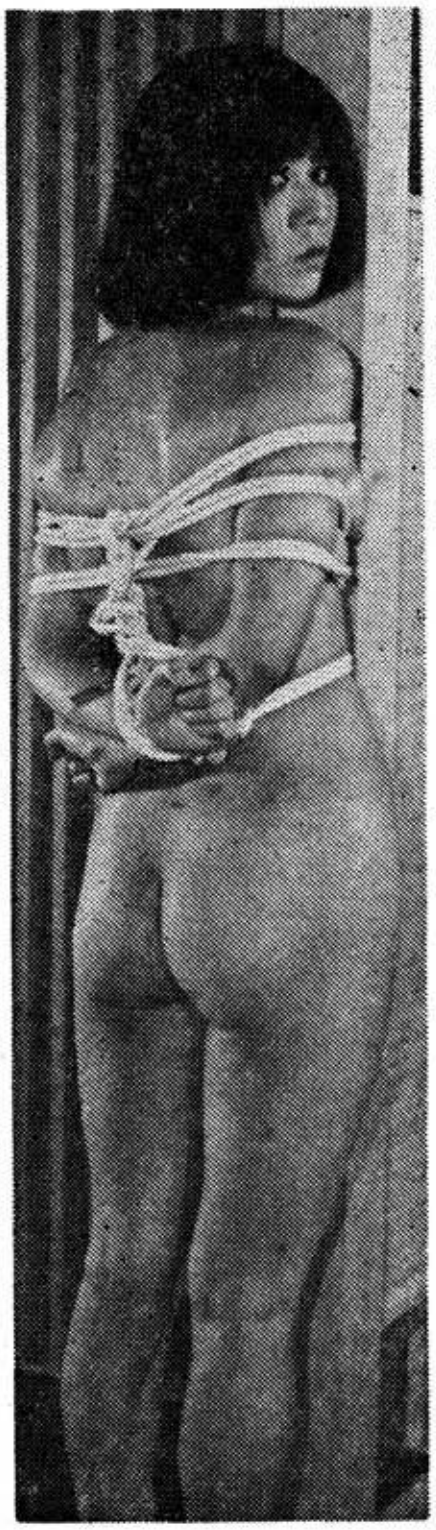
それだけで、深田菊子のからだの自由は、すっかり奪われてしまった。白く輝く豊かな肉体のすみずみまでも、惜しみなく私の目の前にさらけだしているのだ。

私は手首を背後で縛られて転がされている一個の白いオブジェを見た。

どこもかも、綺麗で、清潔だった。

素っ裸にされて、からだのどこもかも、隅から隅まで、じろじろと見られる恥かしさに彼女は身をすくめている。

私は着ていた浴衣を、かなぐり捨てて、彼女の裸身に迫っていった。



襖一つによって隔てられた、この八帖の密室は、いつ開けられるかわからないという一抹の危惧をはらんでいながら、それでも淡い光のなかで、二人の天国を形作っていた。

ぐっと伸ばした太股、脛、足も、心なしか青白く感じるのも、欄間を通して入ってくる光線の加減なのだろうか。

爛れたような頽廃的なムードが、深田菊子の全裸の肢体の隅々にまで、濃厚に漂っていた。私は、このまま、なにもかも、かなぐりすてて溺れてしまいたかった。

没入してしまいたいと願いながら、ふと、ためらった私の心を、いち早く、見抜いて、「私だったら、いいのですよ」と、甘い誘いの言葉をかけてくれた彼女。

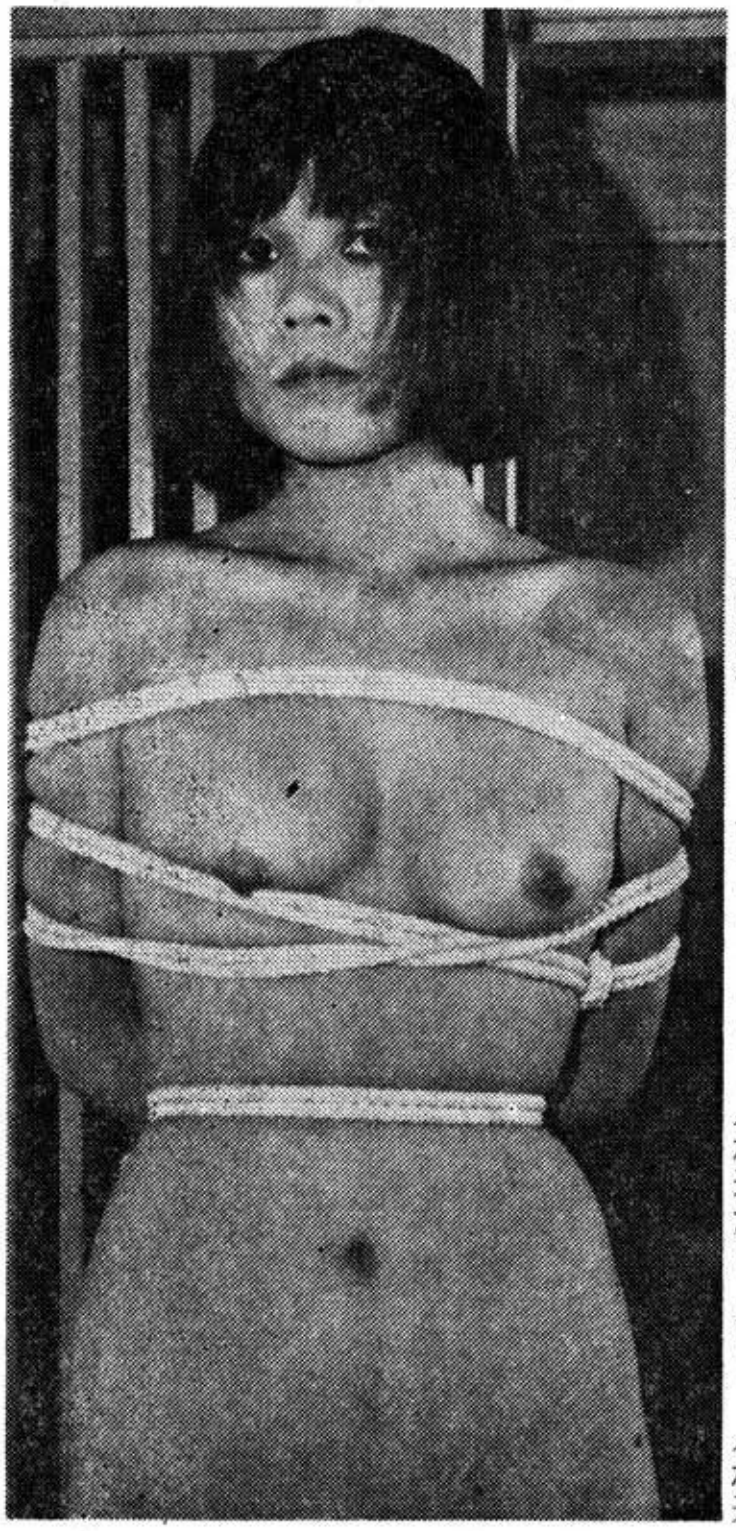
その彼女が、今、私の目の前で、全裸に剝かれて、奔放な姿態のまま、後手に縛られて浴衣の上に、ころがっているのだ。見るだけ見、眺めるだけ眺めた。彼女の裸身は、見られながら、なまめかしく、うねった。

私は、自分の体温を、彼女の体温に移し換えるように、ひしと抱きしめた。

「ああ、あーあ、ああ」

彼女は口を半ば開いて喘いだ。

私の右手は、彼女の乳房を鷲づかみにした



かと思うと、すぐに放して、脇腹を軽く抓った。抓ったかと思うと、べったりと掌を滑らせて、冷たい臀部を温めるように愛撫した。

甘い甘い唇。

そして顔を振りながら、頸と頸とを深く、互いに喰い込ませた。

さつきの女が、たとえ、今、ここへ入ってきたとしても、もう絶対に後へは引けない切羽詰った気持だった。

彼女もまた、同じ気持だったのかもしれない。観念したように、私の腕のなかで、じっとしていた。

こんなことをしている素裸の二人の姿を、誰かが襖をさっと開けて、白日の下に晒したとしても、それは、もう、今更どうしようもないという気持だった。

深田菊子は、後手首を縛られたまま、全裸の輝くような白い肌の前面を晒して、無抵抗で私のなすがままに委ねていた。

そこには被虐の妖しい焔が、チロチロと埋れ火のように燃えていた。このまま、どんなになろうとも本望だという捨身の気持が、二人を濃厚に支配していた。

私の掌は、執拗に、しかも丹念に、彼女の白い肌の上を這っていった。

「ううう、ううう、人が来たら、どうするのよォ。ネ、ネネネ、人が来るかも知れないのよ。ねえ、それだけにしておいて。それからは……いやヨ、いやヨ」

彼女の囈言と泣声は続いてゆく。

私の掌は上から下へと這いまわり、指は軟体動物のように右から左へと蠢きまわる。

そればかりではない。両手ばかりか、唇までが、ナメクジのように、べったりと柔肌のところきらわず、吸いつきまくるのだ。

彼女は顎をつきだして、のけぞり、背を弓のように反らして、両脚をつっぱる。

「イイイイイ、いやヨ。やめて、やめて。そんなこと、されたら、私、たまらないワ。だから、止めてって、言ってるのに……」

私の耳には、彼女の呻き声しか入らない。隣の部屋で、夕食の後片付している雑音なんか、何一つとして入ってこないのだ。

私も完全に夢遊状態に陥っていた。

この深田菊子と二人きりでいる密室以外のことは、何も目にも耳にも入らなかった。

ただ、そこには、若くて美しい深田菊子という女性と接している官能の歓びだけが、五官を痺れさせているのだった。

そう、私は文字通り痺れきっていた。痺れきっているが故に、狂ったように燃えさかっ

ているのに、いつまでも、いつまでも、そんな状態で耐えていることが出来た。

一旦、そんな状態になってしまうと、私は完全に自分をコントロール出来た。

充分な余裕を以て、彼女を思いのままに責めることが出来たし、この若くて美しい女性を、忘我の境地に追い込んでいることに、凄い快感を連続的に感ずるのだった。

このまま、時計の針が止まってしまって欲しかった。いついつまでも、このままの状態で、ずっと、こうして、いたかった。

私は彼女の顔を見た。

半ば口をうっすらと開けて、眉と眉との間に、きゅっと皺を寄せて目は瞑っていた。

それは崇高なまでに美しい表情だった。

「ここを、後で剃ってあげようね」

彼女は、うっとりとしている。

「ええっ、なにか、言ったの？」

「ああ、そうかい。聞えなかったら、いいんだよ。あのね。後で、ここを剃ってあげようって、言ったんだよ」

私は、そこへ手を伸ばす。

「ああ、それはイヤ。駄目なのよ」

彼女は夢からさめたように、あがく。

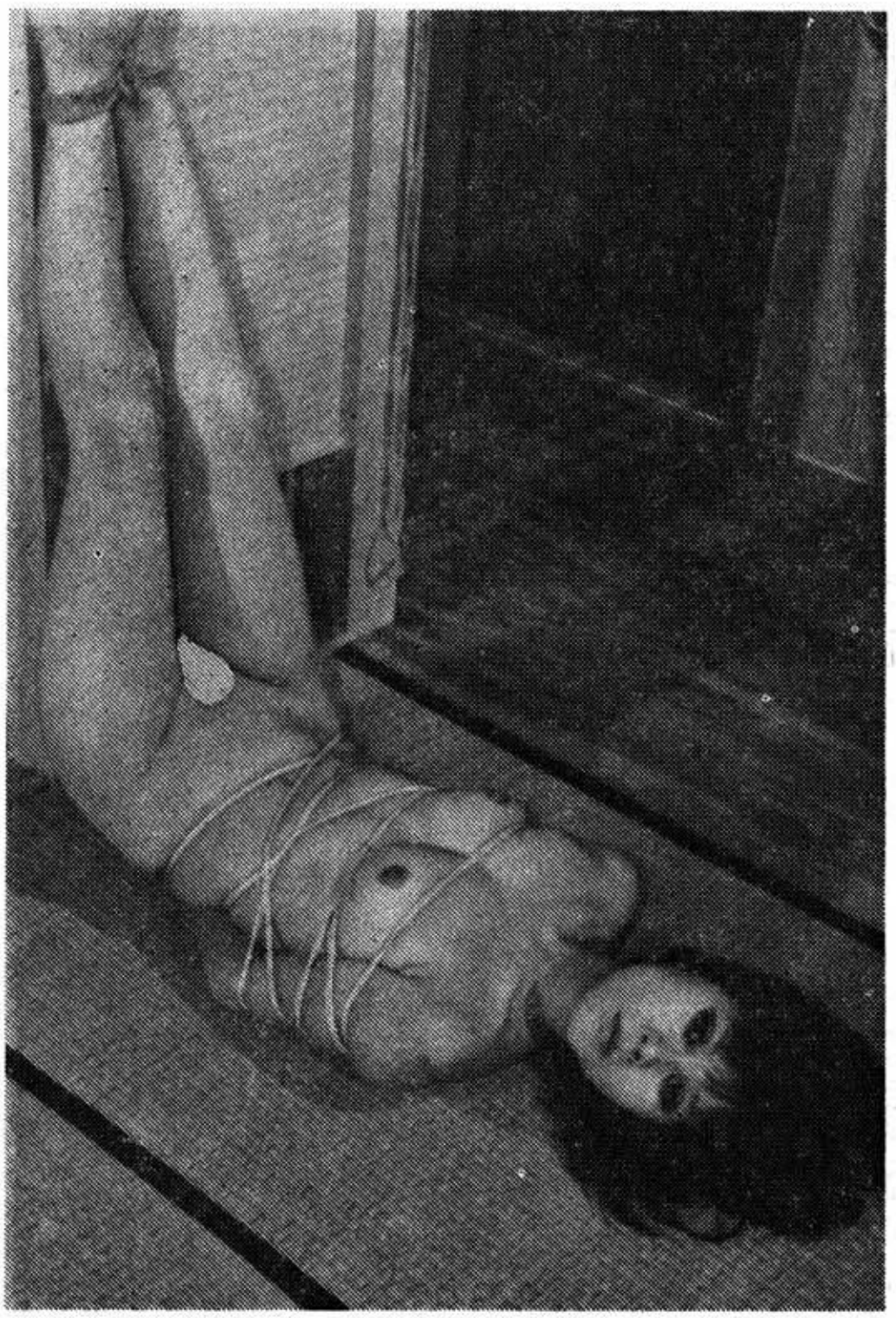
それは、そうだろう。婚約者との結婚を一月半の後に控えて、剃毛責めなんかにされたら、それこそ、新婚初夜の床の中で、大騒動が持ち上りかねないからだ。

だが、しかし、それだからこそ、私の悪魔的な嗜虐癖が、むくむくと鎌首を持ち上げてきたわけだ。

今までの深田菊子だったら、即ち、結婚式を十一月二十四日の目前に控えた婚約の身でなかったとしたら、私が「剃ってやろうか」と言ったら、「あら、面白そうだわね。どんな感じか、一度、剃って頂こうかしら」と、事もなげに、のってきたかも知れない。

でも、今は違うのだ。

彼女には、ちゃんとしたフィアンセがいるのだし、晴れの結婚式が四十日後に迫っているわけだ。



「結婚初夜の闇の中で、ここがツルツルに剃られているのを知ったら、彼氏は、どんなにびっくりすることだろうなあ」

「おお、言わないで、言わないで。そんなこと、聞いただけでもゾッとするわ」

私は秘かに、鞄の底に電気カミソリを忍ばせてきていた。

ブーンという軽いモーター音と共に、私が自分の顎のヒゲを彼女の目で前で剃って見せてから、やおら、彼女のヒゲの方へ、そのカミソリを伸ばしたとしたら、どうだろう。

荒尾慶子に苗木陽子、それに、この間は渡部好美の剃毛責めの際に活躍した充電式の電気カミソリである。周りに、切り込んだようなカッティングが付いているので、長い毛でも巻き込むこともなく、忽ちにしてカットして毛を挑ねとばしてしまうのだ。

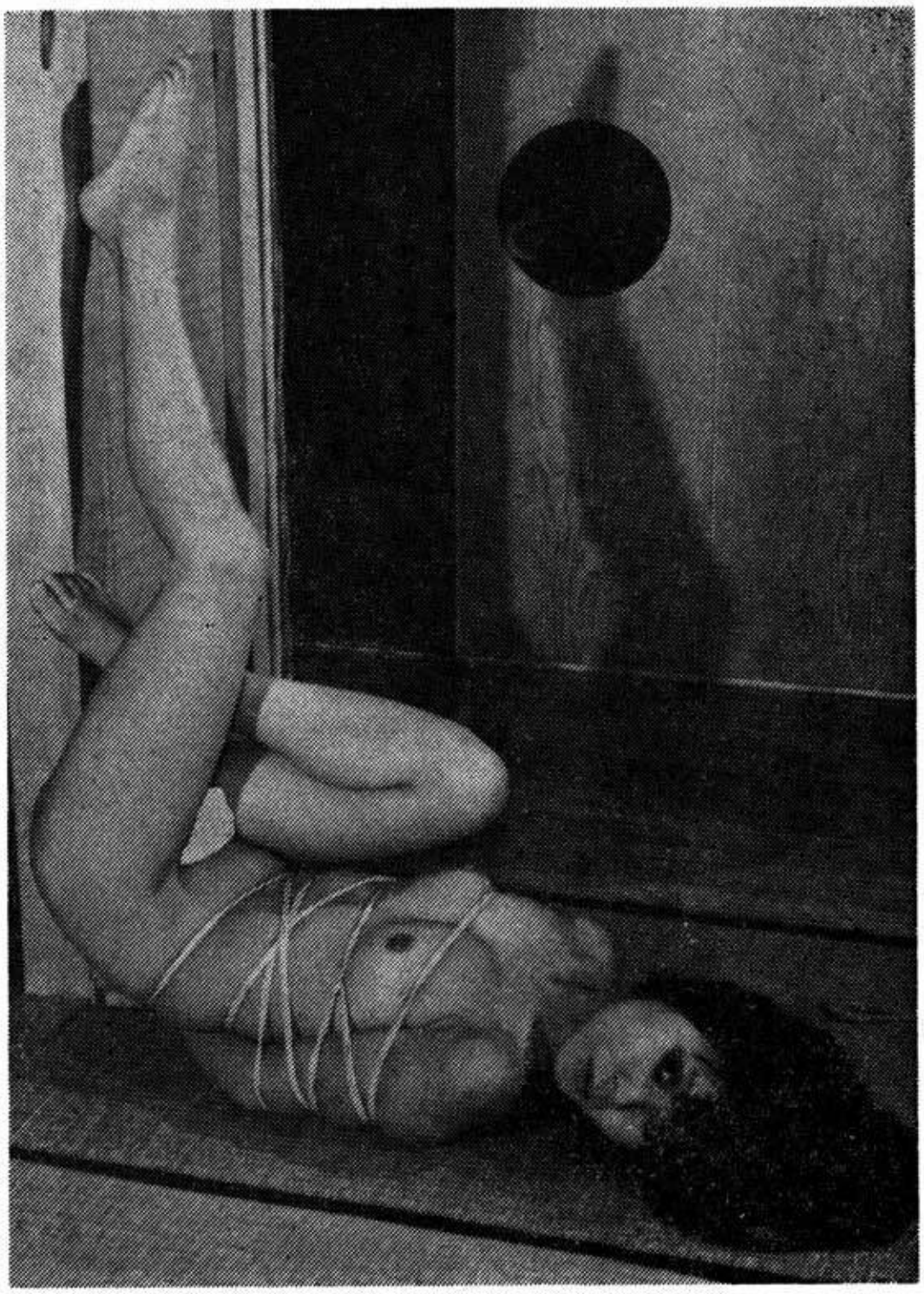
私は、襖をそっと細目に開けて、隣の部屋を覗いてみた。ああ、そこには、食膳だけがポツンと人待顔に置いてあり、食事のアトはすっかり片づけられてしまっていた。

私は入口のドアにロックした。

襖を全部、開け放っておいてから、廊下に置いてあったバッグを部屋の中央へ運んだ。

「ねえ、縄をほどいて。私、おトイレへ行きたくなったわ。それに、体も洗いたいから、お風呂へ入らせて……」

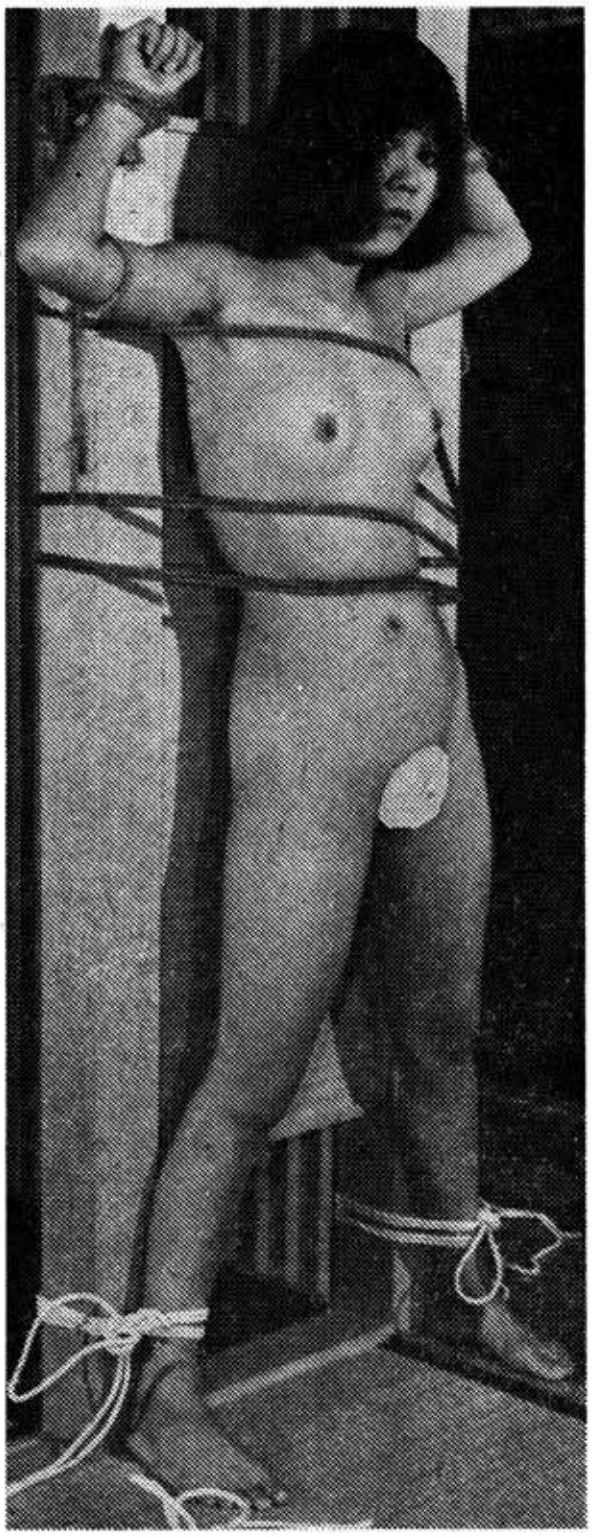
後手首の縄をほどくと、彼女は浴衣を羽織って浴室へ消えた。やがて、聞こえてくるタイルに当る激しい水の音。私は鞄から照明器具を出して撮影の準備をしてから、カメラにフィルムを詰めはじめた。



☆〝剃毛ごっこ〟

母乳を飲んでいる赤ちゃんのような甘酸っぱい深田菊子の体臭が、移り香のように私の胸もとに、まだ残っているような気がした。

その移り香を、振り払うようにして、ストロボを配置し、カメラにフィルムを詰めた。



三台のカメラに、それぞれ三種のフィルムを詰め終えて、ふと顔を上げると、そこに深田菊子の匂やかな裸身があった。腰にバスタオルを巻いただけで、胸からも、肩からも、ほのかに湯気が立ちのぼっている。

益々円熟してきた深田菊子の裸身だった。

私は白いロープを手にして立ち上った。

「やっぱり、括りはるの？」

「でも、菊子は、縛られるのが、大好きなんだろう？」

「ええ、嫌いじゃないわ。括られて、動けなくなったところを、いじめられるのが好きなの。けど、今日は痛くしないでネ」

「そうだね、ひょっとしたら、今日は菊子とのプレイ納めになるかも知れないかと思うと

いろいろな責めをやりたいっていう気がするんだが、実際には、やはり〝ごっこ遊び〟っていうことになってしまうだろうね」

「なんなの、その〝ごっこ〟というのは？」

「例えば、〝お医者さんごっこ〟というのがあるだろう。ああしたもんさ。SMプレイで言ったら、〝縛りごっこ〟とか、〝浣腸ごっこ〟とかいった類さ。プレイという言葉は好かないけれど、まあ、言ったら、大人のお遊びなんだろう。だからこれから菊子を責めるのも、〝縛りごっこ〟や〝いじめごっこ〟になるだろうなあ」

そんな会話を交している間にも、白いロープは彼女のたおやかな裸身に蛇のように、まつわりついていった。

「こんなに、縄で、きっちりと縛られてしまったら、やっぱり、私、たまらないわ。変なのよ、身体の奥の方が……」

「身体の奥の方って、一体、どこなのだい」

「いやよ、エッチだわ。そんなことを訊くなんて、紳士じゃないわ」

「菊子が、縛られることが好きだから、そうなるのか、それとも、この縄が性感帯を刺戟するからなんだろうかなあ。でも、これは、特別に変った縛り方じゃないのにね、一体、どうしたんだろうなあ」

「まあ、憎らしい。私を、こんなにしておいて、澄ました顔をしているワ」

「僕にとっては、縛りということは、前戯でもあり、後戯でもあるわけだよ。それにしても、菊子は縄で縛られると、一段と、あでやかさを増してくるじゃないか。こんなに縛っておいて、無茶苦茶にいじめたいナ」

「だったら、好きなように、いじめて。私、もう、今日が最後だと思って、思いっきり、いじめられたいのよ。でも、痛いことをするのだけは勘忍してネ」

パッチリとした眸が心なしか潤んできた。

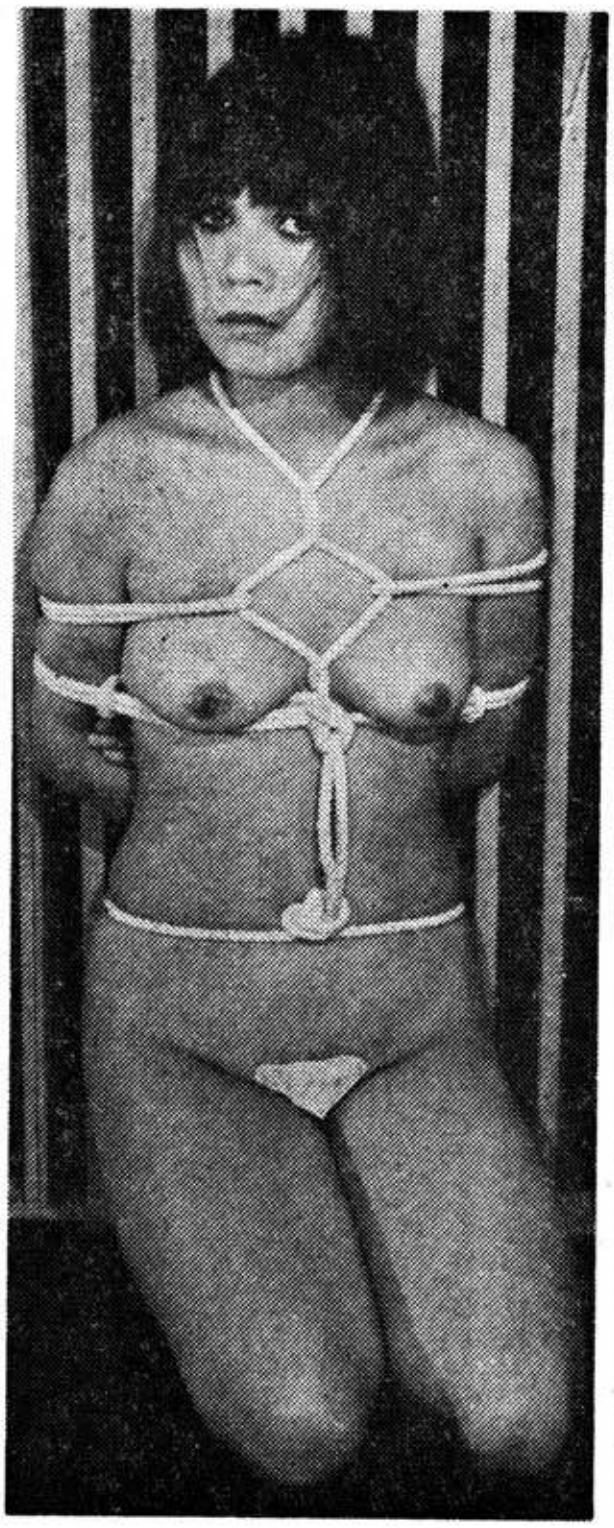
一人の若々しい女のM性を、これから探ることが出来るのだという思いで私の胸は、妖

しく高鳴ってきた。

といって、私の心の中に、異性をむやみに虐待して悦ぶというサディスチックな気持は少なかった。それよりも、むしろ、いじめられて喜ぶ女性の姿態を眺めたいという気持の方が、ずっと強かった。

そして、更には、縄で縛りあげられた女体の美しさを賞でたいという助平根性が介在していたのも、まぎれもない事実だった。

本誌に連載しているロマン派生氏の〈縛りの美学〉に於ける佐野みさ子に対しての丹念な緊縛の美しさは、まことに目を瞠るものがある。シンメントリカルな縄の掛け方によって、M女、佐野みさ子の女体の美が、最高度に発揮されているのを、私はそこに見る。



今、深田菊子もロープで裸身を縛り上げられることによって、白い肌に微妙な陰翳を宿して単なるエロチックな興趣より進んで、妖艶な被虐的ムードを醸しだしていた。

男性は、視覚によって、その映像を見るとに異常なまでのエキサイトぶりを示すが、女性は見られることに、耐えがたい羞恥の泥沼に悶えながら快感にむせび泣くものだ。見たい者と見られたい者。そこに、火花の散るようなSとMの相剋があった。

私は見るばかりではなく、そうした菊子の緊縛肢体にカメラを向けた。

その度毎に、彼女は、なんとも言えない哀れな顔つきをした。哀愁を帯びた顔だ。やるせない、仕方がないといった諦めきった表情のなかの羞恥、羞恥のなかの快感が、彼女の全身に漲っていた。彼女のからだ全体から発散した物憂い頽廃のムードが、この密室全体にまで、充満してきていた。

いつの間にやら、私自身も、その深田菊子の頽廃の美のなかに溺れ、その渦中で毒気に当てられたようにフラフラになってきた。

それは深田菊子の不可思議な魅力だった。

自分の身のすべてを捨てきってしまった捨身の身のこなしでありながら、それでいて、結局は、周りのもの、すべてを、灼きつくして、自己のものとしてしまう魔術だった。

私は目の前に花園を見、耳には雅楽の妙なる調べを聴いた。鼻に匂ってきた佳香は、まさに天女の羽衣からのものだった。

私は夢遊病者のように、フラフラと電気カミソリを右手にしていた。

「ここの毛を綺麗に剃ってしまおうネ」

高手小手に縛られて、逃げだすことも這いだすことも出来ない彼女の裸身を、しっかりと私は膝の下に押えつけていた。

「いやヨ、いやヨ。そんなことをしたら、お嫁に行けなくなるわ。カンニンして……」

まさか、私が、そんな剃毛責めなんか、絶対にしないと考えていた彼女だったのだろう

が、下半身の近くで電気カミソリのスィッチが入って、ブウーンという軽快な電動音が起るに及んで、途端に悲鳴を挙げた。

僅かに自由な両脚が激しく空を蹴った。

青白く静脈の浮きあがった内股の抜けるような白さが、なんともいえない、なまめいた色っぽさなのだ。

跳ねまわる足の指、脛、膝、太股——。

それらの陰微な動きを、私は何一つ、見逃すまいと凝視しつづけた。

軽く振動する電気カミソリのヘッドを、無情にも、私は彼女の毛の上に押し当てた。

「ホラホラ、これで、ツルツル坊(ぼん)さんになってしまうんだよ。うわあ、きれいに剃れた、剃れた。こりゃ凄いもんだ」

私の言葉と下腹部を這いまわる電気カミソリの振動とで、彼女は狂ったように、挑ねまわった。あの淑かな彼女の身体に、これほどの力があったのかと、びっくりした。

私はガタガタ、おびえている彼女の上半身を、しっかりと抱きしめた。

目がすわって、一筋、二筋、涙のアトが目尻を濡らしている。

畳の上にころがった電気カミソリが、スイッチの入ったまま、相変らず、ブウーンと唸りつづけている。

彼女が余りにもショックを受けすぎているようなので、私はいささか反省した。

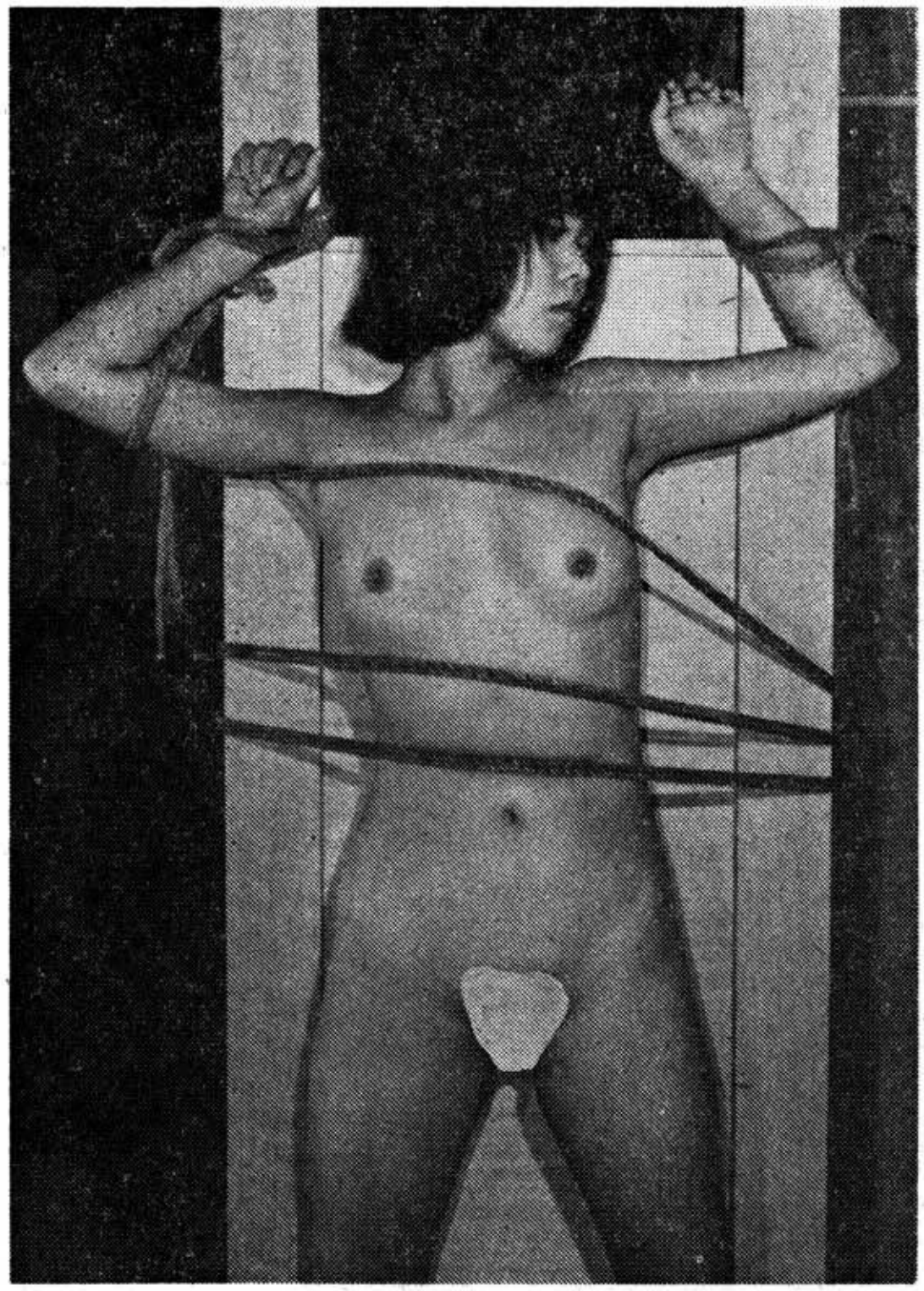
〝少し、驚かしすぎたかナ〟

私は電気カミソリを拾い上げて、スイッチを切ってから彼女の目の前に差し出した。

「ごらんよ、ホラ、この通り、カバーをかぶせたままだよ。これだったら、いくら、スイッチを入れても剃れないだろう」

「まあ、そうだったの」

彼女は、ほっとしたように、涙のいっぱいたまった眼を、またたいた。自分のおびえようが少しオーバーだったので、バツの悪そうな顔をしてから、ニヤッと、はにかんだ。



「剃ったように見せて、実は、この通り、キャップをつけたままのインチキ・カミソリって言うわけなんだよ」

「最初から、それを言って下さったら、あんなに、びっくりしなかったのに、ズルイわ」

「だから、さっき、わざわざ言ったろう。これからやるのは〝ごっこ遊び〟だって。これも一つの〝剃毛ごっこ〟さ。でも、菊子が、あんまり、びっくりするもんだから、実のところ僕も、ちょっと怖くなって、途中でやめてしまったんだよ。本当は、実際に剃り落したように、毛なんかを見せたりしたらネ、もっと迫真のプレイになったんだがね」

「まあ怖い。ほんとうに、寿命がちぢまったみたい。胸がまだ、こんなにドキドキしているわ。〝ごっこ遊び〟って怖いものネ」

「そうでもないさ。種が割れてしまうと、さっぱり迫力がなくなってしまうんだよ。目かくしをしておくと、一寸、面白い責めも出来なくもないがね」

「目かくしなんて、イヤイヤ。目が見えないだけで、怖いもん」

「あんまり怖がらしても心臓に悪いからネ。これ位にしておこうか。菊子には、こんな責めの方がいいんだろう」

私は、さっと掬いあげるように彼女の膝の下に腕を通して抱き上げた。

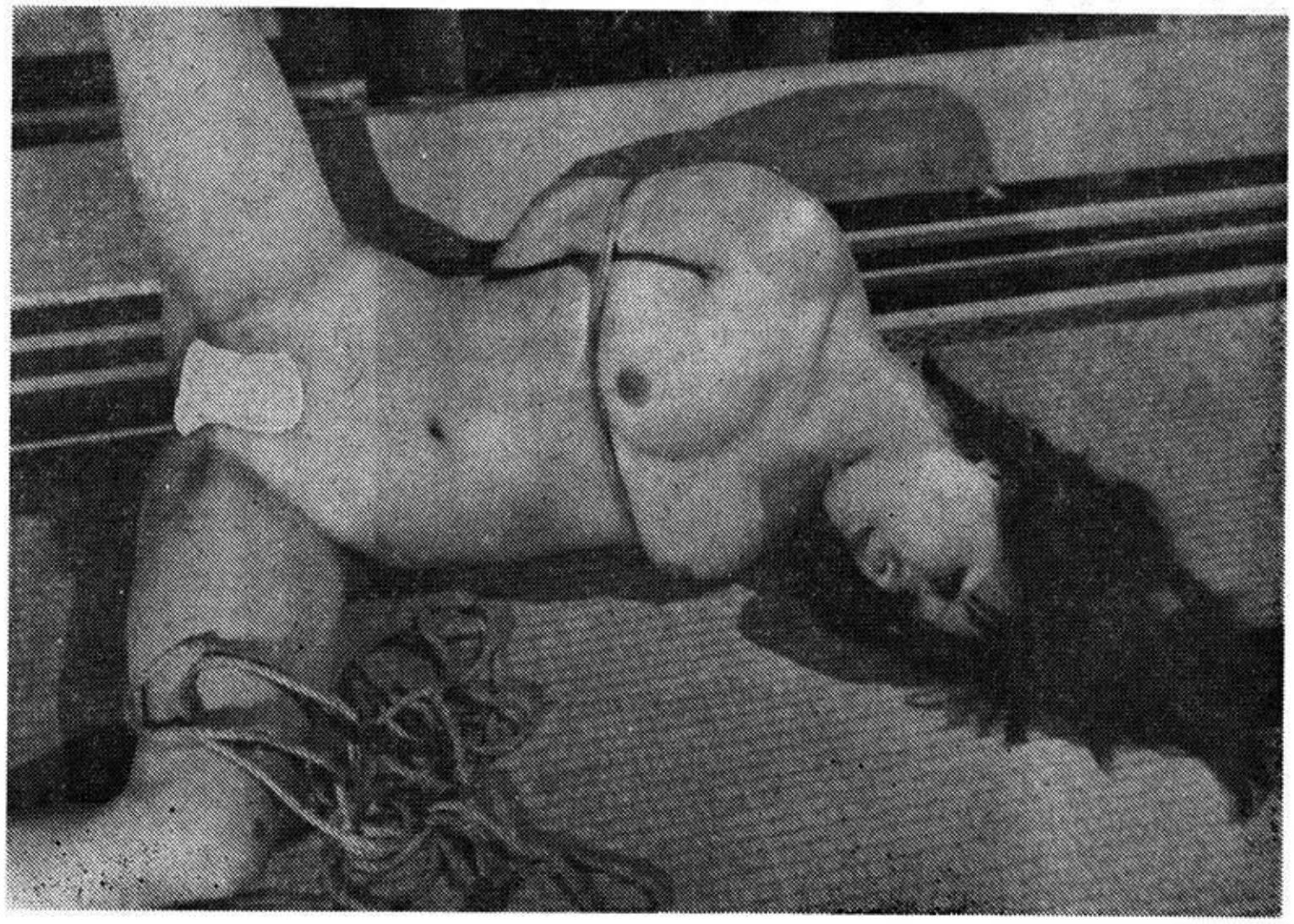
恐怖のあまり動顛してしまっていた彼女の瞳も、次第に落着きを取戻してきている。

ドサッと座布団の上に置いた。

彼女の足の裏に掌をやった。

ねっとりとした餅肌がへばりつくようだ。

近頃の若い女性は専ら椅子生活だから、足に坐りダコというものがない。それに、彼女は高校時代も運動は何一つ、やったことがないと言うだけあって、足の裏の柔らかいことは驚くくらいだ。概して若い女性の足の裏はふくよかだ——というのが定評のようなものだが、この深田菊子と、それと、もう一人、玉木章子



の足の裏の羽二重餅のような柔軟さには、触ってみて度肝を抜かれたものだ。

それに、以前にも書いたことがあるが、深田菊子の足の裏の温かさというものは、まことに、心のなごむものがある。

総じて、夏は肌が冷たく、冬は肌の温かい女性が逸品である。夏の暑い日、ひんやりとした冷たい肌を寄せられると爽々しいが、冬の寒い日、凍ったような膝頭なんか寄せつけられると、思わずゾッとして興ざめだ。

この深田菊子という女、お尻が滅法冷たい割に、足の裏は、いつも温かいのだ。

私は、その温かい足の裏を、くすぐる。

女を縛っているからこそ、こんな〝いたぶり〟も出来るのだ。

縛っていなかったとしたら、こんな擽りも出来ないし、ましてや、こんなにジロジロと彼女の裸身を眺めまわすことだって出来る筈はない。私は深田菊子のからだの、どの部分だって、見るのが好きだった。

それが普通の状態であっても、また、責めに悶えて、特別な様相を呈しているときであっても、見るのが好きだった。

男が女に、女が男に、なんとなく、ひかれてゆく気持。それは純粋には動物的な、それではないだろうか。

私は単純に、文句なしに、理屈なしに、深田菊子という女にひかれてしまった。

この女のからだだったら、どの部分だって舐めてみたいと思った。

乃美対造氏は嘗て深田菊子のユリンを直接飲んだということだが、私も、彼女のだったら、舐めるだけぐらいなら、してみてもよいという気がする。若しも、彼女が、それを望むということならばの話だが——。

彼女は、男の目の前で排尿するところを見られたいという露出欲を持っている。私は、その彼女の欲求を満たしてやるため、花蕊から迸り出る透明な液体を、幾度となく、この目で確かめたしカメラにも納めた。

身体中を隅々まで見られる。しかも、女として、最も羞恥に満ちた排泄の行為を、異性に見られる。それだけでも、もう、耐えがたい恥辱なのに、更に正面から、鮮鋭なレンズによって刻明に印画紙の上に記録される——そう思っただけで、彼女のからだ中の、血という血が沸きたたずにはおかないだろう。

花蕊の奥の奥まで見られるということは、それは女にとって、一体、なんだろうか。

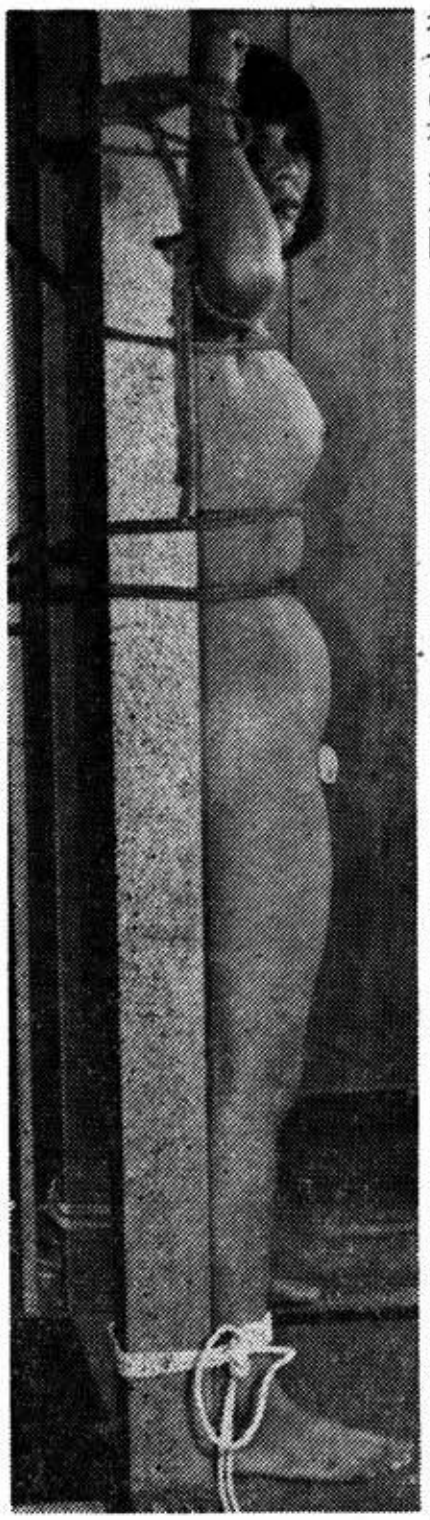
私は結婚式を四十日後に迎えた一人のうら若い女性としての菊子を改めて見直した。

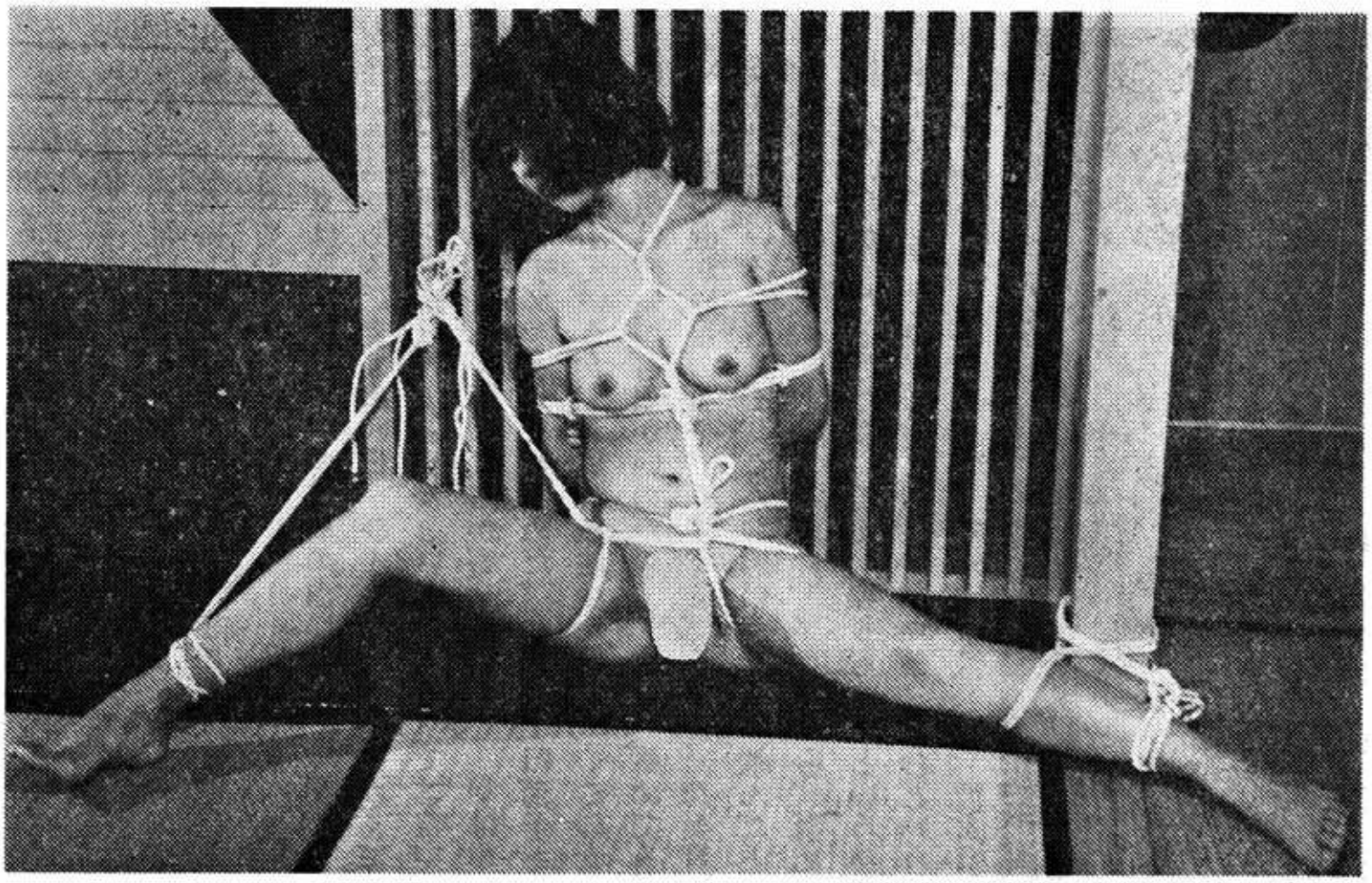
M女は結婚すると幸福な生活を営むことが出来ると言われている。とすれば、彼女もまた幸福な結婚生活を営む有資格者というわけだ。彼女の未来のハズバンドとなる彼を、私は知らないが、きっと美しい彼女にふさわしい好青年なのだろう。

☆

天真爛漫の若さを誇る深田菊子の裸身から私はロープを解いていった。

生身の肌に、じかにトゲトゲしいロープが





締めつけているのさえ、うら若い女性にとっては、とても、たまらない刺戟にはちがいないだろうが、縄を解くときも、からだ中の至るところの性感帯が、ロープでこすられて、いやが上にも性感を昂めるものなのだ。

私は、わざと時間をかけて、ゆっくりロープで柔肌を殊更ずらしながら解いていった。

ふうっーと、安堵の息を洩らす間も与えずに、私は新しい縄で再び彼女を縛り上げる。

彼女を開股縛りの晒しものにして、悦虐責めにしようという意図であった。

私が、どんな悪どい悪戯をやっても、じっと覚悟をきめて、つぶらな瞳を見開いたまま為すがままに耐えている聖女のような深田菊子の両足首に縄を掛けて、ぐいぐいと左右に押しひろげた。

若い女にとって、これはまた、なんというハレンチな責め方であろうか。両足を八の字に、無理矢理に開かせられるなんて、これはとんでもない、女の心も誇りも完全に蹂みにじったやり方ではないか。

私も最初は、そう考えていた。そんな責め方をやりたくて、うずうずしながらも、若い女を前にして、なんとなく、ためらわれた。

それが、いざ、この開股縛りの責め方をやってみると、最初は、なんだかんだと拒んでいた女も、縄によって固定され、もう、どうしようもない絶対絶命の境地に追い込まれてしまうと、俄然、燃え上ってくるのだった。

それは驚くくらいの早さと激しさとで、彼女の身も心も、燃えつくさんばかりに、悦虐の悶えを、あからさまに見せつけるのだ。

「恥かしいわ。あんなところを、お見せしたりして……」

狂うばかりの発作のひとときが過ぎると、消えいりたいばかりの羞恥と後悔の念で、顔を赤らめるのであるが、そんな悦虐の狂態を男の目の前で演ずるということに、身も心もとろけるような快感があるものなのだろう。

開股縛りにする過程でも、足の裏を擽ったり、乳房を抓ったり、お臍の窩に指を突っ込んだりして、彼女の抵抗を弱めながら、両脚を出来るだけ大きく開かせて、縛りつけてし

まうのだ。

それからは腹這いになって、近々と目を寄せてしげしげと眺めたり、ライトやカメラを近づけて、いたぶりながら、いよいよ、そのポイントへ直接的な攻撃を加えることになるのだ。

今まで、ポーカフェイスだった深田菊子もここに至って、初めて顔をのけぞらして、激しく呻いた。縄で足首を括られた脚が、ピンと伸ばすだけ伸びて、ブルブルッと痙攣しているのが、私の目に、はっきり映った。

私は指で執拗に攻撃を加えながら、彼女のたえず呻き声を洩らしている顔と、激しく痙攣している脚とに視線をこらした。

そのさまを見ているだけで、開股責めをしている醍醐味に酔ってしまい、私の全身は快感のルツボと化してしまった。

ああ、見ているということが、こんなにも気持がよいものなのか。からだ中が、火となって燃えつきてしまうような快さなのだ。

なんといっても、見ているのが気持よい。

真っ白い彼女のお腹が大きく波打っているのなんかも、とても見ていて、たまらない。

そのうえ、耳から、とぎれどぎれに入ってくる彼女の呻き声の伴奏も、これも捨て難い味わいがある。

自分自らが責め、そして、それに対する彼女の反応を目のあたりに見ていると、まさにこの世の極楽、夢の天国という気がする。

責めて、責めて、責め抜き責めの果てに悶絶する女の姿って、それは凄いものだ。

外郭から攻め込み、次第次第に、本陣の中枢——所謂、ポイントへ攻撃目標を集中するのが常套手段だが、それも相手に依って、それぞれ個性があって、面白いものだ。

徹底的に責めて、責めて、責めたてれば、殆どの女性は狂乱状態か、失神状態に陥ってしまう。しかし、これがM女の終焉だと考えたら、多くの場合、失敗してしまう。

いわば、これが彼女たちの出発点なのだ。

ここの所を、よく弁えていないと、殆どの男性は、みじめな立場に陥ってしまう。

肉体のすべてを捧げても悔いないという境地に到達した女性が、如何に失神状態や狂乱状態をあからさまに男性の目の前で見せつけたとしても、それは、まだまだ序の口と判断すべきなのだ。

ここが、男性にとって、非常に辛い男性の本性の弱点なのだ。ここで早く遂げてしまいたいという排泄欲を満足させてしまうと、総てがアウトになってしまう。

M女性を足下に睥睨して完全に牛耳ってしまえるか、どうかが、この最後の一点にかかっているといってよい。

M女の狂態に惑わされて、うっかり気を許してしまったが最後、その時点でM女を土足で蹂みにじることは決して出来なくなってしまう。ここを出発的と考えるならば、赤児の手を捻じるようにM女を思いのままに、翻弄することが出来るというものだ。

二人きりの密室で、露出趣味を最高に満喫させるためには、カメラとテレコが楽しさを倍加させてくれる。M女の露出癖は、この二つによって殆ど解決してくれるが、残念ながら男性の側の露出欲は満足させてくれない。

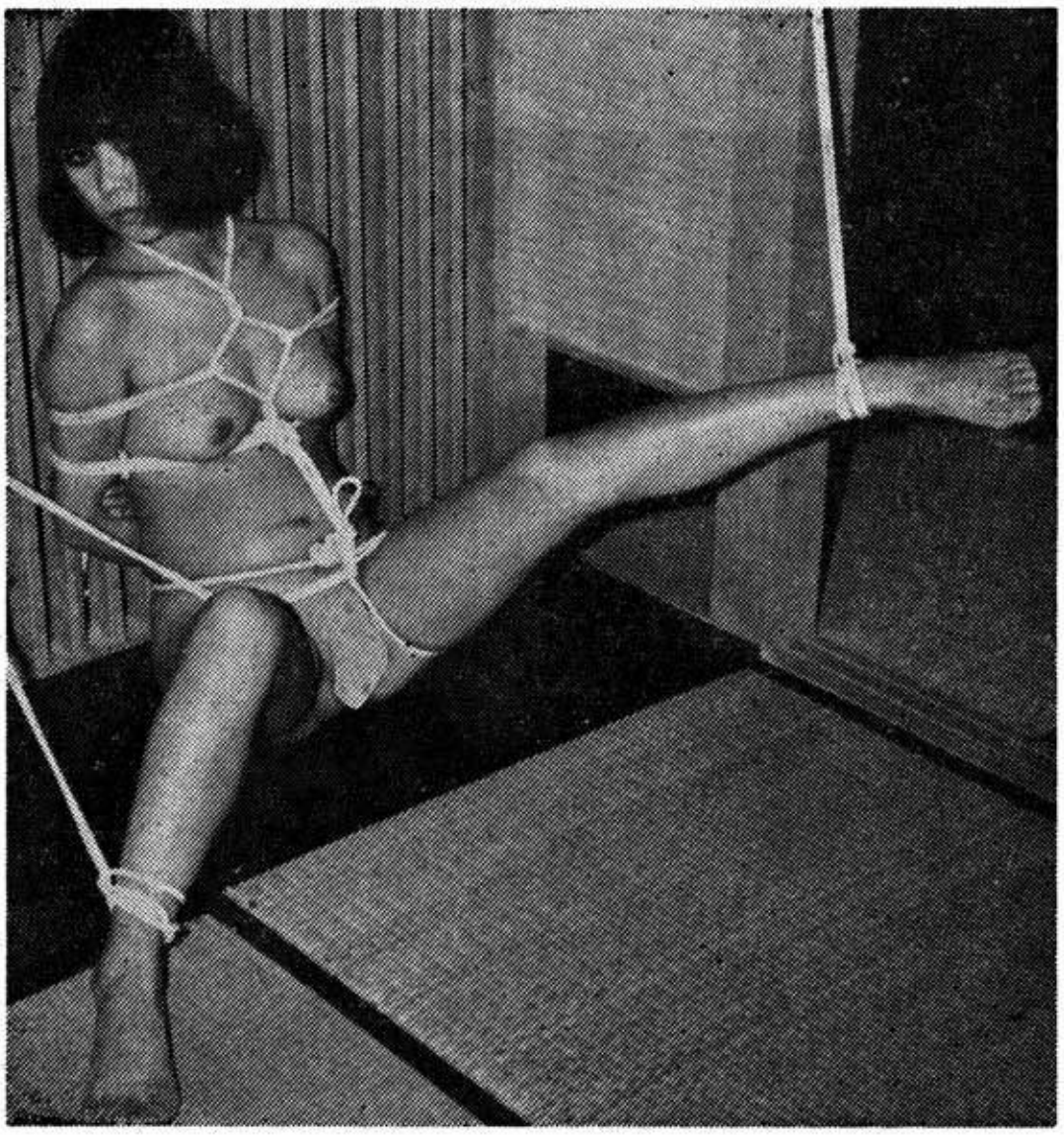
私は、深田菊子の全身をメロメロになるまで昂揚させておいてから、いろんなポーズをとらしてカメラに収めていった。

M女というものは、一旦、そんな状態に陥ってしまうと、もう、それからは、男の言うことには、どんなことでも易々として従うのが常だった。それが、彼女にとって、恥かしいことであればあるほど、それを無理にさせられているということと、自分が仕方なく、その恥かしい行為をやっているということに限りない快感を覚えているのではないのだろうか。

深田菊子を縛り責めるのも、これが最後になるかも知れない——という思いが、私の心を支配して、あれもやりたい、これもやりたいという気持がしたけれど、時計の針は、待ってくれるということはしなかった。

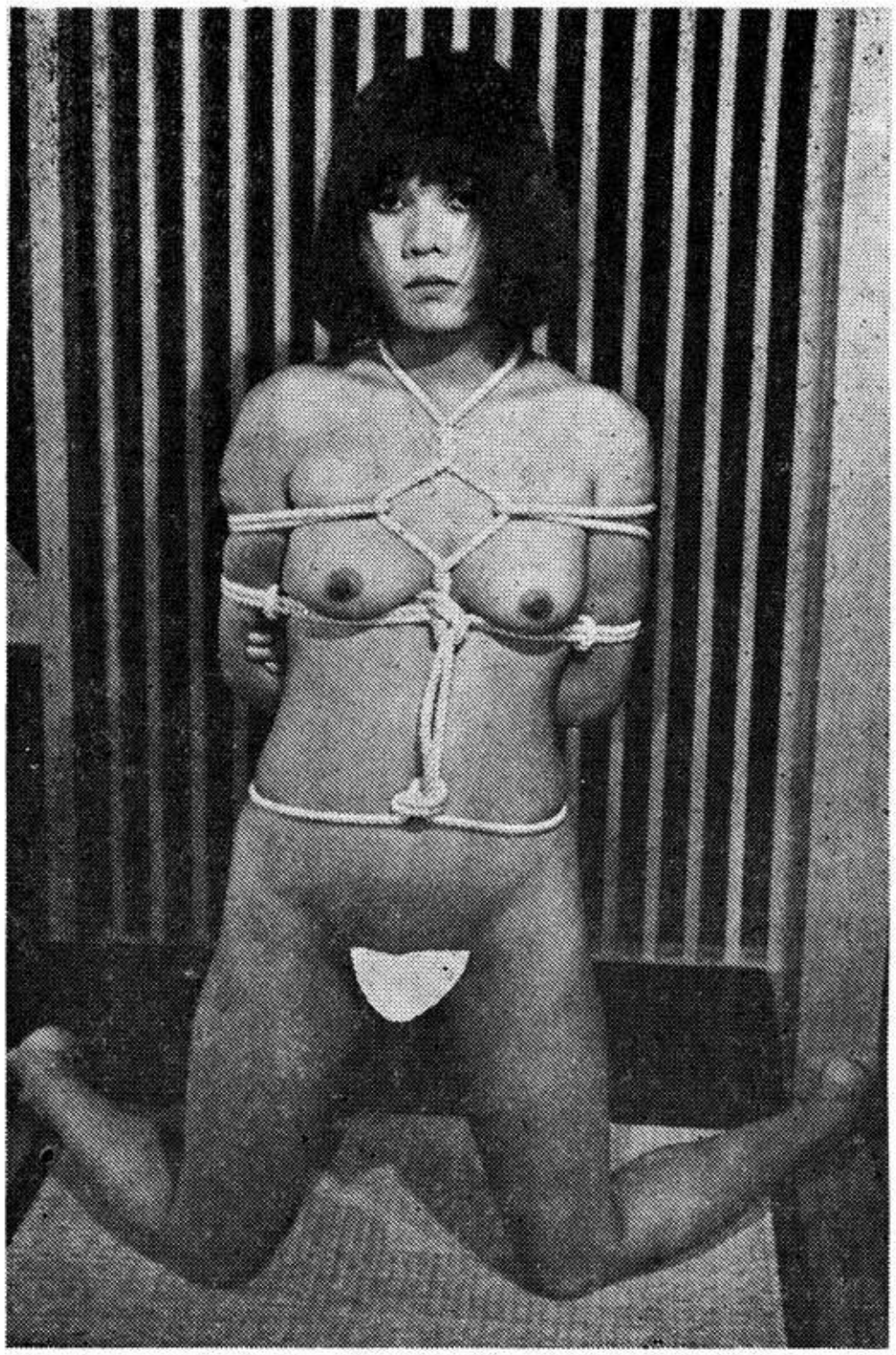
折角、塩田温泉まで、足を伸ばしたというのに、肝腎の温泉につからない間に、徒らに時間ばかりが過ぎてしまった。

彼女の縛られた裸身を晒し者にしておいてから、カメラを組んで、穴のあくほどウブ毛の一本一本も、見逃すまいと眺めてから、カメラを構えてシャッターを切った。



カメラに詰まっているフィルム全部を使いきってしまうと、それを畳の上にころがしておいてから、彼女の方へ近寄っていった。

今の今まで、鑑賞用女体であり、被写体であった深田菊子が、いよいよ、私の人身御供として、犠(いけにえ)の祭壇に供せられることになるの



だ。

私が彼女の縄尻を持って部屋の中を引き回して薄暗い奥の部屋へ連れてくると、私の淫らな意図を、いち早く察して、彼女は軽い拒否を示しはじめた。

「いやヨ、いやヨ、もういやヨ」

口では、そうは言っていても、全裸で縛られたからだの方は、崩れるように、私の両腕のなかに倒れかかってきた。

なんという媚態なんだろう。

四肢のはしばしから、匂うような色気が、ほのぼのと漂ってくる。

その気がない男性でも、この全裸で縛られた花嫁人形の消え入るばかりの風情を見たならば、きっと、たまらなくなって、ハッスルしてしまうだろう。

淡い反射光に浮かびあがった白い裸像は、柔肌に縄を喰い込ませながら、そこに横たわっていた。

入口はロックしてあるので、もう、誰も入ってくる心配はない。どんなに泣き声を立てたって、聞かれる心配はないのだ。

私は、やおら近づいていった。

「ねえ、お願い。カーテンをしめて——。明るいと、私、恥かしいもの」

彼女の舌足らずのような甘い声がした。

私は立ちあがってカーテンをしめた。

深海の底に沈んだような、あたりの暗さに目が馴れてくると、彼女の白い肌の陰翳が、夢幻的な美しさで浮かびあがってきた。

まるで、お伽の国のお姫さまみたいに、とても奇麗だった。暗いので、見ていて、たまらないほど、ロマンチックだった。

全裸で縛られて、身動きのできない、この美しい女が、自分の思い通りになるのだ——という悦びが、私の全身に、ふつふつと溢れていた。私は、じっと彼女を眺めていた。

眺めれば眺めるほど、彼女の体は微妙な変化をきたした。ただ見ているだけなのに、なんとも云えない繊動が、彼女の、その部分に起こっていたのである。

（終）

わが青春と奇クとの出合い

——大塚啓子さんへの妄想譜——

水江伸　文と画

本屋の店先でパラパラと繰る奇クのグラビアに心奪われ、しばし我を忘れて見とれる。グラマーな女体の乳房、腰に喰い入る縄目の柔らかき肉のくびれが描き出す妖美な曲線。黒髪の床に垂れて艶々しく初めて見る女体緊縛の妖美な世界に、このように美しい女体があったのだろうかと驚きの声、洩らしつつ、胸は高鳴って止まない。

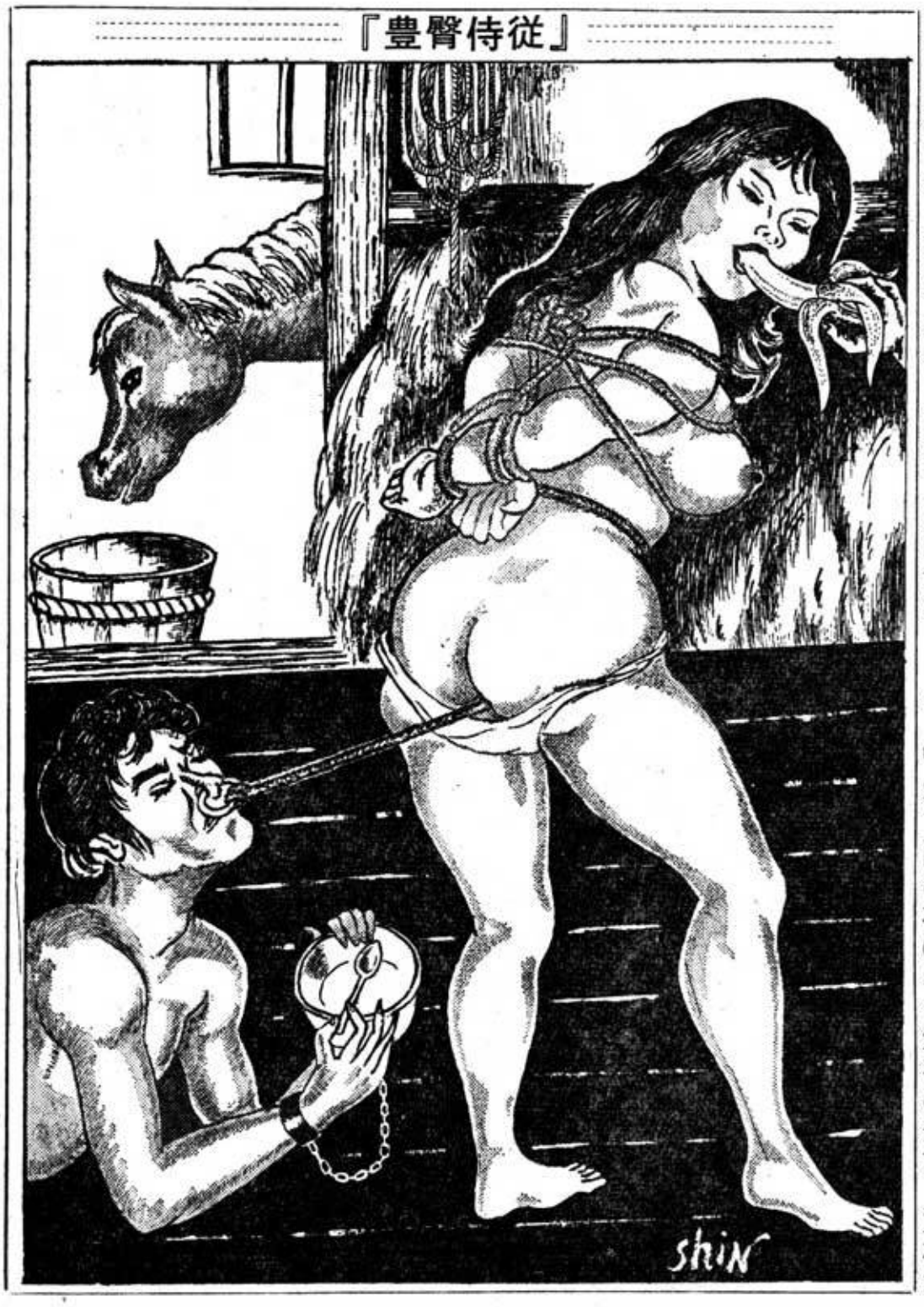
店頭に立ち読みの客の溢れ、次第に数増す春の日の夕暮れ、いつもの事で客が混んでくれば本屋の女将が、はたき持って店頭の本パタパタと払い立てるのは本の塵払うのではなくて、立ち読みの客、払うものと覚える。

だが平然と素知らぬ顔の半兵衛決め込み立読み続けるのは立ち読みの醍醐味だが、その折の私は、それを機に手にした本持ち、万引きに目光らす老主人の、どっかと腰据えた前に本を差し出す。毎度おおきにとも言わず金額のみ言って包む主人も、いつもの事。私は未だグラビア写真の緊縛女体の眩惑に心奪われた侭、暮れゆく町の燈火の中を、わが狭き下宿へと急ぐ。

思えば独得の地味な表紙四馬孝画伯の口絵の奇クに初めて出合った宵であり、また奇クとの出合いは大塚啓子さんの緊縛女体美に、私が強く魅せられた所為に他ならぬ。

包み解き改めて見るグラビアに顔は火照り吸う煙草にも息は咽ぶ。執拗になぞるが如く打ち眺め、眺めれば眺める程に大きい乳房、腰や太腿の曲線妖しく私に迫まり、私の心を虜にする。風もなき春の闇夜は生暖かく私を包み、次第に独身のやる方なき欲情の渕へと溺れさせる。それからは毎号、奇ク出るたびに大塚啓子さんのグラビアを目で確かめては心弾ませつつ買い求め、愛川悦子さんの美事な乳房、押せばコチコチに固いような気さえするのも、男に跨がる絹川文代さんの美しさにも目を留め、楽しむものの、私にとって最初の衝撃の大きかったために、やはり啓子さ

『豊臀侍従』



んでなければ物足りぬ。

乳房、腰、太腿見るたびに、さかりついた犬の如く欲情し、脳裡に描く妄想の無限に拡がる異端の世界は、或は陰惨に、ある時は華麗に妖しく私を捉え、啓子さんの脂粉の香り鼻腔に湛えつつ夢うつつともつかぬ甘美な陶酔に埋れながら過ごす夜毎、醒めては陽光の目に眩しく悔恨と哀感の交錯する心に自らをさいなむのは青春の常であったろうか。

貧しき金をはたき、遊里に赴けど、夢幻（まぼろし）は啓子さんから離れる事は出来ぬ。着衣の上より身体つき、彼女に似たりと思い上り、ふと洩らす君の名に、女怪訝（けげん）に「今、何て言った の？」寝て醒めれば名も知れぬ売女。荒れた肌の蒼白く痩せ、啓子さんの面影、宿す片鱗もない。馬鹿さ加減に我ながら腹立ち筐底に秘めた奇ク、取り出しグラビアの彼女見てはやがて心静まる。

まだしばらくは、彼女との夢のプレイ続けたい願望なれど、身体つき啓子さんに劣れど話してみれば優しさあり、精神のみ愛抱き憑かれる娘に、また父母の念じて止まぬ心思えば、気も滅入る故、やがて結婚に依り、その幕を閉じぬ。

心の奥底に愛執の残れど、ここで総てを忘れねばならぬと、一人勝手に決心し、やがて妻となる人の目に触れぬためにとパッキンケース一杯に溜め込みたるは手垢にまみれ、表紙摺り切れたる奇ク、せめてもグラビアの一枚、二枚、切り取って残し置きたい未練に駈られながらも、折柄、廻り来た屑屋に「金はいらぬ、中見ずに持って行け」と、どっさり重いのを背を屈め、自らリヤカーに積み込んでやる。

屑屋、屍体でも入っているのではないかとばかり訝（いぶか）しがれど、我の哀しき惜別の顔に表われたのを恐れたのか「左様か」と一言、礼も言わぬ。中味知れぬもの、礼言わぬも当然ながら、町角に消えゆくリヤカーの軋み見送

りて涙こそ出さねど、心中は泣く。

思えば、その頃の奇ク、股間縛りはおろか開股のグラビアも少なく、啓子さんも必ずパンティ纏い、後向き臀見せるのさえ良くて、パンティの半ば下ろしかけ、時折はその腰、太腿の魅惑の線追う私を嘲笑う如く、腰巻着け、下半身定かならず。わが妄想もって勝手に脱ぎ、その股を開かねばならぬ。

緊縛の素晴しき乳房に、蜘蛛の囲い迫るもの。両手高挙げに縛られた太腿の辺りまでの立像。また俯伏して高手小手、パンティは半ば降ろされた臀の円い肉剝出し、鼻を責められる図。長き髪の、乱れて肩に掛かり、腰巻びっしょり濡れ、下肢に纏わる水責め。

それらの今も尚、鮮明に、わが網膜に灼きついて消えぬ。既に当時の奇ク、手許になけれど、青春の思い出と共に、それらは生涯、私の脳裡より消える事はない。

やがて子も成長するにつれ、又そぞろ萌え出だす昔の夢かの懐かしき奇ク、女房に隠れ再び読み出せば、グラビア消えし幾年かを経てM女の開股緊縛の姿態、最近よりは素晴しきカラーの美、百花繚乱と咲き匂えば昔日の事、夢の如し。今、啓子さんが登場していたならば、惜しげもなき股縄の掛かりし開股、一糸纏わぬ臀部の縄目に、くびれるを楽しめたるにと思えば、非常に残念に思う。

わが青春振り返るよすが、啓子さんに求めて得られなかったグラビアへの願望を、またわが恥かしき妄想の一駒をイメージに託してみた。

啓子の下腹部を一巻きした荒縄の中間から股間を通して臀へ抜けている縄尻は更に手足を鎖で繋がれ、底を逼う男の鼻環に繋がれている。彼は啓子の豊かな臀に絶えず従っている処から名づけて豊臀侍従。この男の姿は、嘗ての、わが姿なのだ。私は彼女の臀と腿に憧れていて、絶えずそれを求めていた。

彼女のパンティを鼻先でヒラヒラさせられながら両腿の肉に顔を挟まれ、或は臀の二つの円みの間に顔を埋めているのが妄想の始まりであり、足裏舐めから黄金の水の洗礼まで真に欲していたのだ。内腿の肉に包まれ彼女の脂粉の香に咽びながら、めくるめく甘美の陶酔に落ちてゆくのが常であったが——。

さて馬小屋に隣接した藁束の積み上げた板間で、啓子は後手に縛り上げられたまま、無理矢理、バナナを口に含まされている。荒縄は彼女の柔らかき肉の襞に喰い込み、それが絶えず侍従の鼻環との間でピーンと張りつめている。

豊かな臀を持つ啓子が歩くと、例のモンロー・ウオーク。心ならずも内腿も左右に、くねくねと動いてしまう。荒縄は、そのたびに秘めたる肉の合わさに、痛いばかりに擦れるのだ。繋がれた侍従は自らの鼻、捩じ切れそうな痛みに襲わるるとも彼女との間、渡す縄は、いささかも弛めず絶えず60K余の体重をかけて引いている。それが、せめてもの男の根性というもの。啓子はバナナを食べ、小屋の馬は飼葉を喰い、侍従は手枷の嵌められた手に食器とスプーンを持ちながら何を食するのか。

彼は、縛られたまま、乳房まさぐられ、尚股間責める荒縄の恥辱と快愛に酔い痴れ、既に潤んだ女体より洩らす啓子の愛泉に渇きを癒し、黄金の美食を、ひたすらに待っているのだ。やがて男は啓子と侍従の間の荒縄を摑むと、力を込めて、ぐいっと、引っ張り上げる。「ウウッ」苦痛の呻き双方から上がる。

「どうだ啓子。擦れて痛むンだろ。大切な所だもンな。傷はないか調べてやろう」

「あッ、止してっ」

啓子は叫び、身を捩じる。やや開いた股を臀部越しに目前に見て、侍従は生唾を呑み込

み、荒く息づきながら、啓子の臀の、ぬめぬめと光沢放つ白肌に汗の玉散るのを打ち眺め快楽に揺れ蠢くのを見守る。内腿の筋肉のピクピク痙攣するのさえ、つぶさに観察しながらマゾヒズムの喜悦に声を洩らす。

男は、散々弄んだ揚句、粘液に濡れた指先啓子の目前に差し出し、

「啓子、これは何だい？　どこから出したンだ」

「ああ、知らないッ」

啓子は頬染め、目を伏せる。こうして恥辱に責められながら、燃えて来る肉体の疼きをどうする事も出来ぬ。

「よし、傷に効く良い薬を塗ってやろう」

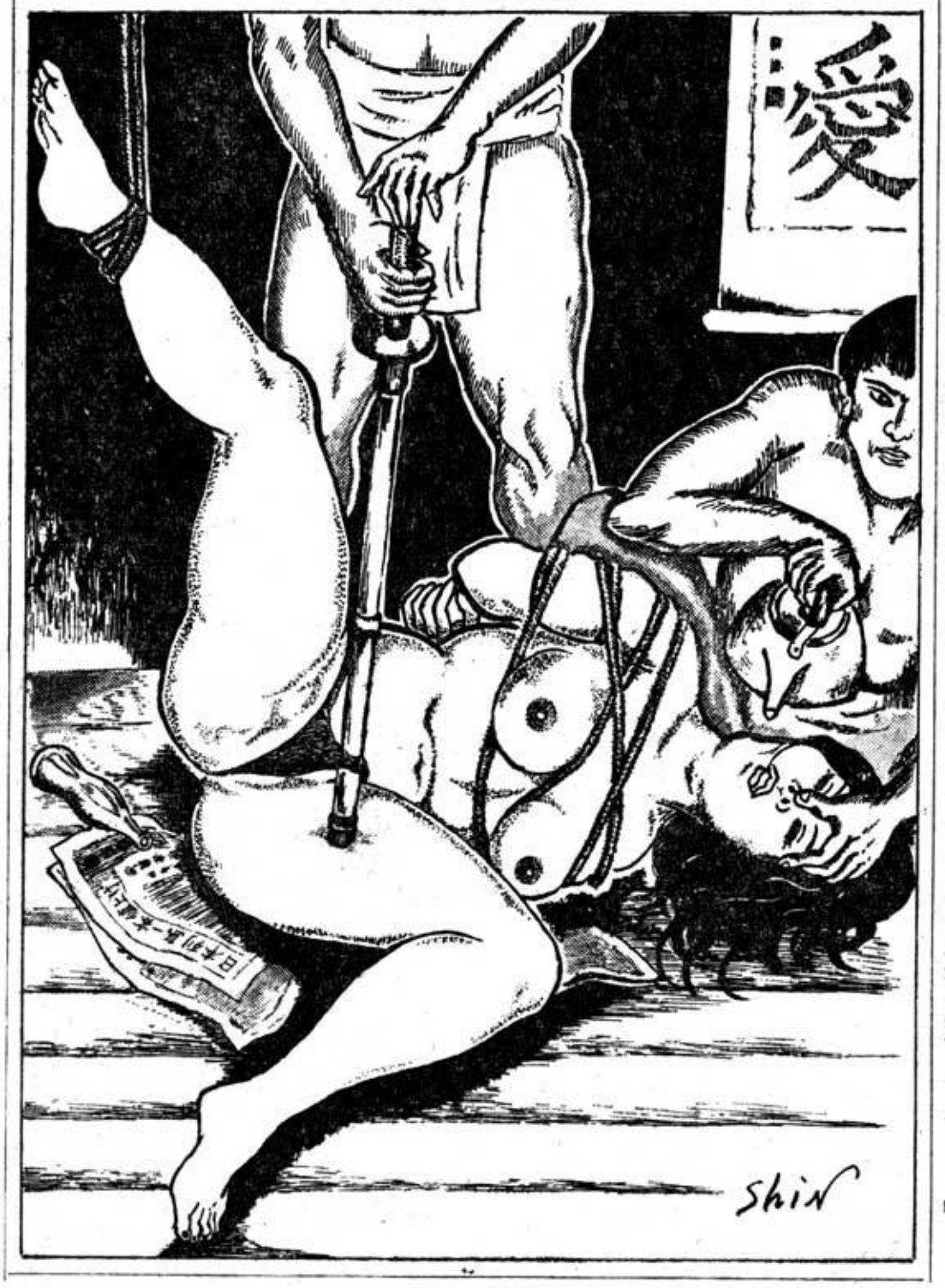
それは（もう我慢出来ない薬）とは露知らぬ啓子は、それをたっぷり塗りたくられた上折柄、隣接する馬小屋で行われる馬の種付けを見せられるのだ。

――私は彼女を責める男のイメージとして、求めるのは頑強な男達だ。いわゆる荒くれ男という所なのだが、一口で言えば六尺褌の似合う男といって良いと思う。責める男のイメージを、そのような男に求めるのは、彼女の肉体からの連想に他ならぬ。グラマーで、且つ、骨太の彼女を責めるのは老人や弱々しい男では合わぬと私は思う。荒くれ男共に依る荒々しい責めが彼女の肉体に融合して、美事な嗜虐の美を構成するのではなかろうか。

さて、竹刀でパンティの中を通し、太腿を突いている。小さいパンティは臀から股間へ喰い込んで、先刻コーラ瓶で責められた肉の翳りの潤みも乾かぬ間に、竹刀は、じりじりとパンティの締めつけと太腿の錐揉みを続ける。既に背は竹刀の雨を受けているのだ。その上、鼻頭を押さえられて冷水を飲まされている。そればかりか、啓子の脂の乗り切った女体にも素っ裸の板間は冷える。啓子は哀願した。

「お願いです。おトイレへ行かせて」

【愛の喝き】



「おトイレ。そんな物は、ねえよ。此処へやりな。洗面器を用意してやるからさ。だが少しでも洩らしてみろ、神聖な道場を女のおしっこで汚したとなれば、只では済まねえよ。ここの可愛いい毛も、お坊さんだ。そればかりではない。さっきコーラの瓶、くわえた所を思いっきり拡げてさ〝舐めて頂戴、吸って頂戴、見て頂戴〟そう言って、皆の前を廻らせるのさ。どうだい、一寸稽古して見ろよ。へへへッ。女盛りの熟れた身体が、これっぽっちの洗面器に洩らさず用を足せる訳は、ねえ事位、判っているのさ。さっきから腰を、しきりに揺るのは竹刀の太腿、責める痛みだけでねえ事も判ってる。この分だと、洗面器通り越して随分、先まで飛ぶだろうよ」

いきなり、男は啓子の部分に指を遣った。

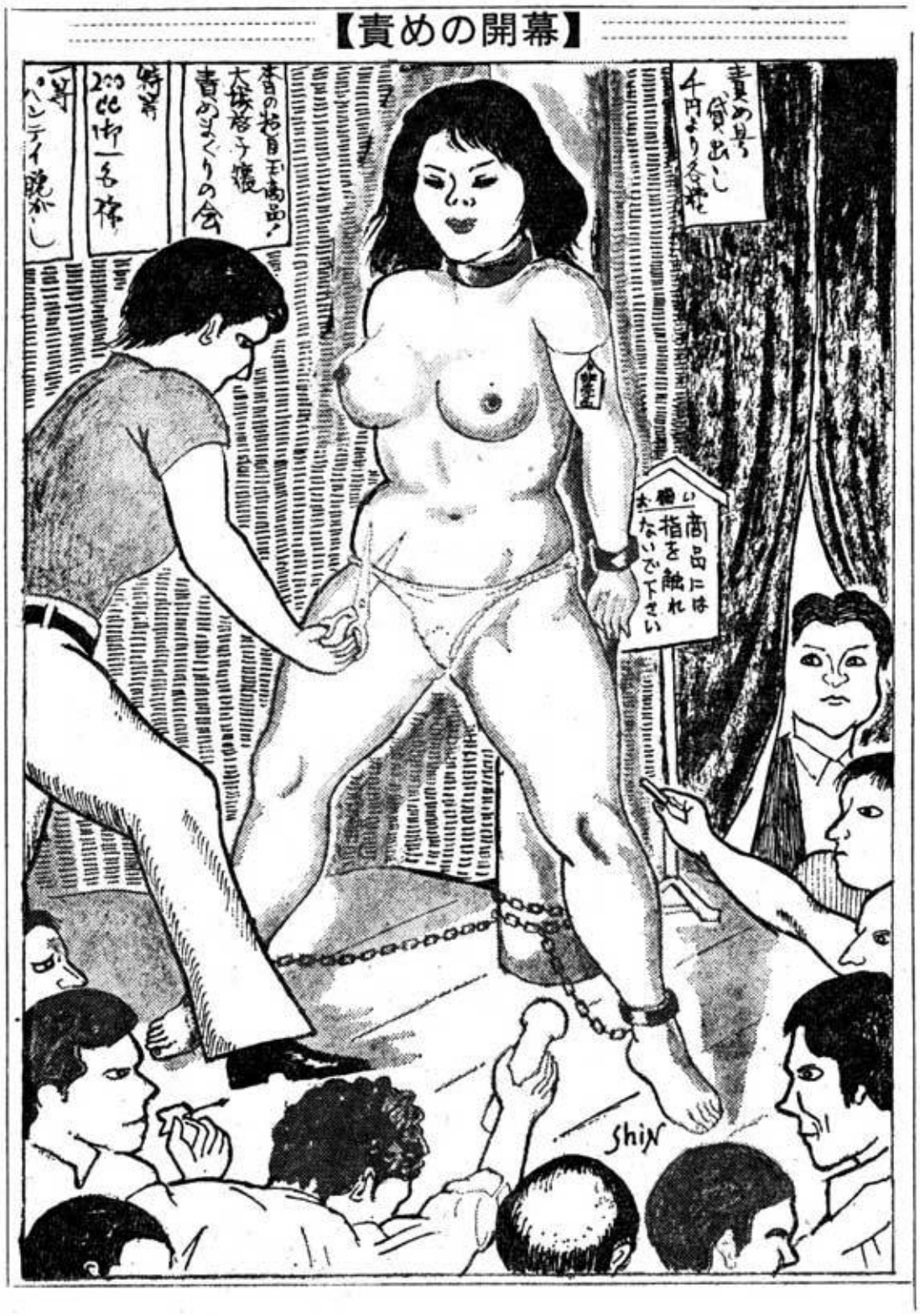
「あッ、止して下さいッ」

啓子は、叫ぶと同時に失禁する。

――私の未だ幼ない頃、千日前や天王寺公園住吉大社境内で天幕張ったサーカスや見世物の小屋、父母に連れられて行った頃の記憶は黒いビロードに金の縫い取りの文字が光り、哀調奏でるジンタのサーカス。時折、猛獣の唸り声、聞こえ、うらぶれた天幕張りの丸太組みの中で、金襴の衣裳着けたサーカスの少女の身軽な綱渡り、巧みな曲芸見ては、母より聞いたる（子捕り）の話、思い出し、この子もそうであるかと思えば、一種の嫉ましさの起り、その白粉塗りし顔見れば、幼児なりに遣瀬なき想い抱いたものである。

さて、天幕や筵吊るした見世物小屋から、うららかな小春日和の怠惰と睡気の誘う午後を、縁日の雑踏に揉まれながら往き交う人々に語りかける呼び込みの忙しく、まくし立てる声に耳傾ければ

「さあ、いらっしゃい、いらっしゃい。写真や映画ではありません。正真正銘、生身の娘それも、そこらにいる、ただの娘ではない。かの有名な奇譚クラブのグラビアから、その



まま抜け出て来た、娘だよ。名は、お啓ちゃん。当年、取って十と九つ。そうれ御覧。花も恥らう娘盛りを、高手小手、緊縛の縄目も痛々しくステージ中央の六角柱に晒されて身に纏う物は何もない。ふくよかな胸くびれた胴。丸まっちいお尻、はち切れんばかりの太腿。深山の雪より尚、白い、肌も露わな裸だよ。だが、ただの裸、見せるのはもう古い。お入りの皆様に責めの四十八手、四十八種類の責め具、お貸しして、うーんと彼女を苛めて貰おうという趣向。責め具のお代は僅か千円より各種、取り揃え、これなる美女を好き放題、責めて責めて責め抜いて貰おうという日本広しといえども、当方だけの企画。思案投げ首、もっての外。今の機会（チャンス）を逃がしたら一生涯、取り返しのつかぬ事、お受け合い。さあ、お入りはお早く。今お入りになれば、ただ責めるだけじゃあない。入場券の番号抽籤で、彼女の身に纏う唯一の赤い小さいパンティを脱がせて戴く役が当たるよ。さあさあ一列に並んで、押し合わないで順序よく。さあ御覧の通り、緊縛の縄目、一分の弛みもない。既に紫色に変わったこの手首、彼女が如何に悶え喚こうとも、微動だにしない厳しい縛り。……さあ、幸運の方が決まりました。早速、鋏で彼女のパンティ、切り取って戴きましょう。お啓ちゃんは恥らいに目を伏せて乳房、腿といわず、身体中の筋肉ピクピク震わせている。さあ、鋏が彼女のパンティに通されました。あ、一緒に毛を、切らないように。後で剃毛の方のお楽しみ、ちゃんと残して置いて下さい。あ、パンティ桜花散る如くヒラヒラと、こぼれる。そうれ御覧。既に彼女のもの潤んでしまっている。次々と責められる予感の歓びか、見せるに非ざるものを、大勢に見られる快感からか。あっ、いけません。肌には絶対、指を触れないで下さい。それでなくとも多感な彼女、指で次々と、いじられては責め具、使う前に参ってしまう。一切、指を触れる事なく、貸し出しの責め具で責めてやって下さい。あッ、順番崩さないで順序よく願います。随分、混乱して来たな」

狭い場内、埋め尽くす客、入り切れぬ客の表で喧嘩さえ始める有様。呼び込みの男も、こうなっては堪らぬ。遂に地が出て、関西弁が飛び出してくる。

「そんなに押さないで下さいッ。そんなに押さンでも自分の番になったら見えますがな。映画と違って消えてしまいはしまへん。貴められて彼女が、幾度、絶頂の呻き洩らすとも全員、済むまで責め抜いて貰いまっせエ。何？　浣腸。それは一カ月前から予約済みになっとります。彼女が悶えに悶え失神したら、活入れにすることになっています。あ、そこのパイプ持った方、そんなに勇み立って前に押し出て貰っては困ります。その後の方、身体ぶるぶる震わせて。小便なら、裏にトイレがありまっせ。え、小便やない、武者震い？そこの鞭、持ったお方、前の方の禿頭の上に鞭先が垂れてます。迷惑にならぬように持って下さい。自転車の空気ポンプ持った方、そんな責め具、貸し出してまへンで。彼女に風船、差し込んで膨らませるって。そんなの、口で吹いた方が楽しいのンと、違いますやろか。興奮して息を吸うのに追われ、吐く息が続きまへン。まあ、勝手にしなはれ」

青春の時代に抱いた啓子さんへの私のM的願望が、幾年かを経た今、S的に変化したのは奇クの恩恵かも知れぬと思う。

（了）

（挿絵を描くに就きまして48年4月号掲載の大塚啓子さんの『実験動物としての私』文中挿入写真より一部、参考にさせて戴きました事を、ここにお断わり致します。水江　伸）

縄の命題

〈告白〉

（SとMの交錯）

柏木はじめ

新宿の街をぶらつき、とある露地に、いつの間にか迷い込んでいた。どこの盛り場もそうだが、そこにはバーが軒をつらねていた。

その中の一軒に、ぶらりと入った。

そこに、ひな子がいた。

ぽっちゃりとした肥り肉で、色が白くて、肌のきめが緻密で、腰まわりが張っている。

（勿論、こんな事は後で知った事だが）

それからが交際（つきあい）の始まりであった。

帰りがけに、「イブには、きっと来て下さいね」と念を押されたが、クリスマスの特別料金を払わされるのがオチであろうと、聞き流していた。大体、その頃、どこでもクリスマス前一週間位は、喰べられない不味いクリスマスケーキがお土産に付いて、馬鹿高い料金を取られるのが相場であった。だからいつも、その期間をはずして遊びに行くのが常であった。

その時もバカ騒ぎが、おさまって年の瀬も押しせまった頃、私は又、その店の扉を押していた。文なしの安サラリーマンでは、ボックスに座れない。その日も、カウンターに止った。

私が、ひな子に「やあ！」といった具合にチョット手を上げると、どういうわけかブスッとした顔で、隣の椅子に腰掛けた。

「今夜は、ごきげんが悪いらしいな。大事な人が未だ、みえないと違うかい」

「そんなんじゃないわ」

私は、二言三言、軽口をたたいたが、最初の時と違って硬い表情である。

私も黙ってウイスキーをなめていると、急に、恰も対決するように身がまえて、

「この間、約束したイブの日、どうして来てくださらなかったの」と言った。その言い方が余りにも、しんに迫っていたので、つい冗談を言って切り返す事も出来ず、

「本当の事を言うと、来たかったが、クリスマス期間中に来れる身分じゃないよ」

「私のお店は、毎年、そんな特別料金は取りません」

「えっ！　そうだったのか。何せ、この間が

あれから十年が過ぎようとしている。

秋の東京オリンピック大会を目前にひかえ新幹線の建設、国立競技場の拡張、選手村の整備。そして幹線道路の工事等が、ハイピッチですすめられ、まさに『黄金の60年代』にふさわしい『時』であった。

「もうこれっきりで会わないで欲しい。お願いだから」近頃会うと、口ぐせのように、ひな子の口から、せつなげに吐息のように吐かれる。6年間、続いた我々の仲は何といったらよいのか、恋人、夫婦、きょうだい、友達そのどれにも、あてはまる奇妙な関係であった。

その6年前、私は、ある私大を卒業し、サラリーマン一年生の駆け出しであった。

クリスマスも近いある日、その日は安サラリーの身にしては懐が暖かった。歩きなれた

始めてなのだから、そんな事、知るわけがないじゃないか」

「私は言いました」

「いや、聞いていない」

「言いました」

「いーや、聞いておらん」

「イイマシタ」

カウンターの中にいたバーテンが、とりなしてくれなければ、こんなやりとりが際限なく続いた事だろう。実をいうと、彼女と最初合った時から、私の好みに、ぴったりであった。好みというものは、その人の性格、性癖から来るものだろうか。各人それぞれ、程度の差こそあれ、誰でも持っている。

私の場合、まさに、ぴったりであった。

「あの日が、私の誕生日だったの」

ちょっとした沈黙の後でポツンと言った。

「それは悪いことをしてしまった」

「貴方に、靴下とネクタイを買って待っていたの」

又、ポツンと言った。

「おいおい、君の誕生日だろう。話は逆じゃないか」

「クリスマス・プレゼントとしてよ」

「ますます、悪いことをしてしまったね」

「そう。全くこの人は悪い人よ。癪にさわったから、お店が終ってから、そこにあるゴミ箱に捨ててしまったわ」

「ウワー、あれはお客さんの分でしたか」

我々のやりとりが聞こえたのか、先程のバーテンが横から口を、はさんだ。

「ひなちゃんが捨てたので、オレ拾って、今、使わして貰っておりますよ。えらい剣幕で、ゴミ箱に叩きつけてましたよ」

男と女の仲は、こんな他愛ない事で結ばれていくケースが多い。

その夜、我々は、お互い相手のものを弄り合った。

他愛ない事で結ばれると同時に男女のセックスは、徐々にエスカレートして行く。

初めは単なる営みが、手を変え、品を変えたテクニックで、互いの欲望を高めていくという事は、やはり人間だけが持っている英知なのだろうか。

セックスの内容は、文化のバロメーターなるも一理ある。

我々の仲も、徐々に高揚し、半年もたたないうちに、ただ単なる結合だけでは、お互いを確認し得なくなっていた。

商売柄、彼女の周りには、5、6人の男がいた。某省高級役人A、中小企業の工場主B

既に現役を引退した高令のC等々である。
特にCは持てる財力により、彼女の有力なるスポンサーであった。
ときたま彼女が語ることによると、このCのセックスは、まさに陰微の極致で常に5、6時間をかけ、ねちねちと攻める。
縛り、浣腸、バイブ、張り型、及び女に牛乳を垂らし、猫による舌の攻め等々、次から次へと連続的に攻めまくる。そして最後に彼自身の手にて女へのイタズラを延々と行う。
既にベトベトに濡れきった女は、彼の最後の攻めにより、彼女の口からは動物の咆哮に似た雷鳴を轟かせる。そのためか、彼女の女は、肥大し、特に一番外側の部分は、大きく発育し、しかも5センチ位、下に垂れ下がっている。始めは私も奇異に感じたが、話を聞いて、うべなるかなと思った。又、それが私にとっても、我々のセックスのアクセントになり、より高揚した事も事実である。
当時、若造の私にとって、縛り、浣腸等といった事を知るすべもなく、その話を聞いて正に戦慄であった。
世にそのようなセックス・テクニック、いや性癖の男女が今、この前にいる驚きは、何と表現してよいか戸惑いを感じてならなかった。しかし一方、その真最中の彼と彼女の肉塊と肉塊の搦み、汗、粘液が二重写しで私の網膜にうつる時、何か感動にも似た気持になった事も事実である。
我々の営みも次第に進行し、今では、前戯だけでも2、3時間を掛けるようになった。しかしそれは、今いうSMのテクニックでもなく、又、SMによる、愛の確認でもなかった。
そのようなある日、決定的な夜を迎えることになった。その夜、いつものような前戯で搦み合っていたところ、急に彼女が、何処に隠してあったのか、布のヒモを持ち出して私の身体を縛り始めた。ハァハァ荒い息を吐きながら、ものに憑かれたように無表情で、しかも目だけ、らんらんと光らかし、この作業に没頭しはじめた。
まあいい、やらすだけやらそうと思い、私は彼女の言う通り、マナイタの鯉然としていた。紐を首からかけ、胸から手、腹部、そして私の『男』の所で交叉させ、余った紐で脚を末広がりに拡げさせ固定させた。それを無言で黙々と作業していく。縛り終わると、たじっと、私の縛られた全身を睨め廻していた。しかし目だけは相変わらず爛々と輝かせている。
怒った時と何かものに憑かれた時の女の目ほど、恐ろしいものはない。女豹の如き目とは良く言ったものだ。獲物を前にした女豹の目。ゾクっとした冷気が全身か駆け抜ける。
全身を睨め廻すのが終わると、唇と舌による全身へのキッス、いや舐め廻す作業が始まった。先ず、顔から始まって、首、胸、乳首腹部、足、何故か私の『男』には触れず、そして今度は裏返し。こちらとしては、身体の自由がきかず、そこから、逃げ出すことも出来ず、ただ、されるままになっていた。しかし、この擽ったさは何とかならないものだろうか。
「おい、縄をといてくれ、擽ったくて、しょうがない。おい、たのむ！」
私が、とうとうネをあげて言うと、チラッと、例の目で、こちらをみたっきり、恰も聞こえなかったように舌の作業を続けている。
先程、私は大きな気持と、チョッとした好奇心で、まあいいや、やらせておけ、等と呑気な気持で許した事が、悔まれて来た。
「もういいかげんにしてくれ。助けてくれ！ギァ！」
柄にもなく、とうとう哀願と悲鳴をあげだ

していた。背中、臀部、アヌス、脚裏への舌攻めを終わり、又、表側を、攻めまくり始めた。もうこの段階になると、私は、恥も外聞もなく、悲鳴、哀願の連続であった。

彼女からは、激しい息づかいと燗々とした瞳だけがアップされ、私の耳、目に入ってくる。私の、やめて欲しい願いと反対に、私の『男』は、隆々と青筋太く怒り出した。その時、彼女の目がチラッと動いた。その目線の先は、私の『男』を見つめている。彼女は中心を移動させ、ちょうど壊れそうな椅子に腰を下すように慎重に、座り出した。まさに、『女』が徐々に私の『男』を含み始めた。そして先程、さんざん私の身体を這い回った口から、人間とは思えない唸り、怒鳴り、咆哮を発し始め、やがて唸り声は反狂乱を呈し始めた。本当に発狂したのかと、こちらが驚く程、最後の一声を絞り出し、私の身体の上に倒れ込んで来た。こちらは縛られている上に彼女の体重がキュウバタンと、のしかかって来たのだから、その重いこと。

一刻の後、未だ私の上で、ウンともスンとも言わない。仕方なく、私の不自由な体で、下から横に振り落そうとしたが、その位の力ではビクともしない。本当に死んじゃったのかなと一瞬、私の脳裏をかすめたが……。

そのうち、気が付いたのか、ウワーという奇妙な、かけ声と一緒に横倒れざま仰向けにひっくりかえってしまった。彼女のカラダはまさに粘液、粘膜の剝出しであった。

その後の私達の営みは、このような連続になっていった。しかし私は、生来Mっ気がなかったのか、それ程の楽しさはなかった。又彼女のその時の目、喘ぎ、最後の咆哮は、世の男性なら誰でも興の赴くところであろう。その意味で、この営みの内容は、それなりに充実したものであったといえよう。

「あれは復讐なの」

ある時、彼女が私にもらした。復讐？　始め何の事やら、私には分からなかった。

「そう、あれはフクシュウなの。Cにいつもいじめられている事を、貴方にやってみたかったの」

「最後のクライマックスは、脚本にはないのじゃないか」

「Cは、いつも攻めつけるだけ、とどめは彼自身、出来ないの。男は年取ると皆んな、あんなになっちゃうのね」

一種の代償行為か、いつもいつも同じパターンで攻められ、決してトドメは刺してくれない。しかも、そのパターンが屈辱的である程、自分では気づかないうちに、自分の中に鬱積され、いつか誰に自分のやられている事を味わしてみたくなる。

彼女も最初は無意識に、衝動的に、そのような行動に走った。しかも今度は、トドメを刺してくれる。いや、自身で刺せる。

されている事と、している事が、ゴッチャになって、常日頃の主（S）と従（M）の両方の充実感を貪る。これこそ、セックスの極致であろう。

この意味に於いて羨ましい限りであった。こんなパターンを繰り返しているうち、私自身も縄の魅力が、だんだんと分かって来た。こう会うたびに縛られていると、少しMの気持も分かるようになったが、たまに、こん畜生と思って逆に縄で、縛りつけると、もとより日頃、Cによって飼育されている彼女のこと、そのメタメタぶりは一幅の芸術品を観るようであった。

一本の縄によって人間が生の充実を知る。これは、なんだろうか？……。

別れてから十年、私が今も追い求めている『命題』である。

（完）

有明帰還

有明の帰国は、この国での最大のイベントであった。誰が言うともなく、何で伝わるともなく、そのニュースは驚くべきスピードで国中に行き渡ってしまう。上は貴妃・高官は勿論、下は畜位・物位の女囚までが、そのニュースを敏感に察知して、あるいは期待に胸をはずませ、あるいは、又も始まる苦痛と凌辱の煉獄を怖れ戦くのであった。

パレス・エリアに落ちついた有明が、何を最初にはじめるかは全く予測出来ない。一切が、彼の気まぐれに委ねられていたからである。誰しも彼に会う可能性がある代りに、又誰しもその確率が、きわめて低いということを知っていた。ともあれ、激しい自己改造のノルマに明け暮れる日々であるといっても日課は、ややもすると単調であった。誰しも、その単調さを破る何かを期待していた。しかも、それは有明によってしかもたらされないのである。

有明の御料馬に指定されるという光栄？を担ったE―一四三（かつての修道尼のアン・ブラウン）とF―五五四（アメリカの富豪令嬢）の二頭は、その栄光の故に、他の役畜より数倍も厳格な調教を受けなくてはならなかった。厳格な調教は、二頭のすぐれた材質に一層の磨きをかけることになった。

（（注）「材質」とは、この国独自の用語で、女囚たちの心的、肉体的等、あらゆる特質を綜合的に測定判断して判定される、その価値を表現する。人間を評価するものに、わざと物質的用語を用いているのも、この国らしい）

そこで、有明がG号作戦に出発すると、す

ぐ宮殿の主馬寮から、もとの調教所に移されベテラン調教師から連日、激しい特訓を施されてきたのであった。

ある日、それは正しく有明の帰国前日であったが、二頭はピカピカに磨き上げられた上再び元の主馬寮へ戻されてきた。

そのことだけで、二頭には有明の帰国が迫っていることを感じさせるのに充分だった。幽かな昂奮をさえ覚えながら、二頭は主馬寮の厩の中で美しい裸身を並べて眠りについたのであった。

二頭の予感は、その限りでは見事に的中していた。翌朝は日課通り、五時から宮殿内の馬場に引き出され、他の畜馬たちと一緒に二時間の激しい調教を受けたのち、再び厩舎に戻って汗を流し、はじめて餌が与えられた。餌といっても、畜位や物位の女囚の場合は通常、宇宙食のような合成栄養物だから簡単である。緑色をした角砂糖程の固型物は、ただ塩辛いだけで到底、味覚をそそることはないが、美畜たちは、それをただ、飢えを満たすために喰べる。それ程、空腹感は日常的なものであった。そうはいっても、僅か五個程では、余計ひもじくなることさえ多い。それで何かを飲もうとするけれども、許されるのは水だけ。それも食後にコップ一杯程度だけにすぎない。調教にシゴかれ、汗をいっぱい、絞りとられた女体には、どこへ行ってしまうか、わからない程の量である。馴れた者たちは経験から、ゆっくり少しずつ飲んで乾きをいやして行くのだけれど、新入りでは、とても我慢出来ることではなく、アッという間に飲み干して、あとで一層、つのってくる飢餓感と斗わなければならなくなる。とはいえ、計算上は、人間一匹を養うのに充分なだけのカロリーはあるのだ。ついでながら、このようにキューブ（圧縮口糧）と水を別々に貰えるのは主馬寮だけのことで、家畜にしては破格のことである。何故なら、お伽にあがる上臈なども、そのときだけは失態のないようにこれを喰べるからである。（第39回、参照）

調教所では手間を省くためドロドロにといた餌をフィードして、特別に水などはやらないのである。

さて、朝食を終わった二頭に、今朝は入念な直腸洗滌とカテーテル排尿が施された。その上、万一のための予備タンクが体内に装着される。これで一日位は粗相なく働けるわけだ。これで二頭には、有明が帰国して自分たちが使役されるのだということがハッキリする。

二頭の美畜は丹念に柔肌をマッサージされ香料の入ったクリームを丁寧に、すり込まれる。忘れかけていた人間らしい粧い感が、ふと蘇るのも、こんなときであった。坊主頭に黄金の頭飾りがズシリと、かぶせられ、轡で固定される。久しぶりの重さが、むしろ快かった。そればかりではない。何としても味気ないツルツルの頭をかくすことが出来るのは女としては歓喜といってもよい程であった。ボインなくせに、垂れ下がりもせず、恰好よく、ふくれ上がった四つの乳房。その桃色の

前号まで＝秘密裸女王国の独裁主、**有明**は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその材質に応じて、五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚だしい。大量捕獲のG号作戦は成功裡に終結、厚潜ネプチューン号は海中の水路を通ってポートエリアに帰った。新入荷のハイライトは何といっても英国の**メリー王女**だった。王女だからといって例外にされる筈もなく既に航海中から数々の辱しめを受けていた。この他、数百の美女が……

乳首に、純金の鈴が結びつけられるのも、何故か懐かしく感じられる。このように、二頭ともに輓畜になり切った今は、豪華な馬具に厳飾される自分たちを、かえって誇らしく思うようにさえ、なりはじめていたといっていい。そこには、もう敬虔な尼僧アンもなく、キャデラックを乗り廻し、沢山なボーイフレンドを手玉にしていたヤンキー娘のプライドもなくなって、ただひたすら、有明に奉仕し賞賛のひとことと一緒に、美肌をなでてもらうことだけを無上の歓びとも光栄とも考える二頭の輓畜があるだけであった。

八時頃には、もう準備万端、整っていたというのに、なかなか、お召しがかからなかった。二頭は黄金の馬車に繋がれ、直立したままタップリ二時間程も待たされていた。こうした時間的不経済は、いつものことで、有明や貴妃高官たちの気まぐれに、いつでも対応出来る態勢を、ととのえていなければならないのは、下級女官を含めて鉄のクラス（畜位・物位）女囚たちの義務であった。

十時すぎになって、ようやく正階前に引き出され、大后貴和の点検を受けた。有明公式の帰国だから、貴和をはじめ、資格のある高官たちは、それぞれの身分に応じて、あるいは馬車に、あるいは轎に乗ってレセプション・エリアまで出迎えるわけである。

そんなわけで正階前には久しぶりに、その広場を埋めつくすような人垣が出来ていた。

やがて、出発の喇八が高らかに鳴り響く。先ず若紫騎兵小隊が、今日を晴れの先駆に選ばれて、夫々の愛馬（軍用畜—第51回、参照）にまたがって進む。転属したジャンヌの姿は見るべくもないが、小川隊長をはじめとして内藤伍長、木村上等兵などの面々が続き最後尾に美畜ジュリーことF—〇二七に騎乗した元女優、望月レイ子が見違える程、胸を張って続いた。（第45回、参照）

次に有明の戦車が行く。人語を解する輓畜の便利さは、御者がいなくても、いわれた通り動くのである。

次に続くのが、大后貴和であった。

有明の代理者としての威厳にふさわしく、四頭の美しい担畜に、かつがせた輿に座る。かつがせるといっても肩ではなく、この国の式に従って、轅と同じように股間に狭むスタイルで後手に縛りつけるのである。したがって輿の床高は、丁度、美畜たちの股の高さになる。輿を水平に保つためには、単に背丈を揃えるだけではダメで、股下の高さも揃えなくてはならないわけだ。

輿の造りは、有明の馬車と同じ金色で、精巧な彫刻で飾られている。玉座には、家畜女囚一匹がスッポリ嵌め込まれて人肌のクッションを形づくる。薄い更紗に金の縁飾りをした寛衣をまとった大后貴和が、つつましく、それに腰かけている姿は、あたかも昔のクレオパトラが生き返ったように美々しく、又、壮大であった。

四頭立ての輿が許されるのは大后だけの特権で、それに続くサラや上臈たちの乗物は一段と落ちて、二頭立ての轎となる。それでもサラの轎は準后にふさわしい黄金の彫刻に飾られているが、上臈たちのはシンプルな模様なしである。

武官には夫々の階級に準じた戦車が決まっているから、彼女等はそれぞれ戦車を御し、文官の輿や轎を警護するようにして進む。

レセプション・エリアの池には、一定の間隔を置いて帰国者を一人ずつ容れたカプセルが次から次へと水しぶきをあげて落ち込んできた。間髪を入れず、泳ぎついたアマゾン女

兵が、それにロープの鉤を引っかける。池畔に立った数名が、それを引き寄せ、天蓋をとって、中の人間を抜き出すのである。

秘密の通路は、有明しか通れない。複雑な大扉が、いくつか、有明の声紋によってのみ開閉される。有明と、彼自身が運ぶ荷物は、ここを通ることができるのだが、その他は、エミー司令でさえ、有明と同行することが許されていない。

当の有明は、池の側に建てられた豪華な待合所のラウンジで、早くも好物のデア・ジャーキーを肴にウイスキーの盃をかたむけていたのである。秘密の通路は、この待合所の地下に通じていた。有明だけが操作出来るリフトを降って、狭い坑道をウネウネと歩くと、出発のとき、箱詰めになった百合子たちを運んできた扉口に一緒になるのである。しかし有明以外は誰も、このことを知らない。

有明が腰かけたソファから、大きな一枚硝子を通して、水しぶきのあがる池の模様が眺められた。G号作戦に彼と同行したアマゾン将校たちが次々とカプセルから、あらわれてくる。彼女たちは直ぐ待合所の中にある、豪華な化粧室に入り、シャワーを浴びたり、ヘアを整えたりしたのち、次々と有明の周囲に伺候する。

アマゾン女兵達の収容が終わると、要員は新入荷の女囚（未決女囚）たちを入れたジュート袋を収容するのに忙しくなりはじめる。有明たちがポート・エリアで一泊したのだから、本来は、もっと早く収容される筈であったが、ネプチューン号からの荷揚げが都合で一日、遅れたため、アマゾン女兵の帰国と一緒になってしまったのである。

「新入り」は帰国者とは別のシュートを落下して、直接、五人組のプール（第24回参照）に導かれる。それは池の向う側は厚い壁で仕切られているから、今の有明の位置からは見えない。ただ、今まで忙しそうに働いていた当番のアマゾン女兵たちが、そっちの方へ行ってしまったことで、有明には充分、想像が出来た。人気のなくなった池は、照明が変わってデコレーション一色になった。有明が、つまらなそうに後を振りかえる。

そこへ、丁度、大后貴和が入ってきた。

星エミー司令を含めて、居合わせた将校たちが一勢に平伏した。（開跨跪座は有明に対してのみ、行われる最高の敬礼で、その他の下位者は、上位者に対して平伏するのが、ならわしである）

「皆さん、長い間、ご苦労さまでした」

静かに貴和が言った。

有明が立ち上がった。その足下に、今度は貴和が平伏して、両手にその足を、おしいただくようにはさんで口づけするのであった。

何気ない動作が、凄くしとやかで、又、同時に凄くエロチックに見えた。

「おお、マスター！　お帰りなさいませ」

小さな声が、よく聞こえる程、あたりはシーンと静まりかえってしまったのである。

このラウンジに入れるのは貴和だけで、あとの大勢は反対側の広場を、うずめるようにして控えている。

アマゾン女兵たちの検疫と肉体番号の検査が行われ、小さなカプセルのパスが、それぞれのVに挿入されると、帰国の手続きが終了したことになる。

ジャンヌにとって、冷たい光電管の椅子に局所を押しつける肉体番号の検査（第37回、参照）も、自分に関するデータをマイクロフィルムに縮写した短い万年筆のようなカプセルを体内のポケットに差し込まれることも、すべてが何故か懐かしく、故国に帰ったよう

に安心した気持になれるのであった。

王女剃毛

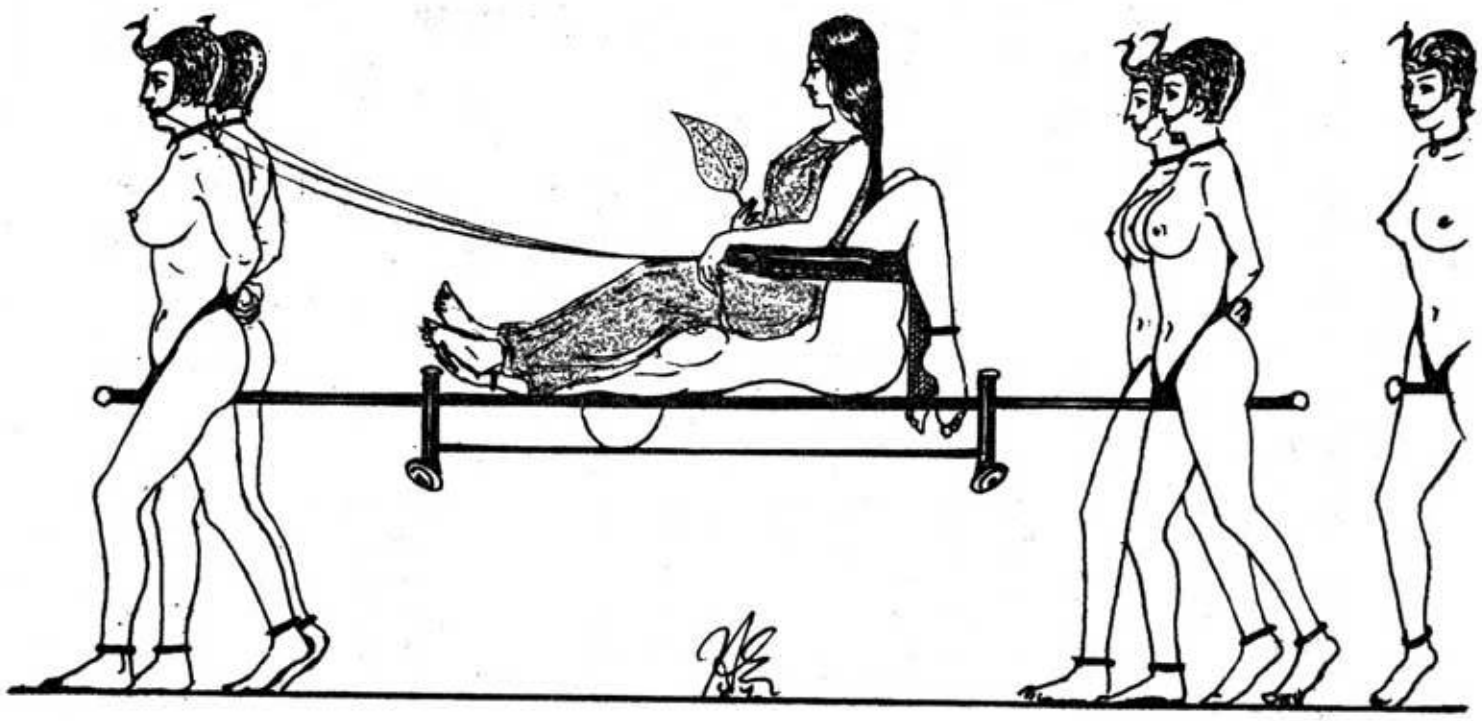
「オー・マー！」

貴和が叫ぶと、全員が、それに和した。オー・マスターの省略語であったが、それが、この国では「ハイル・ヒットラー」のように有明に対する敬意と服従を表理する言葉とされている。有明が正面玄関に姿をあらわしたからである。

この国の仕来りに従って、ロビーへの扉口は三つあって、中央のそれは一メートル程、高く、三方につけた数段の石段から広場へ降りるようになっていた。もちろん、この正階を出入するのは、有明と一品以上の貴妃高官でしかない。他の者は向かって右の扉（通用口）を使う。前に述べた通り、左の扉は不浄口といって、奴婢以下のためにある。

正階の中央に立った有明の後には、大后貴和と星　恵美子、つまりエミー司令だけが従っている。高橋侍従以下、遠征に従ったアマゾン女兵将校団は、正階の下に居並ぶ。

広場の正面には出迎えた貴妃高官たちが、準后サラ・ロスタンを真ん中にして、横一列



に整列していた。その背後に雇従者の人垣が続く。一品の親授官には夫々、五人の従者がつくので、これだけで七十名にもなる。その他の有資格者を含めれば、文官だけで、ざっと百五十名を越す人数となる。

今日の儀杖兵を命じられた若紫騎兵小隊は閲兵を受けるため左手の方に堵列（とれつ）していた。

有明が立ち止まると、全員が、いっせいに開股跪座の最敬礼をした。アマゾン騎兵たちでさえ、軍用畜の背中に爪先に屈んで、両膝を横一文字に開くのである。まるで軽業師の芸当のようなものだが、訓練はおそろしいもので、人馬共にビクともしない。

大后貴和だけは貴位にあたるので、跪座はせずに、正階を降りはじめた有明に続く。

有明はツカツカとサラの前に近づき、その頭に手を置いた。すると、サラはガバとばかり有明の足下に、ひれ伏して、前に貴和がしたように有明の足の甲に唇をつける。

次は一連のお手付上臈たちの番であった。

東のお年寄、明石の局（伊原直子）や、新年寄、夕霧の局（加藤カツ代）などが、次々と頭をなでられ、平伏して有明の足に口づけをする。最後は新上臈、若紫こと、佐瀬直美

であった。

有明のお情けを受けて間もない若紫の局は表面こそ、つつましく万事に控え目に振舞ってはいたけれども、本当は有明を想って、もだえ抜いていたのである。それだけに、有明の右足を抱く両手が慄え、思わずその甲に泪をこぼしてしまった。

「胤（タネ）をやどしたそうだね」

有明の声が背中へ降ってきた。懐かしい、やさしい声であった。その懐かしいお方の足を、しっかりとおさえ、なお、名残惜しそうに頬ずりしながら、若紫の局が答えた。

「はい。お蔭様を持ちまして、お胤を、みごもらせていただきました」

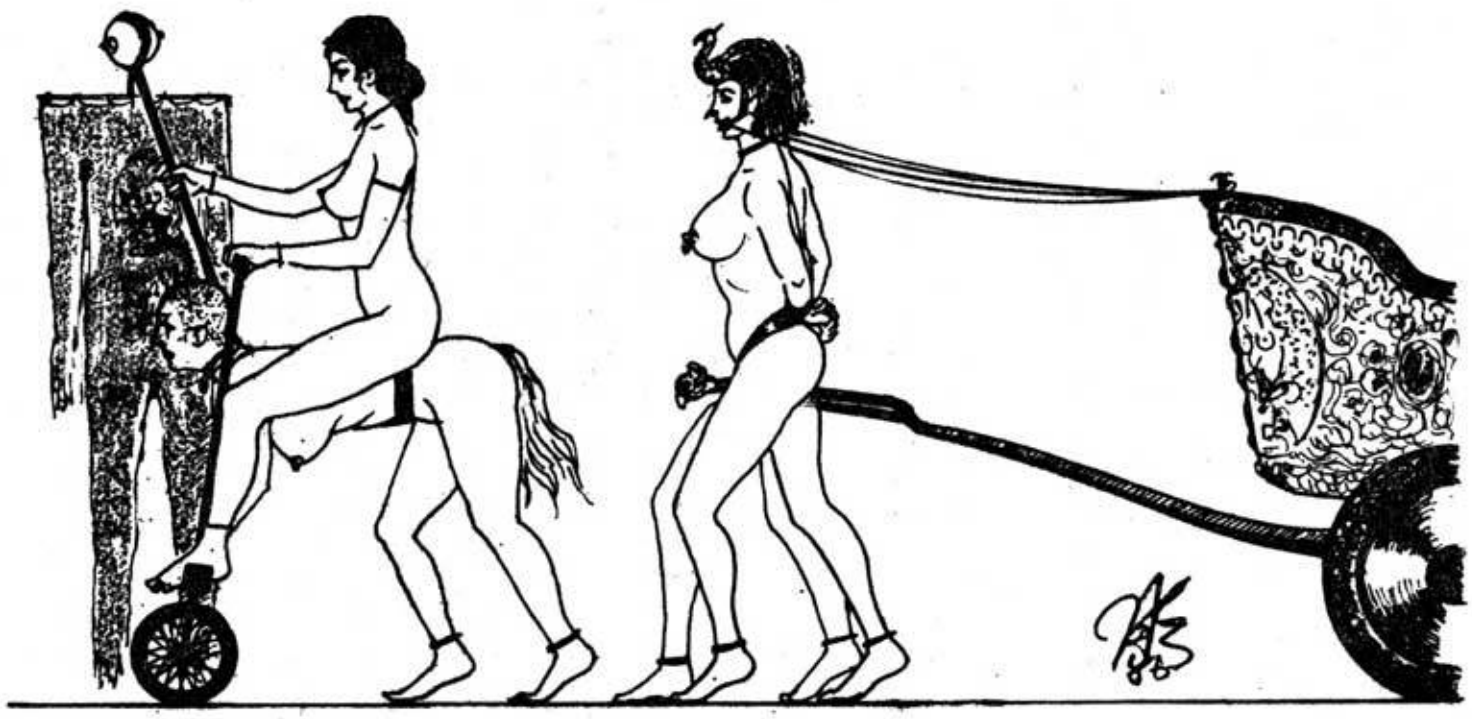
「佐野女医からの報告ではオンナだそうだ。よかったね。健康に気をつけて、しっかり育てることだ」

「ありがとうございます」

又もや、泪があふれ出して、有明の足首を濡らしたので、若紫の局は少し狼狽したように唇で、それを拭った。そのとき、

「もういい。さあ、立ち上がりたまえ。ながく、うつむいていると、お腹にわるいよ」

といって、有明は肩を抱くようにして、若紫を立ち上がらせるのであった。



「みんなも立ち上がってよろしい」

若紫の局だけを立ち上がらせては不公平になると、ふと気がついた有明が、重ねて言った。平伏していた親授官たちが、静かに美しい裸身を起こしはじめた。

有明のお胤を妊った上臈は直ちに、その胎内の性別を判定し、女児のみを腹に残すことになっている。それにしても母体を衰えさせないため、三カ月で出生させ、その後は人工で生育を図り、地上世界へ秘かに連れ出してしまうわけだ。その仕組みは第41回に記してある。

さて、有明は右手に歩いて、若紫小隊の方に近づいた。名誉小隊長の資格で、若紫の局が同行する。

軍用畜の背中に開股跪座したアマゾネスたちは、依然として不動のままである。跪座する位置が高いので、丁度、有明の目の高さと一致する。

例のロシア娘の生皮を鞣（なめ）して作った若紫幢幡（どうはん）を山本中隊長が高々と捧げ、

「マスターに注目ッ！」

と号令をかけた。

隊員の頭が一斉に有明の方を向いて、有明の動きにつれて、目迎目送して行く。

文字通り一八〇度、開いた内股は、あくまでも白く、中心を彩る翳りの間に、チラリと珊瑚色の濡れたものが覗いていた。六十名のご開帳というわけである。

有明は一人々々、たんねんに見て歩いた。女兵たちの中には緊張のあまり、歯の根も合わず、カチカチいわせる者さえあった。

列の最後尾に全身を、こわばらせていたF—〇一八号こと望月レイ子も、その一人だった。前に立った有明の凝視で、自分の肉体がトロトロに、融けくずれてしまいそうであった。それは羞恥とも少し違った感じで、或は褶伏という言葉に近かったかも知れない。実際、彼女は開いた膝を合わせたいという切実な本能と必死に斗わなければならなかった。

——これが自分の軍用畜とレズっていると言われた娘だな。

と、有明は思い出した。そのこととは別にこのレイ子の乗馬、つまり元スクリプターのジュリーは、それとハッキリ目立つ程、みずみずしく感じられた。調教と手入れが、よく行きとどいて、絶好の体調であることが誰にでも、よくわかった。

——かなり、よくやるわい。こうなるとホモも、わるくないな。まてよ、このウマは確かイギリス娘だったな。

そんな考えが泛かんで、有明の立ち止っている時間が若干、長くなった。彼の考えがわかる筈もないレイ子は、こらえきれなくなって、小刻みに慄えはじめた。それが又、敏感に下のジュリーに反応して、人馬ともに慄え出したため馬具の車輪が幽かに、きしんだ。この国では、何か特別なことがあるということが、とりもなおさず、何か新しい受難の始まることの前兆になるケースが多かった。

だが有明は、それだけで何も言わずに通り過ぎていった。

安堵した望月レイ子は、思わずホーッと大きな、ため息を、もらすのであった。

有明は次に、足を早めて自らの黄金の馬車（戦車）のところに近づいた。

今度は二頭の輓畜、それこそ、磨きあげられた珠馬のようなアン・ブラウンとアメリカ娘の「白雪」ペアが慄え上がる番であった。

有明の鋭い視線は美畜にとって、その全身を切り裂かれるように感じられた。何も隠すものはない、裸身だというのに、もう一つ、その奥の秘密まで見抜かれてしまいそうな恐怖だった。

が、それもホンの一瞬のことで、有明は白い歯を見せて満足気に言った。

「ウン、元気そうだな」

アメリカ富豪令嬢のハジケそうに突き出した乳房の先端に、ぶら下がっている純金の鈴をパチンと爪で、はじいた。これは、有明が気にいったとき、よくするクセの一つだったので、極度に怖れおののいていた二頭の美畜も、はじめて胸を、なでおろした。

リン、リン、という清らかな音色に、アンの方はもう、涙ぐんでさえいた。最高の恐怖が、不思議と有明を畏怖する感情に変わり、それが、有明のちょっとした言葉にさえ感動するのは、この国の女たちの常態であった。

有明は、久しぶりに戦車の上に立って、鞭を、ひと振りした。

二頭が待ちかねたように走り出した。腰をためて走るので、股にはさんだ轅（ながえ）は少しも上下せず、車台も、なめらかに進む。

広場をグルリと、ひと廻りして、有明の戦車は正階を背にして停止した。

「乗馬ッ！」

待ちかねたように小川小隊長の号令がかかった。今まで跪座していたアマゾン女兵が、一せいに軍用畜の背中に、またがる。

「分列に前へ――」

再び号令が出る。一団の若紫騎兵小隊が整然と動きはじめた。

有明の前にくると、

「頭（かしら）左！」

の合図で右手を高く上げて、顔を左に向け有明を注目する。

分列行進が終わったあと、有明はエミー司令を呼んで小声で、ささやいた。

「あの一番、最後に行進した兵隊が、例のウマとホモだというやつだろう？」

「さようでございます」

「あのウマの資料を、すぐ報告してくれないかね」

「かしこまりました」

そのとき、一団のアマゾン女兵がレセプションエリアから、高手小手に「荷造り」された二人の新入り女囚を引き立ててきた。

メリー王女とジャネット・イングリス卿夫人だった。

「諸君――」

有明が言いかけると、あたりがシーンとなった。

「昔、エジプトのファラオは凱旋のとき、敵国の王女たちを自分の戦車につないで、その勝利を誇示したという」

有明は、ちょっと言葉を、きった。

ひき据えられた二人は大勢の女たちに囲まれて、ただオロオロするばかりだった。

「今日、この国は初めて王女なる者を捕獲した」

そう言って、ニヤリと笑った有明は急に声をおとして、

「王女とかなんとかいっても、この国では地上的な身分や地位は一切、通用しない。今までコレクションがなかったのは、王女なんかに、ろくな材質の者が、いなかったからに過ぎぬ。ただし、一般の女どもを、さらうより少々、厄介なことは確かだ。面倒がかかった分だけ、可愛がってやろう」

――可愛がってやろう。

という意味が通じなかった。だが、少なくとも、今まで以上の屈辱と苦難が振りかかってくるのは朧気ながら察知出来る。そしてそれは、たちまち現実のものとなった。

正階の脇に家畜をつなぐバーがあった。メリー王女は、それに顎を乗せるようにして縛りつけられた。

強要されたイングリス卿夫人は久しぶりに自由にされた自らの手にバリカンを握り、泣く泣くメリー王女の栗色の髪を刈りとってゆく。レセプション・エリアで通常、行われる断髪を、王女だけは満座の前で辱しめながら行おうというアイデアだった。

骨も氷るような絶叫が、王女の口から奔り出ていた。頭を剃りとられた王女は、両手をいっぱいに拡げた形でバーに縛りつけられ、その上、両足首まで、その手首に、つなぎとめられてしまった。腋の下と下腹部を剃りとるためである。イングリス卿夫人は、もう夢遊病者のようであった。

「なかなか、しなやかな毛じゃないか。いい尻尾が出来るだろう」

散らばった毛の束を、つまみ上げた有明が誰に言うともなく呟くのであった。

（未完）

体験手記
緋牡丹慕情

瞳耀太郎

少し陽が陰ったかなと思われる感じの空模様の中で家を出たのだけれども、タクシー乗り場までくる頃になって天候が変り始めた。台風が近づいている様子であることは知っていたのだが、風が急に吹き出した。

「いかんなあ、これは昼から雨だよ」

妻に語りかけ、私は再び歩き出した。

「雨だなんて、いやねえ」

何となく、風にしめっぽいものが感じられたのは、あながち、気の故だけではなかったらしい。

車に乗って東の方へ走り出し、二十分も経った頃から車のフロントガラスに二つ三つ、水滴の様なものが散ったのが目にとまった。雨の先ぶれが見られた。

「運転手さん、雨になりそうだね」

車のハンドルを握っている若い人に話しかける。

「大した事ないのじゃありませんか。でも、夜になれば崩れてしまうかも知れませんね」

「どうも、そのようだね」

雑談を交している中に、車は静かな処へ入って来た。「ここでいいんですか」と言っている運転手をねぎらって、車を下りた。

妻と私とは、肩をならべて静かな道を歩き出した。誰から見ても仲睦まじい夫婦の街歩きと見られる事はあっても、SMプレイに赴く夫婦とは、思わないだろう。何時も私達は二人で歩いたり、旅をするからである。

予約した場所へ来る。

次郎氏夫妻はまだ見えていないが、いつも律気なお二人の事であるから、間もなく見えるだろう。予約した部屋は使い馴れた部屋であるから、我が家で、くつろいだような気持になる。上着を脱いでラフな気持で手足を伸ばし、熱い茶をすする。

テレビにスイッチを入れて見たが、あまりすっきりしたものがない。自然を訪ねた画面に見入る。

「クーラーが冷え過ぎるのじゃないかしら」

「じゃ、ロウにしたらいいだろう。冷えを感

じるのかい」

「ええ」

麗花は大体、冷え症であり、冷気にすごく敏感であって、次郎氏と似ている。うまく出来たもので、私と環さんとは身体が自然に燃える体質である事だ。私達がペアになって動いても異和感をもたないのは、こうした体質にもよるのかも分からない。

ジッーとしているだけで私は汗ばんでくるのが分かる。多汗症も同じである。ケラケラ笑い乍ら週刊誌を見ていると、

「やあ、遅くなりました。出かけに急な用事ができましてね」

「それはそれは、御苦労様です」

次郎氏と環さんが入って来た。

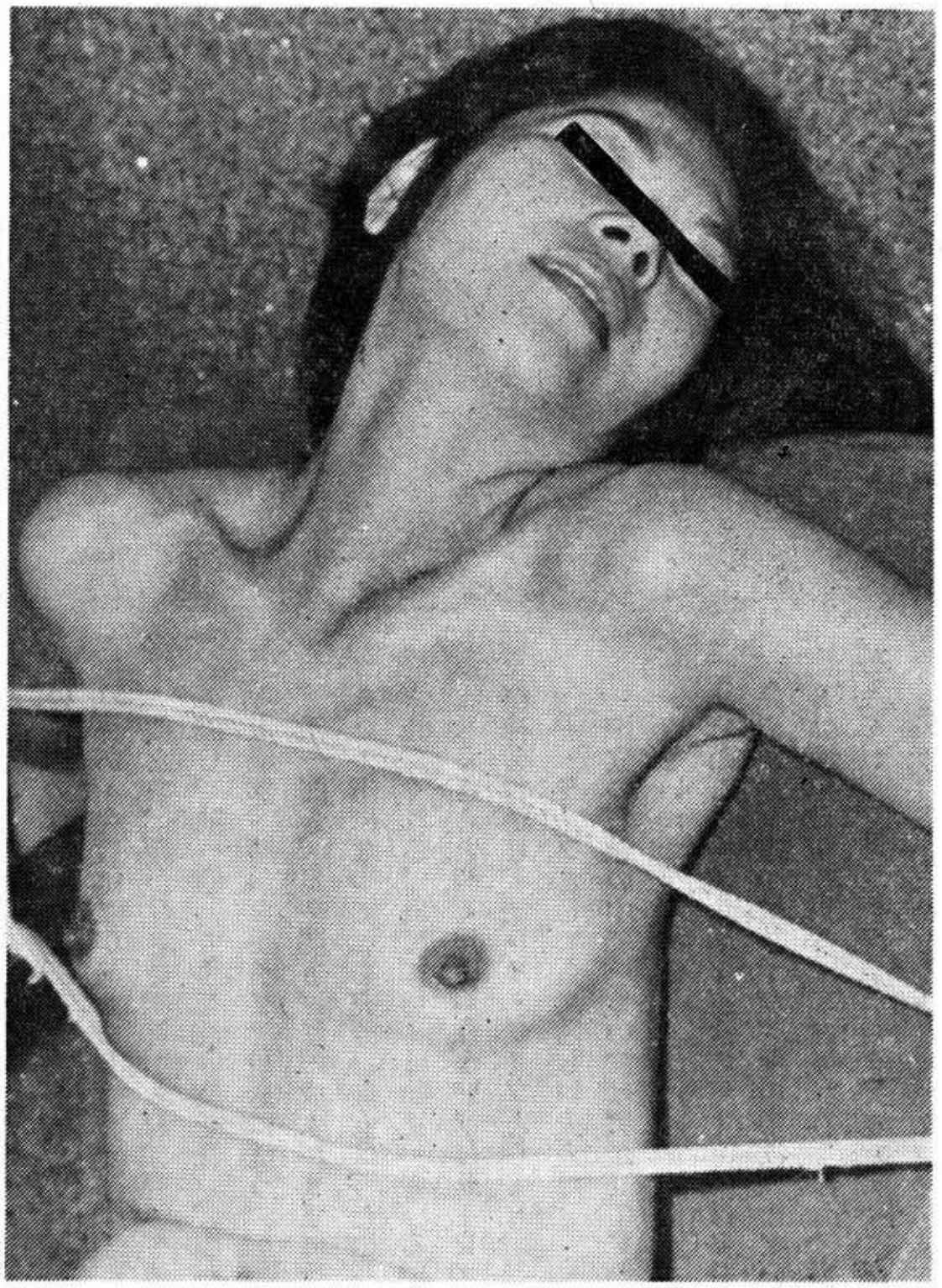
どこか少し違ったなと思ったら、環夫人が髪を短くした故である。派手な若々しさに溢れた次郎氏と環さんは、夫婦雛を見るようなお似合いのカップルで、ショート・ヘアーが似合った美しい夫人像を見る。

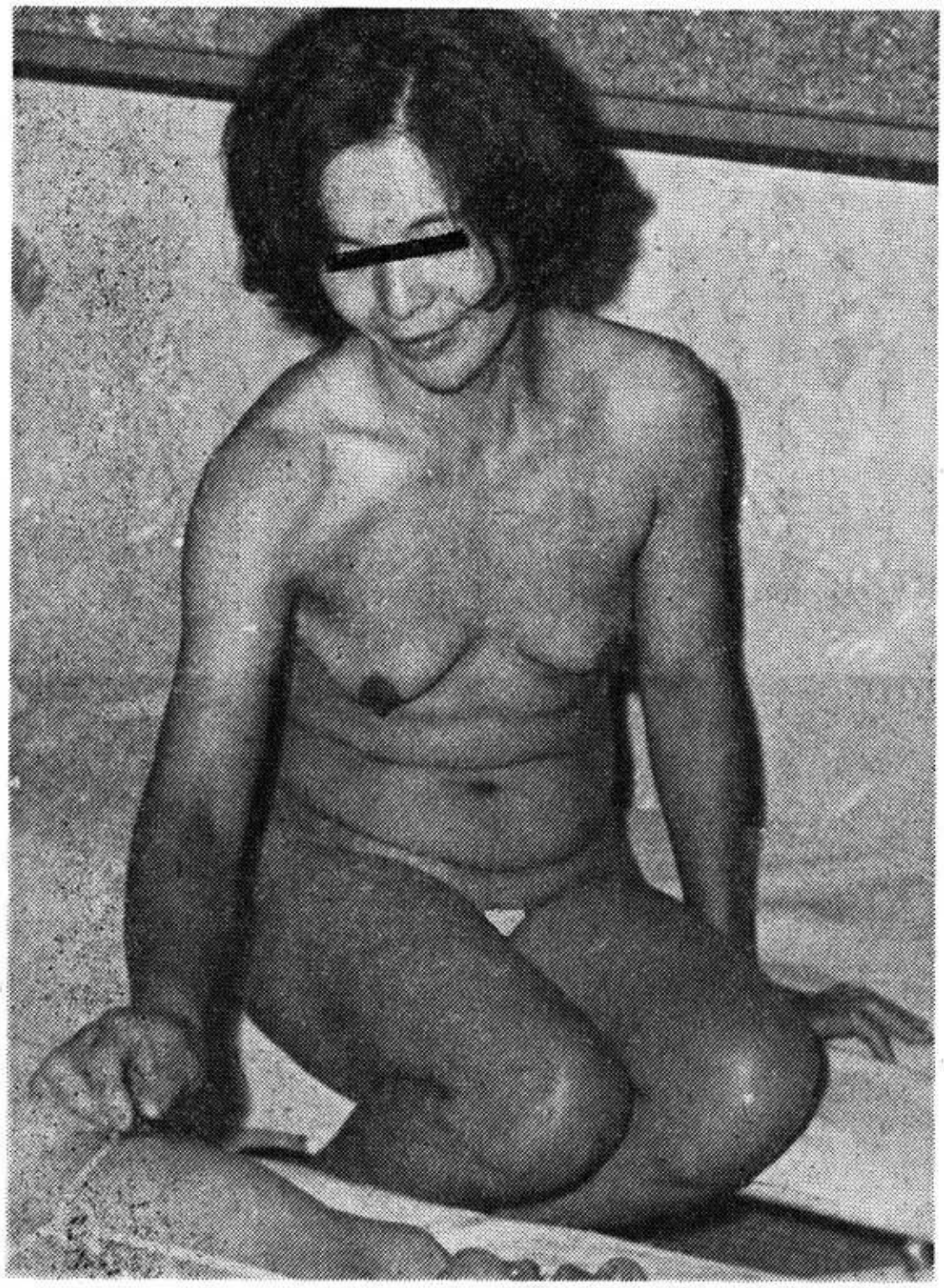
今日のプランを、どう実行しようかなあと思う矢先に、麗花が私に浴室で汗を流すようにすすめた。

「よし、じゃ、汗を流そうか」

私が浴衣を脱いで浴室に入る。陽の高い、この時間に湯を使うのも楽しいもので、私は一日に何度でも湯に入るのが好きだ。

ドアの開かれる音がして誰かが入って来た気配がし、浴室のドアの向うで脱衣するらしい衣ずれの音がする。ダイヤ・ガラスの向うの人影は女らしいので、麗花なのか、環さんなんだろうか。次郎氏が残っている処から見れば、入ってくるのは環さんらしい。ブラジャーを外す様子が見え、続いてスキャンティを脱ぐようである。ドアーを開いて浴室へ美しい全裸を見せたのは、やはり、可愛いい私のプレイ・ワイフ環さんだった。





「ここへいらっしゃい」
浴槽の中から私が招く。恥じらいを見せ、かかり湯を使う彼女。
手が伸びて、彼女をぐっーと引き寄せる。
「私ね、のぼせるから、あまり熱い湯は、だめ。貴方は、どお?」
「私は大体が熱湯入りだよ。この湯は熱くないから、丁度あなた向きだね」
浅い低い浴槽の中で身体をビッタリと合せ後から、彼女の首筋や胸を流してやる。
頬をくっつけ合って湯の中での感触を楽しむ。きめの細かな美しい肌から成熟し切った女の肌の匂いを、人妻の匂いを嗅ぐ。
湯槽から上って石けんを使っている私の脊に環の手がふれて脊を腰を洗ってくれる。
振り返った私の目にふれたものは、裸の天使が中腰になってセッセと汗を流してくれ、優しい微笑を讃えている姿だった。
私がひととき、ひとときに情熱をかけて悔いる事のない女こそ、彼女である。
「さあ、今度は私が流しましょう」
彼女を、腰かけさせ、首から脊、脊から腰を流し、前へ回って手を洗い胸を洗い、腹から大腿部、膝から足首まで丹念に洗う。
手を開き、足を開き、私の成すがままに生きた人形になって私を充分と彼女は、たのしませてくれる。既にプレイは始まっている。
きらきらと輝く黒い真珠が旺盛なサービス精神を物語り、プレイ・ワイフとしても、ペット・ワイフとしても素晴しい夫人だ。
泡立つ石鹸の中で、この次は哭かせて見たいと思いつつ、泡を流す。タイルや岩にかこまれたこの密室の中で、次のデートには多分艶やかな唄声を放ちつつ、体の中に残っている体液を、撒き散らすことになるだろう。環さんが、どんなロマンチックでエロチックなものになるか、私も期待して見たい。

濡れた仲から臭い仲へ、私達の仲は更に深く契り交わり合ったものになるだろう。

再び湯の中へ戻った私達は、言葉を交しながら、私が先に湯から出て浴衣にかえる。

すれ違いざま、麗花が入ってくる。

「いい湯だよ。お前も汗を、よくお流し」

「私もそうするわ」

乳房をブルンブルンさせ、麗花は浴室へ。

「奥さん、いいお湯よ」

環と麗花の、はしゃぐ声が聞える。

二人は、分け隔てのないプレイ・ワイフであると共に日常をも分かちあえる立場の妻達でもあることは結びつきを堅くするものだ。

次郎氏がパイプをくゆらせながら、くつろいでいる。

「妻達が湯へ入っているのです。貴方も一浴び、どうです」

「いやぁ、勘弁して下さい。私は烏の行水であまり好きじゃないんですよ。身体から脂が抜けてしまうようでね、苦手なんですよ。お宅はタフでよろしいが、私は駄目でね」

私達が何かと喋っている内に、時間が経って行った。

ややがやと賑やかな、華やかな二人の妻が上って来た。

「また二人で、悪いこと、たくらんでいるんでしょう。男達ってしようがないわね。助平博士達、よい考えでもつきましたか」

いたずらっぽい目で、二人共、なまめかしく誘いかける。

「嘘をつけ！　この助平博士達に感謝で一杯なくせに。嬉しがって泣いたり、もだえたりするのは誰かさんかなあ」

「ねえ、奥さん。私達は、どこばせてあげている、犠牲者よ。私達は、どうでも押えられるわよ」

環と麗花が、異口同音に話しかけ合う。

「何とでも言うんだな。後で、ぐーっと大きく哭いて貰うさ。お義理で哭いてうめくのか歓んで哭くのか、見せて頂くよ」

「ともかく、あなた、汗を流しなさいよ」

環夫人と麗花に押しまくられて、次郎氏が浴室へ入る。

まさしく烏の行水。湯を浴びただけて早々に次郎氏が上ってくる。

麗花と環が、爆笑の渦をつくる。

私達はビールを飲み、女二人は清涼飲料をのむ。ああでもない、こうでもないと、話題に花が咲く。

「うちの人、縛って、いじめましょうか」

とは環さんの発言。仲々勇ましい。

この間は麗花が次郎氏を縛って、軽いベルト打ちをしたのが次郎氏の気に入っている。麗花は神酒を求められて、彼にまたがったらしいが不調で、直接神酒の授与はできなかったらしい。麗花に神酒授与を直接するように私は申しつけていたのだから、今日は成功するよう祈る。

麗花、いわく、

『だって、神酒が出ないんですもの。何時もある訳じゃなし』

次郎氏が忍耐強くソフトムードで直ったら神酒授与の口うつしは初めてではないし、可能な筈である。

ビールを飲ませたら十分たらずで麗花は、神酒授与は可能である。縛ってから口うつしでも何でもいいから、アルコール分を麗花の中へ送り込みなさい。麗花は必ず、神酒の放流をはじめるから、口をつけるようにと伝えたのを、次郎氏は忘れたらしい。

この点がSにも転じ得る可能性をもっている麗花が、環さんと異なる処である。

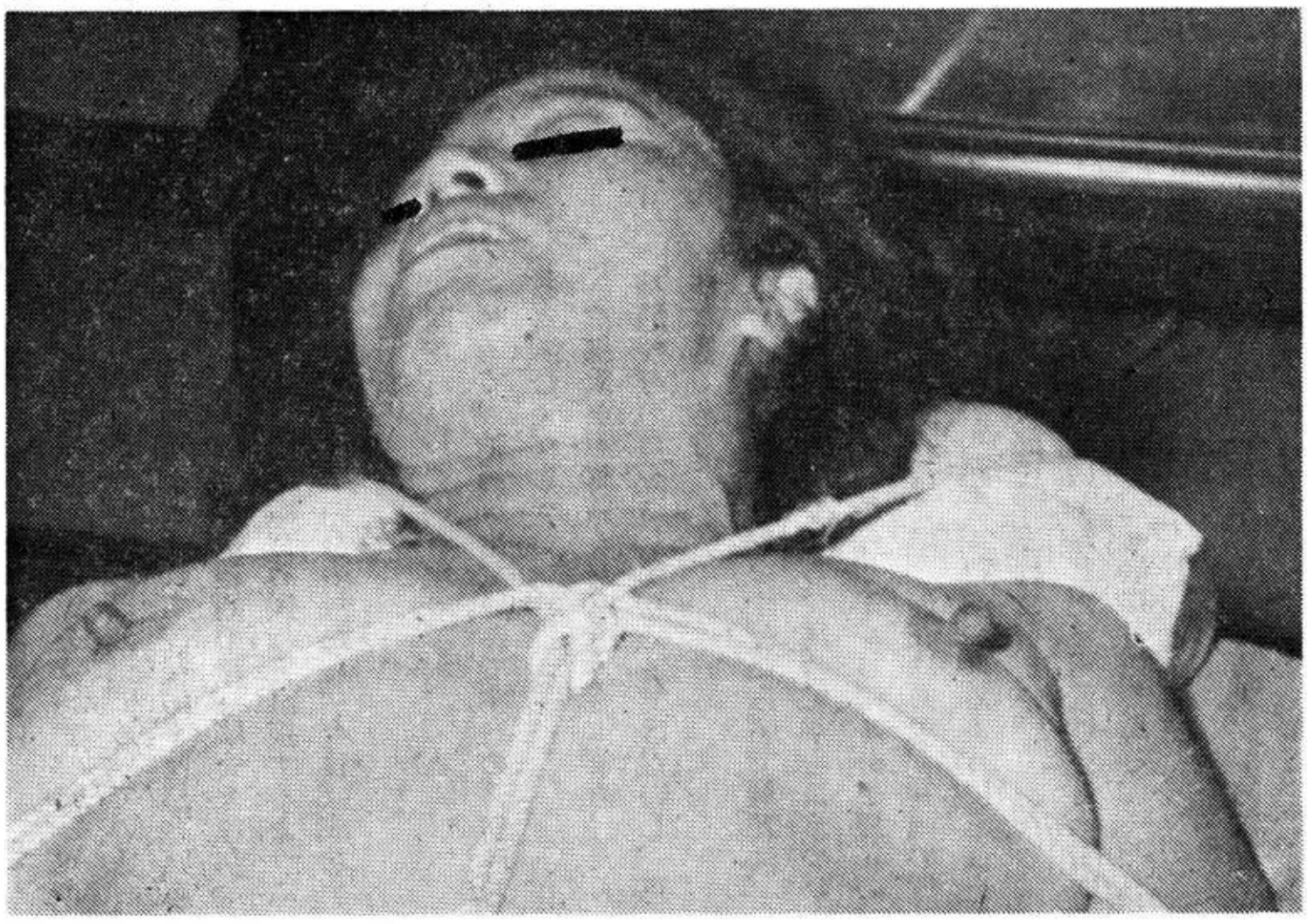
先ず次郎氏から、麗花の責めプレイを始めるようにと、すすめる。

浴衣をぬぎ、全裸となった麗花が、同じく全裸となった次郎氏に手を引かれてベッド・ルームへ入ってゆく。

ベッド・ルームへ導かれて行く麗花は、プレイ・ワイフとして次郎氏の恋人であり、情婦でもある。私は私の妻であっても次郎氏の恋人としてSMワイフとして、全身に一糸もまとわず、ベッドという調理台にのって、プレイに打込む麗花を美しいと思う。

妻が歓喜して放つ声は、心から、私に歓びをもたらし、顔を紅潮させ、欲情してプレイに入っている妻の姿は、何よりも美しいと思う。次郎氏によって異なったプレイの歓びが与えられることを願っている訳だが、私に遠慮しているのか、気おくれするのか、麗花の開懇のテンポが少し遅れている感じであるが麗花はプレイを通して、私以外の男性にふれることにより、眠っていたものが甦りを見せプレイの歓びを見せつつある。アヌス責めを好まなかった麗花であるが、今は、アヌス責めを好む女となった。アヌスに対する指責め舌によるペッティングが、次郎氏によって馴致され、感度高きM女性へと昇華しつつあることを私は喜んでいる。フレンチ・スタイルの麗花と、次郎氏のプレイを見るが、私はその美しさ、妖しい胸のときめきを感じこそすれ、麗花が多くのプレイ者と技術を深め、M女性の極致を身体の中に学びとることを希望してやまない。次郎氏は、私が麗花を見つめることを希望しているので、次郎氏に従ってプレイの進行をアドバイスして見るものの、むしろ、麗花がプレイのムード作りのためには、私とは別室の方がよいのではないかと思ったりする。それは麗花の未熟といえるものであるけれども、私の知らない中でプレイ体技を覚え、その覚えた中での公開発表を、麗花が求めているのではないだろうか。

両手を頭の下に敷き込み、両足を左右一杯、くつろげられて、女の園を一望の中に曝してYの字型になり、乳房を責められ、アヌスを責められ花びらの舌責めをうけて、大



きな息をつづけている麗花。

「さあ、堅くならないで、力を抜いて」

次郎氏が真剣な面持ちで麗花にレッスンをつけている。

「遠慮しないで泣いてごらん。そうそう。可愛いいよ、奥さん。どう、気持がいい。気持がよかったら、泣いていいんだよ」

赤ん坊をあやすように、足首をもち、大腿部をもち、乳房を吸い、指責めを行って、感情のせり上りを行っている。

時々、目をつむって顔を紅潮させるのは気持が乗っている故である。麗花の傍に近づき「気持が、いいかい」と横からのぞき込んで私が声をかけると、「ううん、とてもいい気持」と答える。

次郎氏もピッチを上げて、ビックリするような大きな音を立てて、麗花とからみ合ったプレイを展開する。熱中してくれれば次郎氏は喚声を上げて麗花に武者振りつく。

肉体と肉体とが激突して放つ音は、私の想像もしなかった音だが、この音で次郎氏は昂奮して、サディスチックになり、果ては自分で泣きたくなるそうである。彼から見ると、私はまだ本当でないのかも知れない。

ただ、麗花はムード派であるため、プレイによって高められた情感が、と鳴る大きな音で、途端に失われるらしく、あれがなくなるか、小さくなれば最高だという。私がとても及ばないような、凄いバイタリティで麗花に向う。A責めにしても、V責めにしても、乳房のペッティングにしても、環さんにはあれ程ファイトを見せないと私に言ったが、環さんでは彼は燃えないという。「こんな立流な身体の奥さんを、もっと大事にして上げなさいよ」と彼に言った。

夫婦のマンネリ化に、他人を迎え入れる必要性を彼が感じたのは、私も理解できる。それだけ、彼は一途に生きる男なのであろう。

私は次郎氏を通して麗花に、もう一度、魅力の源を見つめているのであり、環さんも更に、もっと歓びに溢れたプレイに満たしてやりたい。私の目の前では、一対の牝と牡との斗技が、くりひろげられている。牝である麗花、牡である次郎の華麗なる決斗は、汗を流し、露を撒き散らし、体臭の匂いが入り交って、妖しげな気分をかきたてる。

麗花の小鼻がヒクついているのは、陶酔の情を表わしているのは、言うまでもない。一つのプレイがすむと彼は、麗花の秘園の中で作られた蜜をすすり、麗花は彼のものを胃袋深く収めて、プレイ妻の務めを果して眠る。

「こちらへ、おいで」と、私の可愛い全裸の環さんを坐らせ、椅子に縛りつける。

頭を椅子の脊にもたせ、肩口をピタリと押え込むと、後手に椅子へ縛りつける。縄が短いので充分とは言えないまでも、動かぬように環さんを椅子に固定した。先ず右の足を横へくつろげて足首を引っ張りながら、椅子の右足へ縛りつける。先程から見ていた故でもあるだろうか、女の大切な部分が、しっとりと濡れている。残念ながら片ひじのため、左足だけを椅子の肘にまたがせて、太腿と左肘左足首を肘の立ち上りへ縛りつける。

「とても可愛いいポーズだよ」

フォームをそのままにして、カメラのシャッターを切る。露光が不足気味だけれども、何とかなるだろう。

傍へ寄って正面から舌先まで、乳房を責め片手で花びら責めを行う。先程から昂奮していた故だろうか、指を伝って露のしたたりが椅子にシミを作る。

乳房から顔を離して、彼女の下腹に目をうつす。

「気分は、どう。貴女の露がしたたってシミが出来たよ、随分と濡れている。可愛いい人

だねえ」

私は彼女の耳につーと口を寄せて囁く。

目を丸くして、びっくりしたような彼女。

「気分がいいわ。とてもいいのよ。嬉しい」

彼女は正直で、自分を偽らない。それがまた、彼女の魅力の一つなのだ。また、ひとしきり、私が指責めで責めて見ると、切なくあえぐ例のすすり泣き。

これがまた、たまらない魅力なんだが、次郎氏が魅力を感じないとしたら、何という、もったいない贅沢な事だろう。私は、この切ない環さんのあえぎ、すすり泣きを大切に扱って行きたい。環さんを完全に開股椅子縛りに、したかったのだが、生憎ここには、それに適当な椅子がなく、片肘のものしかなかったから、片股開きとなった責めと変らなければならなかった。

濡れ抜いて露のしたたりを見せる環さんの敏感な部分は、生々とした躍動を見せ、親指の平たい部分が、クリクリとした小さな蕾をさすり続ける。右手は体の中央にチョンと突き出ている桜んぼを、親指と中指でつまみ上げ、人差指の丸い腹で軽くポンポンと、たたいて見る。彼女は顎を、ぐっーと突き出し、頭を、やや左へ傾けるようにして、頭を椅子の脊頭にのせ、力が抜けるようになった。

完全な陶酔に入りはじめた証左である。ふり返ると、次郎氏と麗花とは再び復活を見せている。乳房責めは麗花が好んで、求める責めであり、歓喜に達するのは間もなくであろうか。立ち上って来た次郎氏が気になるのか、環さんに言葉をかける。

「気分がよさそうだなあ。そのままで責め続けて貰えよ。どんどん責めて、哭かせてやって下さいよ」

「勿論、環には、充分、唄ってもらいますとも。カナリヤさん、御主人も、ああ言っているんだし、可愛いい唄を歌って下さいよ。ソプラノでもアルトでも、いいからね。麗花も唄ってもらって合奏しましょうよ」

話している間も、私の手は休まることもなく彼女へサインを送り続ける。

サインはV、濡れ濡れのサインを私の掌に送ってくる。身体の奥底からも指先へ、Vサインを送っているようだ。Vサインは上下へ拡がり、下腹から胸へ、胸から咽喉へ、咽喉から紅唇へ。紅唇から洩れるサインは

「く、くっくっく」

艶美なラプソディ。

全身に接吻の雨を降り注ぎ終わった私は、一つの章の終わりに、彼女の乳豆に唇で終わりをつげる。

麗花は環さんほどでなかったにしても、波打つ柔らかな腹と胸で、次郎氏へ一曲の演奏を見せていた。

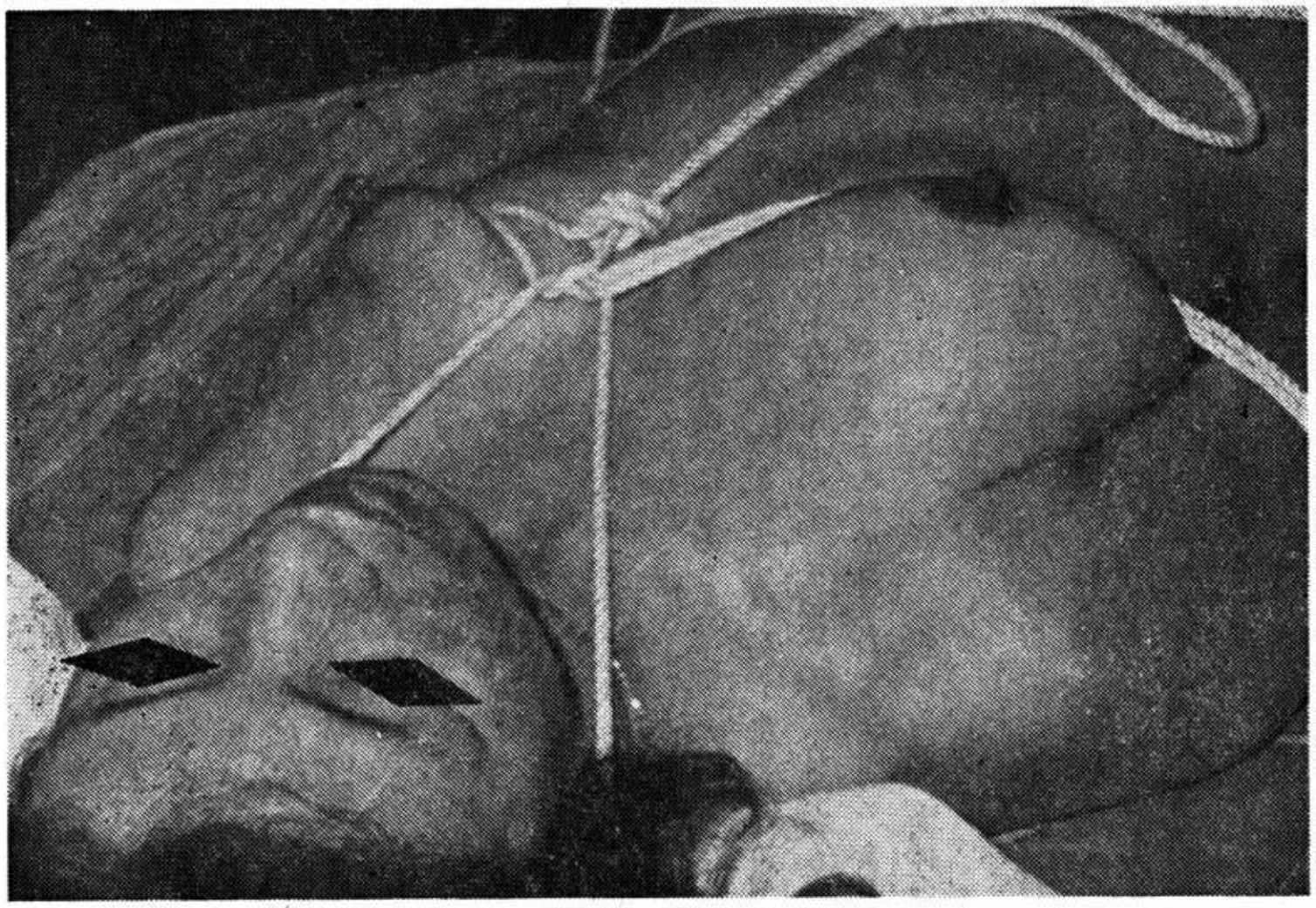
長く椅子縛りをすると、縄の跡が強く残らないかと心配していたが、足首の縄跡は、やはり残ったのである。後で街へ車で出、散策するとき、彼女の足首に残る赤い線を見た。

色の白い足首に筆で刷いたような一線が、ヒールの上、三寸に横断していた。麗花に私が告げた時、麗花は「恐らくあの跡とは、人は気づかないわよ」と言ったが、私は気になったのは事実である。

今日は趣向を替えますよとつげ、椅子縛りから解いた彼女に猿轡をかませ、マットの上に横たえる。

右手と右足を、左手と左足を縛り分け、姿勢を改めて仰臥に置き替える。

こうなれば、二重三重の防音になるだろうし、呼吸が鼻腔だけに限定されてしまえば、気分的にカロリーアップになることは間違いない。歓喜が極点に達し、猿轡の下で、どん



中見よ　だか箝接さ　含私私のや見込を思は　計絶被な

なに絶叫しても構わないし、被縛者自身が自分の力限りの絶叫によって、感度の増幅が計られるからだ。

被縛者が女性である場合には、その効果は絶大なように思う。責める者の下帯や靴下を、その女性の口の中へ押し込み上から猿轡をすれば性的昂奮が高くなるとは、最上氏や塚本大兄の論であるが、私の靴下を彼女にかませるのは私自身に抵抗を感じるので、私は下ばきの一部を口一杯、含ませる事にした。

猿轡をして仰臥している環さんは、私自身の一番、近く接近して、ふれていたものを箝口具としてくわえ、その上から手拭の猿轡をしているのだった。

次郎氏が、環さんと麗花によって緊縛されたときの箝口具は、麗花のパンティが口の中へ押し入れられ、手拭によって上覆いされたのだった。最も親しみのあるプレイ・ワイフなり、プレイ・ハズのパンティを呑み込むのが、更に親近さを加えるだろう。相手の体臭や体液を匂いとりながら、責められる、たのしさは被縛者にとって、コクのある責めのように思う。

私は自分の組んだ足の上に環さんの顔を乗せ、手を伸ばせば乳房も秘園も紅唇もが、自由に自由裁量の中でハネ回る、このポーズが好きである。家の中で麗花を責めるときも、これを最大限に利用する。逆さ富士でない正常富士を見つめながらの、プレイの味は格別である。今、私の足の上には、プレイ・ワイフの環さんが媚を見せて、仰向いて私をみつめている。

優しく髪を撫でながら、手を彼女の胸に走らせ、敏感な乳房に愛を注ぐ。

「声を上げて、お泣き。可愛いい僕のペットさん。さあ、ボリュームを上げて唄をお唄い女豹さん」

静かに彼女に語りかけ、情感を高めるように、つとめる。

「いい気持かい、環さん」

うなずく可愛いい顎。黒い瞳がキラキラ、キラキラと、また激しく光り、燃える。顔が

次第に紅をさして、油に光るような感じになり、胸から向うが波のように揺れ出した。

「さあ、環。パラダイス行きのお舟に、乗せてあげようね」

宝物でも扱うように、彼女の頭を両手で抱えて、足から外す。

立ち上った私が彼女の足許に立ったとき、彼女は足を閉じようとしたが、左右に振り分けられた身体は、無情に環さんの恥かしさには応えてくれなかった。僅かに膝の上が、恥かしげに揺れたに過ぎない。

向う通るは清十郎じゃないか？

お夏恋しや清十郎。

室津の里の恋女、お夏狂乱のは昔のこと。いまは眼下で環さんが招く。素肌の生まれたままの姿で、あられもなく童心の女。その環さんが膝をふるわせ、声をふるわせて私を招いている。

——○——○——○——

腹ばいになり、両膝に両手をのせ、私の唇が逆さ富士の頂に降りたとき、環さんは大地をふるわせ歓呼して、私を迎えた。

小さな宇宙船から、巾の広く厚みのあるタラップが、接地したとき、その大地の小さみなピッチは一段と早くなったようだ。

タラップを安定させるための努力は、大地側から起って来た。せり上ってくる平面が少しずつ、拡がってゆくようだ。宇宙船自身が完全に接地した後は、誰も分からない。頂もせり上る平面も宇宙艇の下に覆われてしまったからだ。宇宙艇のバッフエンダーである円形の唇の輪の中で、何が起ったのか、起っているのか、知るすべもない。

——○——○——○——

せわしく私の両手が、彼女の膝に胸に下腹に走り回り、環さんの乳房がブルブルと、痙攣を見せ、顔が真紅に輝き、水面に跳ねる魚に似て、環さんの腰が、脊が時々、跳ねた。

低いうなり声が遠い処で聞え、絶叫に似た艶やかな声が遠い水底でしたようだ。

私の環さん、そして彼の妻である愛しい環さんが、素晴しい、スネークの踊りを踊りつづけ、肉体のリズムバンドが、鳴り続けている。

薔薇は、したたりを続け、環は今は一人の独奏者として演奏を行っている。

そして私は、その傍聴者であると共に、熱狂的なファンでもあった。

環さんの独奏は、体で私の伴奏を求めてきた。間髪を入れず、私は環さんと伴奏を伴にする。

成熟し切った人妻の肌の美しさ、満ち足りた歓びに溢れたその肢態、立ちのぼる妖しい香気、融けるような瞳さんの光り。

その楽園の中で、私は環さんを抱きかかえ醒めては、その縄をといては、耽美の酒に酔いしれるのだった。

傍では、一つのまた新しい一章を創り、一章のページを終えた次郎と麗花のカップルが胸と胸、腹と腹とを、すり合せ、耽美のフィナーレを踊っている。

一歩一歩と確実に、四人は前進している。

「四人で、研究会に参加して見ましょうよ。麗花さんと環をコールさせて見たら、どうでしょうか。また楽しいのではありませんか」

次郎氏から提案して来た。

もう少し、間が必要なように思うが、それも、遠い事でもないようだ。何故なら、麗花も環さんも、それを望みつつあると、信じられるからだ。

塚本氏の〔S研〕会上に於て、麗花と環さんが俎上に乗せられて、被虐と性愛の旨酒に酔いしれる。それは考えても愉快なことではないか。

——了——

体験告白 〝わかめ酒〟異聞

橘内男

初めて投稿します。素人ですので文章の下手なことは御許し下さい。

大分、以前になりますが、私は一頃、女性の体の美しさの不思議にひかれて、その謎を解こうと思い立ち、ストリップ劇場に足繁く通ったことがあります。

どうして女体は美しいのか実物を見ながらその秘密を考えようとしたものです。いつも行っていたのは浅草のロック座でした。御存知の方も多いと思いますが、小松竜子の全盛の頃で、今はテレビでおなじみの東八郎や、日劇ミュージックで活躍中の高見緋佐子が、連名表に名を連ねていました。

私はストリッパー達のお乳や太ももを眺めては、その奥にひそむ美しさと若さの原因は一体、何なのだろうかと考え込んだものでした。あの白さはビタミンCかな。皮下脂肪が美しいのならビタミンAかしら。いや、女性はメンス等から考えるとB12かもしれない。時折、男性コメディアン達も舞台で裸になることがありますが、女体の美しさと較べますと、劣ること、みにくいこと、お話になりません。また女性は平均寿命からみても、世界的に六年程、長いそうです。

美しいことが若いことであり、老衰が美しくなくなる事だとすると、男性より美しい女性が、長生きする訳が、判るような気がします。結局、私の考えた結論は、どうも若さや美しさの根本は、女性ホルモンらしいという事でした。あの「よおっ、高見！」とか「いいぞ、小松！」とファンの呼ぶ、白い張り切った肉体には、女性ホルモンが充満しているに違いないと考えた事でした。

その頃、何かの本で見たのですが、製薬会社のホルモン製造工場で、男の作業員が、女性ホルモンを合成していると、手や指から、そのホルモンが浸透して来て、オッパイが大きくなって困るということでした。しかし、オッパイが大きくなることは、女性の場合で考えれば、老衰することはオッパイが萎びて小さくなるのですから、それは若くなる事で喜ばしい事ではないかと思うのです。

そして丁度、カルーセル麻紀がオッパイを大きくするのに、女性ホルモンを、せっせと注射しているとの記事が、週刊誌に出ていた頃でした。私には、とてもカルーセル麻紀のように大事なものを切り取って、そこに穴をあけるなんて勇気はありませんが、オッパイ

を大きくするという事には物凄く興味が湧きました。それは私が初めに書いたように、小松竜子の見事なオッパイに感激していたからかも知れません。それにしてもストリップ劇場の踊り子のファンなんて面白いものですね。

中売りのおばさんに、お菓子やアンパンを注文して、好きな踊り子に届けてくれと頼んでるんですから、全く野一色幹男の『浅草』、を目の辺り見るような感じです。

そんな事は、どうでもいいとして、私は女性ホルモンを入手しようと思い立ちました。注射は自分では出来ませんから、飲用できる女性ホルモンをです。しかし、どうも恥かしくて薬局に買いに行けません。

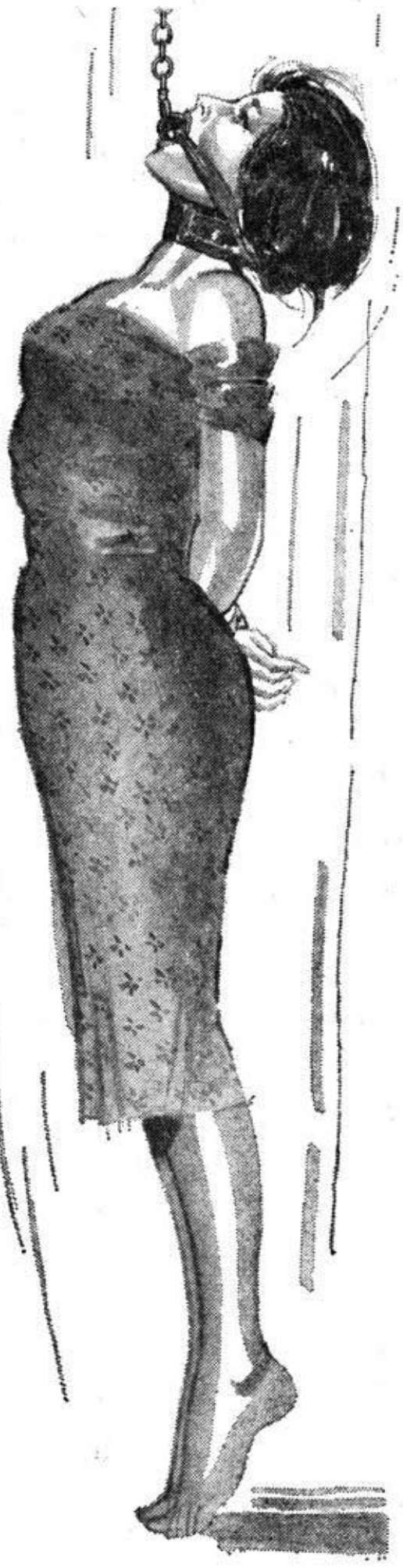
「貴方が飲むのですか」と訊かれたら一体、何と返事したらいいのかしらと考えてしまいます。とうとう勇気を出して、デパートの薬品売場へ買いに行く事にしました。デパートなら、不特定多数のお客さんが行きますからね。しかし、そこでは全く、あっけない位、簡単に手に入りました。

「これ、下さい」、「はい、有難うございます」程度の応答で素晴しいものが手に入りました。興味津々の薬、あこがれの女性ホルモン剤、持田製薬のギナンカプセルを買い入れることができたのです。その時の喜び。今はちょっと忘れましたが、確か一錠当り数千単位の、比較的、穏やかな女性ホルモン剤でした。

黄色透明の、一見、肝油球のような、大きさも全く同じような粒で、かんでみても、味も結構、悪くありません。しかし、何しろ能書には男性服用の場合は、なんてことは書いてある筈(はず)がありませんから、どれ位、飲んでいいか、判りません。又、こんな事は人に聞く事もできません。それにホルモン剤を沢山飲むと癌になるんじゃないか、などの心配もありましたから、沢山は飲めません。

それでカルーセル麻紀が、十日毎に数万単位の女性ホルモン注射をしているという記事から推察して、大体の見当をつけて、一日三粒ぐらいずつ、飲む事にしました。

それは風薫る五月頃の事でした。皆さんはその結果は、どうでしたか、って聞きたい処でしょう。もったいぶらずに御教えしましょう。大体三カ月位で、ふっくらとして見事な我ながら素晴しい大きいオッパイになりました。到底、これが男性のオッパイとは信じられない程、大きく膨れ上り、天にも昇る気分です。丁度、夏になりましたので、半袖のワイシャツの胸の所が、中からムッチリ、フックラした双丘が盛り上がってしまって、恥か



しいやら嬉しいやら、隠すのに一苦労です。

大体の経過は、飲み始めてから一カ月位で大きくなり始めるのが判ります。二カ月もしますと、かなり膨れます。三カ月位で見事にブランと下がるまでには行きませんが、大きな白いお椀を伏せたような見事な、いい形になります。体をゆらせるとブランブランと揺れて、何とも素晴しい気分です。モンブランという万年筆だかが、ありましたが、そんな言葉を思い出す感じです。

それに、その頃になると、どうもお乳の表面の皮が、前より薄くなったような感じで、一寸さわっても敏感に感じます。そしてランニングシャツなんかになると、もういけません。女と見まがうばかりの盛り上がった双丘が出来てしまって、困るやら嬉しいやら恥かしいやら、何とも彼とも言いようのない、変テコリンな気分になります。しかし、ふっくらした見事なオッパイが我身に得られたとは何と好い事でしょう。

私は日夜、たっぷりとナルシズムの気分に浸っていました。ただ、お風呂（銭湯でしたが）へ行くのは一寸、閉口でした。なるべく目立たないように、さりげなく行って来ていました。そして、その頃になると、どういうのでしょうか。股の間の所が、いつも、しっとりと湿っていて、そこが、どうも女性の匂いのようなものがするのです。その頃、女性の匂いは、もう知っていました。会社には狭い事務室がありますので、そこで女の子達がいる場合なんか、よく匂うのです。

その匂いがするんです。私の股の所からですよ。考えられない事じゃありませんか。それで、どうも状況は、女性ホルモンの摂取過剰じゃないかしら、と考えるようになりました。このまま行ったら、男性機能は衰えて退化して、消失してしまうのじゃないかしら。そして卵巣とか、子宮（その時は本当に、そう考えた）が体内に出来て来てしまうのじゃないかしら、と心配になり、動揺してしまいました。

それは夏も終り近くでしたが、さらに私を動揺させたのは、秋になると会社で身体検査がある事でした。会社のですから、レントゲン撮影が主ですが、上半身、裸になって、医者の打聴診がありますす。医者の前に、こんな大きなオッパイを曝したら、一体どんな事になるでしょう。私は、その医者がギョッとなる様子が目に見えるようです。

私は恥かしくて、とても会社には、おられない事になるでしょう。私は、あれやこれや考えて、思い悩みました。折角、ここまで見事に育成したのにと思いましたが、とうとうそこで女性ホルモンの服用を止める事にしました。実験としては大成功で、うまく行く事は十分、判ったので、身体検査が過ぎた頃に又、改めて、やり直す事にしようと考えた事でした。

それに、股の所が、いつも、しっとりと湿っていて、そこから女性の匂いが発散していたんでは、周囲の人に変に思われてしまいます。

とうとう思い切って服用を止めてしまいましたら、又、三カ月程で、いつとはなしに、元の小さな男性のお乳に、戻ってしまいました。秋の身体検査に、何事もなく過ごしたことは、いうまでもありません。しかし、こんな事がありました。丁度、オッパイが、ふっくら見事に膨んで、私の体には女性ホルモンが溢れるばかりに満ちていた頃でした。

私は独身でしたから、前にも書きましたように銭湯に行っていましたら、番台に座っている風呂屋の娘が、いつも、じーっと私を見ているような感じなんです。そして、あげくの果てに、私がお金を番台に差し出す時に、

私は手を握られてしまいました。そして、思いつめたような声で、お近づきになりたいというんです。

お金を渡す場合ですから、そんなに長い時間はありません。私は、どきまぎして、何か返事をしたように覚えています。それにしても、女性ホルモンというものは凄い効能があるんだなあ、と私もホトホト我ながら感嘆してしまった事でしたけれど、又、お風呂屋の娘と一緒になったら、三助をやらせられるんじゃないかと考えて、それから、そこの風呂へ行くのは止めてしまいました。そして、わざわざ遠くの外の銭湯へ行ったことでした。

私は、どういうものか、悪いくせで、何でも判らないうちは興味を持つのですが、大体判ってしまうと、興味を失くしてしまうんです。それで、オッパイ膨まし事件も、つい、そのままになってしまいました。それは一つには、私の結婚に、ぶっつかったせいもあります。結婚してみると、膨んだオッパイなんてものは、毎日毎晩、見たりさわったりしているから、珍しくも何ともありません。興味なんか、なくなります。

子供も二人も出来ますと、もう家内もオッパイなんか、むき出しにして夫に見られても、何でもない生活になりますので、もう自分のオッパイを膨まそうなんて、妖しげなナルシズムの馬鹿げた考えはなくなります。

しかし最近になって、あの時の、女性ホルモン服用の意味を、改めて考えてみました。あの時は美しい女性は若い——というロジックから出発して、女性ホルモンの大量保持者が若いという結論になったものでした。そこで今度は、別の意味でも又、女性ホルモンをとる必要があるなあと考えて、又々、あのデパートへ、ギナンカプセルを買いに行ったら断られてしまいました。

「どうしたんですか」と聞いてみると、「最近、乳癌の患者さんが増えてるんです。それが貴方、何と男の方なんですよ。男の方の乳癌なんて今までは考えられない事だったんです。それで、お医者さんが調べたら、皆さん女性ホルモンを、お飲みになっていたんですね。それで、もう女性ホルモン剤は一般の方には、お売りできない事になりました」

「お買いになるには医者の処方箋が必要なんです」と薬大を今年、出たばかりと思われる女の子が、ニコニコ笑いながら私の顔を見るじゃありませんか。貴方も、その口だわね、と言わんばかりです。私は「そうですか。それはそれは」とか何とか言いながら、さりげなく、その薬品売場を離れると、万引でも見つかったように、脱兎の如く逃げ出してしまったことでした。あんなに恥かしかったことはありません。

今でも思い出すと、冷や汗が出ます。それにしても私は、丁度いい所で止めたんだなあと胸を、さすったことでした。

しかし今度は入手が難しいとなると、どうしても手に入れたい気がして来ます。調べてみましたら、女性ホルモンは化粧品に混入されていることが判りました。それで今度はデパートの化粧品売場へ行ってみました。

ケースの中を見てみますと、確かに女性ホルモン入りとなっている化粧水があります。

白粉もありますが、白粉は、なめられそうもありませんから敬遠することにしました。リブロンというハーザー食みたいな商品名で女性ホルモンを醋酸エステルの形で、水溶性にして化粧品に入れたから、皮膚から吸収されて、お肌が真から美しくなるんだとチラシに書いてあります。しかし、この売場にしても、またまた、女性用品を男の私が買わなければならないとは、私の要望は、よくよく因果に、できているなあ、と思い知らされたこ

とでした。

そして、この売場での交渉は難航を極めました。私の切り出し方も、いけなかったんですが、私は家内から頼まれて来たんですが、と言い出した訳です。恥かしいですからね。そして、その後は何も知らないのですから、聞く一方です。女店員は、貴方は一体、奥様に何と頼まれて来たのかと、確認しようと私に迫って来ました。

値段の高い化粧品ですから、無理もありません。私は、その化粧水が飲用に適するかどうか（適する筈はありませんが）買う前に早く知りたいし、且つ、私が間違いなく女房から頼まれて買いに来たものだと、終始一貫して信じさせる努力も、しなくてはならないし全く弱らせられたことでした。けれど、何とか、ようやく売り渡してくれました。喜び勇んで持って帰り、女房なんかには、もちろん内証で、その夜、一寸、なめてみましたら、その、まずいこと、まずいこと。何か苦い鉱物性の顔料を溶液にしたみたいで、到底なめられたものではありません。

もったいないから味は何とか我慢して、とても口が受け付けてくれません。どうして化粧水は、なめても、うまいように作ってくれないんだと憤慨したのですが、それは後の祭りでした。大奮闘して、ようやく入手した高価な（三千円もした）化粧水は、何の役にも立ちません。捨てるのも惜しいので、翌日、女房にやったら「あらまあ、貴方って馬鹿ねえ。何で、こんな高いもの買ったのよ。それに一つだけ、ポンとくれるなんて、おかしいじゃない」と散々怪しまれるやら、馬鹿にされるやらで、とんでもない目にあったことでした。

それから、しばらく経っていますが、私と未だ話していませんが、私の女房は奇クも一緒に読んでいて、SM的なことには少々の事位では驚きません。だから、協力してはくれると思いますけど、どうにも言い出しにくいし、それに、どうするかも、まだ判っていません。

よく小説等で、花柳界で『わかめ酒』という遊びが行われていたというのを読む事がありますが、あの遊びなども、よく検討してみると、女性ホルモンが少し、お酒のアルコールに溶解抽出（アカデミックな感じがしませんか）されて、一種の女性ホルモン酒といったものが、できているのではないかと思うんです。こんな事を基礎原理として、いま、あれやこれやと、空想を楽しんでいる所です。考えが、まとまったら、女房に協力して貰おうと考えています。

『わかめ酒』とか、『臍酒』といった遊びそのものより、その〝遊び〟を通じて如何に女性ホルモンを摂取吸収できるかということに興味がありますが、そうしてことに経験を、お持ちの方が、もし居られましたら、誌上に於て御教示賜われば、これに越した幸せはありません。

（おわり）

〔伝言板〕○本誌へ寄稿された方、投稿された方、モデルに志願された方、読者通信を寄せられた方々の住所氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません。故御安心の上、通信をお寄せ下さい。尚、通信の転送や斡旋などは双方が納得されない限り原則として取扱いは致しておりません。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。電話連絡が必要な際は、当方からその旨を記してお返事申し上げます。

女 その謎の部分

前田真知子をめぐって

利根川五郎

何年まえになるか、わたしが、はじめて奇譚クラブなる雑誌を手にしたのは、辻村隆氏のカメラハント記事、佐々木真弓であった。あのときの驚きを忘れることができない。

そして、わたしをして熱狂的な読者にしてしまったのは、四十六年一月号、前田真知子の手記『白い陣痛』以来である。

前田真知子の登場は、実に新鮮であった。前田真知子が、このとき処女であったかどうかは知らない。しかし、性的に、決して熟練した女でないことは、たしかなことであった。性的に稚かったわたしを、圧倒的にひきつけたのも、そのせいかもしれない。

彼女の発表された部分をひろい、わたしの前田真知子をつくりあげ、そして、わたしが謎とおもえる処を示し、読者諸氏、S研メンバー、そして彼女をもっともよく知っている塚本鉄三氏に、その謎をあかしていただこうとするのが、駄文を草するゆえんである。

『白い陣痛』を書いたとき、前田真知子は二十二才である。しかし『白い陣痛』とは、彼女のその後の成熟の過程を、実に適確に表現してしまっている。

次の手記で、それを恥じてか、「ちょっとキザな題名」といっているが、前田真知子が奇クのプリンセスになっていくための、それは陣痛の時期であったのだ。

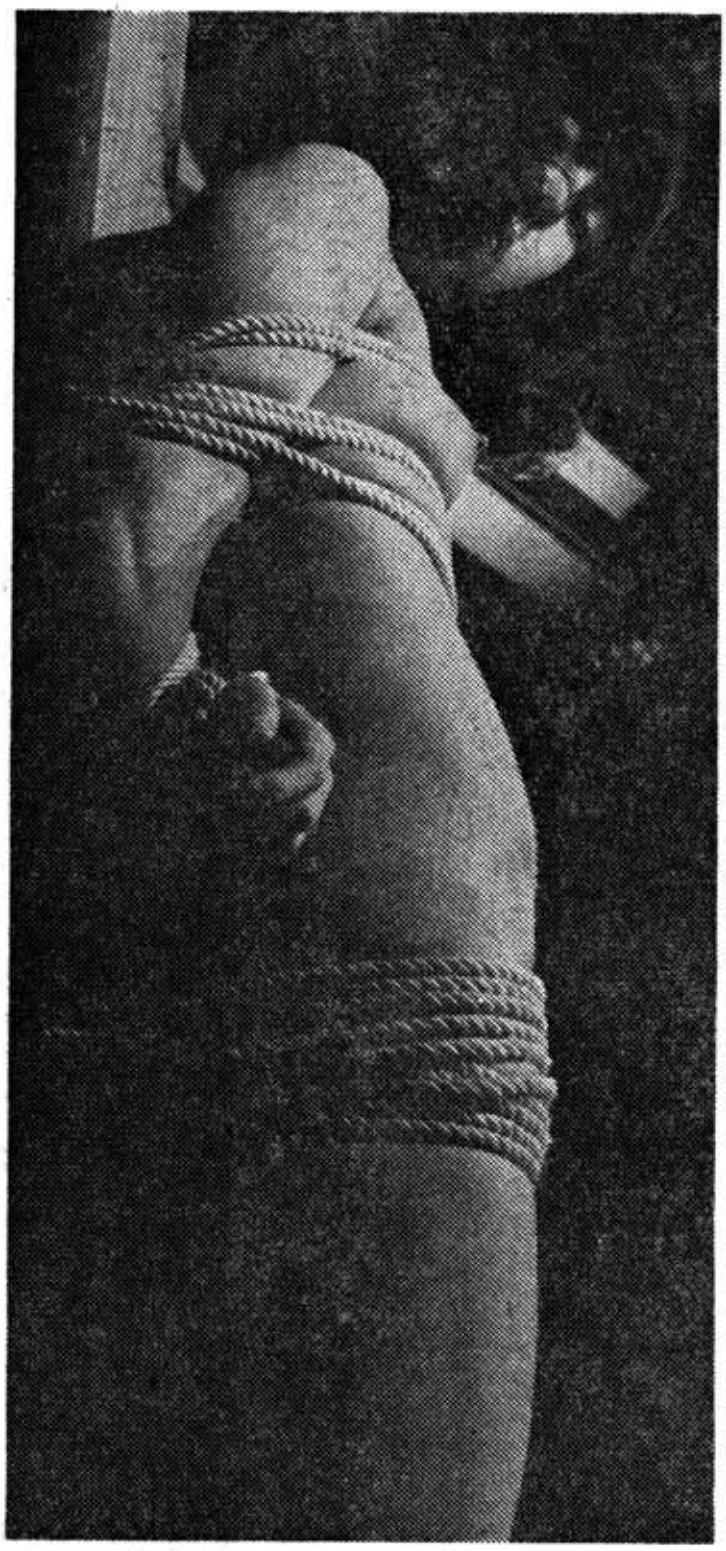
第一の陣痛は、稚い恋人の下宿で奇クをみたときにはじまった。おそらく彼女が二十才になった年に女が縛られている写真をみたのだ。このとき、彼女の稚い恋人は、こう言ったのである。

「なんだか熱心に読んでいるな。こんな雑誌に興味があるんかい?」（京都慕情）

彼が「熱心に」と感じたのも無理はない。はじめてみた奇クを彼女は、「こんな変わった雑誌って、何気なく手にした途端、背すじが、ぞくぞくとしちゃった」（ダベリ会）のであった。

もとより、そのとき「自分がモデル志願をしてみようなどとは、夢にも思っていなかった」（白い陣痛）のである。彼女のボーイフレンドと話がすすむにつれ、「君は完全なMだから、立派な緊縛モデルになることができるよ。一度、志願してみてはどうかな。君のような美人だったら、きっと珍重されるよ」（京都慕情）と言った。

彼女も稚かったのである。どういう、いきさつで、彼がそう発言したのかは知らないが彼がそう発言しなければならなかった彼のこ



ころを、彼女はつかむことができなかったのである。

わたしには、彼女のボーイフレンドと同じように気のちいさな男だから、わかる。まちがいなく、このとき、彼は前田真知子に思慕を寄せていた。彼女自身も、それを知っていたのである。したがって、彼女は、男が彼女の肩に手をかけてくれるのを待っていたのである。でなくて、どうして彼が彼の下宿で奇クなどを彼女にみせるであろうか。

彼のこころのなかでは、彼女を抱きすくめたい感情で渦まいていたのである。なのに、「彼は私の身体に指一本、触れようとしなかったのである」（京都慕情）彼女も又、彼に手をかけられれば、くたくたと彼の胸の中になだれていったのである。

前田真知子よ、そんな小心な、律気で憶病な彼を笑ってはならない。彼女は、そんな彼を称して「不思議な男である」（京都慕情）と言ってしまう。この男は、のちに触れるが藤田明子の良人へとすすんでいくのである。

さて、こんなことから、前田真知子は、その稚い恋人と、やがてこころが離れていってしまったのである。彼は、彼女への思慕を、学園斗争にむけることによって、その青春を生きていった。

一方、前田真知子は、彼に女の地獄をみせられてしまって、みせた男は、はるかに群集の中に埋没してしまった今、自分のなかに渦まいている、えたいの知れぬものを抱きかかえていかなければならなかったのである。

そうして、奇ク編集部にモデル志願の手紙をだすのである。

「私は貴誌を読みはじめてから約二年になる愛読者でございます。私は彼にすすめられて読みはじめたのでございますが、彼は実践派でないらしく、私の身体に指一本、触れることもありません。最近は殊に学内斗争のリーダーとして活躍している関係上、逢うことも間遠になっております。そんなとき、貴誌の女性モデル募集の記事を読みまして、何かしら、いたたまれぬ気持になり、思わず筆をとってしまいました」（白い陣痛）

このとき、「なぜ急にモデルになってもよいなんて手紙を出す気になったのか、自分にも、はっきり、わからなかった。ただ、自分の心の中に、わだかまっている、いろいろのしこり」（白い陣痛）にさそわれて書いてしまったのである。このこころのなかで赤熱しているものは何か。「それがなんであるか、ということを具体的に示せといっても、まだ

何の経験もない私にとっては、無理」であった。ただ、「奇クをはじめて手にしたときから、私の胸にジンと響いてくるものがあったのである」「奇クの内容に強くひかれてゆく自分を、どうすることもできなかった」（京都慕情）のである。

かくて、その日がきた。

十月五日のことである。

彼女は、新幹線で東京から大阪に立った。

これは、現実から非現実への旅立ちであった。汽車は彼女を千里の径庭を走らせる。そして、彼女はこころのなかで、古典に対する素養を、ふんだんにつかって、現実から非現実へ、飛んでいこうとするのである。彼女にとって古典は、千里の径庭を一気に飛ぶ魔法の翼であった。

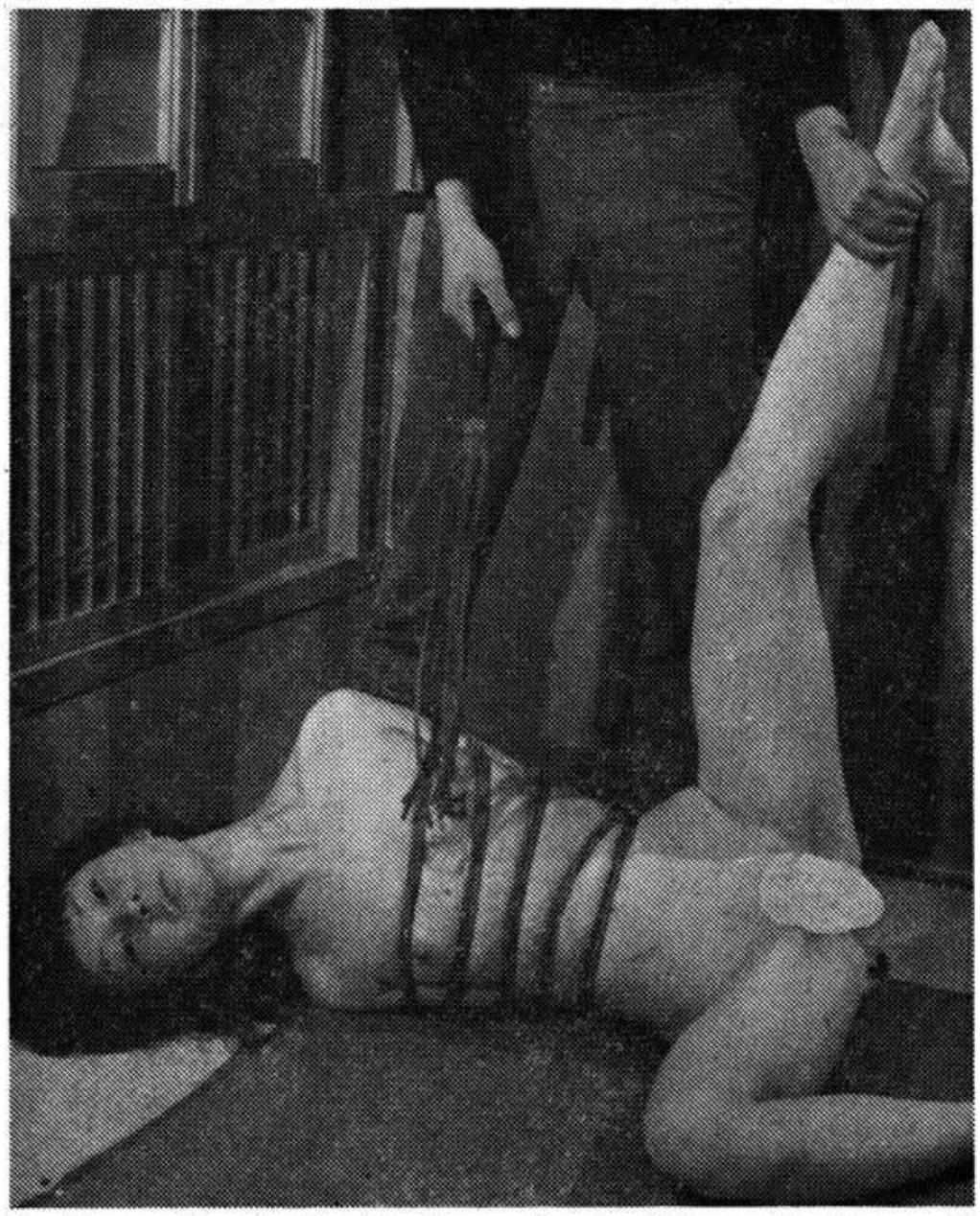
やがて、京都についた。

待っていたのは塚本鉄三氏である。

そして、モーテルにはいり、「今朝まで、東京にいたなんて、夢のような気持。今、ここにいる自分が現実で、昨日までの私の生活は厚いベールに覆んでしまった忘却の彼方の世界」という非現実の中に、はいってゆく。

ここで、彼女は、おしげもなく裸身をさらし、奇クにデビューするのである。

実は、ここで白状しなければならないのだが、洋服を着ている前田真知子は、理解できる。しかし、千里の彼方の、つまり裸身の彼女のことは、わたしには、理解不能なのである。残念である。



しかし、考えられることだけは述べておこう。彼女のことばを、ひろってみよう。

風呂からあがって、「いつ、裸にならなければいけないのかと、そのことばかり、ひやひやしていた」

「まごまごしていて、浴衣をやはり脱がしてもらった／白い肌がそのまま、あらわになって、ライトに照しだされて、いたたまれない気持／前をかくしたりはしないで、ただじっと突っ立っているばかりだった／声をだしたり、前をかくしたりするのは、自分にとっては一層、恥かしさを増すことになるのだから、じっとしているのだった／私は生まれて始めて縛られた／麻縄のトゲトゲが肌にチクチクして、いかにも自分が全裸で縛られているということを実感として私に味あわせてくれる／後手首がきっちりと縛られ、高く挙がったまま、下げることができないのが、身の置きどころのない無防備感となって、全身をぶるぶるとふる

わせる」

この日、彼女の肉体は、彼女の精神の支配下にあった。

これは、ひとつの経験であったのである。そして、新鮮な姿をみせたまま、彼女は一年数カ月に及ぶ空白期間を置いた。すなわち、彼女が、女に成熟してゆくための第二の陣痛の季節であった。

○

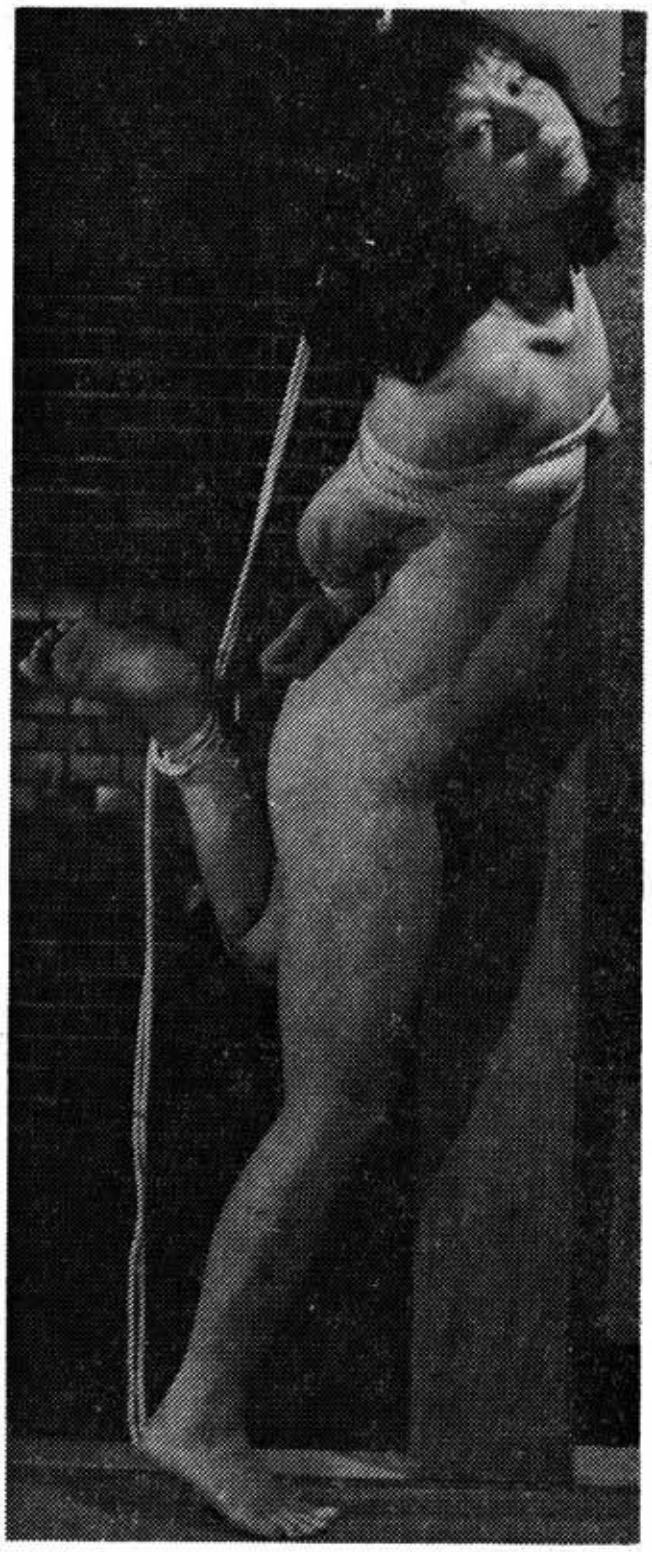
そして、およそ一年間がすぎる。

この期間、わたしは、どれほど彼女の登場を待ったことだろうか。

そのことは、四十七年三月号に、私は慕情告白『前田真知子はどこに?』という短文を書いて徴意を述べた。

「一九七一年一月号に、さっそうと登場した前田真知子は、その後まったく姿を消した。前田真知子は東京の某大学の学生だという。そのように、悧巧そうな顔。ちょうど首だけをかくす、くせのない髪。そして、おそらく服を着ていれば、あまりめだつほどでない乳房。だが、その全裸の豊かさは、男どもを悩殺するに充分である」といった書き出しだったように覚えている。

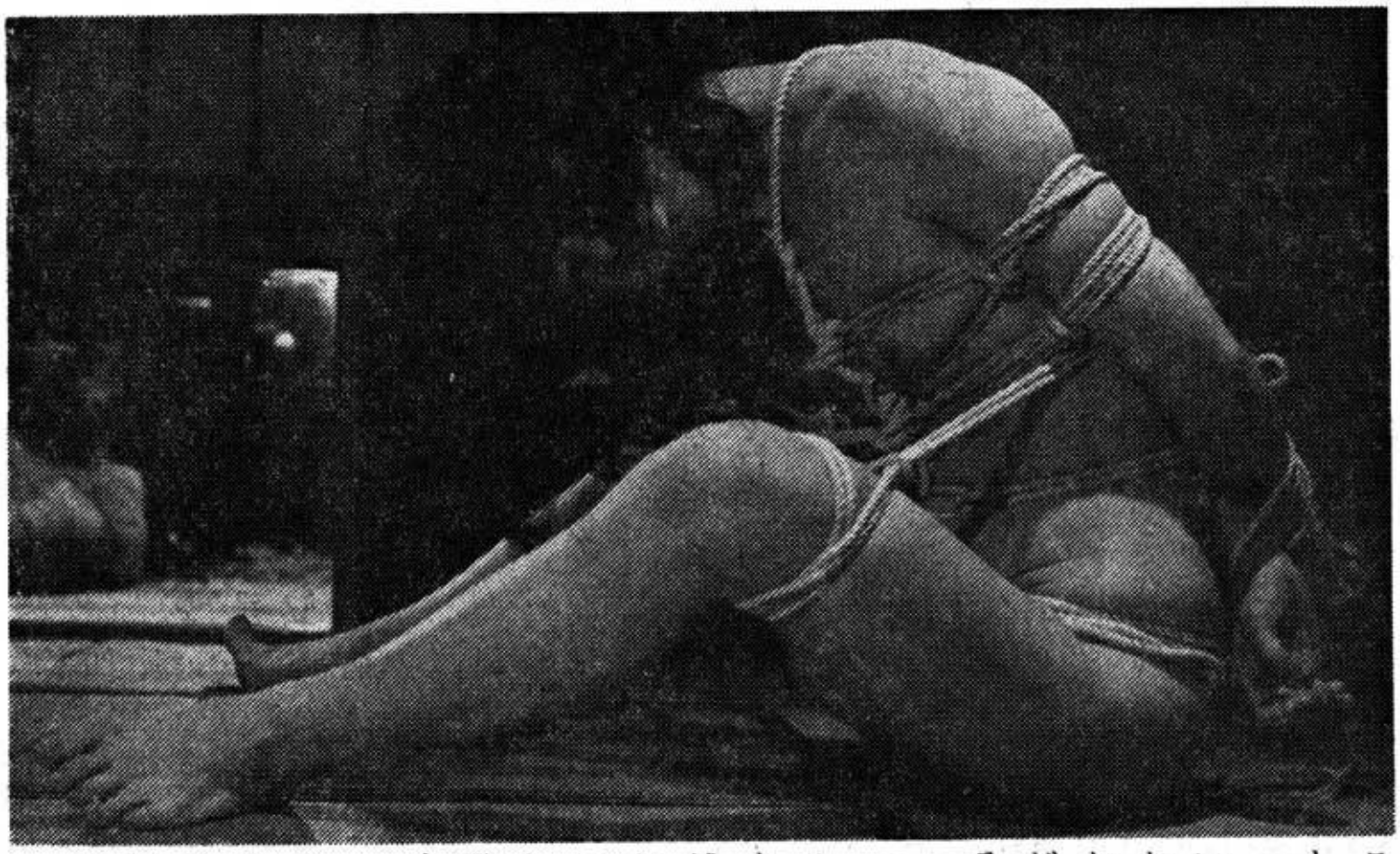
「大臀筋に支えられた実によくはった腰を、仔細に視れば、はいていたパンティのあと。パンティのゴムがつよいか、彼女の無染めの肌がつよいか、相争った跡のようである。さらに太腿の美しさは、えもいえない。なにやら植物のように健康で、それでいて掌を触れれば、その温かさは、彼女の心がそうであるように、再び離すのを惜しませるのではないだろうか。そして、われわれには見えぬ秘かな処は、どのような美しい花が咲き乱れていることだろうか。しかし、見よ。彼女の無染めの肌には、きつい、よごれた、おそらく何人もの女達の肌を知っている黒い縄が、情無用と巻いているさまを見よ。その表情は、緊縛されたからといって、そこに快感のようすがない。そこがたまらなく美しいのだ」と讃美の言葉を書いた。



四十七年四月号に、彼女は再び、その美しい裸体を、われら讃美者の前にあらわすのであった。

この間、彼女は大学を卒えて、就職した。しかし、なにより、おどろかされるのは、克明な、肉体のもたらす快感への心のひだひだを射照したことである。

一年のあいだ「私の身体の中に沈潜しているマゾの血は決して消滅してしまったのではなかったので、時折り頭を持ちあげてきては私を、いらだたせ、私の胸の中にくすぶり続け、そして不完全燃焼のおりのようなものが



この完全に育った私の女体の中に充満していたような気持であった」しかし「私は自分の被虐意識や被虐傾向について、まだまだ未発達、未熟なようにおもえて仕方がない。幼稚という領域から、まだ脱しきれない自分に、いらだちのようなものさえ、感ずるのである」

かくて再び京都に行く。

「京都を見物したいなどというのは、それは表面的な口実であって、実際は女としてのお前の性が、縛ってほしいのだろう。縛られたいと叫んでいるのだろう。それだったら、そんなテレかくしをしないで、女らしく、はっきりと縛ってほしくて関西へ旅」するのだ、と彼女は満をじして弓を放つように、京都にいく。

ここで、彼女のなかで、もやもやとあるいわ、ぶすぶすとくすぶっていた心と肉体の欲望は、彼女のことばでいうと、「私の抱いていた空想と期待に対して、一つのピリオドを打ってくれた」のであった。

すなわち、肉体に発生する快感を、しっかりと肉体にとどめたのである。

「その皮膚の痛さがジーンという弾力性の凄い快感に変ってきた」「ぐっとそり反った足の拇指から足の裏へかけてジーンと快感がつっ走り、それが踵へ移ったかと思うと、忽ち脛の筋肉へ電流のように伝った。脛からは、もう太股の裏側を通って太股のツケ根へと、快感は私の意思を無視して、伝播してしまった」

そして、「自分では予想できないような行動にでてしまった。真正面からカメラをむけられているのに、足をすぼめるどころか、両足をおもいきり左右に開いていたのである。私の裸身はクラゲのように柔らかくなり、麻縄でどのように厳しく縛られても、痛さを感ずるどころか、身体のすみずみまでもカメラに晒す喜びにうちふるえ」てしまうのであった。

そうして彼女は反問する。「私は、なんという女なのだろうか」「私は頬を真っ赤に染めながら、言いわけの言葉を必死になって探す」もとより、現実に在存した快楽に対して言いわけの言葉なぞありはしない。

すなわち、ここで前田真知子は、京都への慕情は、他ではない、自身の肉体の快楽に対

する、つよい慕情であると知ったのである。

彼女は、ここで、はっきり女体の快美を知った。快美を知った女のこころは地獄であろうか。彼女は自身で語る。「この妖しげな昂揚が、やがて発作を起こしそうな前兆が、この胸さわぎとなって、私をさいなみ始めているのです。もう一度、あのときのような私になってみたい——。そういう強烈な願望が、次第次第に、時間が経つにつれて、私の身も心も、しびれさせてしまうのです。平常は別に変わったこともない、ごくありふれた娘である私が、なぜこのように変わった想念に、さいなまれるのであろうか」

これは地獄である。地獄にいて、理性を保つ。ここに、高村浩子と前田真知子の差があり、前田真知子に多くの拍手のあつまる、ゆえんである。うちにおびただしいものをたたえて、しかもそれを堪え、日常変わらぬ生活をしうる者は、男であれ女であれ、そう多くは、いない。

心と肉体の奥深くに炎えている火焔が、火を噴くには、手つづきがいるのである。日常生活にない、虚像の世界に自身を、くりこむことによって、日常生活を健全なものに、しうるのである。彼女は、日常生活から虚像の世界へ。それは、まさに千里の径庭を、古典的事柄という魔法の翼にのって、一気にとびこえるのである。

友よ、だが、日常生活の彼女の名は、なんというか知らないけれど、日常生活の彼女にある喜怒哀楽と、前田真知子という存在しない女の肉体に現に存在する快美と、どちらが現実的な重みがあるか、友よ、君にこたえることができるだろうか。

それほどに、彼女の肉体におこる快美は、われら読者にすさまじいリアリティをもって迫るのである。

「二の腕の縄痕に想う」によって、彼女はこれらのことを、はっきりと知る。くりかえしこの告白文の中で彼女はのべる。

「今、東京のオフィスのデスクに向っている私は、結婚適令期をむかえた、一人の成熟した女性には違いないけれど、京都の街を憧れてひとりで、さまよいあるいている前田真知子という女性とは、まるで違った別人格なのだ」

「私は京都を訪れた時は、つとめて東京にいる自分とは、別人でいようと思った」

「東京の街を離れて、京都を訪れてしまうと平安時代に生きている自分になってしまうのだ」

「東京を離れて、見ず知らずの街を訪れている時こそ、真知子という一人の女性は、別人格の持主として、自由に翼を伸ばして、好きなように飛びまわることができるのだ。お伽噺の世界が、私にとっては京都の街なのだ」

「旅にでた私は、もう別人なのだ」

別人になった女の快美は、彼女自身のことばと塚本鉄三の写真によって、友よ、おのおのが、ひそかに味わうがよい。そうしてやることが彼女への賛美であり、彼女の願いなのだ。

「真知子は皆さまの目によって、自分の縛られた裸身の写真が、なめるように見つめられることを思うと、胸の中が燃えるようになってくるのを覚える」そうである。

『古都の佗びとSMの寂びとを訪ねて』になると、彼女の生長はめざましく、読者は彼女のこころに、かかわることはできない。彼女の創造したお伽噺に参加する以外に方法はないのだ。お伽噺の登場人物として。

お伽噺に参加したことのないわたしには、それ以上、前田真知子について語る筆をもたない。

——(おわり)——

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

『覗き』の美学

《続》

舟橋一郎
江戸川笑鬼・画

1、露出症の女性

事例 V

先月号に書いた、覗きのルールでは、絶対に知られてはいけない、といいましたが、中にはマニア垂涎の、本物の露出症の女性もいるようです。

例えば、深田初美さんは、四十六年一月号奇クサロンで、『私は露出症かしらと悲しくなるほど、異常な露出欲に悩むことが多い。(略)半年程前に公園のお手洗いで覗かれていることを覚った時に全身を貫くような興奮を覚え、以来、その隙間だらけの板囲いのトイレ通いをしながら、恥かしい期待を持ちました。最近では、それだけでは飽き足らないで、超ミニのスカートにノーパンでハイキングに行き、外から、まる見えの、こわれかけた汲取式の便所で、わざと覗かれ易い場所を選んで入ったりします』と告白しています。

私にも、露出症ではないか、と思われる女性に、あたったことがあります。私の場合は映画館ばかりでした。

×

その頃は娯楽と言えば映画が主で、デートのモデル・コースは映画を観て、お茶を飲むことでした。また、多くの人は、趣味を聞かれて〝映画観賞〟と応えたもので、それほど一般化し、全盛でもありました。

勿論、覗きのできる映画館は、そんな立派なところではありません。下町の場末館なのです。

戦後、雨後のタケノコのように建った映画館は、ほとんど木造モルタルのバラック同然で、しかもトイレは男女共用が多く、必ずといって良いくらい、穴が開いていました。

穴には新聞紙や、ちり紙が円めて突っ込んであり、女性が見られないために、した処置であることは一目瞭然でした。

こういう時は、隣に入っていないのを確かめてから取るのが普通です。

その時も紙が先方から差し込まれていました。隣が静かだったせいも、あったかと思い

ますが、入っていないと思って、こちらからそのつめ紙を突いてみました。つめ紙は隣室の床に落ちました。ところがどうでしょう。入っていないと思った隣室に若い女性が入っていたのです。私は驚いて飛び出そうとしました。騒がれたら一巻の終わりだからです。しかし、一向に騒ぐ様子が見られません。もう一度、覗いて見ると、向こうからも覗いているではありませんか。一瞬、目と目が合いましたが、目は女性から、そらしました。

この間は、ほんの数秒だったと思いますが非常に長く感じました。

私は、そのまま、便器に跨がり、穴に目を当てて、じっと、いつまでも見つめていました。彼女も跨がったまま、じっとしていましたが、大便をしている様子でもありません。私は頑張って、ずっと覗いていたかったのですが、あまり長くいては怪しまれると思い、その女性より早く出てしまいました。

どんな女性か、顔を見たくて廊下のベンチで待っていましたが、なかなか出てくる様子がなく、そのうち、休憩でトイレの出入りが激しく、どの女性がその人か、分からなくなってしまいました。

× ×

もう一度も同じような経験です。それも前と同じように場末の映画館でした。

映画館では休憩になる少し前に入ることにしています。その方が効率が良いからです。便器に跨がって待つ数分間は、期待で思わず身震いが出ます。いよいよ、休憩です。バタバタと、あちこちの扉が開いては閉じています。男子用小便器の前も賑わっています。私の待機している隣室にも、先刻から数人の女性が、めまぐるしく出入りし、惜し気もなく自ら開陳してくれました。

何人目かに入ったのも女性でした。するりとズロース（その頃は、まだパンティとは言ってなかった）を膝下に押し下げると、型通りに、しゃがみました。

一瞬、穴がふさがったような、気がしました。こういうことは、よくあります。紙を丸めて押し込まれるからです。心中、舌打ちしましたが、様子が少し、おかしい。よく見ると、目ではありませんか。目を離そうとしたのですが、様子が少し、おかしい。よく見ると、目ではありませんか。驚いて私の方から離そうとして止めました。近づけていれば、お互いに、はっきりしないと思ったからです。彼女との、にらみ合いは数秒、続きましたが、先方から離れました。それから、おもむろに女性の股間から、流動体が白い線となって噴き出してきました。

その間、彼女はチラチラと穴を気にしている風でした。私は、いたたまれず、先に飛び出そうとしましたが、決心がつかず、躊躇しているうちに彼女の方が早く出てしまい、一瞬、出そびれてしまいました。

出たとたん、〝ご用〟なんていうことになるかも知れない、と考えると、その後に入って来た淑女達の開陳も、上の空でした。

× ×

幸い、いずれも騒がれることなく、無事でした。あるいは、彼女達には、わからなかったのかも知れませんが、私は露出症のM女と思いたいのです。

2、放水の生態学

私の場合、映画館がさびれてからは、もっぱら、アパートのトイレを主に覗きました。アパートは、女性の年令が比較的、若いのと一カ所で何人も覗けるからです。

一般的には、誰でも同じ姿勢で、同じ動作でした。しかし良く観察すると、個人間に差があり、似て非なるものとの感を、受けました。例えば若いか年輩か、肥満か痩身か、白いか黒いか、毛が濃いか薄いかの違いだけで

笠鬼

はなく、動作にそれぞれ個性が窺えました。ただ、不思議に大部分の女性の秘匿の部分はすぐに忘れてしまいます。しかし体格等で、その勢いなどが異なることが分かりました。

×　×

E夫人は四十才前後の肥満体の上品な夫人です。ご主人は、どこかの会社の重役とかでなかなか立派な家に居住していました。

例によって掃き出し口で待っていますと、E夫人が入って来ました。

二枚重ねの大きなズロースを下げると〝よいしょ〟と小さく掛声をかけて、便器を跨ぎました。色白で、非常に薄毛です。噴出がはじまりましたが、それは噴出というより、散水と言った方が良いかも知れません。前のキンカクシではカバーしきれず、飛沫が、覗いている私の方まで飛んで来て、顔にあたりました。

そんな趣味のない私は、とても汚ならしくて、不愉快でした。

×　×

戸入ひそむ氏は立派な研究をされ、四十九年五月号で発表しています。

その中で、女性の放尿と体格の関係について、次のように言っておられます。

『一般に女性の小水は烈しいというが、やはり個人差があることは当然である。そして年令、体格に大きな関係のあることが分かる。これを結論的に言うと、〝成人女性の放尿の勢いの強さは、体格に比例し、年令に反比例する〟ということになる』

非常にうまい言い方をされています。多少の例外はあるかも知れませんが、私の経験からしても、間違いないと思っています。

多田野平助氏も、四十九年一月号の視盗録で、大変、貴重なデータを発表しています。氏の場合、女性の体型と女性器の関係ばかりでなく、ペーパーの種類、使い方にまで、わたっております。

覗きのうち、特にトイレの放尿は、ほんの一瞬の芸術？　ですから、よほど落ち着いて観察しないと、すぐに忘れてしまいます。その点、諸先輩は、やはり、たいしたものと感

心しています。

多田野氏は、『初めのうちは、ただ漠然と一点をながめているだけで、満足していましたが、そのうち、ノートをつけるようになりました』と言っており、努力の結晶が、あのように立派な成果となって、あらわれたのでしょう。

3、放水の音響学

覗きは、音を楽しむこともできます。豊川大三氏は『まことにお見事なる放水の玉音。かくも女性の烈しきものか』（四十年二月号放水鑑賞の記）と、水洗でない公衆便所のエピソードを語っておられるし、戸入ひそむ氏は、『幼少女では「シィー」と比較的、高い音。成人女性でも未婚者の場合は、これに近く、既婚女性では「シュー」となり、年をとるにつれて「シャー」「ジャー」と変わっていく。そして音の強弱は、先にのべた勢いの強弱に比例する』と、言っておられます。私も音響に興味がないわけではなかったのですが、あまりにも複雑に聞こえ、分類までは、できませんでした。

×　×

その工場は、何カ所かの工場を、まとめて大きくするため、近く解体することになっており、すでに操業は停止されていました。

用事があって、その人気のない工場へ行った帰りのことです。門の近くに管理人の社宅があり、少し離れたところに、多分、工員が使用していたのでしょうか、公衆便所位の大きさの独立したトイレがありました。

便意を催していたので、幸いとばかりに飛び込んで一人、無我の境地に浸っていると、コツコツと、ハイヒールの足音が近づいて来て、隣の便室へ入りました。

突然のことで、途惑いましたが、衣ずれの音が止んだかと思うと、それこそ烈しい玉音と共に、私の便器の下へ、一直線に白い流体が飛んできました。あまりのすさまじさに、私は息を殺していました。まさに恍惚の一瞬でした。女性の排尿が、男子のそれのように一本線で飛ぶと知ったのは、まさしく、このときでした。

私が自分の耳を疑ったのは、このすぐあとでした。その女性は、終わると、大きく「はあー」と溜息をつき、「……なんだから」と言ったのです。ささやくような発声なので、前後はよく聴き取れませんでしたが、確かにそう言ったのです。

着衣を整える音がして、すぐに出ていきました。窓から覗いてみると、二十前後の娘でした。管理人の娘らしく、外出するところのようでした。

おそらく、自分達以外に使うはずのないトイレに、まさか他人が入っているなどとは想像もしなかったのでしょう。

女性も、えげつない言葉を口にするんだ、ということが分かったのも収獲でした。これほど、えげつない言葉ではなくても、放尿後は気が緩むのか、溜息まじりに言葉を発する女性は多いようです。

あるアパートでしたが、ネグリジェの女性に、ぶつかりました。ネグリジェの下はノーパンで、しかも股間に、紙をはさんでいました。しゃがむなり、紙を取って見て「あの人ったら多いんだから……」と、言いました。放尿後、紙を当て、パタパタと出て行きました。

4、トイレ覗きの方法論

トイレを覗く方法は色々あります。私が盛んに覗いていた頃は、駅や映画館では、穴を開けるものが一番、多いようでした。堀立小屋のようなトイレのせいもありましたが、穴

の開いていないところがないくらいでした。
現在は鉄筋が多くなっており、どうなっていますやら……。裾のあいているビルディングなどのトイレでは、鏡が多く使われているようです。

福島氏はパチンコ屋、ボーリング場など、裾あきトイレで鏡を使い、しかもフィルムに納めることまで、しています。まことに感服の至りです。

私の場合、本格的？　に覗くようになってからは、アパート、ないしは、個人の家庭が主でしたから、そういう道具は一切、使いません。直視できるからです。

視姦紳士氏は、『視姦とは、視て姦すという意味であり、方法は、トイレの壁に格好の穴を開けたり、隣の個室の隙間に手鏡を適当な角度に置いて覗くのである』、と定義しながらも、『壁に穴を開ける方法は、賛同できない』と、しています。

私も裸視の方が、視野が広く、女性の動きも全体に分かり、次の行動に敏速に移れる利点があります。それに、小道具を持っていると、現場を押えられた時、「覗かない」と主張しても、どうにも逃れられなくなる危険があります。小道具を使われるマニアの方々はくれぐれも、ご用心下さい。

5、事例　VI

トイレは、このぐらいにして、次に風呂場覗きの経験にしましょう。

×

営業中の風呂屋の裏口というのは、比較的開放的です。それに暗く、従業員も外にいることは、ほとんど、ありません。物陰も多く容易に侵入できます。M湯は私の行きつけの風呂屋ですから、発見されれば一発でアウトですが、容易に侵入できました。

女湯の脱衣場の小さな庭に八つ手の木が植えられていて、葉が、こんもり繁っており、葉の陰にかくれると、安心して充分に観察できました。顔見知りばかりで、とても楽しく覗かせてもらいました。

その時の感じでは、女体というのは、一般的に、しまりがないということでした。写真で見るような、すんなりとスマートなのは先ず、いません。若いのに、腹がたるんでいたり、短足だったり、顔見知りであるだけに、落胆させられました。

×

K湯にも、脱衣場の庭に八つ手や潅木が植わっていました。近所ではないので、その点気楽でした。いつものように、潅木にかくれようとして、建物の角をまがり、濡れ縁のところへ出ると、濡れ縁の端に立って涼んでいる若い娘と、ばったり、出合ってしまいました。暗くて、わからなかったのです。まさかそんなところにお客がいるとは思ってもいなく、突然のことなので、どぎまぎしてしまいよほど逃げようかと思いましたが、その娘にとっさに目礼をすると、初めは、なじるような目つきだった娘も、従業員か家族の者とでも思ったらしく、柔らかい目つきになり、会釈を返してきました。

しかし、慌てて下腹部に当てた手拭は取りませんでした。この間、ほんの数秒間でしたが、非常に長く感じました。いま、想い出しても、汗がでてくるほど、きわどい、やりとりでした。

×　×

F家の風呂場は、台所と一緒でした。その夜、たまたま通りかかると、風呂場から水を使う音が聞こえてきます。少し離れたところにある木戸を押すと、鍵がかけてなく、すっと開きました。素早く中へ入り、近づいて窓ガラス越しに見ると、F夫人が入浴していま

した。

三十才前後の、子供も二人いる彼女は、小柄なせいか、体の均整がとれていて良い格好です。特に、胴が信じられないほど、くびれていました。体を洗ったり、湯に温まったり何度も繰り返しする間、全く私に覗かれていることに気づきませんでした。

湯から上がってからも下着を着けず、素っ裸のまま、座敷を行ったり来たり、用事をしていました。おかげで、私は明るい電灯の下で念入りに観賞させてもらいました。

突然、私の顔と、ぱったり合ってしまい、気づかれてしまいました。うかつにも、夢中になって、遮蔽物なしに窓ガラスに顔を、ぺったりつけていたのでした。私は、身をかがめ、飛ぶようにして逃げ帰って来ました。

官憲が来るかと心配でしたが、二、三日しても来ませんので、その方は安心でしたが、F夫人と逢うのが恐ろしくて、なるべく逢わないようにしていました。あるとき道で、ばったり出合ってしまい、どうにも逃げられず素知らぬ態で挨拶すると、F夫人は、いつもと変らぬ、品のよい笑顔で会釈を返し、その事には触れませんでした。ホッと、安堵すると同時に、後姿を振り返って、先日の肢体を想い起こし、淫らな空想をするのでした。本当に犯人が、分からなかったのか、分かっていて、とがめなかったのか、いまだに不明です。そのF夫人も、何処かへ行ってしまいました。

×

K子の家は、F夫人の並びです。F家と同様、内風呂です。

ある夏の夜です。K家の横を通りかかると風呂場から水音が聞こえてきます。誘われるように木戸を押すと、手応えがありません。素早く庭中に入り、先ず様子を、窺ってみます。家人はテレビを観ているらしく、まったく気が付きません。風呂場を節穴から覗くと高校二年生のK子が一人で入浴中です。薄暗くて、はっきりと見えませんが、どうやら上がるところのようです。がっかりしましたが次に誰か女性が入るかも知れない、との期待をして窺っていると、廊下へK子が出て来てぺったりと尻餅をついた格好で座り込みました。幸いにもスダレがあって室内からは暗い庭の方は見えないはずです。

そろそろと近づいて、縁の下に半身を入れるようにしました。スダレの裾が廊下から三十センチ位、上がった位置にあり、K子の膝頭が具合よく見えます。

K子は覗かれているとも知らず、胸に巻いたバスタオルを取ると、素っ裸になり、うちわをパタパタ使って涼を、とっていました。

私は度胸をきめて、K子の膝頭の、わずか十数センチのところに接近しました。胸が早鐘のように打ち、口中が、からからに乾いてつばも出ませんでした。

ピラミッド型の胸の隆起といい、腹部の円みといい、腿の肉づきといい、あまりの、なまなましい肉感に、うっとりと見とれていました。いつも見るK子は、セーラー服のためか、こんな、いい体には見えません。秘匿の場所を心ゆくまで、たっぷり覗かせてもらい更に、ナマの処女臭を充分に満喫させてもらいました。

K子も、もうそこには、いません。いまでは、どこかで、その当時の彼女の年頃の子供と平和な生活をしているかも知れません。

6、寝室覗き

覗きの最高峰は、なんといっても寝室覗きでしょう。夫婦生活の場や、恋人同志の愛情交換を覗くことぐらい楽しいことはありません。時間は長いし、種々の姿態が見られるし

また、会話や呻き、喘ぎの声等が入るので、トイレとは異なった面白さがあります。用心のために性質上、ガードがかたく、トイレや風呂場など、問題にならないくらい、むずかしいものです。したがって頻度も少なくなります。場所は、旅館、民間アパートです。

詳細については避けますが、一つだけ共通しているのは、どのカップルも、みんな正常位でした。いわゆる変形、あるいは曲取りと称されるものについては、一つもありませんでした。

考えれば、当然のことと思います。巷に氾濫している性書のようには、できないものです。

7、事例　Ⅶ

東北のA市へ所用で行った時のことです。駅近くに宿をとり、風呂、食事と済んで布団に入って寝ようとすると、隣室から男女の声が、かすかに聞こえてきます。疲労していましたが、そこは好きな道です。覗けるところはないか、と廊下へ出て物色しましたが、適当な場所がありません。度胸をきめて扉を開け、中へ侵入してしまいました。次の間つきの部屋です。手前の部屋と、男女の寝ている部屋の間は、足元が格子造りになっていてもう何の苦労もなく覗けます。用心のために布団の入れている押入れを開け、いつでも、もぐり込めるようにしておきました。

様子からすると、女は未だ処女のようでした。十八、九の店員風の、肥り肉で円顔の可愛い顔をした大柄な娘です。

男は三十才前後でしょうか、色の浅黒い、オールバックの長髪が、ポマードで光っている、いかにも貧相で下卑た工員風でした。

はじめ、娘は強行にセックスを拒否していましたが、おどしたり、すかしたりする、男の巧みなテクニックに、どうしても許さなくてはならない羽目になってしまいました。その間、約一時間かかりました。ここでは、その長い経緯は省略します。

男は、娘の浴衣を開き、胸を露出し、指で乳房を愛撫し、キッスしながら、合い間に歯の浮くような言葉で、ささやいていました。

娘は天井の一点を睨んだきりで、そんなことは上の空でした。

男は、執拗に上半身を愛撫してから、徐々に手のひらを、胸から腹部へと下げていきました。

「痛くしないでネ……」

と娘が哀願しながら、少し体を開き加減にしました。

男は、「痛くしないで……」と、しつこいぐらいに頼む娘に、「ああ、いいよ」とか、「よしよし、力を抜いて」など、なだめていました。

恐怖に震えていた娘も、案外なんでもないじゃない、とでも思ったのでしょう、全身の力を抜いたようでした。男はそのチャンスを待っていたのでした。

「痛たァ――い、いたァ――い」

突然、娘が大声をあげました。

「許してェ――ッ」

娘が泣き叫び、両手で、男の胸を刎ね退けようとしても、男は止めず、上に逃げようとする娘を、ぐっと押さえつけ、情容赦なく攻めまくりました。娘の可愛いらしい顔が、苦悶で醜く、ゆがんでいました。

短い時間だったのでしょうが、私には、とても長く感じました。悪夢を見ているような悦虐の一時でした。

8、事例　Ⅷ

A基地に近接したO家は、女性専門の下宿屋でした。T子は、そこに、下宿していまし

た。私は、ある時期、毎晩のようにT子の処へ通い、ただれたセックスに惑溺しました。

しばらくの間は分からなかったのですが、どうも隣室のO女子大生I子（名前は後日、知りました）のところにも毎晩、男が来ている様子なのです。T子も女子大生でしたが、学生のくせに不埒な、などと手前勝手な正義感を振り廻したものでした。

どんな男が通って来るのか、興味津々で、ついに、押入れの天井板の持ち上がるのを利用して、隣室の天井板に細工して覗き穴を、つくりました。

男は円顔の、生白い弱々しい感じの学生のようでしたが、あの方は顔に似ず強く、夜来た時に一回と、朝出る前に一回は必ず行いました。

I子には、まだ快感がわからないらしく、とりたてて面白いことはありませんでした。ただ、手っ取り早く手軽に実演が見られるので、しばしばT子と一緒に覗きました。

彼等のものを覗いた後のT子は、非常にハッスルし、他の女性に聞かれるのではないかと心配する程の大声をあげるのでした。

夏休みになっても、T子はアルバイトがあるといって故郷（くに）へは帰りませんでした。隣のI子も、石巻の故郷へは帰らないようです。

その年の七月三十一日は、とても暑い日でその夏の最高気温でした。

T子のところへ泊り、目覚めると隣室を覗くのが日課になっていたので、その朝も例によって覗き穴から窺ってみました。

珍しく、その朝は男がいなくて、I子一人がパンティとブラジャーだけで、布団にゴロ寝しながら週刊誌を読んでいました。

右を下にしたり、左を下にしたり、ゴロゴロ横転しながら読んでいて、奔放な姿態を惜し気もなく晒して見せるのでした。セックスは見られませんが、裸身がたっぷりと見られるのと、扮飾のない娘のプライベートな秘匿の時間が覗けるので、私はじっと眺めていました。

T子は、いつものとおり、朝食を摂るとアルバイトに行ってしまいました。私はすることがないので、じっくり落ち着いて見ることができました。

午前中いっぱい、I子は布団の上にゴロ寝していましたが、昼頃になると起き出し、ブラウスにスカートを着け、朝食兼の昼食を食べるのでした。私も一時、覗きを中断し、あまり食欲もないまま軽く昼食をしました。

昼食を終って、再び覗いてみると、女が卓袱台を片付けているところでした。食事の後片付けをしてしまうと、座机の脚元へ、アイロンの木箱を置き、座布団を二枚敷き、その上へ仰臥しました。私は「なんだ、また寝るのか」と、目を離そうとしました。なにしろ暑くて、全身から汗がふき出ていたから、もういい加減、嫌気がさしていました。

「おや」と首をひねりました。様子が変なのです。スカートの裾が捲くれ上り、その中へ右手が這入っているのです。よく見ると、その手がパンティの中にあるのです。すぐに、スカートが胸のあたりまで捲くり上げられました。手首から先は、完全にパンティの中へ入っていました。しかも一定のリズムで妖しげに、うごめいています。

オナニーだということは、すぐに分かりました。初めて見る女性のオナニーで、私は驚愕と興奮で胸が痛いくらいでした。

掌の運動の邪魔になったのでしょう、間もなくパンティを膝のあたりまで、下ろしました。股を開き加減にし、中指と薬指の二本に器用に一定のリズムをあたえ、女性自身を快擦するのでした。

中空に跳ね上げた他の指が、まるで大きな蝶のようでした。あまりにも奇妙で珍奇で淫靡な動作をするので、とても若くて妙令の女性の指とは信じられませんでした。

左手はブラジャーの上から乳房をつかみ、目は閉じたままにしていました。

果てるのに、長い時間はかかりませんでした。淫猥な指が動きを止め、しばらく湿潤の高まったであろう個所へ、あてたままにしていました。目は、天井の一点を、見つめています。

I子は指を放すと、鼻に持って行き、臭いを嗅いでいましたが、寝たままヒョイと腰を持ち上げると、器用にパンティを穿き、体を起こしました。左手を畳に置いて体を支え、腿の上へ右手を置いた放心で怠惰な姿態からは、娘というよりも娼婦を感じさせました。

肉体的疲労と、果てたあとのメランコリックな情感が、そういう姿態をとらせるのでしょう。ノーブルな顔だけに、一層、痴呆を感じさせました。

一部始終を見られたことを知ったら、この娘はどういう態度をとるかを妄想すると、私の欲情は激昂しました。

9、覗きの美学

覗きは、淫猥な情念をかき立てるだけなのでしょうか。また、女性の秘匿を知る歓びだけなのでしょうか。

一度、覗きの味を覚えると病みつきになってしまいます。このことは、先に麻薬と同じだ、といいました。志手原茂氏も四十九年二月号の『ノゾキとSMプレイ』の中で、『一度やったら病みつきになりまっせ』と笑福亭松鶴の言った体験をしたと告白しています。

ピンク映画は勿論のことですが、ポルノ写真、ポルノ映画は、すぐに飽きがきてしまいます。ポルノの解禁された北欧では、自国民は、ほとんど買わないと言われています。長谷田亀治氏によると、一時、隆盛をきわめたポルノ産業も、いまは見る影もないとのことです。

どうして、これらのものが、すぐに飽きられてしまうのでしょう。

そこには本当の姿がないからだと思慮します。淫猥さ珍奇さを強調するあまり、本当にあるべき人間性を失落しているからです。

一方、覗きにはウソがありません。人間性があります。魅力は、そこにあるのです。病みつきになるのは、そのためなのです。

私は、こういう覗きに〝美〟があると確信しています。これについて、私見を述べさせていただきます。（覗きの美学、と大層な表題を付けましたが、そのように立派な内容ではありませんので、初めにお断りいたしておきます。まあマニアの戯事（ざれごと）とお聞き下さい）

第一は瞬時の美です。覗きは（特にトイレの場合）、時間的には、ほとんど一瞬と言って良いでしょう。それは、あたかもボクシングのカウンターパンチのようであり、また花火のようでもあります。覗く者は、この一瞬の中に、すべてを吸収しようと努力し、注視し、没入します。まさに、力士の格闘のように、この一瞬に精力を傾注するのです。一度の覗きで、精神的にも肉体的にも疲労を覚えます。

一種の満足感をともなった心地良い疲労であり、器楽合奏をした後のような、さっぱりした気分でもあります。

人間が真剣に取り組む美しさであり、はかなく哀しい美しさでもあります。まさに瞬時の美とでも言ったら良いでしょうか。

第二は動作の美です。覗かれる女性についてみますと、彼女等には、誰に教わったでもない、長い間かかって独り創意、工夫して造り上げた慣行が窺えます。

肉体的構造、性行、家庭環境などから造り上げられた一連の動作であり、各人が、皆同一の処理（例えば、便器に跨ぐ、放水、紙拭きなど）の動作をするにもかかわらず、それぞれが異なり、似て非なるものがあります。

その動作には無駄なく流れる美しさがあります。大袈裟な表現ですが、芸術的とさえ思えるような行動の美があります。

第三は、欺瞞のない心情吐露の美です。トイレや寝室等、特定の囲いの場は、好むと好まざるとにかかわらず、羞恥を晒すためにある場です。それだからこそ、覗きに価値があるのですが、その場に入った覗かれる立場として、時に心女性は、秘密の保持できる場として、時に心の深奥を吐露することがあります。つい無意識にもらす吐息であり、卑猥な言葉であり、自らの醜悪な行為に対する侮蔑の言葉ですべて偽りのない、真の心が洩らされるのです。

『この観察を通して知り得た女性の姿こそ、飾らない女性本来の姿』（多田野平助氏）を見い出すことができるのです。心情吐露の美です。

最後は、覗く者と、覗かれる女性との、不思議な調和の美です。

ルールのところでも述べましたが、覗く者は、秘密裡に覗かなくてはなりません。何故なら、発覚すれば、女性の名誉や自尊心を傷つけ、マニアとしての誇りを放棄し、悪くすると官憲に捕われ、罰せられて出歯亀のレッテルを貼られ、社会的には全く抹殺されてしまうからです。ですから真剣なのです。

一方、覗かれる女性の側は、そんなことには、とんとお構いなく、安心して羞恥を、さらけ出してしまいます。しかも、巧まずしての名優の演技です。そこには緊張と放恣が渾然一体となった調和の感激があります。

『覗き』それこそは、まさに、覗く者と覗かれる者の緊迫した〝生〟の現象が燃焼純化して『美』の境地にまで昇華した一瞬だと言っても決して過言ではないでしょう。

体験手記

切腹の体験

吉矢和子

私は現在四十八才で、東京都内で主婦として平和な生活を送っております。しかし、終戦当時は現在の中国で看護助手として終戦を迎え、ずいぶん悲惨な体験を致しました。その中でも先輩の看護婦さん二人が切腹自決されたのを目のあたり見た体験が今でも悪夢のように思い出されます。

以前から本誌の切腹についての記事だけは目を通しておりましたが、自分の体験だけは思い出すのもおそろしい気分で、家族はおろか、誰にも話さずにおりましたが、近頃、千葉徳爾先生の『切腹の話』を読んで、切腹という自殺形式にまつわる深い背景が理解できると感じ、はじめて筆をとりました。

同時に私の体験も何かの形でお知らせすべきであると感じ、はじめて筆をとりました。

私の体験談に入る前に「切腹の話」についてですと、例えば四八頁に女性二人の切腹例の経過が、かなり詳しく記録してあり、私も昔を思い出して、ぞっとするような感じで読みましたが、服装については単に「裸で切腹する」とだけ記載されていてそれ以上、細かい描写がないのは残念でした。

同じく裸といっても、両肌脱いで裸になるのか、ズロースとか腰巻だけになるのか、では、かなり状況が違い、女性にとっては大問題です。同じように二〇六頁の四名の女性の切腹例でも、前の人が、かき切った切口に腰巻の紐が食い込んで苦しんだのを見て、自分も腰巻一つになり、臍の下、二寸位を切ったとありますが、現に前の人が腰巻の紐がじゃまになったのに、また腰巻姿で切腹を試みるのもおかしいし、臍の下、二寸の高さを切るのには、小さな日本人女性なら生え際位まで腰巻を押し下げることになり、事実上、下着は着ていないも同然だと思います。恐らく腰巻の紐をゆるめて下腹を全部、露わしたのではないかと感じました。そうした小さな事実の中に、絶対絶命の女の気持が現われるのではないかと思います。

もう一つ、ぜひとも申し上げたいのは、五二頁を中心に引用された田谷敬生氏のことです。ここでは全く謎の人として、あつかわれていますが、私はそれは全く当然のことと思います。『奇ク』の記事の中で私が最も共感を覚えたのは田谷氏の記事で、恐らくご自身にも何かの体験がなければ、あのような記事は書けるものではありません。

いわゆる切腹願望とはちがい、実際の体験は地獄絵のようなもので、体験を提示する自

身を明らかにするのは、とてもいやなものでしょう。私にしても、自分自身を明らかにする気持には、とてもなれません。そのような心理状態は読者の方々も、ぜひ理解していただきたいと思います。私の体験談にしても、場所、切腹者の履歴などは残念ながら公開できません。フィクションだという方があればそれも止むを得ないことだと考えています。切腹の前後の肉体的、環境条件などは、なるべく詳しく、ありのままにお伝えします。

切腹の前まで

昭和二〇年七月頃には、私たちの間にも日本の敗戦の予想が、ささやかれており、そうなったら日本人、殊に女性はどうなるのかという不安が一様に胸の中に満ちていたようです。何とでもして逃げようとする人、掌を返すように現地人に取り入って何とか生きのびようとする人、とても生きてはいられないと覚悟して平静な人など、いろいろでした。

私の仲よしのAさんとBさん（共に当時、満二二才）は、もちろん最後の組だったようです。Aさんは鹿児島県の出身で、郷里には身よりとしては叔母さん夫婦しか、残っていない孤独な境遇であり、Bさんは岡山県の出身で、郷里に両親が居られましたが、お母さんは継母で折合いが悪く、ほとんど音信不通で、事実上、帰国の希望は全くなかったようです。

二人とも看護婦の免許をもっていました。私は東北の某県の出身ですが、小学校を卒業すると、すぐ両親と中国に渡り、その後、両親が相次いで死去してしまい、近隣の方々のお世話で、やっと病院に勤務していました。三人とも不幸な運命のため、何につけても打ち明けあって暮していたのです。

AさんもBさんも、あまり多弁ではありませんが、地味ながら明るい性格で、不幸にもめげず明るく暮していました。Aさんは身長一六〇㎝、体重五三㎏位と、当時では大柄でかなり太ったタイプ。Bさんは一五五㎝位ですが、同じ位、太っていました。私だけは身長はBさんと同じなのに体重は四四㎏で、ずいぶん、やせていました。

自決の話が、はじめて出ましたのは七月末の夜だったと思います。Aさんが急に私に、「日本が敗けたらどうする?」と訊ねますので私は「何とか苦労しても日本に帰りたい」と答えました。郷里には親切な伯母がいたからです。それに対してBさんは、すぐに「私

は自決するわ」と実に、あっさりと答えました。Aさんは私に「あんたは、どんなに苦労しても生き抜いた方がいいわ。私とBさんが死んだら、どうにかして逃げのびなさい」と初めて自決の意志を、はっきり言いました。

私は「私たちが戦争を仕掛けたわけでもなし、自殺することはないと思う。何とか皆で逃げられるだけ逃げて、駄目だったら一しょに自決しましょう」と説得してみましたが、二人とも全く生きのびる意志はないようでした。現在では考えられないことですが、当時は生きることがよいのか、死ぬほうがかえって楽なのか、誰にもわからない時で、私も二人に、絶対に死んではいけないといい切る自信もないほど不安な情勢だったのです。しかし、私は二人に同調して自決しようとは思いませんでしたし、二人も私を卑怯だという感じは、全く持っていなかったと信じます。

それから数日、経って（多分、自決の一週間位、前）また三人が集まっていた時、始めてAさんは切腹したいと言いだしました。Bさんは、これにも、かんたんに同調し、ただ方法が分からないから、教えてくれといいました。私は、あまり意外なことでもあり、切腹といえば芝居で見ている程度で、男がするものとばかり思っていましたし、当時は青酸カリなどは何とか入手できましたので、何もそんな苦しい方法によらなくても、と話しましたが、二人とも始めから自決、すなわち切腹と考えていたかのように、全く私の意見には耳を傾けませんでした。

Aさんの曽祖母は西南の役の折、戦場に近く、賊軍の人が怪我をして切腹するのを実際に見て、その死体を葬ったそうで、Aさんはその体験を伝え聞いていたようです。Aさんがいうには、衣服を着けていては十分、腹は切れないから、両腕と腹は十分、露出させるよう、恥かしがらずに裸で切腹する、上腹部を切るのは、とても苦しいそうだから、下腹の一番、ふくれている部分を十分、深く切って、はらわたを出す、できれば、みずおちをえぐって十文字に切れば、早く死ねる、ということです。Aさんは刃渡り七寸位、Bさんは、もう少し短い短刀をもっていました。場所は宿舎に近い、別の建物の一室で、なおAさんは私に、二人が絶命したら遺髪と短刀をもって、何とか日本まで帰ってくれと申しました。私は、あまりにも、すさまじい話の内容に、ほとんど放心の態で、半ば夢のように二人の話を聞くばかりでした。

二人はズロースだけの裸になって正座してみましたが、二人とも、かなり太って下腹が円くふくれているため、ズロースを押し下げると、下腹が幾重にも、くびれて、下腹に力を入れても、とても刀を突っ立てられそうにもありません。結局、Aさんは壁にもたれ、両足を開いて踏ん張り、上体を、わずか前傾させた姿勢で、立ち腹を切ろうと主張し、Bさんも、すぐ同意しました。後から思えば、ぞっとするような内容ですが、二人とも笑いを交え、まるで冒険の計画でもするような、ふんい気でした。

切腹の経過　八月上旬の終わりの某日、遂に切腹の日が来ました。二人は少しずつ、髪を切って束ねて私に渡し、Bさんは毛深いので腋毛を剃り、二人とも念入りに身体を清めました。Aさんは私に、二人が絶命したら病院に戻らず、そのまま脱走して、懇意な中国人を訪ね、しばらく潜伏するようにいいました。それで二人は夕食はとらず、私は軽く食事をし、目立たぬよう身の回りの持物だけを持って約束の場所へ三人が、ばらばらに集まりました。

約束の場所は煉瓦造りの倉庫の一区画で、厚い壁で仕切られ、丈夫な木の戸が付いてい

て、小さな裸電球がついていました。二人は着くと、すぐ服を脱いで短い白木綿の腰巻一つになり、向かい合って正座し、前に短刀を左脇に木綿の手拭を置きました。私は血が飛ぶからといわれて、二人の中央から五m位、離れて座りました。

二人は、さすがに緊張で真っ青になり、額にも胸にも、汗の露が浮かんでいます。Aさんは少しふるえ声で、とぎれ勝ちに「私が腹を切って、はらわたが、あふれ出して倒れたら、すぐBさんが切腹して下さい。一文字に切っただけでは、なかなか死ねないから、十文字に切らないつもりなら、すぐ咽喉へ突き刺すようにしなさい。二人とも絶命したら、あなたは短刀をもって、すぐ前に言ったように逃げて下さい。それから、私がもし、やり損っても自分で始末するから、苦しがっても手出しをしないでね」というと、前の短刀を取り、脇の手拭を切先一〇cm位を残して固く巻きつけると、それを口にくわえ、立ち上がると腰巻をさっと、といて全裸になり、前にやったように後の壁にもたれ、脚をかなり開き、左手で柄を下から受けるように、右手は手拭を巻いた切っ先に近い端を、上から抑えるように握り、丁度、臍と恥丘の真ん中位の高さで、左脇壺に軽く切っ先を当て、目を閉じて、じっと呼吸を整えるようでした。

動悸が激しいらしく、大きな乳房がブルッブルッと動くのが、はっきり分かります。Bさんのほうは顔も胸も全く土色になっていましたが、あえぐように肩で息をしながら、じっと見つめていました。

Aさんは、かっと目を見開くと、左脇壺をのぞき込むようにして、下腹にぐっと力を入れ、腹が円くなるほど、ふくらませると、両手を真っ直に前に伸ばしてエイッと低く気合をかけつつ、ぷすっと三、四cmの深さまで突き立てると、すぐ左手で、ぐーっと刀を刃の見える部分、全部まで押し入れました。

そして、今度は左手を右手の、すぐそばへ持ちかえると、ぎりぎりと右へ引き廻して行きます。刀が右へ引っ張られると、下腹の皮が、ぐっと右へ引っ張られるようになり、それから赤黒い、太い線になって、ざくりと切れて行きます。ゆっくりでしたが、ほとんどよどみなく、右脇壺まで二〇cm余り位も引き廻すと、真っ青な顔をBさんに向けて「うまく……切れたわ」と、つぶやくように、あえぎながらも、はっきり言いました。

Bさんが「しっかりして」と、さけびますと、大きく、うなずいて、ぐっと刀を引き抜きました。そうしますと、それまで刀で引っ張られていて、閉じていたため、血も糸のように流れていた傷口が、ぱくっと大きく開き下の方がたるんで、あえぐたびに真っ赤な大網膜と橙色のはらわたが、だらだらと、たれ下がり、同時に血が、どっとふき出して両足に流れ、ポタポタ滴り落ち始めました。

暑い空気の中に、何ともいえない生臭い臭気が立ち込める中で、Aさんは全身を細かく震わせながら、それでも、まだかなり、しっかりした手つきで、もう一度、両手を延ばしみぞおちの少し下、手許が狂ったのか、少し右の方へ、ぐさっと七、八cm突っ込むと、右の平手でウームとうめきながら、真っ直にあふれ出した、はらわたのところまで切り下げました。

横一文字の切口よりも一段と、はげしく血がふき出し、腹も足も血まみれで、下の床も全く血の海のようになりました。ここでAさんは全く力つきたらしく、がたっと刀を下に落とすと、膝を折り、がくんと下に尻餅をつく形で腰をおとし、ごろっと横に倒れると、血まみれの両手を上にあげ、虚空をつかむようにして、ひくひくと、けいれんし始めまし

た。私は思わず「Aさんッ」と叫んで、かけよって見ましたが、もう意識はないらしく、瞳も散大しかけているようでした。

Bさんは、Aさんが切腹を終わったので、かえって落ち着きを取り戻したらしく、血色も少し元に戻り、呼吸も平静になって、私にほほえみかけると「Aさんも行ったようね。それじゃ私も失礼するわ。貴女もどうぞ、どんなに苦しくても日本に帰ってね」と静かに話しかけました。私も少し落ち着いて「それではBさんも立派に、お腹を切って下さい」と申しますと、Bさんは「Aさんには負けないわ」と再び笑いました。

Aさんと全く同じように短刀を手拭で巻くと、Bさんも腰巻をとって全裸になり、なおひくひくと動いている血まみれのAさんの死体を見下ろすようにして、立ち腹に構えました。Aさんは色白で体毛が少ないのですが、Bさんは少し黒く、かなり毛深くて、腋毛は剃っていましたが、密生した部分が対照的でした。

Bさんは目を閉じたりせず、割合、平静に下腹をみつめながら、Aさんと同じ位、下腹の中央の高さで左脇壺に切っ先をあてがうとそのまま下腹にぐっと力を入れ、左手でぐっと刀を押しながら、右手で切っ先を切り込むようにして一寸位、ぷっうと突き立てると、両手をそろえて、さらにぐーっと一〇cm余りも押し込みました。そして歯を、くいしばって、Aさんと同じように、ぎりぎりと、ゆっくり右脇壺まで引き廻しました。

ここでBさんは急に左手を刀から離して、臍の真下あたりで血がトロトロ流れ出している傷口を上下一しょに、ぐっとつかむようにして、Aさんと同じように、右手で刀を引き抜くと、次に傷を押さえ、右手で刀を引き抜くと、次に傷を押さえていた左手を離し、くわっと開いた切口へその手をぐっと押し込み、血のしたたる、はらわたを、ずるずると引き出しました。この時は、よほど苦しかったらしく、口を開いて舌を出し、げえっげえっと二度ほど呕吐のような、しぐさをし、だらだらと唾液のようなものを吐きましたが、それでもなお一度、外に出した血まみれの左手を、またもう一度あふれ出すはらわたの間から腹中に押込んでかきまわすようにしました。

はらわたは完全に下腹を覆って股の間までぶら下がり、血がだらだらと床にこぼれています。私は声も出ずに息を呑んでふるえていますと、Bさんは血走った眼で私の方を見るとあえぎながら「では……さよう……なら」とぎれがちに、しかしはっきりいうと、明らかにがくがく震える血まみれの左手で大きな左の乳房を下から押上げるようにして、右手の刀の切先を懸命に乳房の下に押しつけ、左手を右手に添えるとぷつりと少し突立てたようでしたが、そのまま身体を曲げずにドーンと木を倒すように前に倒れました。刀は乳房の下へ深く突刺さり一瞬ばたばたとはげしくもがくと、すぐぐたりと静かになってしまいました。

この時、私は急に一人で生きていることに何ともいえない恐怖を感じました。後から思い出してもどうにも理解できないのですが、夢遊病者のように夢中で洋服を脱ぎ下着をとって全裸になると、まだ時々ひくひくと動いているAさんの脇に落ちた短刀を拾い、血に染まった手拭で巻かれたのを、そのまま持つと、二人と同じように立ち腹の姿勢で眼をつむって夢中で左脇腹へぐさっと力一杯突刺しました。

不思議に痛いという感じは全くなく、全身にぞっとするような悪寒を感じて眼を開けると、刀は脇のちょっと下で左脇腹にかなり深く（後から聞くと七～八cm位）刺っているのがはっきりわかりました。早く引廻さなけれ

ば、と思った時、急に胸が苦しくはげしい悪心を感じ眼の前が真暗になって何もわからなくなってしまいました。

しばらくして、私がたずねるはずだった中国人がかけつけてきて、私だけは助けられました。刀は完全に腹中まで突通っていたようですが、まだ引廻さなかったのと、運よく感染しなかったため、傷口の消毒だけで驚くほど早く治り、三㎝巾ほどのひきつりのような傷跡だけ残っています。それから日本に帰るまでの経過は事情があってお話できません。よく切腹にはためらい傷があり、ないなどというのはうそだなどという意見がありますが、二人については全く突き損じはありませんでした。よほど覚悟したものであり、また二人の間に激しい対抗意識もあったと思います。しかし、私の場合も、夢中で突立てたのがうまく刺さっているので、逆に正常な意識の下での切腹は大変難しいものだということのようです。

二人がためらわず全裸になったのは相談してのことかどうかわかりません。何も丸裸にならなくてもと後から思いましたが、結果としては苦悶すれば腰巻位は容易にめくれてしまいますので、少しでも身軽なほうがよかったのかもしれません。ただAさんは恥毛が非常にうすく、われ目がはっきり見える位で、裸体を人に見られるのを嫌っていただけに誠に意外でした。

Bさんがはじめから切腹するつもりだったかどうかも未だに謎です。しかし、Aさんの切腹ではらわたが自然にはみ出すのを見ていながら、わざわざ傷口を押えてから手を突込んではらわたを引きずり出すというすさまじい切腹を敢行したことから、切腹の意識はAさん以上だったかも知れませんし、逆にAさんとの対抗意識から、Aさんのしなかったことをしたとも考えられ、内容は今でもわからずにいます。

私があれほど生きると言い続けながら、夢中で刀を腹に突立ててしまったのも不思議です。真直に前に倒れていれば刀は串刺しの形になりとても助からなかったでしょう。今でも運命の不思議さを痛感しています。（完）

新発足　懸賞〈告白、手記、体験〉原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	弐万円
佳作	一篇につき	壱万円
可作	一篇につき	五千円

☆規　定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものが大切だと思いますから、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

〈連載〉Mグループ〔空想創作集団〕作品

女の虜囚

(12)

〈ある湯治客の話より〉

佐治麻造

その年も暮れ、正月がやって来た。社会から隔絶された受刑者にとっては、暮れも正月もなかった。だが、看守達の話を聞いて、もう正月か、と考えるだけなのだ。一月の半ばから二月の初めにかけてが最も寒い時節で、如何な洒落者でもワイシャツの下にシャツを着る。その冬の、さ中に素っ裸のままの日夜は、骨身に泌みた。鋼鉄の首環も切なかったが、締め上げられている鎖褌の冷たさは、堪え難い程だ。

「さあ、帰房の時間ね。お前達、今日は裁判所の床を一日中、磨かされてたそうね」

その夜の担当は夜勤に出勤して来た水戸婦人看守だった。四十五号囚が差し出す手錠を

「綺麗に磨いてくれたのね」

と受け取り、環を閉じてジ、ジ、ジと錠を鳴らし、カチャンと合わせて革サックに納める。そして二名の囚人を眼顔で指図し、心得た囚人達は体を前後に回し、四ツ這って戒具の検査を受けた。慈悲はあるが職務には忠実な水戸婦人看守は、四十五号囚にだけ装着されている錠は、特に入念に調べる。

「お前、もう一カ月半も、外されていないのね。苦しい？　もう少し辛抱おし。面会も、とうとう取り消されて、可哀想ねえ。私からも部長さんに、お願いしたげるから、反則するんじゃないのよ。いい？」

「ハ、ハイ」

やさしい言葉を掛けられて、男囚の両目に涙が溢れた。未だ自由を許されている両手の拳で、男囚は目を押し拭った。厳しくいえばそんな振る舞いも反則で、意地悪い看守にかかると両手の甲に鞭を、したたか喰ってしまう所だが、彼女は、もちろん、見逃してくれる。並んでいる女囚十四号が、何だか、ふくれ面をして拗ねた気配を示し、身を屈めてやけくそのような音を立てて自分の両手に手錠を掛けた。女囚の方をキッと見た水戸婦人看守が、

「何故、黙って嵌めるの？　誰が許して？」

と叱りつけた。女囚の若い娘は複雑な感情を整理しかねて、今にも泣き出しそうな顔を

したが、やっと、
「すみません」
と、かすれた声で詫びた。女囚を見すえていた婦人看守の瞳が、看守詰所の前の廊下の電灯にキラリと輝いて、再び男囚の方に帰って来て、顎が、しゃくられた。
「ハイ、嵌めさせて頂きます」
と男囚も、自らの両手首に股手錠をかけて目を伏せた。
「今が一番、寒い頃ね。先刻、見たら十四度だったわ。夜中には十度を少し切るかも知れないわね。ま、ここ五、六日したら暖かくなる一方よ」
婦人看守は、囚人達の股手錠に目を注ぎながら、そう言い、そしてポケットから鍵束を取り出した。第一種手錠には、環がそれ以上には締まらないようにするためのストップ装置がある。奴隷用に市販されている物には、ネジやツマミを回わしてストップを利かせ得る式の物があるが、警官や刑務官や奴隷管理関係職員等が扱う手錠のストップ装置は鍵がなければ利かない。大抵は鍵を一方に回わせば外れ、他方向に回わせばストップが利く構造だ。第一種足錠は、懲罰の目的のための場合以外は、ストップ状態にしておく事が規程されている。それ故、第一種足錠のストップ装置はツマミを回わせば利くし、鍵はそのツマミの作用を消すために使用される。しかし第一種手錠の方は、規程によれば『ストップ状態になしおくことを得』というのだ。だから殆どの場合、ストップは利かせて貰えないで、締まり放題にされてしまう。水戸婦人看守が、鍵束をチャラチャラいわせて鍵の一つを指先で選び出したのを盗み見て、囚人達の顔に喜色が浮かんだ。慈悲深い彼女は、二度に一度は房内股手錠にストップを利かしてくれるのだ。諦め、そして馴れているとはいうものの、眠っている間に、どうしても両腿で押えつけてしまい、指が痺れて手首が千切れそうに痛む朝も多い。
「寒いのに、冷たいだろ。ストップ、かけといたげるわね」
黒髪の匂いが男囚の鼻に漂い、身を屈めた婦人看守の手で鍵が差し込まれて回された。もう締まりはしないと安心した男囚は、少し膝を伸ばし腿を閉じた。腿の内側に挟み込んだ手錠がヒャリと冷たく硬い。先刻、お叱り

イメージギャラリー『清拭の賜物』岡　たかし

を受けた女囚十四号が、哀願の眼差しを上目使いに婦人看守を仰いで、股手錠を少し動かして、お慈悲を乞うた。

「さっきみたいな態度は、これからは、しないね？」

「悪うございました。お赦し下さいまし」

女囚は、一センチばかり伸びた頭髪を虎刈りにされた頭を精一杯に垂れ、そして婦人看守の指先の鍵を見つめて哀れっぽい声を出した。婦人看守の手が手錠の鍵穴に伸びる。

「ありがとうございます。助かります」

女囚は嬉しそうに言って腿の間に手錠を挟んで、少し体を伸ばしてホッと溜息を洩らした。独房の床に正坐した四十五号は、鉄格子扉に施錠しながら見下ろす水戸婦人看守を仰いで思わず額を床にすりつけた。頭上で重々しく閉じられる鉄扉の音が響く。苛酷な規則に縛り上げられ、懲罰を恐れて戦々兢々と囚われの日夜を過ごす、虐げられた受刑者の身にとっては、身に泌みて本当に嬉しく有難い彼女の慈悲であった。

その夜は、ことのほか、冷え込んで来た。手足を縮め、体を丸くして横になっているとコンクリートの硬い床が容赦なく体温を奪って行き、歯の根が絶え間もなくガチガチ鳴った。とても横にはなっていられなくて、囚人は身を起して坐った。しばらくは尻を床につけていたが、股鎖と錠箱の痛さに堪えかね、両手のおき場に困って正坐に直す。足錠の痛みに、今度は足首を立ててホッと、息を吐いた。何としても寒い。電灯に照らされた独房の内部は、コンクリートが寒々と灰色に取り囲んで、見回わした所で糸の一本すら、落ちてはいない。いくら寒くとも、このような姿勢を就寝時間中にとっているのは、反則なのだ。発見されれば懲罰は免れない。恐らく冷水の中へ漬けられるだろう。囚人は鉄扉の向うに耳を澄ませつつ、娑婆でのことを切なく想った。一年の中で使う日が数える程しかないのに、贅沢な赤外線放射器を備えている兄夫妻の邸宅の光景が目の前に、ちらついた。今頃、嫂は軽やかな衣裳をまとって赤外線の仄かな温もりを全身に浴び居間のソファに沈んで、テレビでも眺めているに、違いなかった。破れてボロになったシャツの一枚でいいから身に着けたい。いや、体中にまとわされている、冷たい鎖錠からだけでも逃れたかった。暑いのも苦しいものだが、寒さは、みじめな思いを、より激しく募らせる。ガタガタ震えながら咽喉の奥で忍び泣いた囚人は鉄扉の外の靴音を聞いた。ビクッとして、あわてた囚人は床に横倒れに身を縮め、打ちつけた肩の痛みに呻いた。監視孔がカタリと開いて、水戸婦人看守の黒い瞳が囚人を見下ろす。

「ちゃんと寝ていなかったのね」

彼女の白い額が制帽の下でひそめられた。

「寒いのね。無理ないわ、九度に下ってしまったもの。こんなに冷えるのは珍しいわ。北海道並みの寒さね」

叱りつけられるのを覚悟していた囚人は床に頬を押し当てたまま、涙ぐんで彼女を見上げた。

「でも、規則は規則よ。ちゃんと寝てないと駄目よ。今度、見つけたら懲罰よ」

水戸婦人看守は、キッとした態度と声音で きめ付けた。

「ハ、ハイ」

「もっと寒い所で、そうしてる囚人達もあるのよ。少しの間なんだから、辛抱おし」

監視孔がガタンと閉まって彼女の靴音がコツコツと遠去かって行った。

寒さに震えた二週間ばかりが過ぎ、日一日と暖かくなって行った。殆ど二カ月ぶりで錠

を外された四十五号囚は監視台の下で器具をかぶせられ、股手錠の姿勢で立ったまま全身を硬直させて、おののいた。

「どう？　異状は感じなくて？」

水戸婦人看守が、ゆっくりと器具を取り除き、状態を注意深く観察しながら訊ねた。

「おかしかったら医務室へ、連れてったげるわ。私にはよく分からないことなんだもの」

彼女は事務的な冷静さを装いながらも微かに頬を染めるのだった。

「ハイ、別に……ありがとうございました」

「そう。楽になったらしいわね」

水戸婦人看守は特に鎖褌を外してシャワーを浴びさせてくれた。そのような有様を、少し離れた床にうずくまって鎖を磨く女囚十四号が、妙に悲しげな眼つきで、ちらりちらりと眺めていた。

男囚には再び鎖褌が締め上げられ、自分で洗わされた錠が装着される。村田婦人看守が足早に現われて

「あーら、もう済んだの？」

例のガラガラ声で残念そうに言った。

「ええ」

装着したばかりの錠を入念に調べながら水戸婦人看守は、何だか素っ気なく返事して手を洗った。

「錠の痕、どうなってたの？　凄かったでしょ？」

「別に」

村田婦人看守は鉾先を男囚に向けて

「四十五号。お前、有難くお思いよ。この水戸さんが部長さんに頼んでくれたのよ。そうでなきゃ、もう一カ月は外して貰えなかった所だわ」

「ハ、ハイ」

「けど、男囚って本当に汚らわしくてさ、手数が掛かるわね」

「だから、こんな物、嵌めなきゃいいのよ。男囚と女囚は区別して、男囚は男の人が扱えばいいのだわ」

水戸婦人看守は吐き捨てるように呟いた。

「フフフ、そんなこと言ったって無理よ。刑務官は女性の方が、うんと多いんだし、囚人は男の方が多いんだもの。けど水戸さんて情深いわねえ。面会禁止の方はどうなのさ？」

四十五号囚の目に、縋りつくような哀願の色が浮び、水戸婦人看守の頬に困惑のかげが走った。

「部長さん、ウンと言いそうもないわ」

「そう。じゃ今月も取り消しね。可哀想に」

囚人の肩がガックリと落ち、鼻がすすられた。

「さ、アイロンでもかけさせるわ。十四号もそれが済んだら来るんだよ」

水戸婦人看守は努めて無表情を装おって男囚を小突いて引き立てるのだった。看守達の制服の手入れは既に何回もやらされて、四十五号は男でも馴れたものだ。看守詰所の隣のロッカー室で、女性の香りのこもったスカートや上衣の汚れを拭き取り、次々とアイロンをかけていると、十四号もやがてやって来て一緒にやり初めた。

「とてもいい香水、使ってるわねえ」

女囚の娘は嵯峨婦人看守の上衣に顔を寄せながら呟いて、悲しそうな表情を示した。叶わぬ事と諦めてはいるものの、女性用の衣服を眼前にし手に触れると、やはり自分の境涯が情けなくなるのだ。女囚は自分の腰にまとった鎖褌を切なげに撫でて、いじくり回し、長い溜息を吐いた。

「私、もうじき、再審の決定言い渡しがあるのよ」

女囚はポツリと呟いて彼の顔を、ちらりと見た。数カ月の間、苦しみを共にして来たこの女囚に対する、いとおしさが不思議な位に

柔らかな情感と共に、こみ上げて来るのを抑えかねて、彼はやにわに彼女の首を抱き寄せた。女囚は弱々しく、あらがったが、すぐに瞼を閉じた。自然のままの唇が、ふっくらと微かに開いて震え、そして鼻環と鼻環が音を立てた。

「駄目、駄目よ。こんな所を見つかったら」

女囚は彼の体から逃れようと、もがく。腰のあたりの鎖がすれ合って鳴り、足の間にぶら下った二人の手錠が揺れて触れ合った。体を離した女囚は唾を呑み込み呑み込み、息を弾ませて喘いだ。

「駄目よ。あんた、奥さんに面会したくて死ぬ程の気持なんでしょ。私には、あのひと、一度も面会に来てくれないのよ。あんなに、あんなに愛し合ってたのに。両親や法理士なんかに、いくら会ったって仕方ないわ」

女囚は、鼻をすすって涙ぐんだ。

「私、もうじき、監獄へ送られるわ。そしたら、あの女の看守さんに、やさしくして貰うといいわ。あんたなんか、嫌いよ。先刻のざまは何さ」

女囚は拗ねて、やけくそのようにアイロンを持ち上げた。その時には何ともなかったのに、今頃になって錠の部分に激しい苦痛を感じた彼は、脂汗を浮かべて呻いた、処理を受け終えたばかりなのに。早苗が恋しくて、たまらなかった。喘ぎながら彼の両目から大粒の涙が溢れて来て、誰のものかは知らぬが台上のスカートにホロリと落ちた。面会を今月も取り消される悲しみは、言い様もない程だった。

嵯峨婦人看守はソファに足を組んで煙草をくわえた。

「で、いつ送るの？」

「明日の朝よ。加佐松だわ。えーと、ああ松原さんの番ね」

「じゃ、早く知らせといておやりよ。彼氏と約束があるに違いないからね。フフフ」

女囚十四号は夕食抜きで、夜おそくまで立たされたまま、出入りする看守達にお礼を言わされていた。四十五号が独房に蹴り込まれた後も、彼女は自分の独房の掃除や戒具の手入れ、頭髪の刈取り、体毛の除去等、明朝の押送の準備をさせられ、その物音が看守の叱声や鞭音、そして嗚咽の声と共に、夜更けの監房区画の静寂の中を、いつまでも鉄扉を透して聞こえて来た。

翌朝、鼻環の革ロープを曳かれて連れて行かれる女囚の姿を遠くから眺めて、四十五号囚はホッとした。あのみじめな鎖禅を除かれて、代りに革の褌を装着されていたのだ。細い両手首は護送用の手錠で股革に留められ、十本の指でズックの袋を持ち難そうに摑んで覚悟を決めた面持ちで女囚は足の鎖を鳴らし

「原審支持よ。ちょっと意外だったわ」

壁の鎖を女囚の鼻環に嵌めながら、連行して戻った嵯峨婦人看守が答えた。

「そうかい。その娘も無駄骨、折った訳ね。四、五カ月、損したねえ、可哀想に」

「大体、再審訴願なんて生意気なのよ。素直に恐れ入って罪に服したらいいんだわ。四十五号、お茶ッ。気が利かない男ねえ」

「監獄て、どんな所かしら？　怖いわ」

女囚は、しばらくしてポツンと呟いて、又しても、すすり上げるのだった。

三日の後、女囚十四号は股手錠の腰を振りながら所長室へ連れて行かれた。戻って来た彼女は、見るも哀れに打ちしおれていた。看守詰所で靴を磨いていた四十五号の傍らに、股手錠のまま立たされた女囚十四号は、耐えきれないように嗚咽し続ける。

「どうだったの？」

と西川婦人看守が雑誌から目を上げて声を掛けた。

た。キチッとプレスしたスマートな制服を着込んだ同年配の娘に、鼻環を曳かれて街を歩き、駅から汽車に乗せられ、浅間しくも哀れな姿を人々の目に恥かしく晒しながら護送されて行く女囚の気持を思うと、本当に可哀想だった。一言、何か言葉を掛けてやりたかったが、この身も囚われの体、四十五号囚は床を磨きながら、ただ見送ってやるしかなかった。

十四号が送り出されると、彼は淋しさを感じた。彼女が折角の再審も空しく、原審のままの刑を確定されてしまったのは、彼にも大きなショックだった。一週間程の後、再審訴願中の男女二名の既決囚が監獄送りを保留されて、四十五号の仲間に加わった。五十才位の女囚は十六号、六十才位の男囚は六十一号で、話によると、金融関係の法令違反による相被告人らしかった。二名共、保釈を取り消されて収監されたらしく、男囚の方はそうでもなかったが、女囚の方は贅沢に馴れた脂肪太りの肥り肉の腰のあたりに鎖褌を掛けられて、歩くたびにヒーヒー悲鳴を挙げているのは哀れにも滑稽だった。両名共、未だ社会にいた頃の頭が切り換わらないのか、絶えず痛めつけられていた。そんな彼等に対しても、いつに変わらず憐れみを示す水戸婦人看守だったが、三日目には激しく怒って女囚十六号を半死半生の懲罰にかけてしまった。股手錠のみじめさ苦しさに堪えかねた十六号が、最も組し易いと思った水戸婦人看守に、とんでもない事を言ってしまったのだ。

「ねえ、看守さん。今夜だけでいいわ、この手錠、堪忍してくれないこと。そしたら私、出獄したら、うんとお礼するわ。何なら面会の時に法理士にそう言って、その日のうちに届けさせるけど……」

水戸婦人看守は柳眉を逆立てて烈火の如く立腹した。彼女のような女性は怒ると、ほんとに怖ろしいのだ。額に青い静脈が、ふくれ上がった水戸婦人看守は、いきなり女囚を蹴り倒すと、自分で女囚の股手錠を叩き込み、監視台の下へ蹴り出して、魂消る悲鳴に耳もかせず、電気鞭の雨を女囚の全身に与えた。それでも怒りの納まらない彼女は、翌朝、部長に届け出て、筋を通した後、十六号の太った体に窄衣を掛けて吊るした。その吊るし方も、股手錠のまま捕縄で両肘を背中の方に引き絞り、背に折った両足首の足鎖を短くからげ、両肘と両足首とに体重が掛かるようにして吊り上げたのだ。人間の声とは思えない凄惨な呻きが洩れ、たちまち弱々しくなって行った。吊り上げを手伝わさせられた四十五号と六十一号は、恐ろしさに歯の根も合わない思いがしたし、見ていた西川婦人看守も、

「水戸さん、死んじまうよ」

と言った程だったが、水戸婦人看守は

「私、責任持つわ」

と決然とした態度で、女囚の臀部にハイポンを射ち、充填剤を施すのだった。一時間の後、降ろされた女囚の息は細かった。二名の男囚の手で医務室へ担ぎ込まれた女囚を見た医師は、未だきつい顔で付き添って来た水戸婦人看守を目を円くして眺めた。

「水戸君にこんな目に遭わされるようじゃ、この女は救い難い奴だな。なあに、大した事はないよ」

医師の言葉に、四十五号は安堵した。水戸婦人看守が責任を問われるような事態になるのが、心配だったのだ。しかし、女囚十六号は、それから丸三日間、医務室で手当を受け続けた後に、ようやく恢復したのだった。それからというものは、女囚十六号は水戸婦人看守を見ると、膝をガクガクさせる程の恐怖を示した。そして面会を禁止されかけたが、法理士の運動で防いだ女囚は、法理士を通し

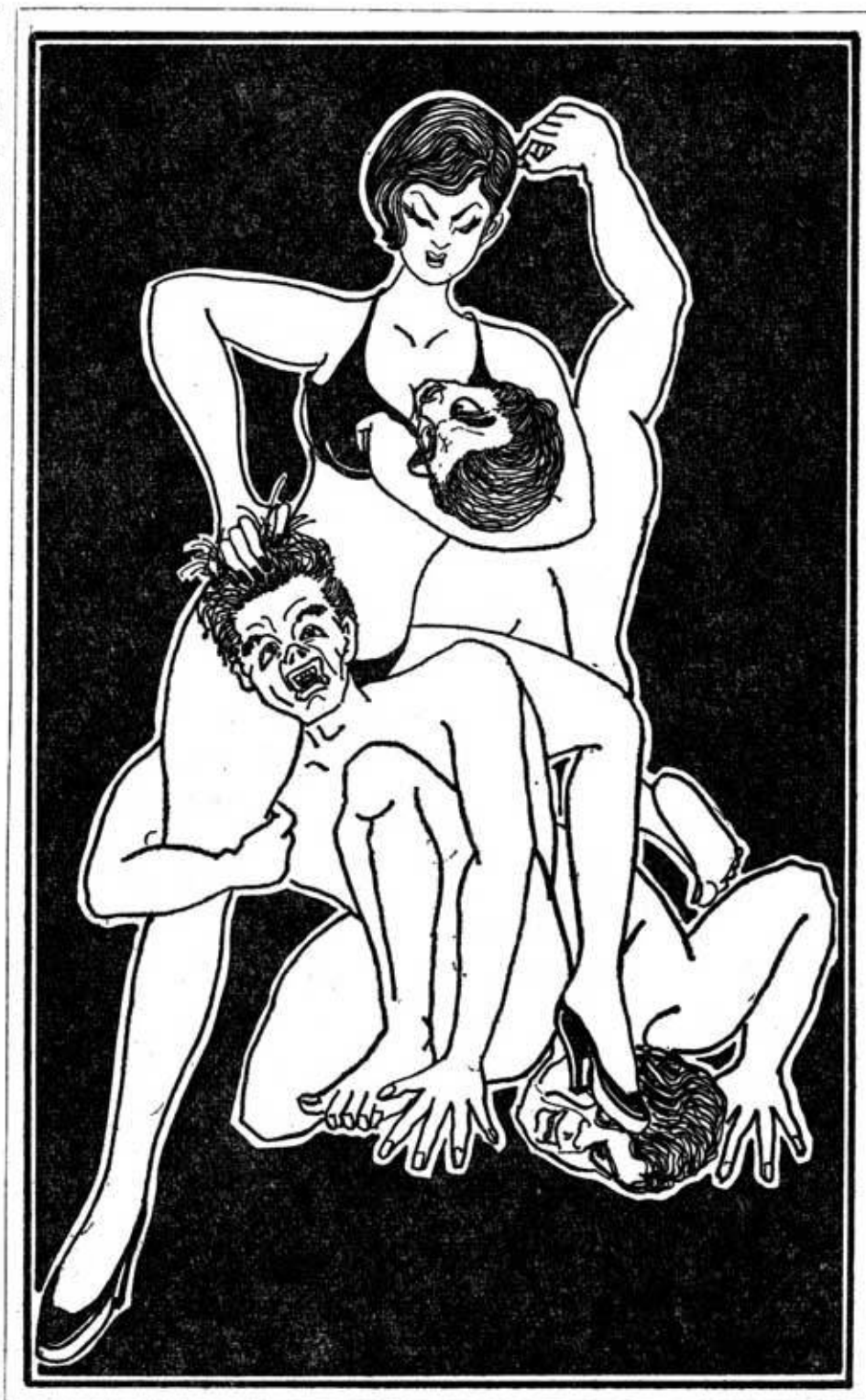
て苛酷な懲罰の非を鳴らし、水戸婦人看守を逆恨みしたのだった。しかし行刑当局は腐ってはいなかった。贈賄未遂で告発する用意がある、と一喝したのだ。女囚と彼女につらなる法理士達は、声を潜めた。そして一カ月も経つうちに、女囚十六号も水戸婦人看守の真の慈悲が身に泌みて分かり、自分の分際をも次第に悟って来て、神妙な態度を取るようになったのだった。

裁判所の前庭の桜の蕾が、ふくらんで来た頃、四十五号囚は、ようやく面会禁止を解かれた。今度は早苗と一緒に法理士もやって来た。ダブルの背広をリュウと着込んだ法理士の前に、鎖褌、股手錠の身を晒すのは、何ともみじめな心地だった。法理士は囚人の錠のあたりを、じろごろと無遠慮に眺めながら、空々しい慰めと励ましの言葉を鉄網越しに投げ掛け、そしてもうしばらく辛抱するように言った。どの位かと訊ねる囚人の必死の声にも、言葉を濁して答えない。そして、辛抱しただけの甲斐は必ずある、少なくとも損はしない、と繰り返すのだった。早苗は更に、やつれて見えた。

それからの毎日を四十五号は考え悩んで過ごした。十六号と六十一号が来てからは、彼に課される労役は極めて軽くなり、独房に正坐して過ごす時間の方が、長くなって来ていた。独房の空気も何だか生暖かく澱んだような早春の一夜、思い悩んで転々する彼に、監視孔がカタリと開いて監視の目が注がれた。振り仰いで目を見ただけで、囚人には、水戸婦人看守だと分かる。翻然として彼は決心した。高い費用を払って、たかだか刑期の一年や二年を縮めた所で何になろう。囚人は鎖を鳴らせてもがき、懸命に起き直って鉄格子にいざり寄った。既に監視孔を閉じて鉄扉の前を去りかけた水戸婦人看守に必死に呼び掛ける。

「担当様ッ。お願いがございます。担当様」

囚人の顔は鉄格子に押し当てられ、股手錠



イメージギャラリー……『八月の思い出』……春日田春夫

の両手が切なげにもだえた。靴音が停まり、鉄扉の前に戻って来て監視孔が再び開いた。
「何なの？　騒々しいわね。反則よ」
体ごと鉄格子にしがみつくようにして仰ぎ見る囚人を見下ろす彼女の目は、不審の色を浮かべて微かに笑っていた。
「お、お願いで、ございますッ。刑に服します。再審訴願を取り下げさせて下さいまし。お願い……」
彼女の長いまつげが、パチパチと、まばたきした。
「籤から棒に何を言うの。驚かせないでね。第一、そんなこと私に言ったって、仕方ないわ。所長に申し出なきゃ」
「じゃ、所長様に会わせて下さいまし」
「そりゃ手続してやってもいいけど……しかし、それ本気なの？」
「お願いですッ。今すぐに会わせて下さいましッ」
膝立ちした腿の間で手錠の手を精一杯に合掌して囚人は歎願した。
「そんな……無理言うもんじゃないわよ、この夜更けにさ。ま、落着くのよ」
彼女はガチャガチャと錠を外し、鉄扉を軋ませて開いて一歩、踏み込んで、鉄格子の前に立った。
「何故、急にそんな事、言い出したの？　よくく考えた。重大なことよ。もう少しの辛抱じゃなくって？」
彼女はスカートの裾を片手で押えてしゃがみ、片手で鍵の輪を、くるくる回わしながら鉄格子越しに囚人の目を見つめて、やさしく問い諭した。
「ハ、ハイ。よく考えまして上のことでございます。お願いです、取り下げさせて下さいまし。この通り拝みます」
囚人は、合掌の両手を示そうとして、腿の間で手錠をガチャつかせて、もがいた。
「無理して拝んでくれなくてもいいのよ。よかったら、訳を聞かせてね」
「ハ、ハイ。あの……いろいろと費用が要るばかりで、それに一向に、はかばかしく進みませんし」
「そりゃねえ、ここでそうして待ってると、焦れったいだろうけどね、お役所の仕事なんて、そんなに早くは、はかどらないものなのよ。何度も言うけど、焦ってヤケ起したんじゃない？　もうちょっと辛抱したらどう？」
鉄格子の内と外で顔寄せ合った彼女の吐くかぐわしい息が囚人の顔に温かく掛かった。
「いえ、決してそんな……ヤケになったんじゃございません。あれが、早苗が、いろいろと苦労して……可哀想で可哀想で……」
囚人の声はオロオロと涙声になった。
「それに坊やのことを考えますと、もう……私の刑期が少しばかり短くなった所で、と考えまして。そんなことより、その費用を坊やと早苗のために残してやった方が……」
水戸婦人看守の、まつげが激しく、しばたいた。
「そう。そこまでお前が考えたのなら、それもいいわね。正直言って、必ず減刑になるとは限らないし。けど、お前は、ほんとにいい良人ね。立派なお父さんだわ。おかみさんも感心だけど」
彼女は深い声音で、そう言って、鉄格子の間から手を差し入れ、ハンカチで囚人の目のあたりを拭ってやり、たたみ直して自分の目頭をも軽く押えた。
「あら、手錠のストップを忘れてたわね」
彼女は取り出した鍵で囚人の手錠を少しゆるめてやり、ストップ装置を利かせてやってゆっくりと立ち上がった。
「じゃ明朝、早速手続してやるわね。今夜はこれで、おとなしく寝るのよ」

「ハ、ハイ、ありがとうございます。お手数かけまして申し訳ございません。お願い申し上げます」

「ホホホ。いつまでも、そんな所で手を合わす真似していなくったっていいわよ」

水戸婦人看守は冗談のような口調で、おどけて頬を綻ばせて言い、二、三歩後退りして鉄扉に手を掛けてギーと軋ませた。

「軋むわね。油を差さなくちゃ……」

額を床にすりつけた囚人の頭上でガチャーンと閉じられた鉄扉の外側で、冷たい施錠の音が響いた。

翌日、労役にも引き出されずに待っていた四十五号囚の独房に、昼近くなって水戸婦人看守が現われて鉄扉を開いた。

「気持は変わらない？　分かってるだろうけど、取り下げたら、もうそれで、お前の刑が確定するのよ。私、ちょっと勘定して見たんだけど、すぐ送られるものとして、ざっとこれから六年八、九カ月ね」

彼女は鉄格子の外に立って囚人を見下ろし憐れむように言った。

「ハイ、気持は変わりません。お願い申し上げます」

「そう。じゃ、所長さんの所へ連れてったげる。神妙にするのよ分かってるだろうけど」

彼女は鉄格子扉を音高く開いて二、三歩、退き、囚人がにじり出るのを待ち、そして鼻環に革ロープをカチッとつけた。囚人の鼻先に延びた彼女の指先から、化粧クリームの香りが匂った。

「ちょっと四ツ這いになって御覧。うん、案外、綺麗ね。洗わないでいいわ。このまま行きましょう。おいで」

拘置所の本館事務室の在る建物の廊下を曳かれて行くと、重々しい威圧感に、囚人の体は訳もなく、おののいた。

「何も怖がることはないのよ。ちょっと調べるわね」

水戸婦人看守は奥まった廊下の一隅で囚人の戒具を念入りに検査し、自分のネクタイを直し上衣の裾を引っ張って扉をノックした。重々しい扉の横には、所長補佐官室の札が掛かっていた。ソファや椅子やテーブル等が並べられた室内には、秘書役兼給仕の、ちょっと綺麗な娘が、ただ一人、片隅のデスクに所在なげに坐っていた。奥の扉に消えた娘が出て来て、そのまま待たされる。

「どうぞ、お坐り下さいな」

「ええ、じゃ……」

水戸婦人看守は近くの椅子に腰を掛け、

「お前も坐っていいわ」

と、革ロープの先の囚人に声をかけた。雰囲気に押しひしがれ、自分のみじめな姿を思って、自らをごみか、虫けらのような哀れな存在に感じた囚人は、体を硬くして深く身を屈めて立ちすくみ、微かに兆しては消えて行く後悔の念と戦っていたが、婦人看守の声にホッとして膝を折った。鎖がジャラジャラと鳴り、お茶を淹れていた娘が、

「床に当てないでよッ」

と、そっぽを向いたまま、叱りつけた。

股手錠の指で吊鎖を手繰り足鎖と一緒に握って尻を踵につけ足首を立ててうなだれると鼻環の革ロープが低く垂れて床に触った。

「鎖禅、掛けられてんのね。冷たそう」

娘はそう言いながら、革ロープを跨いで婦人看守のテーブルに茶碗を置いた。

「ありがと、すみません」

水戸婦人看守は革ロープを持ち替え、茶碗を手にして美味しそうに啜った。

「所長さんは御不在なの？」

「ええ、本省の方とゴルフへいらしたの」

「そう。そりゃそうと、今朝、死刑があったらしいわね」

「ええ、三名続けざまよ。一人は若い女。こらッ、そんな汚らわしいことしないでよッ」

娘は、痒い頬骨のあたりを椅子の足に押しつけて動かす囚人を叱りつけ、コンパクトを取り出して、鼻を叩き初めた。苦い男がノックして入って来て、小腰を屈めて差し出す書類を、坐ったまま受け取ってデスクに放り出し、今度は眉を描き出した。

「囚人って、何となく臭いわね」

「そうですか。よく洗わせてるんですけどねえ」

「これなんか鎖だからいいけど、革の枷や褌なんか締めてるとプンと匂うわ」

水戸婦人看守は黙って煙草に火をつけた。

「受刑者達に衣類を着けさせようって言う意見もあるけど、私は反対よ。裸で暮させてさしょっ中、水でもブッかけてやればいいのだわ」

「私達は規則どおりにするだけですが」

と水戸婦人看守は足を組み直した。娘のデスクの電話が柔らかな音で鳴り、二言三言の後には娘の口調がガラリとぞんざいに変わってポンポンときめつけ、ガチャリと切る。

「さっきの話の続きだけどさ、囚人達が衣類を着けてないと映画会社なんか具合、悪いらしいのよ。スターを裸にしちゃう訳には行かないし。所でこの男、年はいくつなの？」

「三十二才よ」

熱心な水戸看守は担当囚人の事は詳しい。

「そうお。私の彼氏と同い年ね。一番楽しい頃なのに可哀想みたい。私の知ったことじゃないけどさ」

水戸婦人看守は娘と話し合いながら、囚人が身動きするたびに、場所が場所だけに、いつにない鋭い視線を飛ばす。

「あなた、野球はお好き？」

「時々見るわ。けど、おそいわねえ」

と水戸看守が時計を仰いだ。

「ぶってるのよ。待たせるのは、いつものことだわ。ね、来月からペナント戦開幕よ。エレファンツは今年は、どうかしら。彼ったら凄いファンなの」

「そんなこと話さないでやって下さらない？可哀想じゃないの」

と水戸看守は囚人に顎を、しゃくった。

「あーら、ずい分と情深いのねえ。そんなこと私、考えたこともなくってよ」

と娘は目を円くして驚くのだった。

娘が立ち上がった。

「インターフォン、故障したままなのよ。不便ねえ」

と、こぼしながら奥の室へ行き、扉の所でこっちへ向き直って指で招いた。補佐官へ曳かれて入る時には囚人の足は、すくむ思いだった。勿論、立って歩くことは許されず、膝でいざる。上げる勇気は、とてもなく、うなだれて伏せた目に大きなデスクの下の方だけが見えた。

「一監四十五号、連れて参りました」

水戸婦人看守が靴の踵をカチッと鳴らせ、上体を三十度、倒して言ったが、デスクの主は黙って、うなずいたままだ。囚人は額を床にすりつけたまま、更に待たされた。自由を剝奪された日々を送っていると、知らず知らずの中に強い劣等感が巣喰うものだ。囚人は何ともいえない恐怖に襲われて、出来ることなら、このまま逃げ出したいとさえ思って震えた。

「四十五号だったね。顔をお挙げ」

と、張りのある女性の声がデスクの向うから聞えた。おそるおそる顔を上げて仰ぎ見る補佐官は、未だ三十台の婦人だった。水戸看守より年下のように思えた。

「お訊ねになることに、お答えして」

水戸婦人看守が革ロープを、しっかり握って立ったまま命じた。
「再審訴願を取り下げるんだってね」
婦人補佐官に見据えられて、囚人の視線は忽ち床に落ちる。
「ハ、ハイ」
「そう。間違いないわね?」
婦人補佐官は、デスクに肘をついた片手で頬を支え、片手の人差指を囚人に突きつけるようにして、きつい声で念を押した。
「ハ、ハイ。取り下げさせて下さいまし。お願いでございます」
「ふーん。で、理由は?」
「ハイ、費用が、かさみますし……それに、こんな中途半端の生殺しみたいな状態には、もう辛抱出来ません。お、お願いですから、すっぱりと……監獄へ送って下さいまし」
婦人補佐官は、肘掛椅子から立ち上がり、デスクを回って囚人の頭上に、すらりと立った。肩をきっかりと斜めの直線に仕立てた淡緑灰色のスーツの襟元から象牙色のブラウスが覗き、長い袖に包まれた手首に見え隠れする腕時計に、ちりばめた宝石がチカチカと輝き、漂う香りは麝香の匂いだ。
「おかみさんと男の子が一人、いるのね?」
「ハ、ハイ」
「ま、取り下げを願い出るのは、お前の自由だし、手数も省けるから認められるに違いないわ。けど、ようく考えて見たこと。折角、受理されてるのよ」
婦人補佐官は、腰をデスクに当てて片手を机上に突き、片手で缶から煙草を抜き出してライターを鳴らし、体を後ろに反り返るようにしながら足許の囚人を見下ろした。見下ろしたままで缶を取り上げ、水戸婦人看守に手振りで一本、すすめながら
「後悔するような事はないのね? 一旦、取り下げを願い出たら、もう取り返しは出来ないのよ」
と、ライターの炎を婦人看守の方へ突き出して低く言う。沈黙が流れて婦人達は、しばし紫煙をくゆらせ、囚人の心は幾度も念を押されて動揺し乱れた。
「とても、いい香りの煙草ですのね」
「これ? イーストミンスターよ」
喫み終えた婦人補佐官は灰皿に揉み消し、
「もう一度だけ訊ねるわ。矢張り取り下げるのね?」
「ハ、ハイ」
「そう。じゃ、いいわ」
彼女は水戸婦人看守に目配せし、準備されていたらしい書類を取り出して小机の上に置いた。
「お起ち!」
おずおずと鎖を鳴らして立ち上がった囚人の股手錠が、右手だけ外された。
「ここへ署名するのよ。拇印も捺して」
万々一を警戒して、鼻環の革ロープを、ごく短く握った婦人看守が、小机の傍へ囚人を引き寄せて命じた。久し振りに握るペンは何だか、ぎこちなく、覚悟したことながら、拇印を捺す時には、さすがに手が震えた。水戸婦人看守が書類を押えていてくれる。
「ここへ、通知したい人の住所氏名を書くのよ。おかみさんだろ?」
いとしい早苗の名を、書く時には、涙で目がかすみ、大きく刷られた「再審訴願取下げ願」という表題の文字も、ぼんやりする程だった。早苗の姓を自分と同じに書けないのが口惜しかった。刑を終えねば婚姻手続は出来ないのだ。
「それは誰? おかみさんじゃないの?」
と、婦人補佐官が不審そうに言った。
「あ、そうだったわ。じゃ、続柄の所は妻じゃ駄目よ。内縁の妻、と書いて、訂正の拇印

イメージギャラリー『S子の夢・私と七人のドレイ』春日田春夫

を捺して」

訂正印を捺しながら囚人はポロポロ涙をこぼした。目を通した婦人補佐官が、

「いいわ」

と言うと、囚人の右手は忽ち婦人看守に摑まれて引き下げられ、素早く手錠を叩き込まれてしまった。婦人看守の馴れた手つきを眺めながら婦人補佐官は又も煙草を吸いつけて

「でも不思議なものだと思うわ。だってねえ社会人の殿御のそんなの見たら、気絶しちまう程に恥かしいのに、囚人だったら全然、平気だもの」

「そうですわねえ。習慣とはいうものの、鼻環のあるなしで、ほんとに違うものですわ」

婦人補佐官は書類を既決箱へほうり込んでデスクを回って椅子に腰を下ろし、音もなく椅子を回転させつつ囚人を、じろじろ、眺めた。正午のサイレンが微かに聞こえて来た。

「お、教えて下さいましッ。いつ、監獄へ送って下さいますでしょうか？」

「ホホホ。一日でも早く、刑を終えたいっていう気持なのね。ここにいたんじゃ半分にしか算入して貰えないものねえ。無理もないけど、ちょっと自分勝手じゃなくって？　あわてなくても、願いが受理されたら直ぐに送って上げるわ。そうねえ、一週間位かしら」

囚人はホッと溜息を洩らした。今となっては、生地獄と称される監獄へ、一日も早く連れて行って欲しかった。

「お、お願い申し上げます。それで、あの、法理士の方へは何も言わなくても……」

「ああ、それはこちらから通知しとくわ。さあ、七年足らずのことよ、まじめに刑に服して来るのね。いい？」

「ハ、ハイ。いろいろと……お手数かけました。ありがとうございました」

「うん。所で、試用装着されてる、その鎖褌は、どんな具合？　大分、こたえる？」

「……」

「正直に言ってごらん。叱りはしないから」

「ハ、ハイ。それはもう、辛うございます。辛いというよりも気持がみじめで……」

「そう」

婦人補佐官は、ふっくらした唇を、綻ばせた。笑うと端正な頬に、えくぼが出来る。

「そう。そりゃねえ、お前達だって生身の体なんだから辛いことは分かってるわ。今、気持がみじめで、たまらないって言ったわね。何も締めてないよりも、みじめだと思う？」

「ハ、ハイ。それはもう……どんなにきつく硬いのでもいいですから革褌を掛けて頂けたらと……」

婦人補佐官は満足そうにうなずいて婦人看守に目で合図した。控室から娘が現われた。

「あ、今日はね、外で食べるわ。ちょっと遠いけど、美味しいグリルを見つけたのよ」

婦人補佐官はハンドバッグを取り上げ、ハイヒールを鳴らして出て行った。靴下の縫いめが何故か囚人の目に灼きついた。目礼して送った水戸婦人看守が、

「おいで」

と革ロープを引っ張った。もうこれで、すべての希望も失われて、完全な懲役囚になりなのだ。鼻環の革ロープを曳かれ膝でいざって出て行く受刑者には目もくれないで、娘は電話で自分の書食を注文して何かケラケラと笑い声を立てていた。廊下へ出ると婦人看守は、囚人が立って歩くことを許した。

「さ、もう立っていいわ。気持が、すっぱりしたでしょ？　おや、泣いたりしてどうしたの？　もう駄目よ」

囚人はかぶりを振り革ロープを揺すった。

「もう、これで……」

「え？　これで、どうしたって言うの？」

婦人看守は囚人の顔を探り、いたわるように覗き込んだ。

「ああ、分かったわ。おかみさんと面会出来るかって心配してるのね」

囚人はうなずいて、必死の想いをこめて婦人看守を仰ぎ見た。監獄では面会等、許される筈はない。護送される前にもう一度だけ、早苗に会っておきたかった。彼女に相談なしに、再審訴願を取り下げたのが、心残りだった。しかし水戸婦人看守は、

「もうそれは、ちょっと無理ね。面会させる理由が、もうないものねえ。諦めた方が、よくってよ」

と最後の方は低く低く言った。囚人の肩が落ち、頭が更に、がくりと垂れる。なまじ、優しく言い渡されて、悲しみの念が全身に泌み渡った。拘置所本館を曳かれて出た囚人の口から悲哀の喚き声が洩れた。転げ回わり、のた打ち回って、叫び喚き、この胸のやる方ない悲しみのしこりを吐き出してしまいたい衝動に駆られた囚人は、泣き喚きながら全身を、もがいた。驚いた水戸婦人看守は忽ちキッとした、きびしい表情に口を引き締め、革ロープを鞭にしてピシピシと打ち据えながら叱りつける。

「おとなしくしなさいッ。何故暴れるのッ」

股手錠に足錠、更に鼻環に革ロープをつけられていては、てこずる程の暴れ方や反抗が出来よう筈もなく、まして本気に反抗する気は全然ない四十五号囚は革ロープの鞭を全身に喰ってヒーヒーいいながら揺すぶられて引

き絞られた鼻環の痛さに涙を浮かべて、激しく喘ぎつつ、取り鎮められた。革ロープの鞭を散々喰って、却って悲しみが紛れたのだ。

「一体どうしたの、急に喚き出したりして」

水戸婦人看守は、なおも油断なく身構えながら不審気だったが、ベテラン刑務官の彼女は忽ち囚人の気持を悟って言った。

「切なくて、やり切れなくなったのね。鞭で少しは気が紛れた？」

「ハ、ハイ、申し訳ございません」

囚人は心から詫びた。手数を掛けて、ほんとうに済まなかったと思ったが、何故か鞭をもっと受けたかった。

「戻ったら、もう少し、鞭を上げるわ。革ロープじゃ、打ち難いものね」

「お願い致します。しかし決して反抗等、しようとは思ってもいなかったんでござ……」

「分かってるわよ。さ、おいで」

どこへ行くのか分からないが、若い男が一人、ワイシャツにズボン、薬草履姿で、前手錠を陽に光らせ、押えた腰縄を握る婦警らしい若い女性に腕を扼され、連行されて通り掛かった。

「お前も早いこと、あんな風にして頂くんだわね」

と婦警。

「冗、冗談じゃねえですぜ。あっしは何も、してやしませんよ。前科があるっていうだけでワッパ掛けられて、しょっぴかれたんじゃたまりませんや。い、いてて。そ、そんなに引っ張らないでも歩きまさ。行きゃいいんでしょ、行きゃあ……」

「お黙りッ！」

いきなり平手打ちを喰った男は、ぶつぶつ言いながら検事局の建物を曲がって消えた。

監房へ戻された四十五号囚は、水戸婦人看守の手で革鞭を二十ばかり当てられた。

「水戸さん。あんたが鞭を、そんなに当てるなんて、珍しいじゃない。どうしたの？」

松原婦人看守が監視台から声を掛けた。

「ウ、ウン。何でもないの。大したことじゃないのよ。さ、これ位で赦してやるわ」

「有難うございました」

四十五号は背、尻、腿に残る激痛に、歯を喰いしばりながら額を床にすりつけて心からお礼を言うのだった。その日の昼食は半分しか、すすれなかった。腹は空いているのに何だか胸が一杯だったのだ。受刑者は、食事を残しても懲罰を与えられねばならない。

「お上の下さる御悲慈の食事を残すつもりなのね。どうしても、すすれないのかい？　よしし」

今度は松原婦人看守に、鞭を当てられた。水戸看守と違って内腿や、ふくらはぎ、脇腹や上膊部を狙って打つ小娘の鞭はこたえた。

☆SM画稿募集!!☆

☆SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしいSM画稿を読者の方々から募ります。

☆画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチシズムに関係したものでも、本誌の内容にマッチするものでしたら、お好みのものを、お寄せ下さい。

☆必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カットでいいと思います。

☆掲載作品につきましては、作品の出来的なものは半分大きまして、アイデアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

〈奇譚クラブ編集部〉

三麗花に贈るソネット

朱知好春　文画

十二月号で拝見した水江伸氏の〔深田菊子さんに捧げるバラード〕の画と文は、私をして、稚拙な筆をとらしめる、ささやかな勇気を与えてくれた。

私と奇クとの出合いは、もう十数年も前になろうか。

当時、都築峯子氏の『嬲られる花嫁』或は『白鳥の夢』であったか、チャイコフスキーの白鳥の湖の白鳥に扮したバレーダンサーが後手、片足吊り格好で責められているのが、印象的だった。

それから、現在でも麗筆をふるっておられる四馬孝画伯の〈ピエロ〉と題する、サーカスの少女が、後手縛りのまま、玉乗りをさせられ、ピエロに鞭打たれている、妖美にして華麗な絵に、凄くエクスタシーを感じたものである。

そして、『腰元折檻』の拙画と拙文を投稿して誌上に掲載され、記念品として、奇ク半年分、贈られたのも、今は昔、楽しい思い出となって残っている。

それからも、折にふれて愛読しているが、近年、とみに、それがナウな感覚、ファッショナブルな新風俗とでも思っているのか、世の多くの女性が男性化し、羞恥をおき忘れた女性が多くなっているのは、まことに、なげかわしいことだ。

つつしみや、はじらいの姿にこそ、私はエロを感じ、美しさを見出すのだが、羞恥なき露出は、単なるグロであり、珠玉の女体も、醜怪にさえ見えるのである。

そうした意味で、奇ク誌上を賑わしている含羞の三麗花を俎上にのせ、私のイマジネーションを、ふくらませる事にする。

あくまでも、私の空想の所産なれば、三嬢よ、非礼の点、ご容赦下されたし。

〔陰陽九星萬年暦〕に、十二支から観た性格というのがある。

大道易者が、竹の杖か何かを地面について「十二干支（えと）のあるなかで、子（ね）の年生まれの子の年は、表面柔和できれい好き、金もたまるが口軽く、尻も軽くて色ごのみ……」と立て板に水で、面白おかしくやっている、あれである。

その信憑性については、論評の限りではな

尿する犬を連想するのである。

それも可愛いいスコッチ・テリア。

藤圭子ふうに、眉がかくれるあたりまで、黒髪をのばした丸顔は戌年の性格そのままに、如何にも正直でお人好しといった印象を受けるのである。

電信柱に片足あげて、小水をとばす習性はそのまま、排尿責めが好きだと告白する彼女に、ぴったりではないか。

黄菊、白菊、爛漫と咲きほこる早暁、裏の野に出でて、ビール、ウィスキー、ジュースと、したたかに飲ませ、乳色の朝霧の中、首輪をはめたまま、一糸まとわぬ姿で鎖をつけて、ボール投げて拾わせるもよし、御主人様の食べ残した肉片を、三度、チンチン、お預けの後、食べさせるもよし、さんざん、運動させた後で、羞恥に身悶えする彼女を、片脚あげた浅ましい格好で排尿させ、自分がオシッコで濡らした上を、両手で土をかけて始末させるのも面白い。

自分の脱いだパンティをくわえさせ、左足をあげさせ、首輪へ背中越しに縛り、四つん這いならぬ両手と右足とでの払暁の散策と洒落のめては、いかがであろう。

朝やけの空の下、菊の香におう。

君は今、いずちをさ迷う。鎖もて、追われ追われて、尿する場所を求めて。

さすらえど、首の輪固く、東に、朱の陽のぼり、玉の肌、あらわに浮かぶ。

岩走しる水の音にも、心乱れて、はじらいに身を細めつつ、片足あげ、黄金水、しとど濡らしぬ。

☆前田真知子☆ 申年 さるどし

申年生まれの人は、鋭敏な感覚の持主で、才能縦横の人が多いとある。

前田真知子さんは、やや面長で色白。

ノーブルな顔立ちは京人形を思わせる。

体つきは痩せ型で、細骨の柔肉は、抱きしめれば折れそうで、少しでもサドっ気のある

いし、また、三嬢の干支についても関知しないが、勝手に、こちらで推測し、その性格に適応したSMプレイを、私なりに試みることにする。

☆深田菊子☆ 戌年 イヌドシ

戌年生まれの人は、正直で義理堅く、直言直行の人が多いとある。

グラビア・フォトで、一直線に伸びた脚の深田菊子さんを拝見すると、片脚をあげて排

男性は、一度は、お手合せ願いたい女性の一人ではないだろうか。

その理智的な瞳には、清純な色気と、そこはかとなき哀愁とを、ただよわせている。

人跡未踏の山野。

白日のめくるめく陽光の中で、その白磁の裸身を、けもの縛り、又は開股のまま、老木に吊るし、そのまばゆいばかりに艶やかに輝く臀部を、それこそ、お猿のように、真赤になるまで、打ちのめしては、どうだろうか。鴇色に染まった臀部の美しさ。

苦悶にゆがむ端正な顔。

可憐に、うちふるえる白い乳房。

夕陽に映える白桃のような双丘の尻。

ボッテチェリのヴィナスの誕生にも比すべき、生きた名画といえよう。

そして、その後でのアヌス責め……。

アブマニアには、とても、こたえられない素晴しい図である。

風絶えし、静寂の山峡。

年を経し、柿の木の間に、見え隠れして、吊り下る、稀泣の人は誰ぞ。

みどりなす髪は乱れて、白球の乳房はふるえる。茜さす、双桃かなし。

ひたぶるに許しを乞えど、かたくなに、主は許さず、今ははや、得耐えずに、

しのびねに玉虫色の恥じ塊洩らす。

☆玉木章子☆

寅年　とらどし

寅年生まれの人は、大胆の如く見えるが、実は小心翼々なれど、一面、狭気の風ありて弱きを助け、強きに向かうという気持を持ちあわせているとある。

私は元来、女性は、あるがままの姿、自然の生まれたままの姿態を、美しいと感じ、いやしくも、女体に傷つけ、ましてや、血を流すなどは好まぬ方である。

S派指向のくせに、フェミニストとは、おかしなものであるが……。

いや、ひとつのパラドックス（逆説）としては、私がSなるが故に、女体美を異常なまでに憧憬し、傷つけまいとするのかも知れないが……。

ともあれ、そんな私でも、この女性だけは鞭打ちへの激しい欲望を感ずるのである。

豊満な、それでいて、決して、ブヨブヨした贅肉のない、しっとりした固肉。

そこには、成熟した女体の完成美を見るこ

とが出来る。

女の魔性というか、女のシンの強さというか、前田真知子さんとは違った意味の強さを玉木章子さんに覚えるのである。

あたりはスミレ色にかすむ夕まぐれ。

風、中空に舞う竹林の中。

丸裸に剝かれた彼女を、両足を大きく開いたY字型の逆さ縛り、あるいは、それこそ、虎の敷皮よろしく、地面に、杭を打ち、大の字型の晒し縛り。

腰のくびれに縄をかけて引き揚げ、弓なりにそらして、その細腰から、豊かにみのった臀部へかけての入念な鞭打ち。

赤、紫。

みるみるうちに走る縞模様の条痕。

全身に、じっとりと滲む汗。

その芳醇なにおい……。そして、まだ熱くほてった体の一番大切な部分に、冷たく鋭利な刃を当てての剃毛……。

屈辱に、彼女の不自由な四肢は、熱病患者のように蠢動する。

腥風すさび、月痩せて、人影絶えし、渓谷に咆哮悲痛の一声は満身創痍のはぐれ虎

みそなわしてよ、天津神

鞭打つ人の恋しくて

邪恋衣、身にまとい

その破れ裂くる、その日まで

とく打ちてよと、乞い願う

哀しき我が性、静めかし。

鞭打ちと剃毛責めとで、さすがの玉木章子さんも、いささかグロッギーとは思うが、これだけでは仏作って魂入れず……。

フィニッシュは加藤清正ほどではないが、彼女の黒髪、むんずとつかんで、あおむかせいやがる彼女の可愛いい唇、こじあけ、三つ又の槍でとどめさす。

私好みの三人の女性への見果てぬ、あさましい白日夢を開陳した次第である。

乞い願わくば諸嬢よ。何時の日か、この愚者の痴夢、かなえ賜わらんことを。

しからば私は、深田菊子、前田真知子、玉木章子の三麗花と共に、親しく灼熱のSMプレイを交わして、その経緯を詳細に記して、奇ク誌上を賑わし、満天下、幾百万のマニア諸氏を唸らせたいと思う。

果たして、この痴夢、果たせるや否や。

〈終〉

さるぐつわ

（第四回）

――この美しきものの詩と真実――

新川裕夫

もう少し、江戸時代の文学に描かれた猿轡を鑑賞しよう。

○　岳亭定岡

『俊傑神稲水滸伝』

この物語は典型的な草双紙で、すこぶる長編である。（勿論、作者は初めと終わりでは違うが）そして、草双紙とは、こんなものと言わんばかりの物語構成上の特性が続々と展開され、実に面白い。

ここに麻児（あさこ）という美女がいる。彼女が一人で寝ていると、曲者が彼女をさらうべく、しのんで来る。目ざとく、それを見つけた二人の女中が曲者に、たち向かう。しかし――

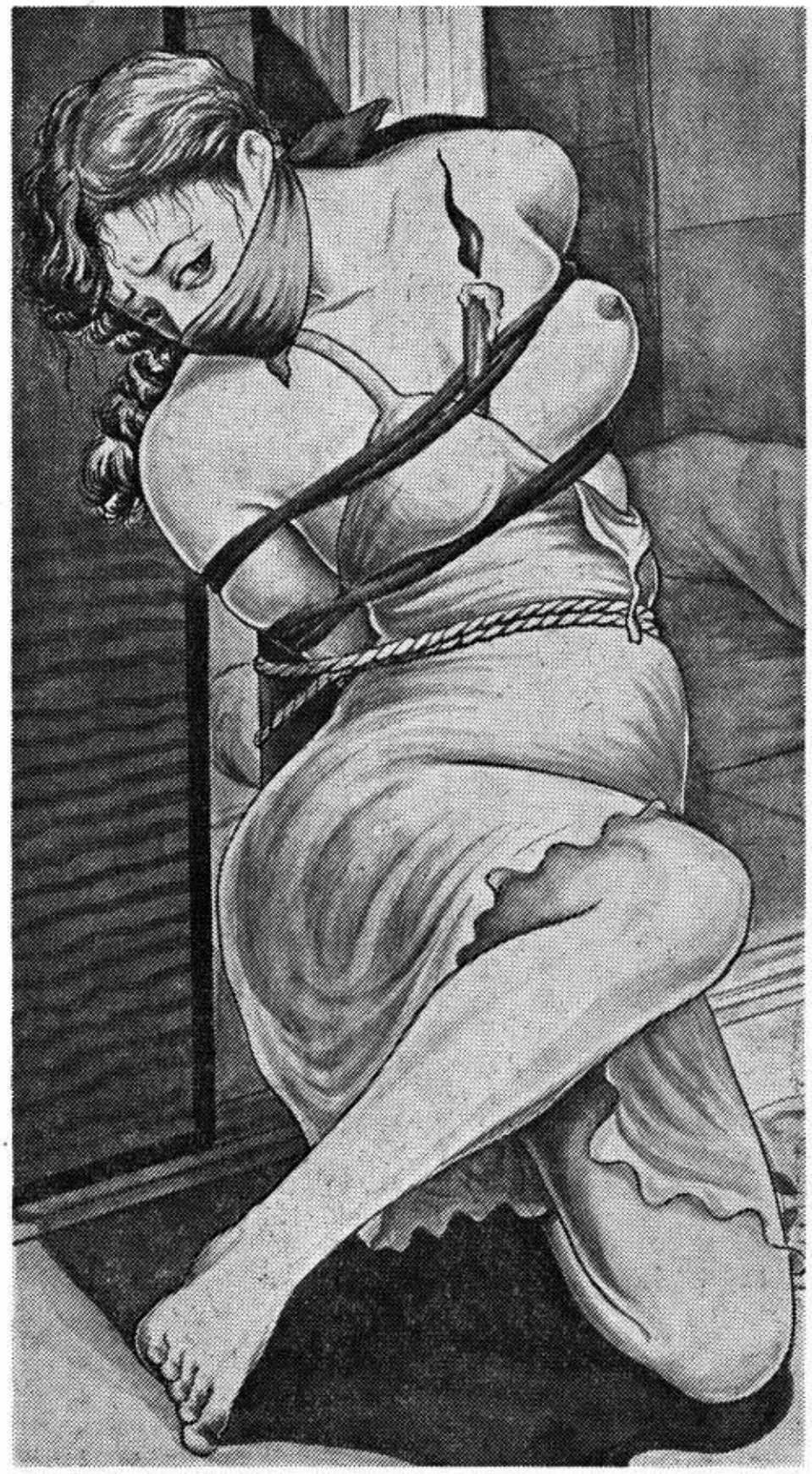
今はとて彼曲者（かのかつい）、一喝焦（いら）って力を極め、
両人の女を打倒し、頓（やが）て麻児を扯捉（ひきとら）へ、豫（かね）てぞ乖巧（たくみ）もて来にけん、猿轡て小物を喰（はま）せ
口を捻（くく）りて言（もの）いはせず、振袖にて両手を縛
り、

逃げてしまうのである。

われわれは、いくつ
この簡単な文章から、
かの面白い点を発見する事が出来る。

例えば、「振袖にて、両手を縛る」という事である。これは二様に解釈され得る。即ち第一は、縄を使用せず女の着ている、あの長い振袖だけを後で、きつく縛る。第二は着物をたばねて縄のかわりに使用する。そのいずれかであろう。私は前者だと考えるが、振袖を後できつく縛れば、腕もあらわに、むき出しになった女の両手は、ある程度、その自由を奪われるであろうから、女をさらっていこうという男の目的は達成できるわけである。

むき出しの白い女の腕と、美しい着物。視覚的に読者をして、その美的感情を、そそらしめる。これが現代であったならば、女が首に巻いているスカーフで手首を縛り、という所か。



縛り方はそれ位にして、論題を猿轡にもどすと、何といっても最大の発見は、この作者が既に読んで来た京伝や種彦などより、文学的には、あまり有名でないにもかかわらず、事〝猿轡〟に関しては、一歩も二歩も先んじた感覚を持っていたという事である。

即ち、麻児がされた猿轡は、まさしく本格的な型式によるものである。

それは「喰ませ」、「口を拄り」の二つの表現から、わかる。先ず「喰ませ」たのであるから、必ずや女の口中に何か、つめ物をしたであろう。ついで「口を拄」ったのであるから、そのつめ物を、はき出させないため、口の上から別の布で、しっかりと掩うようにして後頭部で結んだ事も明らかである。

この場合も、実は二通りの解釈が成り立つのである。

その一つは、今、私が述べた型式のもの。第二回で記した私の猿轡分類によると、第二、第四が、これに該当しよう。

もう一つは、外国式に、つまり山口とき子さんが実験なさったように球状のものに穴をあけて紐を通し、口中に入れて頭の後ろでその紐を結ぶ型式である。

私は江戸時代という事から考えて前者だと考えるのだが、如何なものであろう。

しかし問題は、さらに残る。

曲者は、猿轡を「豫てぞ乖巧もて来」たというのである。曲者は、いや作者の岳亭は、なかなか念が入っているのだ。つまり、つめ物も、ただ手拭をまるめて女の口中に押し込むというような、ありあわせ的なものでなく、あらかじめ、それの目的のために工夫して来たというのである。一体それは如何なるものであろうか。何か解く鍵を、なおも本文を読み続ける事により見出すことは出来ないか。

さて、曲者にさらわれた麻児の運命や如何に——

今しも大阪の住吉丸という船が、船底一杯

荷を積んで、伊豆沖を走っている。船内を見廻っている船長が何気なく積荷を見ると、古つづらから血が流れている。びっくりして開けてみると、一人の女が口や鼻から血を流して死んでいた。

葛篭の中より死骸を出させ、熟々と打窺に、寔にこれ珠をも欺く許なる、美麗き女なり、口に木丸を喰せたれども、

この美女は麻児である。

これで、彼女は木製のボール状のものを口中につめられていた事が、わかった。

木丸と書いて〝さるぐつわ〟と読ませる事については、既にこのエッセイの第二回（十二月号一一六ページ）において考察した。その時、大槻博士の『大言海』に、さるぐつわとは「唐書ニ云フ、木丸ナリ、トモ云ヘリ」という所から、古代中国では木を丸くしたものを口中に入れて、防声の具としたのであろう。そこから、なにも丸い木でなくても防声具を、木丸と書き、さるぐつわと読むようになったのではないかと一応、結論づけておいた。

この唐代の猿轡に関する風俗は、もろもろの文化と共に、実はひっそりと日本に伝来していたのである。

慶長年間、日本に来た朝鮮使節の一人、黄慎が書いた『日本往還日記』に、「其ノ鞠因之法、木ヲ以ツテロニ箝ス」という記事がある。日本の場合、「口ニ箝」した「木」が、棒か丸か、いずれとも判別しがたいが、丸が主流として両方とも渡来したと考えるのが妥当であろう。そして、やがて、別に口中に木丸を入れなくとも、さるぐつわを木丸とも書くようになった事は、既に考察した通りである。

中国から伝来した木丸の猿轡が、やがて日本的に消化され、豆絞りの手拭による猿轡にみる一つの高峰に行きつく変遷の過程は、これ亦、面白い研究テーマであろう。

さて、話を前にもどすと、麻児は口に木丸を喰まされていた事につき、私は、彼女は木製のボール状のものを口中につめられていたと既述したが、広義に木丸を解釈すれば、なにも木製のボールでなくてもよいわけで、おまえの前の言っている事は矛盾するではないかという疑問も起ろう。

たしかに、古つづらの中の麻児の猿轡の描写だけならば、それを木製のボールと断定する事はさけねばならないが、曲者は、彼女に猿轡をするために「豫てぞ、乖巧もて来」た事に注意しよう。木丸を広義に解すると、この描写は無意味になる。そして工夫し準備して来たものを彼女に「喰せ」たのであった。故にこの場合の木丸は、さるぐつわ一般の意味の木丸でなく、狭義に解釈した木丸――文字通り木製のボール――と理解したい。そうしないと、麻児をさらう最初の場面の猿轡の描写が死んでしまうのである。

いずれにせよ、岳亭定岡は、猿轡に〝うるさい〟男である。そして猿轡に関心があった事も、その描写から充分、うかがう事ができた。彼も我党の士であった。

○　**知足館松旭**

ここから作者が変る。

さて、話かわって、ここに音羽という美人がいる。（猿轡をされる女は、何時も皆美人なのである。そしてまた、猿轡をされる女はどうして、こうも美しいのであろう）

彼女に恋してひじてつばかり、くっていた一人の男。たまりかね、遂に――

手拭把出して、悶く音羽の口をしめ、

さらって行こうという非常手段に訴える。

この場合の猿轡が、如何なる型式であるかは、にわかに断定する事は出来ない。しかし「口をしめ」の表現が、どんな型式にせよ、

女にした猿轡が、容赦なく厳しい事を示している。もうそれだけで充分であるが、なお詮索してみると、急いで手拭を取り出しての猿轡であるから、そこを考慮して、女の口を割って後で縛った型式が、どうしても想像されてくるのである。「しめる」という言葉に少しとらわれすぎるかもしれないが……。

先に血だらけの死骸になって、つづらに入れられていた麻児は、後に生き返ったのである。（こういう所が、草双紙の面白さの一つだ）そして又しても別の男に言い寄られる。

（ああ何と美人とはいそがしいものかなあ）

しかし、「いか程威し斬害さるるとも、汝が不義に陥なんや」と、きっぱり断わる。男はそんな事では引き下がらない。それどころか大口開いて打ち笑い、

情張広言能も述たり、斯して呉んと袂より、細き麻縄把出して、逃んと悶くも無理無躰、ぐるぐる捲に引括れば、打哭聲に手拭以、唇を蔽ふて襟髪にしめ付、悶起るを肩に引懸、

逃げてしまったのである。

この猿轡は、「手拭」で「唇を蔽」ったのであるから一般的な手拭の長さから考えて、手拭をただ一重、唇の上からそれを掩うようにして「襟髪にしめ付」、即ち後頭部で強く結んだものである。ごく普通の猿轡であって私の分類の第一、第三の型式が、それにあたる。

このように手拭一重の猿轡が、果たして防声の具として、かなうか否かは極めて疑問であり、むしろ悲観的であろう。

現に、上記の猿轡をされ、かつぎ上げられた麻児は、向こうから二、三人の男が来るのを見つけ、今がチャンスとばかり、

〃らる唇に叫きたるにそ

幸運にもそのうめき声が男達の注意をひいて、救い出されるのである。

しかし、だからといって、この素朴な猿轡を捨ててしまうのは早計である。

たとえ防声の面では欠点があっても、縛られた女と、いじめる男が、お互いに愛情のあるSM的妖艶な雰囲気を構成する場合、はかりしれない効果を発揮するからである。

即ち、S的男性を興奮させるM女性のたまらないうめき声が、そして言葉が、その一重の猿轡を通して、くぐもり声的に聞かれる事である。例えば、豆絞りの手拭で、もだえながら、うっすらと目を閉じて、歓喜の絶頂のうめきを一重の手拭を通して吐く女は、実に聴視覚両面から、男性のS的感覚を、ゆさぶってやまない。その時、もう少し不明瞭の声の方がSM的だとするのなら、女の口中に何か軽く、つめ物をすればよいのである。

いずれ、この一重の手拭による猿轡の持つ防声やSM的雰囲気への功罪は、真実篇で確かめ、改めて報告するつもりである。

さて、話は、ぐっと変わる。

夜の静寂の中に横たわる一本の街道。

今しもカッカッと馬蹄をひびかせて、一頭の馬が急いで、こっちへ来る。

今頃、何だろう？　一寸そこの物陰に身をひそめて、様子を見よう。

やがて眼前にやって来た馬には二人の男がつきそい、馬上に誰かが乗っている。それも不自然な形で——。

馬に乗しは花かつら主内着の上より縄をかけて、馬の肚へ団々巻に、幾重となく括付て、手拭をして布嚢を喰せ、仆れんとする背の方へ、夜着なるべしと顧ふ物を、押帖みてもたらかしたる、其様勾引の行相なり、

女を縛って猿轡では、たしかに、「其様勾引」に違いない。

布嚢と書いて〃さるぐつわ〃と読ませるの

は、先の木丸と同様、草双紙では、よくある事だ。三省堂版『明解漢和辞典』をひくと、嚢とは、ふくろという事で、又、包むという意味もある。

そもそも猿轡とは、布で口を包むものだから、布で「嚢（ふくろ）」のように口、頤を「嚢（つつ）」むから、布嚢（さるぐつわ）なのであろう。木丸同様、その外形から字をあてて作った熟語である。

この花かつらという美人の遊女が、されている猿轡は、〝布嚢〟という字から普通のタイプ、つまり、さっと手拭で口を掩うようにして、後頭部で結んだ型式が容易に想像され得るが、又「喰せ」という表現から、手拭を細く、しごいて口にくわえさせた型式か、とも思われる。一般的に猿轡をする事を、それが口を掩う型式のものであっても、「喰す」という表現を使う事があるから、それ程、この字句に拘泥しなくてもよいかもしれぬが、本文の数行後に、花かつらの勾引される姿を叙して、

裸馬に縄縛（なはしばり）して、布嚢迄唇（までくち）に喰せ、自由を禁（とど）めて乗たるは、

とあり、「唇に喰せ」と限定してあるところから、やはり女の口を割るようにして手拭をくわえさせた猿轡と一応、考察しておきたい。いずれ読者諸兄姉の御叱正を待とう。

又もや、話が変わる。

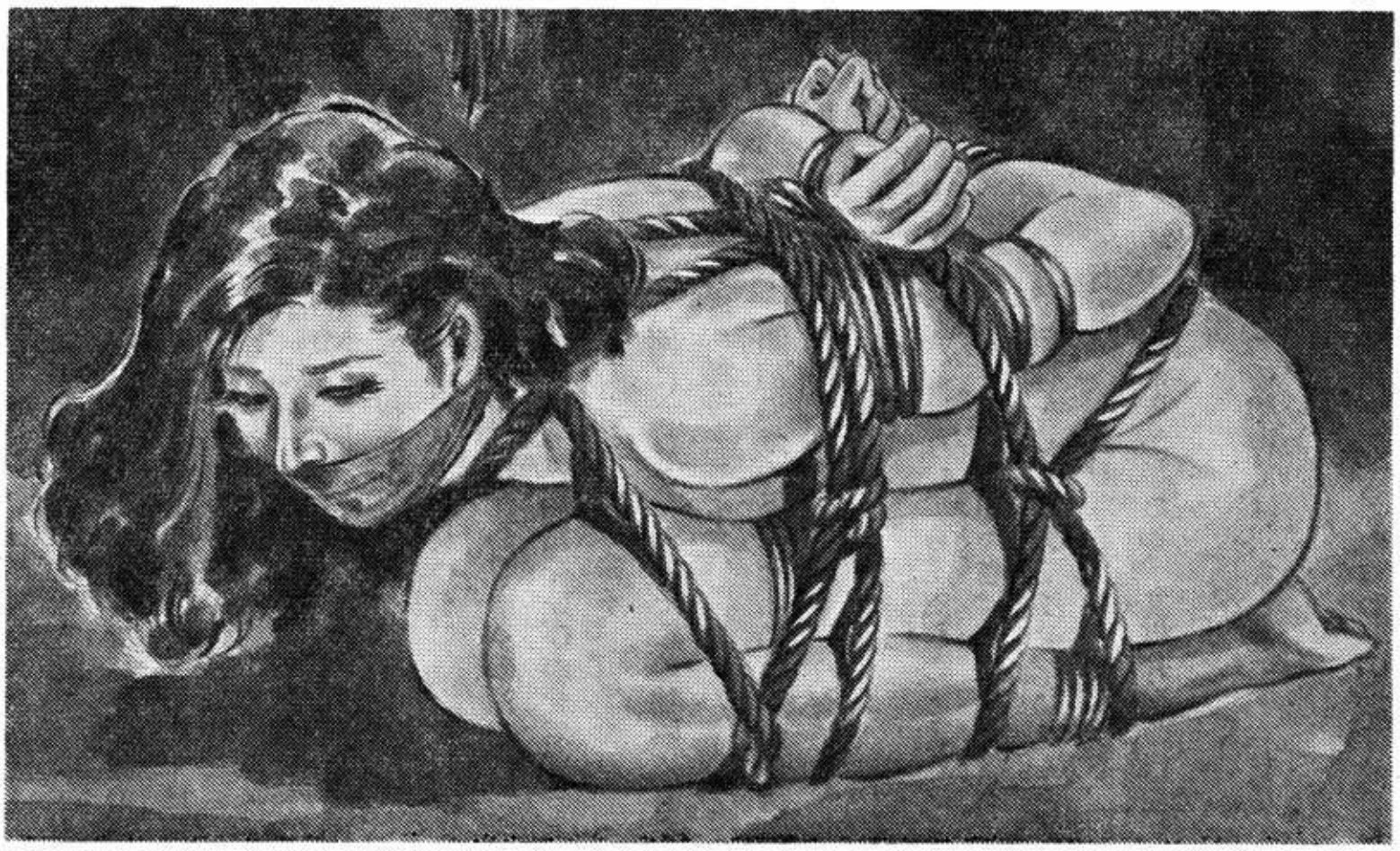
権三郎という悪漢が、捨女という美人をさらう所。

理不盡にも掌下（てもと）を摑みし其舉止（ふるまひ）に駭（おどろ）き恐れて、噫（あな）やと叫（さけ）ぶを権三掌を振除（ふりはら）はんとす、権三郎は聲立（こわだて）られじと、己が頬面（つら）を包み隱せしが、手拭片手に外し拿（とり）て、押へし捨女の唇（くち）へ廻して、端（さき）を首元（うなじもと）にて引結び、

なおも悶（もが）く「捨女の両手を背（そびら）へ押曲（まげ）て」、用意の縄で「直（すぐ）に背手（うしろで）に縛（しめ）からみ」つけてしまったのである。

草双紙にしては珍しく、猿轡をする描写が写実的である。

まず、男は女の口を押える。そして、さらに女に猿轡をすべく、自分が頬かぶりしていた手拭を片手で取りはずす。故に、先に女の口を押え



ていた手は、左手である事が、わかる（もしこの男が、ぎっちょだったら、逆になろうが……）。そして、さっと女の口の上から手拭をまわして、くび元で、そのはじを固く結んだのである。

明らかに、別につめ物などはない、普通の猿轡である事がわかる。

「――云へども女は唇を悶きて、掩ひたる掌を振除はんとす」のあたり、もがく女の体の温み、やわらかさ、丸味等も感じられて、もつれる男女の姿が躍如として、うまい。

今ここで、ふっと私は思ったのであるが、女とは、縛られ、猿轡をされて、もがくのが一番、ふさわしい姿ではなかろうか――。

さて、もう一カ処、この作品から、猿轡をピックアップしてみると、小次郎信行という豪の者が、鳥会女という悪女を捕える所に、その描写がある。

有躰に白状に及ぶべしと、問へども鳥会女返答なく、尚も身を悶きて逃れんとするを、信行は手元を緩めずして、豫て用意せし麻縄取出し、汝には穿鑿すべきの筋もあれば、縛り置かん覚悟をせよとて、両腕押曲げつつ膝下に捻ぢつけ、強く縛めて塀の押への木につなぎとめ、小賊の死骸につけたる処の、手拭とりて鳥会女の口を掩ひ、聲を立てさせじと厳しく引結び、

手拭を、単に女の口を掩い包むようにして巻き、後頭部で結んだ型式の猿轡である事は一読して、すぐわかる。ただこの場合だと、既述の如く、男女のSMムードを高める時の道具だて（それも極めて重要なる）とするならばともかく、「聲を立てさせじ」というつもりなら、いくら「厳しく引結」んだとしても不完全であろう。女の頬は小さいとはいえ手拭のはしを「厳しく引結」ぶためには、ある程度の布の余裕をみなければならない。二重では、どうしてもそのゆとりが出来ず、ために、この場合も、やはり手拭は一重にして女の口を掩ったと考えられる。それ故に小次郎信行が鳥会女にした猿轡は所期の目的に対して不完全であったと断定せねばならない。さしもの勇士信行も悪女の妖しい美しさに思わず、あわててしまったというところか……。

○　柳下亭種員
（しらぬいものがたり）
『白縫譚』

これも有名な草双紙である。いや知名度においては前記の『神稲水滸伝』以上、全草双紙中、第一であろう。これまた、長篇も長篇初篇は嘉永二年、そして明治十六年の柳水亭種清作になる第九十編で終わっている。『白縫譚』については語りたい事が沢山あるが今はそれが本旨でないので、いきなり〝猿轡〟を楽しもう。

照葉という美しい娘が、或尼寺にかくまわれている。それを知った土地の悪漢、さっそく舌なめずりしつつ押しかけて、照葉をさらってしまう。照葉の侍女、雄浪は、照葉をとりもどすために後を追って行く。しかし、あわれ雄浪は、その時、鳥目で目が不自由であった。が、彼女は照葉の救いを求める声をたよりに、必死で追うのである。

故に、まだ最初の頃は、何故か照葉は猿轡をされていない事が、わかる。ただ縛られているだけである。

「照葉さま、照葉さま。どこにいらっしゃいますか、雄浪がお助けにまいりました」

「おお、雄浪。私はここに――」

いえど照葉は身も叶はぬ、羽翼絞なる縛縄。身の自由なる雄浪は又、聲のみ聞き居る眼無し鳥。

対句的に、うまい表現だ。そして、あっちこっち探しさまよう雄浪を見つつ、

悪漢どもは頷き合ひ照葉に掛くる猿轡。

最初、照葉に猿轡をしなかったのは、彼女

の救いを求むる声を、わざと聞かせて、雄浪を、さそう手段であったのだ。

照葉がされた猿轡は「掛くる」であるから別に技巧は、こらさず、ただ手拭で口をきびしく掩い包むようにして後で結んだ型式か、或は、女の口を割るようにかませた型式などが考えられる。猿轡をされてから後、照葉はウンともスンとも言い得ないという表現が、この少し後で出てくるから、後者であるかもしれぬ。それの方が、防声の意味からいってより完全であろう。

さて悪漢は（本当に、こいつは悪い奴なのである）ウロウロ探す盲目の雄浪に「鬼さんこちら。手の鳴る方へ」よろしく、「イヤ、娘はこっちだ」、「イイヤ、あっちだ」と、さんざん、じらし、なぶる。雄浪は、からかわれていると思う、いとまもなく、必死で、さまよう。と、そのうち、悪漢どもが並べておいた石につまずいて倒れる。そこを、しめたとばかり一人の悪漢が、石を取り上げ、雄浪の頭をガッキと打ち割る。

「玉走る血潮諸共に、アッと叫んで揖と伏し再び起んと差伸す、右の腕を砂平（註、悪漢の一人）が、かた口より切落す」という無惨さ。

照葉は側に見ながらも、聲も出されず身も叶はず。

猿轡と縛り方のきびしさが想像される。

雄浪は呻き苦しみつつ「照葉様は、どこにいらっしゃいます。早くお逃げ下さい。早く……」と云う声も次第に弱っていく。悪漢どもは鼻先で、せせら笑いながら、雄浪の肩先に足を、ふみかけて押し動かし、「たかが女の分際で生意気な事をしやがるから、こんなざまになるんだ。サア、もっと立って相手になれ」と後へ、どうと蹴倒す。そして今度は黒髪をつかんで引き起こし、「お前を何時までも苦しませて置きたいが、娘をしっぽり抱いて寝る予定がある。残念だが、この世のいとまをとらせてやろう」と、雄浪の胸に足をかけ、とどめの刀をグサッと、さし通す。

「片手ながらに虚空をつかみ、苦しみ悶へ息絶へしは、眼も当てられぬ有様なり」雄浪はかくして死んだ。

何と可哀想な女なのだろう。私は読む度に落涙を禁じ得ない。

草双紙の持つ美しい残酷味を、既に第二回の山東京伝作『本朝酔菩提』でも鑑賞したが『白縫譚』の、この個処も、飛び散る鮮血、苦しみもだえる女。そして死という極まりない残酷の中に、掬すべき詩的ともいうべき美しさが、ただよっている。（私の要約が下手で、上記の文章からは、それが少しも感じられないかもしれないが……）。

われわれは、かかる残酷味を鑑賞し、理解し得た祖先の繊細なる美意識を誇りに思うものである。その精神的エクスタシーを愛する能力が、どうして現代においては薄れているのであろう。昔の残酷美は今日では、ただ残虐、それも残虐のための残虐へと悪化して行くような気がしてならない。例は一寸、不適当だが、猿轡と今、流行の浣腸にしても、SM界では浣腸の方が、比べものにならぬ程、人気があるが、一体どっちが美しいだろうか——。イヤ、これは我田引水となってしまったか……。お許しあれ。

では次。

ここは一軒の茶屋を、かねたる木賃宿。四五人の泊り客たちが、何やら大きな箱を持ちこんだ。女主人のお霜が、「何だか変だわ」と、いぶかる素振りを見た男達は、いきなり女主人の「腕捻上げ猿縛」。「まア、あなた方は、一体、何をなさるのです」。「エエ物言うな」と旅僧のなりをした泊り客の一人が手に持つ払子を口へ突込み。手拭にかう

巻きて、堅乎と結はへる猿轡。

女主人がされたこの猿轡は、防声上からはまさに完璧である。払子、あの短い棒の先に沢山の毛のついたものだ。これを、まず女主人は口の中に突っこまれた。かなり大きな口をあけなければならないだろう。そして、その払子を女の口に固定するために、しごいた手拭を棒に一巻して、女の後頭部で縛ったのである。それも「堅乎」と——。

もうこの女は、ただフワフワ首を振るだけであろう。

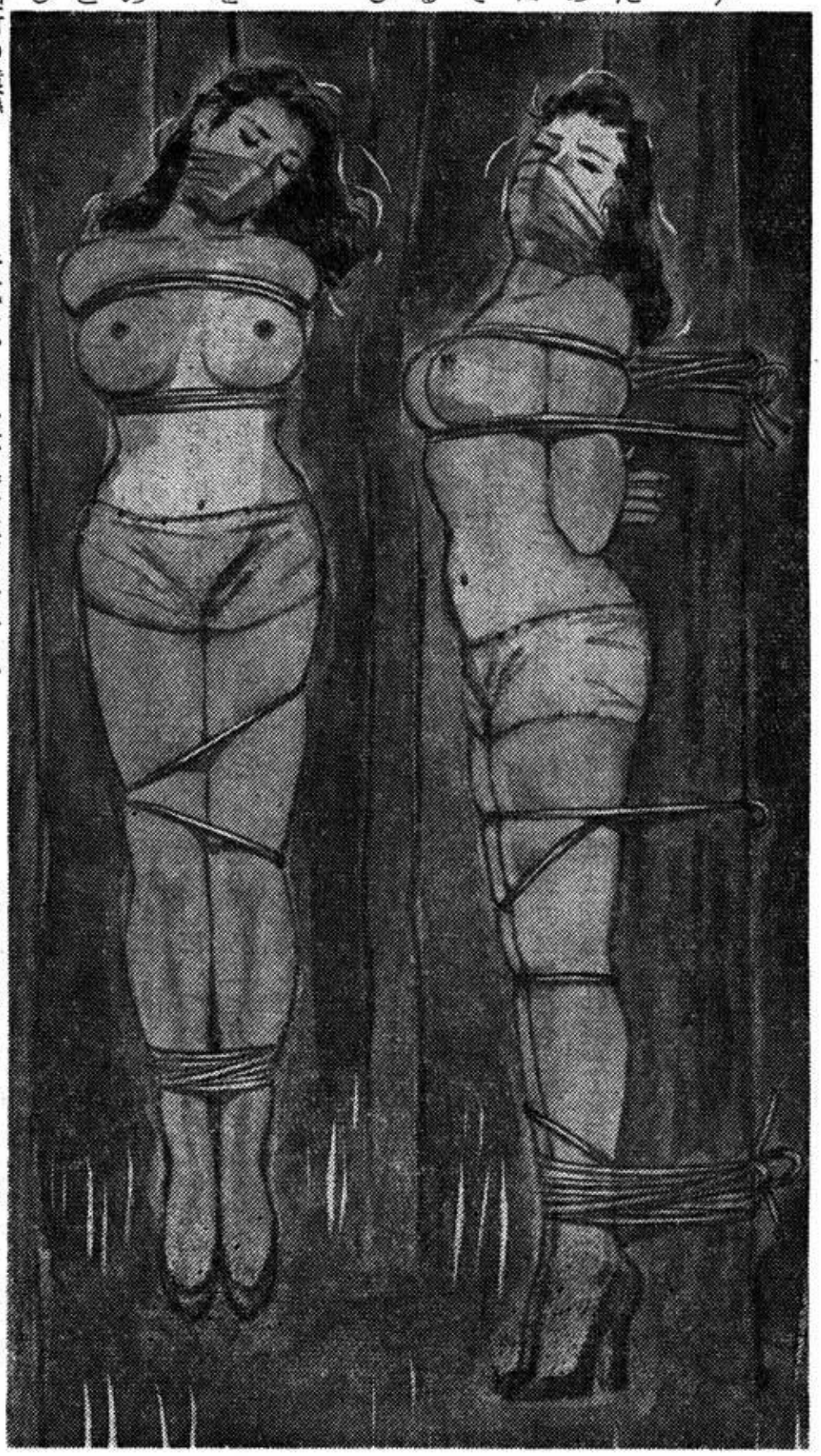
今まで読んで来た猿轡の中、つめ物としては、木の丸、或は手拭などがあったが、払子というのは、珍しい。その意味からいっても、この個所の猿轡は資料的に特記すべきである。

○　**二世柳亭種彦**

作者変る。

さて、翠という、悪人だが美しい女が寝ていると、正義の士が、ふみこんで来る。おどろいて逃げる翠の小腕を捻じ上げ、

衣桁に掛けたるしごきの巻帯、取って翠を厳しく縛め、柱に結付け泣喚く、聲喧しと手拭を、口へ捻込む其の手早さ。



一読してわかるように、手拭を丸めて、ぐいと女の口の中へつめ込んだ猿轡である。その上から、つめ物の手拭を吐き出させないための、もう一枚の手拭で掩うという動作が必要であるが、それをしたか否かは、わからない。一歩をゆずって、女の口の中に手拭を捻じ込んだだけでも、「泣喚く聲喧し」と止めた、男の目的は達せられたわけである。

夜の京都。お夏という美しい女が小ばしりにやって来る。追われてでもいるのか、時々後を見ては、走って来る。と、ある町角で女を、しっかと抱き留めた曲者があった。無念プロの追手は先まわりして逃げる女を待っていたのだ。男に抱きすくめられて女は、しきりにもがくが、

急る効なきかよわき手弱女、「誰ぞ助けて下さんせ」と叫べは何助（註、曲者の名）

喧(かしま)しと、お夏を股に引挟さみ、手拭しごいて猿轡。

これは、「手拭しごいて」猿轡をしたのであるから、口にかませる型式のものである。防声を主眼とする時は、当然、美しさより実質本位となるであろうから、その意味では効果的なこの型式を使用したのであろう。

お夏は、すぐ助けられる。曲者は、もんどり打って投げとばされ一目山随徳寺——。

その次のお夏の動作が可愛いい。

口縛られし手拭を、広げてお夏は顔を隠し、「ああ可い処へお前が来て」と、にっこり笑らふて足疾に

お夏は自分で、口を割るようにしてかまされていた手拭をはずし、その型式の猿轡であるから、細くしごかれてあった手拭をサッと広げて、自分の猿轡姿を恥じたのか、顔をかくして、にっこりしたのである。

いくらM女性でも、その女が、すれていて「サア、どこからでも縛ってこい」という感じの女は、縛ったり猿轡をしたりしてイジメても少しも面白くなく、真実のSM的感興をもり上がらせるには程遠い。と経験豊かなSM界の先人たちは言われている。たしかに、そうであろう。縛る度に、恥かしさに体をちぢめ、猿轡をされた顔を美しく伏せる（極端では興ざめだが）、このつつましやかな女の感情に、S的男性の血は一そう、たぎり立つに違いない。このお夏は、奇クのグラビヤを飾る女性たちのように、まさにS的男性好みと言うべきか。

さて、正義の士が悪人どもを、もう少しでやっつけようとした時、人質をとられていた事を知り、鈍る。現代の映画やテレビでも、よく使う狂言回しの手段である。

今しも、「是非とも、ここで勝負しろ。さあ立ち会わぬか、腰抜けめ」と正義の士に、つめ寄られた悪党どもの親分、せせら笑って「何とでもほざきをれ、野郎ども、あの女を此処へつん出せ」と、どなる。

呼べば勝手の戸を開けて、引出したる優(やさ)女(おんな)。誰ぞと思へば無惨にも、妻の揚羽(あげは)に縄掛けて、口さへ縛りて物さへ言はせず、唯涙のみはらはらと落ちて悲しき揚羽の顔。

思いきや正義の士、ここで猿轡姿で縛られた美しい妻に会おうとは。という所である。この猿轡は一体、どんな型式のものなのか？わからぬ。しかし文字この文章からは一寸、わからぬ。しかし文字面でなく感覚的に考察してみると、口中につめ物をし、その上から手拭で縛った本格的な猿轡ではなかろうか。

悪人どもは、女に猿轡をするのに充分な時間があった筈である。そして、この場面、防声を第一の目的としている。故に、女の口を割って、かませるよりも、もっと合目的である、つめ物をして、それを掩う型式、この猿轡を採用したであろう。

女の口に、つめこんだ布は、いずれ悪人どもが使用した、所謂、醤油で煮しめたような手拭であろうが、もしそれが、黄色く、且つ茶色に汚れた越中ふんどしででもあったら、SM的に、もっと面白いのだが——。いや、女の口に、つめこまれていたのは、読者諸兄姉の、あなた方の、さるまたやパンティであったと読んで、ジーンと来るSM的感興にしばらく、ひたろう。

この美しき女揚羽は一旦、助けられるのだが、又しても猿轡をされて、読者を楽しませる身の上となる。

彼女は身ごもっていた。孕み女の腹中の子供は或種の妙薬だと目をつけた悪者どもは、揚羽をさらう。そして誰が研ぐのか出刃庖丁を砥石にあてる音がヒンヤリと気味悪く彼女の耳に聞こえてくる。ああ、

神も仏もなき世かと、怨む言葉も出で

ばこそ、口には綿の猿轡、手足は縄目の食入りたる、其痛さより胸の内、張裂く如く歎けども、助くる者のありをも覚えず。

面白い。「口には綿の猿轡」だというのである。綿を大きく引きちぎり、鼻をつまんで無理やり、女の口を開かせ、ぐいぐい、それを、つめこんだのであろう。さぞ、「まだ、はいる、もっと、つめろ」とばかり、彼女の口に押しこんだのであろう。綿を一杯、口にして揚羽は大きく口を開いたままだったのだろう。用心深い悪者の事だから、その上から手拭で、綿が出ぬよう覆い、ぐっと後で強く結んだかもしれない。いやもう、これは完全なる猿轡だ。

綿の猿轡を空想的な所産として、片隅に押やる事なかれ。

春川ナミオ画
分譲用秘蔵版
〃女体の下敷〃
〈M画決定版〉略号〈ぬけ〉
大中版印画紙焼付　七枚一組　三五〇〇円
☆M派マニアなら、是非！この一組を。
一、女の股間で圧死
二、行水の美女の尻
三、臀部の下に喘ぐ
四、人間ハンモック
五、逆エビで蝋燭責
六、臀下の人間椅子
七、豊尻の下の法悦
（以上七葉のM画）

われわれは今、ロマン派生氏の達意の文章により、それを、まのあたり、する事が出来るのだ。即ち、『縛りの美学』（十二月号）一四一ページが、それである。

柱に立姿で縛られた女は、「口には十分、脱脂綿を詰めた上、粘着テープを貼りつけてある」というのだ。〃口には十分〃とか〃詰めた〃という表現が極めてSM的感興をそそる。ただ惜しむらくは、縛られた女の目が白長方形で、かくされ、グラビアでないので印刷が不鮮明であり、折角の美しい女の表情がわからぬ事だ。しかし、ロマン派生氏の麗筆と、きれいな肉体の女を見ていると、感じるのだ、充分にSM的興奮を感じるのだ。

話は一寸それるが、ロマン派生氏は「ロマン派のサジズムは、憎たらしいから、いじめるのではなく、可愛がりたいから可哀そうな状態にしてしまうわけである」と、氏のSM哲学を述べておられる。まさにロマンチック・サディズムの神髄である。全くその通りである。私も双手を挙げて賛成である。私もロマン派の一人だ。

○　**柳水亭種清**

再び種清の作となる。

場面は変わって稲次という女がいる。あ、一人の曲者がしのびこみ「あれっ」と声を立てる稲次にとびかかるや、

用意のはや縄扱き、諸手を縛り手摺に結付け、猿轡を食ませ置き、

という状態にしてしまった。

この場合、やはり防声が主であるから、猿轡は、手拭を細くしごいて女の口を割るようにして、くわえさせたものとみるべきであろう。そう考えた方が「食ませ」の表現が生きてくると思う。

そろそろ長かった『白縫譚』も終わりに近づいた。

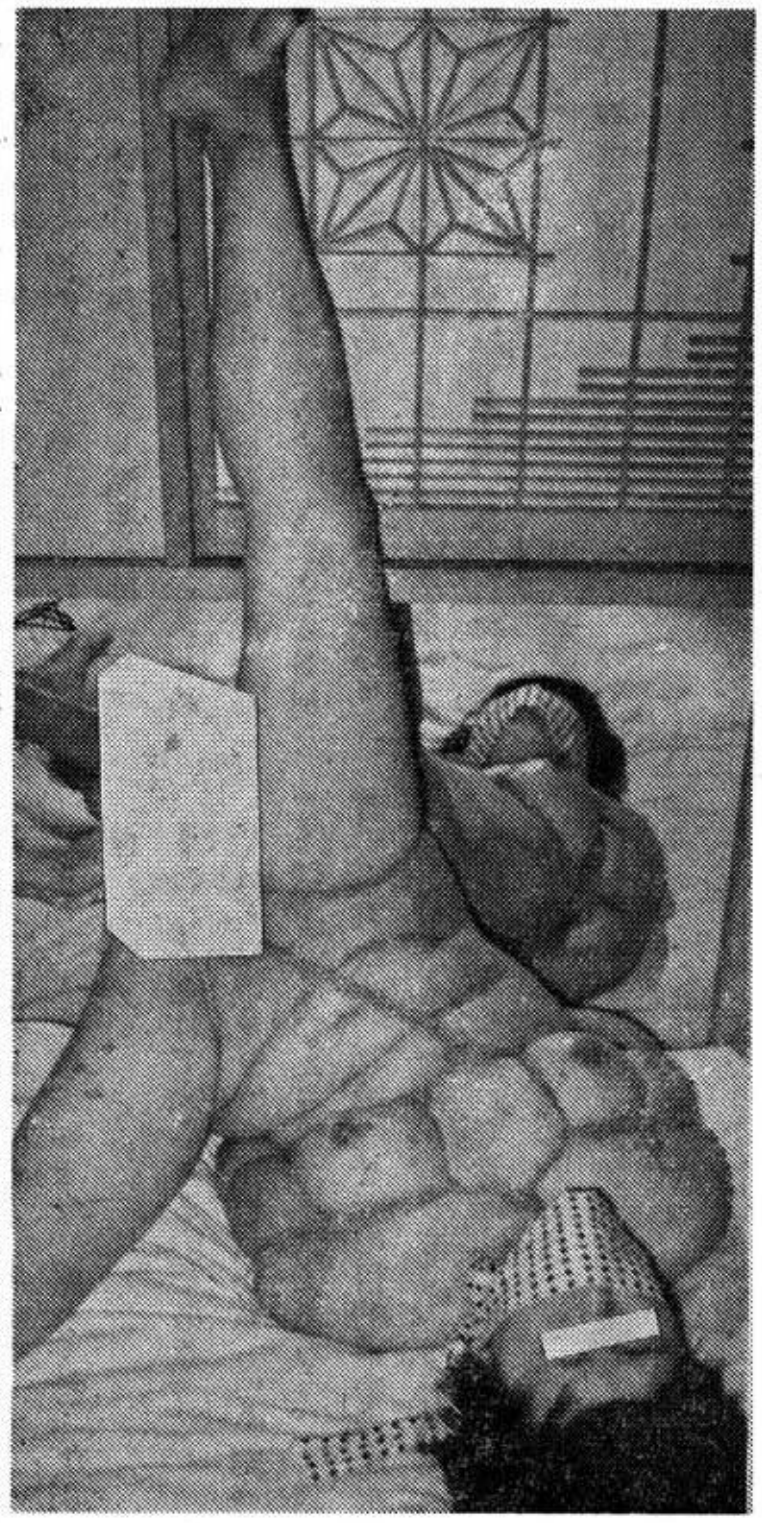
悪人の夫婦が捕えられる。そしてとうとう男女二人に轡を喰ませ、厳しく括って引きまわして連れて来られるのである。

やはり「喰ませ」の猿轡だから、口を割って手拭を、くわえさせた型式であろう。〃猿轡〃と書かず、「喰ませ」の目的語を、ただ一字〃轡〃とした所が、うまく、それ故に女のされている（強いて女だけに焦点を、しぼろう）猿轡が馬のくつわのように、つまり手拭をかます型である事が、よく理解できるのである。

――（つづく）――

縛りの美学（最終回）

ロマン派生

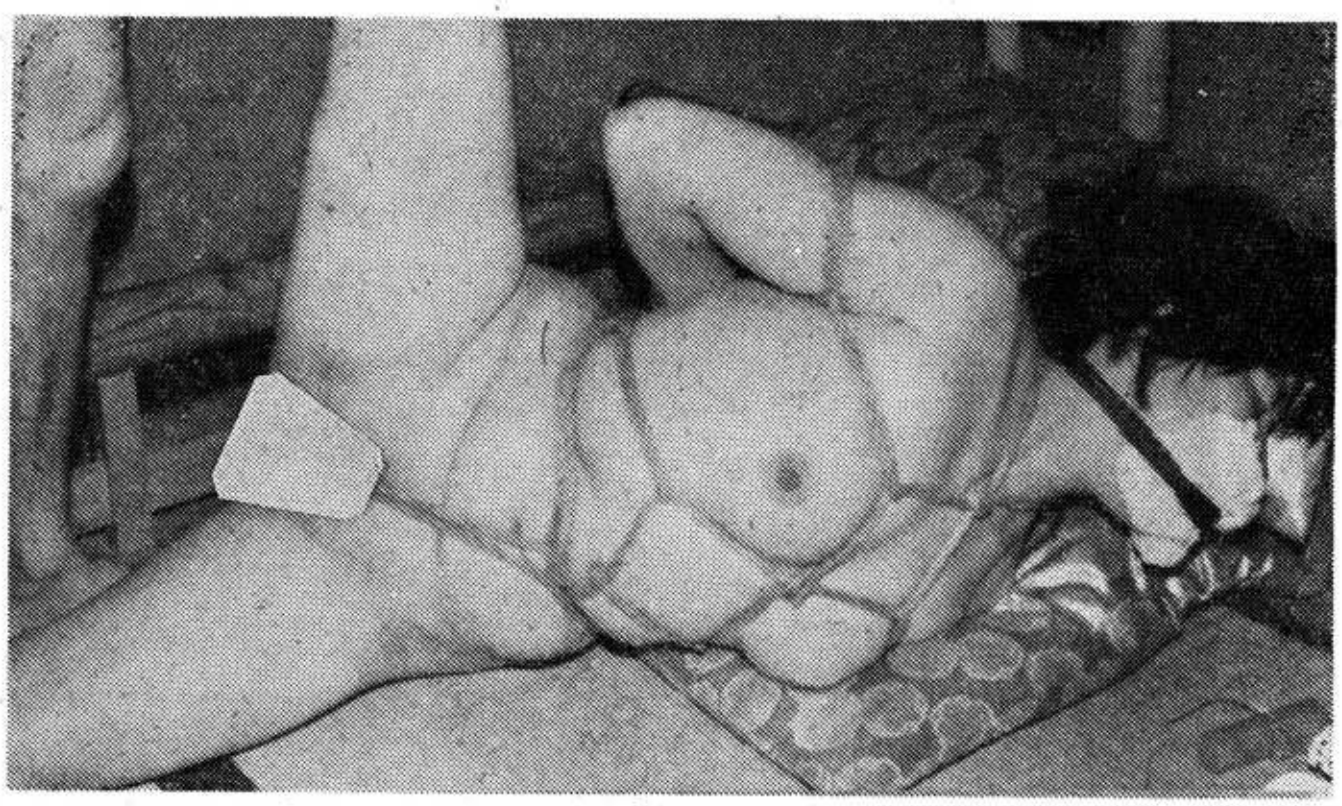


毎月チビリチビリと半年にわたって書き続けた、この怪しげな美学も今回で一応の終わりとなるが、これで完結という、わけではない。『縛りの美学』が、こんなチャチなものであって良い筈はなく、もっともっと奥深いもので、私はほんの入り口を齧ったにすぎないことは良く承知している。

本来ならば、私なぞより、はるかに造詣の深い辻村氏あたりが書いてくれれば、本格的な美学論議が出来ると思うのだが、氏が休養されていることは誠に残念で、その間、鳥なき里の、こうもりよろしく、私なんぞが出しゃばって生意気なことを言っているのは、いささか気がひける次第である。

一方、奇クを読むほどの人ならば誰でも、それぞれ自分自身の美学がある筈で、それを尺度に私の美学に対して異論を唱えてもらい百家争鳴の状況を期待したのだが、どうも私の美学が貧弱なので議論を吹きかける気も起きないのか、さしたる論議も起きないのが、いささか残念である。いつの日か、また十分な資料を揃えて、にぎやかな論議が呼び起こせるようなものを書いてみたいと思う。

残り少なくなった資料の写真を見ながら、あれこれ、書き足りなかった部分が気になるが、くよくよしても仕方がない。せめて最終回を大いに盛り上げて有終の美を飾りたい所だが、どうも落穂拾いでは、あまり盛り上が



りそうもない。そこをなんとか頑張りますから、御叱正はお手柔らかにお願いしたいものである。

十　足挙げ責め

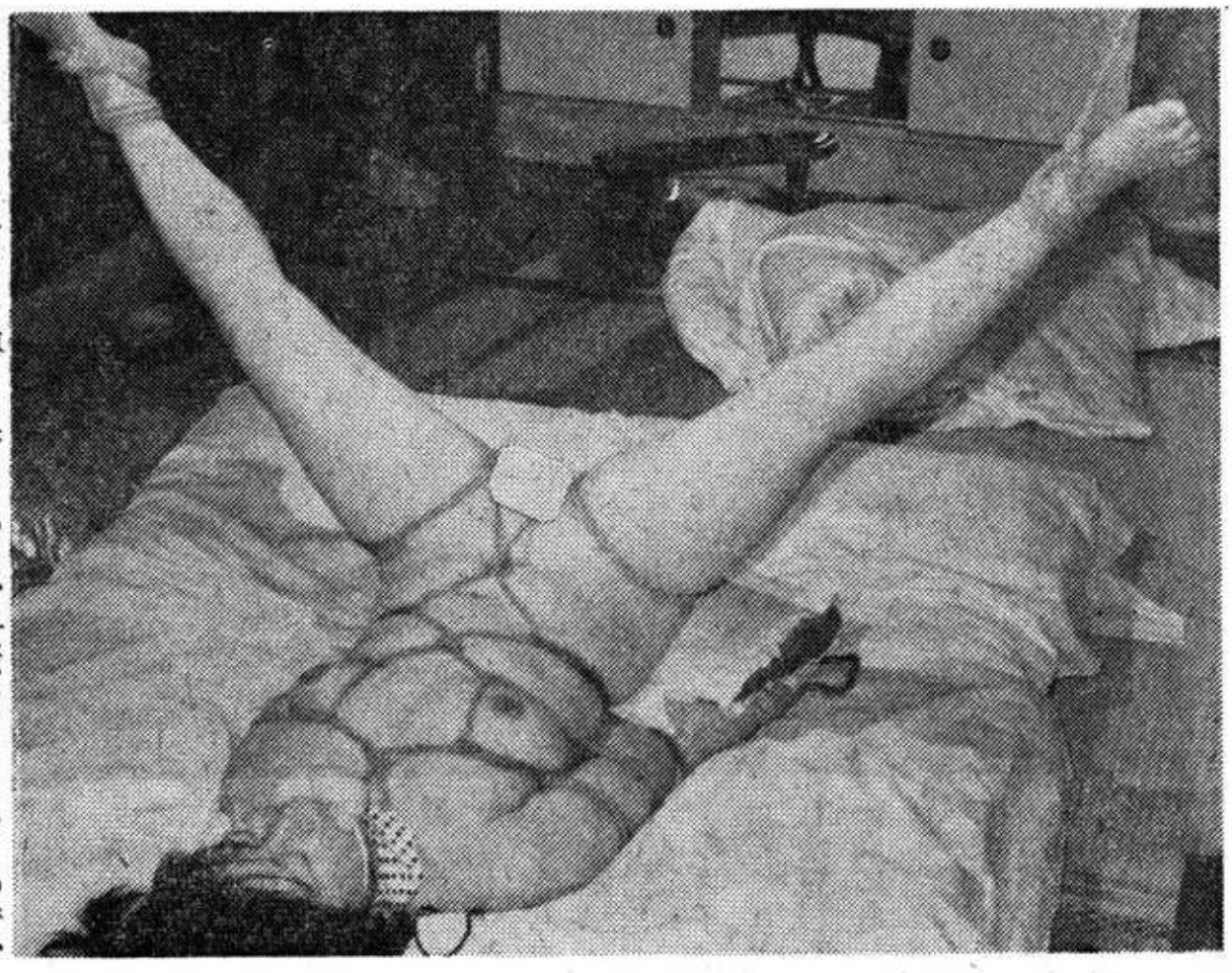
足挙げ責めではなく、足挙げ縛りと呼びたい所だが、今回、御覧頂く写真の一部は足を縛らず、自分で足を挙げたものがあるので、苦肉の策で足挙げ責めとした次第である。

先ず写真①を見て頂きたい。亀甲縛り股間縄をかけられたみさ子が、自ら高々と片足を挙げているが、これは何も、みさ子が彼女の趣味で挙げているわけではなく、写真の白紙で覆われている部分に、秘密があ る。と、もったいぶっても始まらないので種あかしをすれば、私が、ここに火のついたローソクを持っていて、挙げた片足を下ろそうとすると、ローソクの火で、みさ子の太腿が焦げてしまうという仕掛けになっている。

みさ子は長い間、挙げさせられた足が、だるくなって、しきりに許しを乞うのだが意地悪じいさんに変身したロマン派生氏は一向に許してくれないのである。「ああ、可哀そうな、みさ子の運命は、いかに」というわけで、これはプレイとしては大変、面白いのだが、美しさという点では問題がある。やはり足首は、ちゃんと縛って吊り上げる方がよい。

女が自分の意志で、自分の身体を一定の状態に保っているのは、いじらしいとは思うが若しそれを押しすすめるならば、女体に何も縄などかけず、ビストルか何かで脅迫して、こちらの思いのままの姿勢をとらせれば良いわけで、それでは始めから縛りの美学は成り立たなくなる。

それほど抵抗するわけでもない従順な女を



ることさらにきびしく縛り上げるのは、女が自分の意志では自分の身体を動かせない状態にしてしまうことに美を感ずるからである。そんなわけで、写真①のような責めは、美学上は必ずしも好ましいとは、言えないわけであるので、となっている。

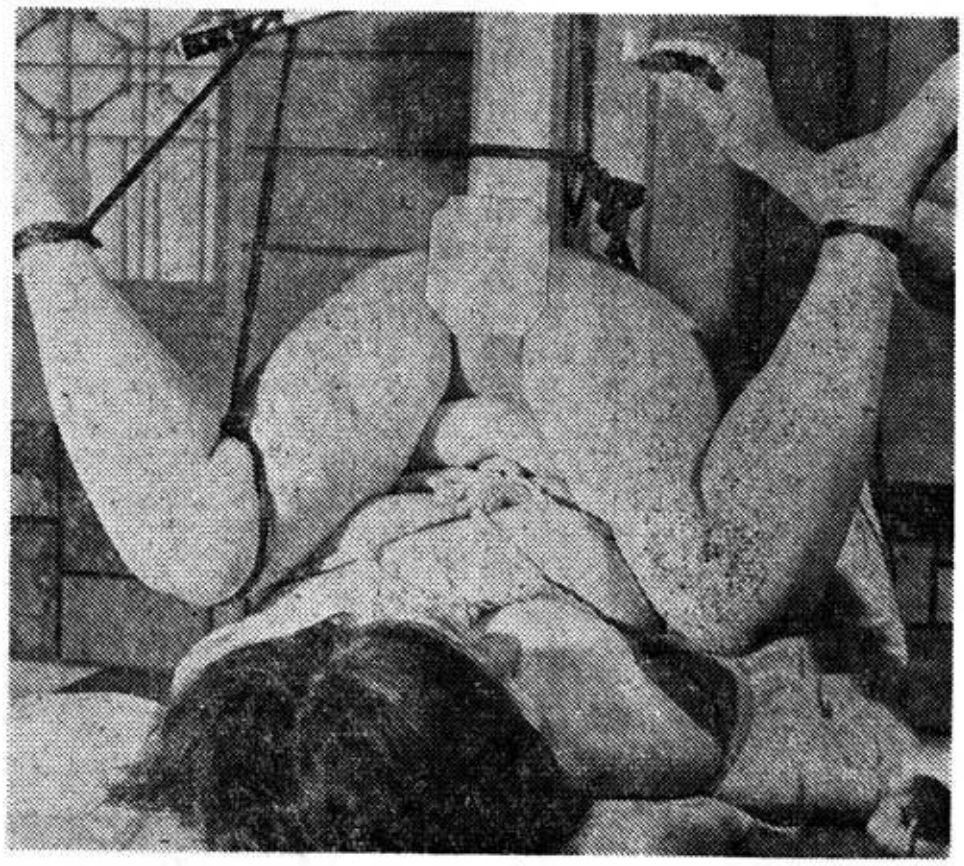
片足挙げは当然、シンメトリではないわけで、そこに動きの要素が出てくるのだが、動きの美しさというものは、写真に固定してしまうと、この次に述べる両足挙げに近い形

写真②は、足首が写っていないが、これは、またまたロマン派生改め、意地悪じいさん（それほどの男ではないが）が、みさ子の足首をつかんで引っぱり上げている所である。

先に述べたように足首を縛っていないという点では、写真①と同罪だが、みさ子が自分の意志で挙げているのではない所が幾分か、ましである。

この写真は縄の締まり具合といい、腕の角度といい、鼻口を覆うパンティの息苦しそうな様子といい、まずまずの出来と思う。こんな風に側臥位にして片足を挙げるのは割合と良いポーズで、美しい写真がとれることが多いから、是非、試みて欲しいものである。

写真③は片足挙げといっても、一方の足をかなり頭の方に持ち上げ、もう一方は横に開いて縛ってこの次に述べる両足挙げに近い形



手段が欲しくなるわけである。

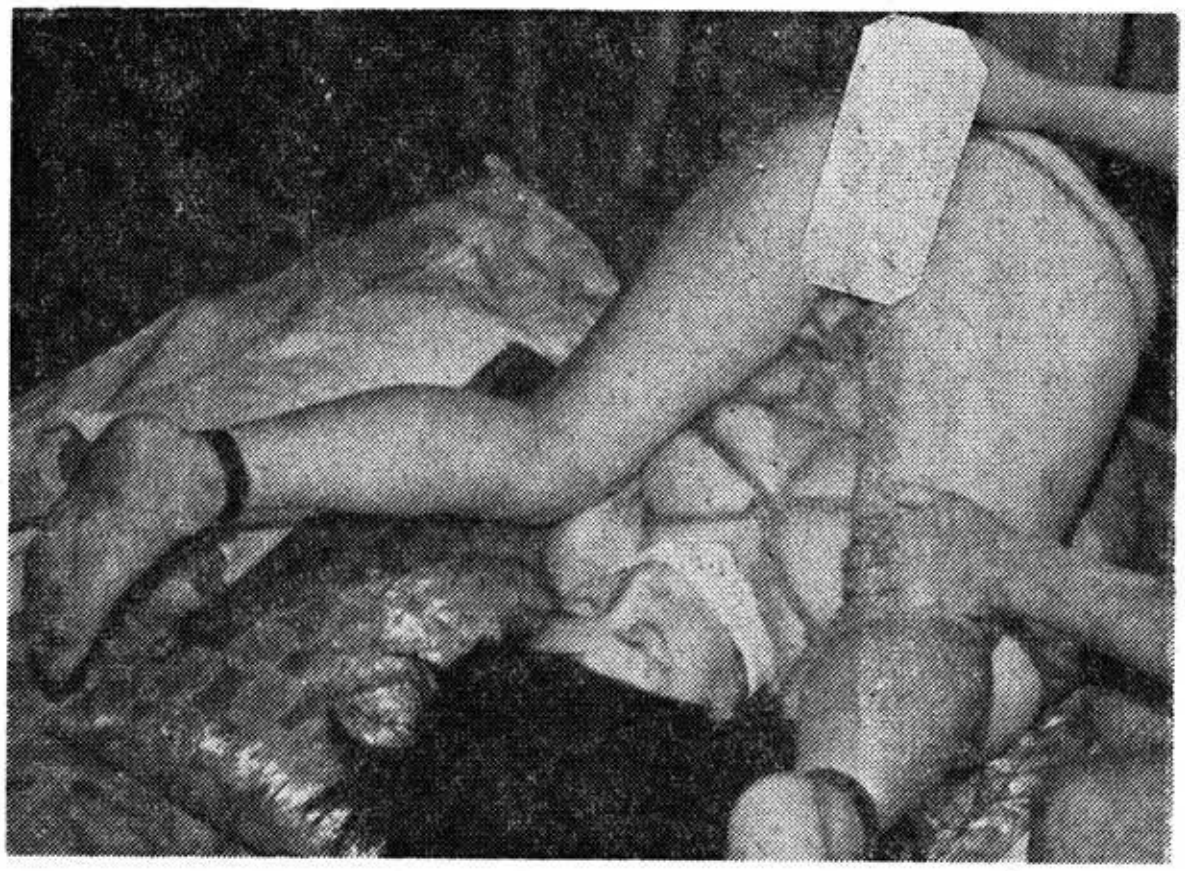
そして、その固定の手段であった写真が、いつのまにか、それ自体が美の対象と、すり変わってくる。そんなわけで、写真は美学の対象の一部にすぎないのだが、どうも私は今まで「写真における縛りの美学」だけを、語りすぎたようだ。8ミリやビデオにおける縛り文学における縛りの美学も当然、存在するのだが、今更そこに気がついても仕方がないので、このまま話をすすめることとする。

写真④は両足挙げ縛りである。片足挙げに較べるとシンメトリーの安定感が、はっきり出ているが。大きく開股して鴨居から吊り下げてあるが腰の下に枕を二つ入れて十分、持ち上げているので、交叉した後手の手首は、さして痛まないし、足首にも、それほど体重が、かからない。

割合と楽な姿勢ではあるが、殆ど身動きは出来ない。実をいうと、この時、長い時間このまま縛っておいた所女囚みさ子はスヤスヤとお眠り遊ばされたのには驚いた。長時間の責めに疲れた故もあろうが、かのロマン派先生に対する、みさ子の信頼感の表われ、（別の言い方をすれば、マンネリズムということにもなるのだが）とも言える。しかし、よく世間で「ピアノでもバイオリンでも、聴いている人が眠くなるようならば相当の腕前だ」と言うように、女囚を拷問中に眠らせるようならば、一かどの縛り手ということになる。

これは余分な話なので先にすすめよう。みまうと損われるような気がする。これは、むしろ8ミリとかビデオにおまかせした方が良いように思う。

ここで、ふと思いついたのだが、私の美学は、どうも「写真における縛りの美学」に片寄っていた。縛りの美学は本来は何も写真の上だけに存するものではなく、実際の縛られた女体そのものが美の根源なのだが、それは舞台芸術や音楽のように、瞬間々々に消えて行ってしまうものだから、何等かの固定化の



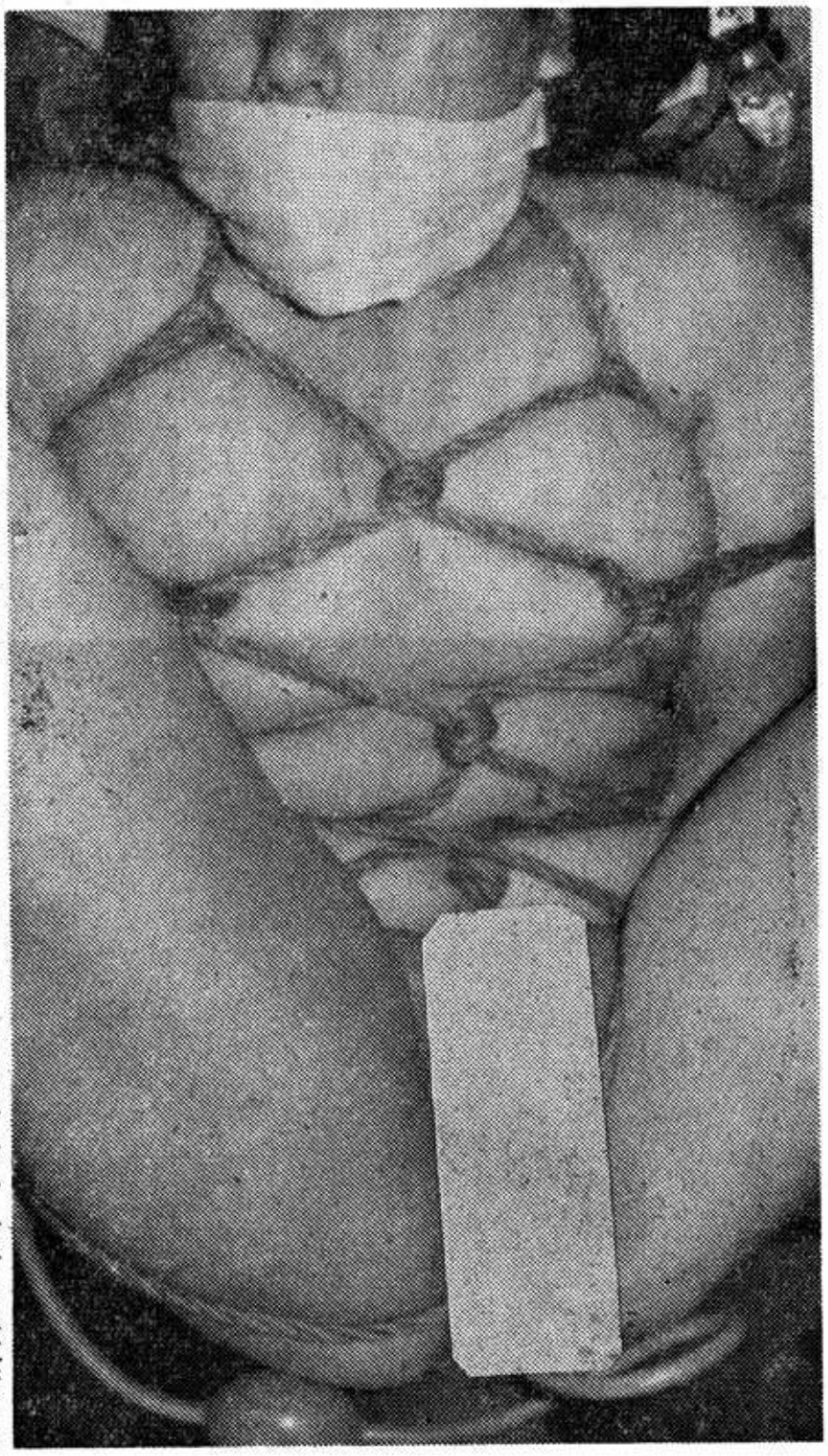
さ子が口にくわえているのは、スポンジのフワフワ・ボールとかいうものに穴をあけて、ひもを通したもので、口に半分、噛ませて、ひもでくくってある。時には、すっぽりと口の中に詰め込んで使うこともある。

写真⑤は同じポーズを反対側から撮ったもので、アングルにより、足の挙がり具合が大分、違って見えるものである。この両足挙げの、まっすぐに伸ばした足は、ある意味ではむしろ健康な美しさを感じさせるが、SMの美しさというものは、どちらかといえば、もっと屈折した不健康さの中に存するように思う。

美しい体操の選手の洗練され切った動きや肢体は、もちろん、この上なく美しいが、SMの美は、それとは、かなり異質のものだと思う。そこで、この写真④⑤は、あまり整いすぎているという所が欠点かも知れない。

さて写真⑥は、いかがなものであろうか。これも両足吊りの一種だが、膝を曲げて下肢がW字型に開かれている。これは写真④⑤に較べると、文字通り屈折して、かなり不健康な味わいが出ていると思う。

シンメトリックな安定感がある一方では、激しい動きも感じられよう。ローソクのしたたり落ちる度毎、わずかに動かせる尻を振って身もだえしている可哀そうな、みさ子は一体、どうすればいいのであろうか。適当な写真が、この一枚しかないので、多角的に見てもらえないのが残念だが、このポーズはロマン派屋の推奨品なので是非御試食頂きたい。



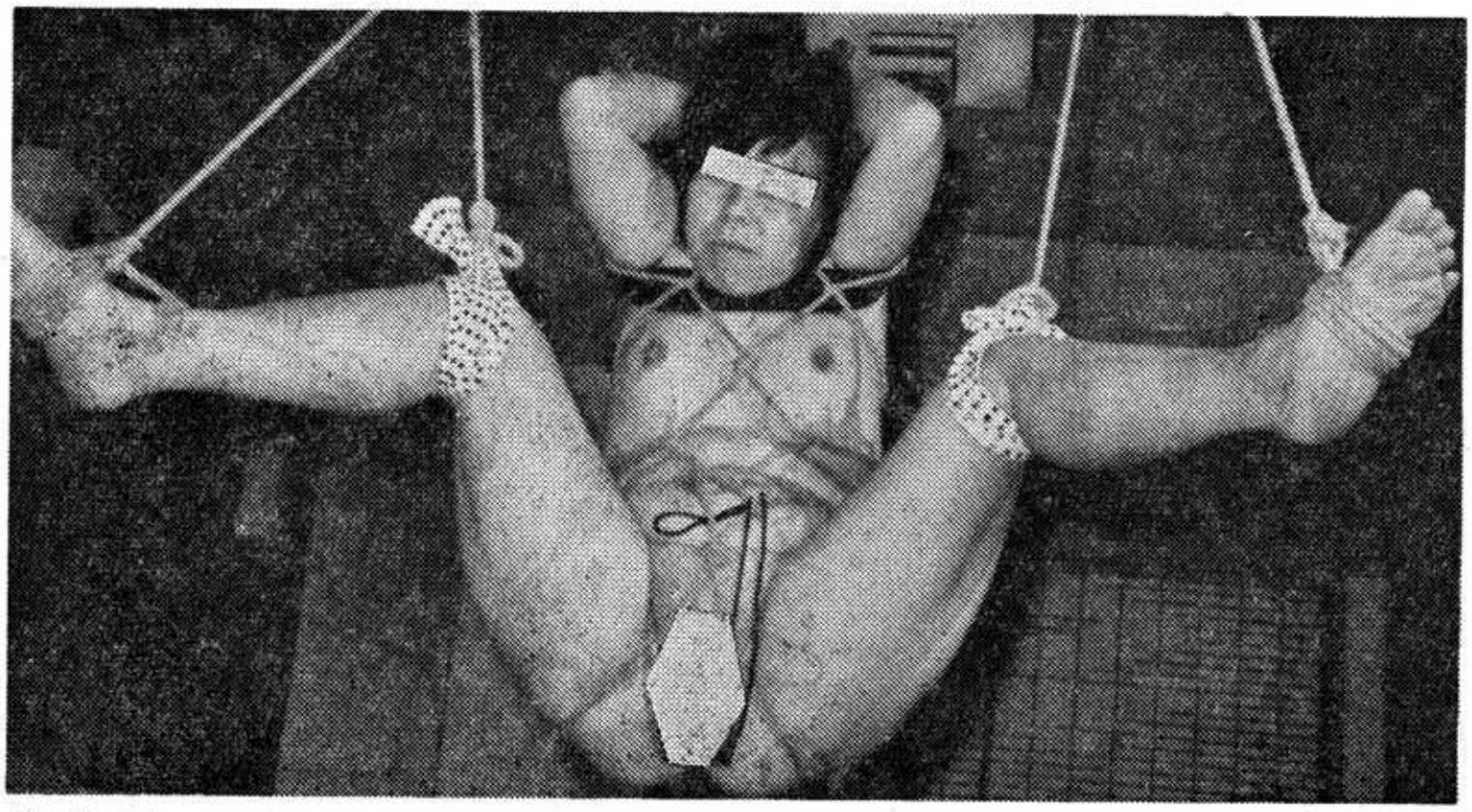
十一　その他

その他などという項目の建て方は、いかにも楽屋裏がうかがわれてしまいそうで情けないが、あまり見栄を張らないこととしよう。

写真⑦は⑥の足首を縛った縄尻を頭の方に引っぱれば出来上がりだが、ひそかに私淑している美濃村氏は、これを逆富士縛りと呼んでおられる。私には逆富士でなく富士山そのもののように見えるのだが、余計な詮索はしないで素直に逆富士縛りと呼ぶことにする。

この逆富士縛りも、二つ折りにされ、身動き出来ない女体を、思いのままに責めさいなむのに大変、都合が良いし、適度に緊張した女体が仲々美しいポーズではある。

写真⑧は⑦のポーズをクローズ・アップした所で、縄の喰い込み具合と太股の張り具合を御賞味頂ければ幸いである。光線の具合がフラットで、みさ子の立派な乳房が目立たなくなってしまったが、これは、もともとがカラー写真のため、と、またまた弁解が多くて



申しわけない。

さて次の写真⑨は変わった宙吊りだが、変わっていることだけが取り柄で、あまり良い写真とはいえないのが残念である。せめて後手に縛っておけば良かったと思う。女体を宙吊りにすることは相手に、かなりの苦痛を与えるものだし、下手をすれば怪我をさせてしまう怖れもあるので、無理なことは出来ない。特に、こちらが一人で相手がグラマーな女体の場合は、無理をして危ない目に合わせては不可ない。

吊りは、なるべく加害者側が二人で、被害者は、やせっぽちか、小柄な女の方が、安全に上手く行くようである。グラマーには、グラマーにふさわしい縛りがあり、やせっぽちには、やせっぽちに適した縛りがある。それぞれの美しさを十分に引き出すのが、縛り上手というものである。

縛り上げられて吊り下げられた女体は、それが逆さ吊りであれ、駿河問いであれ、ぎりぎりの緊張感と、哀れな残酷な美しさが強烈に放散するのだが、残念ながら、お見せ出来るような写真がないので、吊り責めについては語ることが出来ない。

四十九年九月号に「あるSMプレイの呼びかけ」と題して、主に吊り責めについて書かれた香川紘一郎氏あたりに、もう一度登場して頂いて、うんちくを傾けて頂きたいものである。

さて、勝手に他の寄稿家の名前を持ち出して責任回避をし、ハイサヨゥナラは、いささか、ずるいようだが、すっかり種が、つきてしまったので、しばらく休眠させて頂くことにする。

長い間、我慢強くおつき合して下さった読者諸賢と、少なからぬ誌面をさき、投稿した写真を一枚残さず掲載して下さった編集部の御好意に心からお礼を申し上げる次第です。

また、きびしい縛りに耐え、素晴しい肢体を惜しげもなく、さらしてくれた佐野みさ子さん、本当に御苦労様でした。文中で女囚みさ子とか、奴隷みさ子などと無礼な言葉遣いを、ふんだんに用いたことは、文字通り言葉のプレイなので、お遊びとして笑って許してくれるものと思っています。

また『縛りの美学』は形の上だけに存するものではなく、むしろ、心の問題の方が大切だということは十分に解っているのですが、心の問題に取り組むと、必然的にプライバシーに、かかわったりするので、あえて、その点は避けて、もっぱら形の上だけに問題を限定しました。この姿勢に対して当然、御批判があろうかと思いますが、私としては当分、この線を崩さないつもりです。これから先もプライバシーにかかわらずに書けるような題目があれば、また書かせて頂きます。

僕の青春の告白

年上の女とのSM情事

青山健一
志羽利也・画

五年前の僕が二十才の時の出来事です。

今思えば、ハハーンとニンヤリするのですが、当時の僕には、納得の出来ない、これが変態なのか、としか思えなかったのです。

夏休みの学生アルバイトで、オシボリ屋へ行ったのです。そう、レストランや喫茶店なんかで手を拭く、あのオシボリです。大きな洗濯機が三台と、そのオシボリを自動的に巻き、ポリエチレンの袋に入れるオートメーション化した機械を備えた会社でした。

近所の奥さん達が常時、五人か六人、アルバイトで働いています。あとは社長とその姉がいて、社長が配達をしているのです。

朝、出来上っているオシボリをライトバンで持って出て行き、昼頃、使い終ったオシボリの山を持って帰ってくるのです。まだ若い一人者の社長は、昼食をしてから、又新しいオシボリを持って出て行き夕方帰ってくるのです。僕の仕事は、社長の姉さんと山積みにされた使用済みのオシボリを、ゴミやポリエチレンの袋と分けて、洗濯機で洗うのです。

業務用の大きな洗濯機の前は、二坪位の広さがあって、そこにオシボリの山があるのです。真夏の暑さで使用済みのオシボリは、いやな匂いがするんです。

社長の姉の英子は、アルバイトの奥さん達に時々目をやりながら、僕と同じ選り分けの仕事をしています。英子の実家は東北地方の大きな病院長の長女で、弟である社長と一緒に世田谷の上野毛で鉄筋二階建てのアパートを経営していました。英子の過去は自分でも余り話したがらないのですが、結婚はしていないらしいのです。

三十に近いと思うのですが、ぽっちゃりと小太りで、とても魅力のある人でした。家柄がよいせいか、もの静かで上品な感じの落着いた物腰の女性でした。

その日も、いつものように社長の姉の英子と、オシボリを選り分ける仕事をしていました。この仕事はしゃがんでするんです。僕がアルバイトで入った三日目頃から、英子は、いろいろと話しかけてくる様になりました。

でも、くだけた話は一切しないので、自然と僕の方からする様になりました。例えば、

二、三度行った事があったモーテルの話とかをしました。そんな話をしだした頃から、しゃがんで仕事をしている英子のスカートの奥が、妙に気になり初めました。僕が視線をやると、彼女は時々気にしたように、足を閉じるのですが、仕事に夢中になっている時は、奥の方まで、はっきりと見えるのです。

毎日、毎日、僕は仕事をしながら、英子のスカートの奥が気になって仕方がありませんでした。いつも清潔な真白いパンティをはいているのです。肉づきのよい真白い太腿、それは、まるで大きく盛り上った二つの丘のようです。そして、その奥のパンティには、うっすらと割れ目までうつるのです。

アルバイトの奥さん達を気にしながら、英子のスカートの奥を見るのが、僕には楽しみでした。仕事も楽しく、時間は瞬く間に過ぎてしまいました。

大変暑い日の午後でした。いつもの様に仕事をしていました。又、僕のくせが出てしまい、英子のスカートの奥へ、ジッと目をやったんです。今日は気のせいか、いつものパンティより、ずっと小さいビキニをはいている様な気がしたんです。でも、色は白でした。

僕はワクワクした気持で、仕事をしながら彼女のスカートの下へ視線を集中して眺めていました。盛り上った二つの山は、英子が少し動くたびに、うっすらと割れ目の動きまではっきりと見えるのです。うっすらと、黒く見えた様な気もします。

僕は、すっかり落ちつきをなくしました。英子のしゃがんだ、すぐ前のオシボリを取るふりをしながら、かがむ様にして近くで見ました。凄く興奮しました。二、三秒のほんの短い間でしたが、僕はジイーッと、見つめてしまったのです。

その時、英子の目が僕の方を見ました。目と目が合ってしまい、僕はあわてて仕事の手を動かしました。初めて気がついた様に膝を閉じた英子は、イヤな顔もせず、何気ない風で又、仕事を続けました。

僕はもう興奮の極に達していました。ピッチリと、コットンのスラックスをはいている僕自身は左側に大きくふくらんでいました。

それは、僕が気がついたより、英子の視線で気がついたのです。気がつくまで時間がかかりました。かなり見られていた様です。ああ、こんなとこを見られて、恥かしい。とまどった僕はトイレへ行きました。トイレへ行くのには、アルバイトの奥さん達の前を通るのです。早足で行きました。

トイレへ入り、小便をしたくない僕は、思わずオナニーをしてしまいました。英子のふくらみと割れ目を思い出し、早い時間で終ってしまったのです。フーウと、大きく息を吸ってトイレを出ました。

オシボリの山の前にしゃがみ込んで、又、仕事を初めました。英子は、今、僕がしてきた事を知っているかの様に、うっすらと汗ばんだ顔を赤らめているのです。僕が戻るのと入れ違いに立ち上って洗剤の空缶に腰を下しました。疲れた様に、ぐったりとしているのです。僕は、まるで英子を犯した様な、そんな気持になり、せっせと仕事の手を動かし初めました。

しばらく空缶に腰を下して休んだ英子は、再び仕事をやり初めましたが、いつも仕事が早い英子にしては、動きがゆっくりしているので、僕が目をやりますと、まるで酒でも飲んだ様なうっとりとした目つきで、ボケッとしているのです。

オシボリの山を挟んで彼女との間は一メートルぐらいしかありません。大きく両膝を開いたスカートの奥は、いつもより、はっきりと見えます。彼女は、ぼんやりと目をつぶっています。僕は顧ってアルバイトの奥さん達が見ていないのを確認してから、彼女の膝の前に、かがみ込んで顔を両膝の間に、つっ込まんばかりにして見てしまったんです。

近くだったので手にとる様に見えました。彼女の大きく盛り上った真中の変化に、気がつきました。真白いビニキのパンティが、ビッショリとぬれているのです。さっきは、たしかに、こんもりと大きく盛り上って、か

すかに割れ目が、ぼやけているほどでしたのに、今、パンティが、お尻の方までぬれてしまっている。そんな彼女を見ていますと、もう、僕は我慢できなくなってしまいました。

彼女の仕事をする手は動いていますが、なんだか、もうろうとして緩慢なのです。

『こんな私でも、まだ魅力があるのかしら』と言っている風にも僕には見えました。

仕事が片づいて行くにつれて、次第に移動して洗濯機のかげになり、アルバイトの奥さん達の死角になるのです。

ラジオが大きく鳴っています。たしか、北島三郎の歌でした。僕は、もうたまらなくなって、彼女の膝に、そっと手をふれました。

彼女は、うつろな目で、ゆっくりと僕の方を見ました。いつもの様に膝を閉じないので両足の奥の方へ目をやりますと、大きく盛り上った二つの丘がピクッと動いたので、思わず手をのばしてしまったのです。

左手の中指をパンティの真中にあて、そっと、たてに動かしました。アルバイトの奥さん達を気にして、ふり向くと、ここからは、全く見えません。彼女は仕事の手を止めて、僕のなすがままにさせています。

肉づきのよい彼女の、ふっくらとした山々は、やわらかく、とても大きいのです。我慢出来ずにパンティの横から指を入れてしまいました。彼女は小さく声を出しはじめましたが、ラジオの音が声を消してくれます。

彼女のふっくらした丘をおおっているパンティの部分が横にずれて、まる見えになってしまいました。グッショリぬれたパンティがそれを簡単にしたのです。

僕は彼女の前にしゃがみ込んで、顔を両膝の所へ入れる様な格好をしました。生ツバをのみ込んだ僕は、彼女の目を見ながら、手を動かしてゆきました。

われに戻った彼女は、顔をこわばらせながら、大きく肩で息をしています。「す、すみません」僕は、小さな声で言いました。自分のした事が、すごくこわかった事を、今でもはっきりとおぼえています。

彼女は、立ちあがり、さりげない様子でトイレへ行きました。多分、あとしまつに行ったのでしょう。

それから一週間ほどたった土曜日の夕方、「たまには家へ遊びに来いよ」と社長にさそわれたんです。「でも」と、僕は英子との、この間のことが気になって、ためらっていますと、横から彼女が、「そうよ、家には彼と二人っきりだから泊っていってもいいのよ。そうそう、家の近くに、この間、開店したスーキ専門のお店があるわ」と言ってくれたので、行く事にしました。

社長の車で世田谷へ向いました。なるほど鉄筋建ての小さなマンションです。二階のつき当りの部屋です。ドアを開けると、すぐ二十帖ほどのルームがあり、向う側に部屋が三つありました。

歩いて五分位の所、第三京浜国道の入口の所に新しく出来たステーキハウスがあり、一ポンドのステーキを注文しました。僕がまん中に坐り左側に彼女が坐りました。コックさんが目の前の鉄板で肉を焼き初めました。サラダも注文しました。

食べさかりの僕は一ポンドのステーキを、ペロリと平げていました。社長と彼女は、僕が泊って行くつもりでいるのです。勿論僕もそのつもりでいました。

部屋へ帰ってテレビを見ながら、三人でビールを八本ばかり空けた頃には十一時すぎになっていました。英子は客である僕に一番風呂をすすめてくれました。僕は社長に先に入って貰い、その次にバスルームへ行ったのです。服をぬいでいると、彼女がノックもせずに入ってきて「ハイ、タオル」と差し出しながら視線を僕の下の方へ向けましたが、すぐドアを閉めて出て行きました。

僕は、なんとなく不安な気持と、もう一つ心の底では、例の助平心がうずいているのでした。十分位でバスから出ましたが、社長はもう自分の部屋へ入って寝ていました。

彼女は冷たいジュースを冷蔵庫から出してテーブルの上へ置いてくれ、アルバムを見せ

てくれました。「それじゃ、ちょっと、失礼しますわね」と、言葉をかけてバスルームへ消えてゆきました。社長の部屋では、もうイビキが聞え、バスルームでは、ザーザーとお湯をかけている音がします。

彼女は、すぐ出てきました。僕の考えすぎかも知れませんが、彼女はネグリジェに着がえるためにバスに入った様な気がします。

膝までの短い白のネグリジェを着た彼女は二十を少し出た位にしか見えません。

「ほほほ、ごめんなさい。こんな格好で」

自分でジュースを入れてきて、僕のとなりのソファーに坐りました。

「あなた、若くていいわね。きれいな彼女がたくさんいるんでしょう?」

彼女は、そう言って、僕の膝の上にひろげてあるアルバムを、半分位、自分の膝の上にひっぱりました。ふかっとしたソファーが気持よく、僕の体をつつんでいます。

なるほど、病院の前で、年老いた母と一緒に彼女が写っています。

僕は厚いアルバムの下で、自分の膝をソッと彼女の膝に寄せつけました。だが、何の反応もありません。ビールのせいか、なんとなく彼女がまぶしい様に見えます。でも、社長が隣の部屋に寝ているのかと思うと、それ以上、何も出来ませんでした。

「僕も寝ようかな」

彼女は、まだ話していたい様子でしたが、立ち上って、「このお部屋で、どうぞ」と、ドアを開けてくれました。掃除のよく行き届いた、きれいな洋室です。「それじゃ」と言いながら、彼女は物足りなさそうに出てゆき隣の部屋に入りました。

真暗にした部屋の上に大の字になりましたが、なかなか眠れません。この間の会社での出来事が思い出されたのです。

二、三十分もした頃です。隣の英子の部屋から、かすかな呻き声の様なものが聞えるのです。パッとベッドからおりると、壁に耳を当てました。いくらか大きく聞えます。電話で話をしている様な感じで、彼女の呻き声が耳に入ってきます。

知らず知らずのうちに、僕は自分の物を握っていました。もう我慢ができません。ソッとドアを開け、真暗なルームへ出ると、息を殺し、彼女の部屋の前に立ちました。

鍵穴から、そっとのぞいてみました。

彼女は部屋を明るくして、案のじょう、自分で自分をなぐさめています。僕は息を荒くして、鍵穴からのぞいていました。のぞいているのが、ゾクゾクするほど気持がよくてそこに釘づけになっていました。

さきほどのジュースの瓶でしょうか。床に坐り、はげしく動かしています。薄いネグリジェを通して見える、その行為は、すごく、僕を興奮させました。

十分ぐらい息を殺して見ていました。やがて立ち上った僕は、自分の部屋に戻って、ブリーフ一つのままでベッドの上に仰向けになりました。ドアを、わざと三センチばかり開けておくのを忘れませんでした。

案のじょう、彼女の部屋のドアが開き、僕の部屋の向うに立っている気配がしました。

たしかに彼女が立っているのです。ルームは真暗なので、はっきり見えませんが、ドアが半開きになっているので気配でわかるのです。彼女の方からは、外の街灯の明りで、僕の方は、きっと、よく見えているでしょう。

ブリーフ一枚で仰向けに寝ている僕を見ながら、彼女はドアの外で息を荒くさせています。のぞき見されている……そんな事は、初めての経験なんです。すごく感じます。

音ひとつしない静かな気配の中で、彼女の行為がよくわかる様な気がします。ネグリジェのスレる音、荒い息づかい。それらが痛いほど、僕にはよくわかるのです。僕の真白いブリーフの中で、僕自身がすごく大きくなってきていました。

彼女に、のぞき見させたい……そんな事を考えながら、僕は寝返りを打ちました。

僕にとっては、とてもとても悩ましい一夜でした。

連載・S時代小説（第四十二回）

紫蘭の門

風流極道軒

美倉節子・画

壮烈なる戦死を夢みながら
ガダルカナルで餓死した先輩に
お通夜は、まだ終っておりません
貴方の恋人（リーベ）は、まだ独身です

人か魔神か

「さきほど、たしか暁、単騎、本営を衝（つ）くと申したの」

用人の樺山たちを退けた領田下野は、酒肴を運ばせると下林流・二本棒の責めをうけている美和をまえにして盃を、さし出した。

「いかにも」

ぐい、と干して盃を返した元禄屋は、

「おっつけ急使が参りましょう。御登場までの一刻、お耳に入れたい儀もございまする」

「聞こう。いや、聞かせてくれい」

ひと膝のり出した元禄屋は、

「さむらいの道やもののふの道を守るようなことではこの難局に処してはいかれませぬ。さむらいの道は侍ひの道、所詮は、人に顎使され犬馬の労をとるだけで〝自我〟というものが、まったくございませぬ」

もののふの道も「物部の道」で太古、神武天皇から聖徳太子の頃へかけて軍事に生きた物部（もののべ）という一豪族の姓に由来する言葉で、これまた〝自己の信念〟というものを皆目（かいもく）もたず、ただ命じられるままに右往左往するだけの集団だったというのである。

領田が、うなずき、美和が喘いだ。

喘ぐ美和のあぐらに組まされた太腿のあわいに、それとなく視線を注ぎながら元禄屋は水野出羽なきあとの幕閣の動きを、鎖国している一島国日本の現状に照しあわせて真剣に語りつづけるのであった。

二人の密談は美和の耳に入ろうはずもなかった。

一糸まとわぬ裸身を「二本の棒」で串刺しにされて身動きひとつできないのだ。

武士の妻だけに許される、丸髷の紫元結はとっくにきれて、根掛けの崩れた黒髪が芙蓉の花びらを偲ばせる肩に乱れかかり、もぎたての水蜜桃のように瑞々しい乳房が呼吸のたびに大きく息づく。

それにしても——

内股と内股のあわいに、あたかも女体その

ものを釘づけにしたように燦めいている銀色の棒のたたずまいは、鳥尾芳年描く「女責め二十八佳撰」にもまして妖しかった。

四半刻も経ったころであったろうか。

牢格子洩る春の陽ざしが、ぐみの実のような乳首から咽喉へと、さらに、ふっくらと下ぶくれしたあぎとへと光をのぼらせた時、

突如、

「殿、殿！　一、一大事でござりまする！」

口々に叫ぶ声が庭をよこぎって、こちらに近づいてきた。

「やっと気付いたようじゃの」

「いかにも」

――その間にも、殿、殿と、てんでに叫びながら追っ取り刀で駈けつけてきた侍たちが、中へ入ることもできず喚きつづけていた。

「あれが侍――主君の命を待たねば、なにひとつ出来ませぬの」

元禄屋が含み笑い、それに応えて、

「苦しゅうない、入れ！」

どやどやと乱入してきた一団のなかから江戸詰家老の中堀典膳が、血走った目で、

「天下の一大事にござりまする。老中筆頭水野出羽守忠成さま、ただいま江戸城内においてて斬り殺されてござりまする」

「ほほう！」

領田は、盃を目八分にあげると、さも何事もなさそうに頷いてみせた。

――フッフッ……

うろたえた家臣たちの出鼻をみごとに挫いた振舞いに共感しながら元禄屋もまた、酒盃をかるく飲み干していた。

中堀が報告するところによると、徳夜叉の襲撃は目もさめるほど鮮烈なものだった。

所は――江戸城中、

半蔵門から入った水野の駕籠が伏見櫓から殿中に入ろうとして振天府のまえにさしかかったとき、欝蒼と生いしげった松の巨樹林の影から、白く幽かなものが、ただよいでたかとみえた瞬間、

――咄！

裂帛の懸声がもの憂い晩春の気を裂いた。

「十数町、離れております桜田門詰の侍の耳にまで、ひびいたそうにござりまする。あとは、またたくまに四、五人の護衛の士が倒れ駕籠の扉が開かれたかと思うと」

――プシューッ！

胴体を離れた水野の首は数尺の高さに舞いあがっていたという。

「討手は一人か」

「はい、たしかにひとり。それが白綸子の着流しに献上博多の帯をしめた、いかにも凛々しい若者にて、その立居振舞いが電光の如く人か魔神かと」

中堀の言葉に、元禄屋を見やった領田は、

「魔神か……フッフッフッ」

意味ありげに笑ってみせた。

そばから用人の樺山が、つけ加えた。

「しかも、その怪漢、左手には馥郁と香る沈丁花の小枝を携えていたと申しまする」

「風流なことでございまするな、領田様」

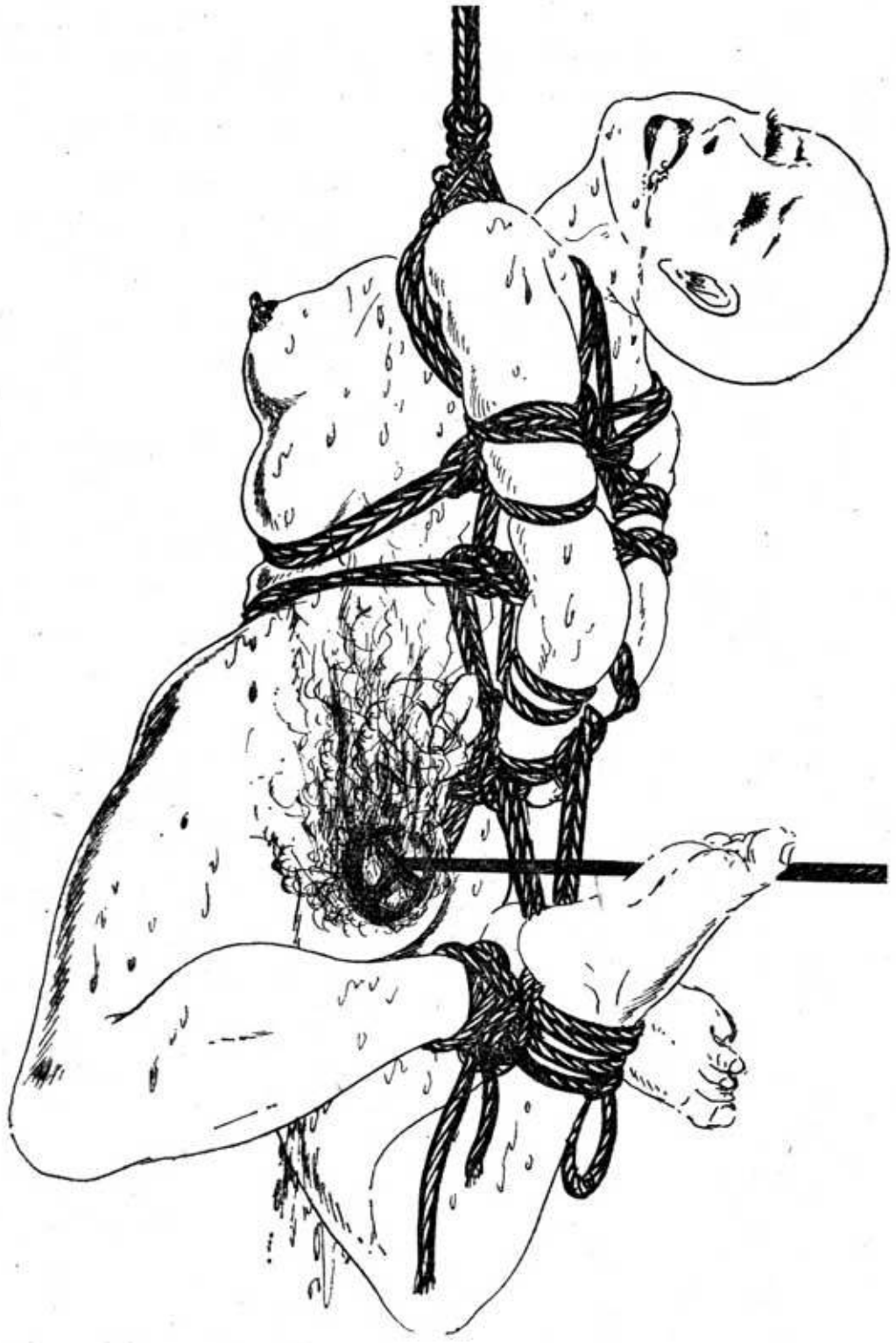
今度は元禄屋が笑って見せた。

「いかにものう」

中堀はじめ、家臣たちを尻目に領田が、

「つわものの道を歩めと申したの」

前号まで――天保四年初夏、豊太閤の遺した〝五夜のロザリオ〟をめぐって**元禄屋**と怪盗・**徳夜叉**が丁々発止のかけひきを展開していた。忙中の閑、**貴子**のソリゲノギシキもおわり、**雅子**と**小紫のお景**の二人を〝穴沢流双つ臼〟で責めて楽しんだ元禄屋は、領田下野の中屋敷へ出かけたが、そこでは衣笠美和が〝下村流二本棒〟の拷問をうけていた。と、黒鍬の者が駈けこんできて、領田に、老中首座水野出羽が斬り殺された事を伝える。



「いかにも〝強者の道〟でございまする。古来、日本、〝悪〟とよばるるものは、すべて〝強者〟の意味にて、〝悪〟と呼ばるるものでのうては天下の御政道を糾すことはできませぬ。白綸子を着流した若者も〝悪〟になりたがっている様子。いや、すでに御家来衆からみれば〝魔神〟に見えたとか。殿も〝悪〟の権化になられませい。いまこそは、その絶好の機会かと」

「フッフッ……で、そちは」

「私は、すでに〝悪〟――地獄に堕ちるは必定と毎日毎日、極悪無残な所行を重ねておりまするわ。ワッハッハッハッハッハッハッハ……」

「余とて……今日よりは……ハッハッハッハ」

登城する領田下野守信季に従って中堀たちは姿を消していった。

下林六平が、ひとり、その場に残ったのは美和を相手に新しい責めを考案するためであろうか。目もくれずに元禄屋は春靄々の光のなかを悠々と麻布別邸へと戻っていった。

手順よく

江戸城内で大名が殺されたのは五十年前の天明四年三月二十四日、新番頭蜷川相模守組番士佐野善左衛門政言の手によって若年寄田沼山城守意知が刺殺されて以来の椿事であり江戸八百八町、寄るとさわると、この噂でもちきりであった。

「お銀、商売は繁昌してるか」

浅草弁天町の家に珍しく顔を出したのは北町の与力・工頭監物であった。

「あーら、旦那。どういう風の吹き廻しでしょうか」

同僚の黒尻善内が、小塚原の処刑場で〝頓死〟したときに訪ねてきたのが、きっかけでときどき顔を見せ、たまには商売の話も持ってきてくれる、ま、悪い客ではない。

「うまい話があってねえ」

「いやですよ、この前のように、よってたかって嬲りものにするだけ。縄掛け一つ、まっ

とうにできない男のところなど、まっぴら」
「いゃあ、すまぬ、すまぬ。あれは拙者の見込み違い」
「見込みちがいも、いいとこですよ」
ついひと月ほど前――
〝縛られ屋〟を欲しがっているからと、一夜五両の約束で根岸まで出かけたのはよかったが、相手というのが大阪は二十四組問屋の旦那衆で、縄をかけて楽しむのではなく、上方独特の、ねちねちしたやりかたで嬲りぬかれて、なめくじの、はいまわるような、いやらしさを味わった朱房のお銀なのだ。
「やっぱり、江戸っ子でなくっちゃあね、旦那。上方の男は、いやですよ」
といいながらもお銀、今日は、どうやら躰があいているのを察した工頭は、
「大丈夫だよ、今日こそは大鼓判だ。江戸っ子のなかの江戸っ子、しかも捕縄術にかけては死んだ伊平治も感心するだろうよ」
「いやだねえ、仏さまのことを言っちゃあ」
それでも仇っぽい深川崩しの髷に飴いろのべっ甲の櫛をさしたあと、仏壇の亡き夫・伊平治に手を合わせる姿は、いじらしかった。
「どこだえ。お客さまは」
「麻布さ。ついそこの六本木。駕籠にするかい、それとも二人で道行きとしゃれようか」
「旦那とじゃあねえ」
ニコッと笑うと、いくらか厚ぼったい唇に何とも言えない色気があふれ出た。それでも弁天町から南へ、銀座に出た二人だったが、あちこちで興奮した人の群れに出くわした。
「いい気味だわねえ、下々のことを考えないから、こんなことになるのさ」
「これ！」
与力の手まえ、めったなことのいえない工頭は、どうやら徳夜叉という怪盗に共感を抱いているらしいお銀を制しはしたものの、
「かまうものかえ。天明四年、佐野大明神が祭られたように今度も〝世直し大明神徳夜叉さま〟と、それはもう大変な評判だよ」
赤坂へでると瓦版屋が多くの人々を集めていたが、いずれも白綸子着流しの若者にやんやの拍手喝采をおくっている様子であった。
そういえば貞享元年八月、大老堀田正俊が稲葉石見守正休に、わき腹ふかく抉られて殺されたときも、宝永八年八月、老中井上正就が目付豊島刑部に斬り殺されたときも、江戸の人々はみな下手人に味方したものである。
「世も末かのう、お銀」
「フッフッフッ……」
含み笑った、お銀。
「世も末だからこそ、妾の商売も繁昌するのさ。これ以上、よいことないじゃあないの」
どうやら、痛烈な皮肉のようであった。
やがて半刻――
着いたところが元禄屋の別邸であることを知ったお銀は、
「工頭さま。旦那というお人も、すみにはおけないわねえ」
「そりゃあ、どういう意味だい」
「黒尻善内とは、ちょっとばかり出来がちがうと、ほめてさしあげましたのさ」
富士額のしたの黒い大きな瞳が、ぎらぎらと燃え始めたのは〝縛られ屋〟商売にとって冥加ともいうべき好敵を予期したせいであったろうか――。
お銀が築地塀を廻り、門から広い邸内を黒縄の黒馬たちに案内されている頃、
「水野の次はそなたかも知れぬぞ、元禄屋」
昨日、待望の老中首座の地位についた領田下野は奥座敷で、こみあげてくる嬉しさを押えかねていた。
「すでに生命は捨てておりまする」
「相変らずじゃのう、フッフッフ」
出された盃をうけると、

「私よりも領田さまこそ、狙われておいでになりましょう」
「そうかも知れぬて。今もそこにいる千登世とやらいう女も余を恨んでいようからのう」
十二畳ほどの部屋であったが半分は畳をあげて床がむき出しにされ、天井や壁には各種のおぞましい拷問道具が並べたてられ、午後の日ざしに照り映えていた。
その照り返しをうけて天井から吊られているのは千登世であった。
日本橋小町と謳われた容色は少しも、おとろえてはいない。いや、むしろここにいる鞭兵衛たちに、さんざん可愛がられることによって、いっそう美しさに磨きがかかったというのであろうか。百合の花の蕾が満開になったような艶やかさを見せていた。
無残なのは、その後方、部屋の隅に、またたく二本の大蝋燭であった。
一本は、義父にあたる春田和泉の股間で揺れている——全裸に剝がれて、まるでもうムチャクチャに芋虫のように縛りあげられて立たされている股間で大蝋燭が、ぶらりぶらりと揺れていた。
もう一本は静止したままであった。
そして——
揺れているほうよりも静止している大蝋燭を立てている〝燭台〟が、より無残といえようか。〝だるま転がし〟の形に縛られて下半身を上に、やっと床についている両肩と背中の一部で豊満な全体重を支えているのは和泉の妻の豊香であった。無論、身に一糸も許されるはずもなく宙に浮いているあぐらに組まされた太腿の中央、凝脂ののった内股と内股のあわいが巨大な花蝋燭の台座なのだ。
——ウ、ウウ……
ときどき洩れる呻きは、桔梗の花の描かれた蝋燭の表皮を伝わった蝋涙が一滴二滴と、したたりおちるせいであろうか。
二人とも猿ぐつわをされてはいるが、目は見える。その眼前で娘として育てた千登世の湯文字が揺れるのだ。
明石ちりめんの地に百合の花を染め出したその湯文字の紐に手をかけたのは、新五郎であった。この和泉の一番弟子は千登世とは、かつては恋仲だったはずだのに。
「お嬢さん。また私が脱がせることになりましたねえ」
来客へのもてなしとして千登世が、ひき出されるたびに責め手として登場するのが、この新五郎だった。
「新、新五郎……」
年は、まだ十八。若いだけに千登世の羞恥は、たとえようのないものであった。恨みつらみを吐きかけようにも、まだ言葉を知らない。だから、ただ、紅色の唇を噛みしめる。
「なんですかい。甘えてみたいわ——とでも言っておくんなさるんで」
「な、なんて……ひ、ひどい」
「ひどいことはありませんよ。いつも、せいいっぱい可愛がってさしあげているのです。お礼のひとつも言って貰わねば間尺にあいませんや」
といいながらも鞭兵衛の顔色を伺っているのは、湯文字をきっておとす合図を待っているらしい。
「今日は手順よく、いきますからね。触る、撫でる、揉む。縛って、組んで、飾り櫛で飾りたて、嗅いで、舐めて吸う——と、まあこんな順序でしてね」
と、よこから白豚が、
「どこのことだい、新五郎。その手順で、いったい、お嬢さまのどこを、嬲ってさしあげようってんだい」
「しゃ……それ、この間、教えてもらったシシャ……シャム……ハー……ハ……レ」

口ごもる新五郎に、
「しゃむ・はーれ——もっと、しっかり言って見ねえか、おい」
「は、はい」
何度か繰り返す新五郎を面白おかしく眺めていた鞭兵衛が、やがて、
「始めな」と、声をかけた。
「は、はい」
いくらか蒼みの残っている乳房から腰のあたりへと撫でおろした新五郎は、
「そうビクビクしなくても、いいじゃあ、ありませんかい。今日が始めてというわけじゃあなし」
「ア、アッ……」
「そんなに騒ぐと、ほれ紐のほうから解けていきますぜ、お嬢さん」
ウ、ウウ、ウウッ
という呻きとともに豊香がこちらを見たのは、できれば身代りになりたいという所詮ははかない願いを訴えたものであったろうが、そのために花蝋燭が揺れて、ふとい熱涙が急速度で下へと垂れて、いっそう無残な呻きをあげさせたのにとどまった。
「お母様も楽しんでいらっしゃる、ほれ」
チラッと部屋の隅をみたが、その間に紐が解けて、あとは新五郎の指先一つで千登世の娘心を、どうにでもあやつることができた。
「新五郎さん、あなたが好き、大好き。抱いて……ね、抱いて頂戴……ってまあ、こんな調子で言ってごらんなせえ。この指先を……オットットット」
いまにも落ちそうな紐を、しっかりと持ちながら、
「どうです、お嬢さま。この私に、こ、ここのところの」
「しゃむ・はーれだ」——と、白豚。
「そ、そのはーれを、触る、撫でる、揉む、そして縛らせてあげますわって、その唇でおっしゃっちゃあ、くださいませんか」
しゃむ・はーれ——むろん Scham Haare ドイツ語である。このドイツ語を鞭兵衛たちは、ほかならぬ、あのオランダの美女モニカ・フッン・インダイクから学んだのである。
こと性にかけて解放的なヨーロッパ人のことわった、その道の日代りに鞭兵衛たちから教本語を、いまごろはアムステルダムやロッテルダムで、しきりにつかっちがいなかった。それにしても、触る、撫でる、揉むというのは、いったい組む、飾り櫛でかざるというのだろう。
「いやですかい、お嬢さま。私に抱かれたいというのは、どうしても、いやだと仰言るので」
「だ、だれが……」
桜桃の実のような乳首が春の光に映えた。
「だれが、お、おまえなどに！」
「どこまでも強情をはる、お嬢さまだ。こんな女と恋仲になっていたかと思うと」
新五郎がボヤくまもなく白豚が、
「この俺さまも恋に目がくらんだものだ！」
芝居がかった茶々を入れたが、そのとき、すさまじい呻きが豊香の唇から迸った。
もうよほどまえからその状態がつづいているのだろう。なかば燃えつきた花蝋燭が灯蕊にちかく溜めていた蝋涙を、いっきょに四方へ溢れ出させた、せいであった。
「あれ、あれ。娘よりさきに、やって貰いてえ腹づもりだぜ。ほら、あんなに、なりやがったぜ」
うすく張りついた蝋涙を、斑猿や黒馬のうす汚れた指先で剝ぎとられるたびに、豊香の呻きは、いっそう妖しくも嬌めいたものになってきた。そして、奇態なことがおこった。もう一本の蝋燭、夫の和泉の内股で揺れていた大蝋燭が、ものの二、三寸も、その位置を

上へと持ちあげてしまったのである。
「ケェ！　この段になってこの野郎、催してやがるぜ！」
「モノズキな野郎だ。てめえの女房が、こうされるのが、そんなに楽しいのかい」
「もっとやってやろうじゃあねえか。いってえ、どのくらいまでもちあがるかをよ」
興にのった斑猿と黒馬が、いっそう指々をどうしようもなく曝け出されてしまっている豊香の内股と内股のあわいへと繰り込みつづけていくのであった。

穴沢流　下の髪結い

「年増には年増の味がありますからねえ」
「大旦那が仰言ったろう、肉は腐りかけのときが一番うめえ――と」
散々いじくり廻して濡れそぼった十本の指をぺろぺろ舐めた斑猿が、こちらを振り返るまで新五郎は、指先の紐を上げたり下げたりして、千登世の羞恥を、いやが上にも、あふりたてていた。
「その顔色なら、もうよかろう」
後手に縛りあげられた二の腕のあたりから乳房にかけて、もう真っ赤にそまってしまった千登世をみて、鞭兵衛が声をかけた。
「腐りかけの肉よりも、やはり私は新鮮なもののほうが……ねえ、お嬢さま」
「ア、アッ！」
限度に達した羞恥が千登世の咽喉を、のけぞらせたが、そのとき、
微風に散る花びらのように明石ちりめんの湯文字が腰のあたりまで滑り、そこで大きく左右にめくれて舞いおちていく。
右膝を「く」の字に曲げてあらわになってしまった秘苑を隠そうとする所作は、いかにも初々しかったが、前はもちろん横も後も男たちに取りかこまれている身では所詮は甲斐のないことで、右側から黒馬が、
「新五郎。どこへ、まず触るというのだ」
と声をかけると左側から赤狐が、
「撫でて、揉む、縛って組むのだったな」
後方からは白豚が、これに負けじと、
「飾り櫛でかざるのは、どこでがっしょう、新五郎さんよ。まさか、ここでは」
目の前の双臀の凹みにチョチョッと触って千登世に悲鳴をあげさせる。
青蛇もいた。鞭兵衛もいた。
それに正面には賓客の領田が、元禄屋と二人で酒を酌みながら、こちらをみている。
「触る、撫でる、揉む――ここまでが、初手でございます」
多くの人々の見守るなかで千登世を責めるという大役に、ゾクゾクする興奮に駆られながら新五郎は、やにわに下腹に手をのばす。
「こ、ここをでござります！」
軽くてうすい紗のような下腹に、一線を画して黒々とした翳りがあった。
「年齢のわりには濃いようじゃの」
領田が、のぞきこむようにして言う。
「いかにも。だからこそ組むこともできますわけで」
「フッフッフッ、縛りあげてのう。じゃが、よほど手さきの器用なものでないと」
「ま、御覧じめせ」
元禄屋とのやりとりの間に、いくつもの悲鳴があがり、新五郎が、触り、撫で、そして揉んでいった。
――ギシッ、ギシッ……
後手に縛りあげた縄尻を吊るした天井の滑車が鳴り、厳しい縄目の間で、こりこりっとした乳房が苦しそうに喘いだ。
「新、新五郎。や、やめ、やめてェ！」
耐えることができなくなったように千登世が喚く。が、無論、返事はない。

返事の代りに、
「これからがみもの。公儀御用櫛師の一番弟子だっただけに指々が、しなやかでございましてな」
と元禄屋が言ったとき、新五郎が、
「では中の手、縛って組んで、飾る――の三つをお目にかけます」
黒い草むらのなかで数本の指々が躍った。
「や、や、やめて！　イ、イ、イヤアア！」
その部分に迫ってくる指々を追い払おうとするかのように幾重にも縛りつけられた背後の両手が伸びたり縮んだりするさまは、いじらしいほどの可憐さであった。
可憐さといえば、男が迫っているというのに、膝か足をつかって蹴り上げようともせずただ内股を、しっかりと閉じ合わせつづけているのも十八の乙女ならではの初心（うぶ）さと云えよう。
「お手伝いしようか、新五郎」
「か、かまいません」
「ひとりで、やれるのかねえ」
「や、やれますとも。ほれ、もう……」
協力を申し出た白豚に、チラッと指先で抓んで見せた新五郎は、早くも次の「縛り」へそして「組ませ」へと移っていった。
「櫛師を止めて髪結床でも始めちゃあどうだい、はやるぜ。〝御婦人、下の髪結います〟って看板でもあげりゃあ、新吉原や新橋のキレイ所で押すな押すなの騒ぎになろうぜ」
「兄貴。すると、なんですけえ」
青蛇の駄洒落を真にうけた白豚が、
「キレイ所のお姐さんたちは、いつもあそこんところをこのように組んでいなさるんで」
と真顔で言ったからドッと湧いた。
「そうだとも。お前、知らねえのか」
「す、すみません。いつも辻君ですませておりやすので」
「違いねえ。辻の君、夜鷹に総嫁（そうか）は二十四文ってな。おめえにあ似合いだろうぜ」
「有難いことで」
何が有難いのか、白豚のこのスットン狂な返事に座中が再び湧いた。
ちなみに二十四文とは橋の袂、材木置場や土手の端などで女を買うときの相場で、転じて私娼そのものを指す名辞となった。当時の大工や左官の手間賃が、六、七十文前後だからそれから換算すると、ほぼ現在（おっと失礼。赤線最後の日以前の）との比較も、できようというもの。いずれにしても、いまは失われた懐かしき佳き時代の想い出ではある。
ともあれ、その間も新五郎の指先は小休みもなく千登世の、しゃむ・はーれと取り組みつづけ、遂には、みごとな文様を描き出したのであった。
「いかがでございます、領田さま」
「フッフッフッ」
賞めはしなかったが、始めてみる光景であることは、細めた目尻で窺うことができた。
「稲穂のようじゃ。黒い稲穂を束ねたとでも申そうか」
「私なら、こう申しまする。黒い真綿を連ねたようなと」
「いやいや、吹けば飛ぶタンポポのはな、あれを黒く染めあげて糸で結んだ……」
「フッフッフッ、黒百合の花蕊に、ひねりをくわえ」
「いや、やはりお下（さ）げ髪じゃ」
「なんのなんの、おどろおどろの黒い……」
「なにを申す、木の下闇の黒き下萌え、それを……」
「それを、どうなされましたかのう。ウ、ワッハッハッハ……」
気の合う二人であった。
知的遊戯というよりも、かけ合い漫才のような会話を、しばし楽しんでいたが、

「穴沢流・下の髪結――と申します」
鞭兵衛が割って入った。
「やはりのう。よいよい、面白い名じゃ。して、これからは」
「髪を結いあげましたる上は、飾り髪もカンザシも、ときには笄（こうがい）も必要でござりまする。ほれ、あれに」
「べっ甲かな」
「いかにも、御老中さま。べっ甲に象牙、馬爪と各種の飾り櫛に、玉カンザシに松葉カンザシ、平打ち、耳掻き、花カンザシと、とり揃えておりまする」
「そうでのうては、かなうまいが。しても巧妙な細工よ」
「ものが小さうございますゆえに、髪飾りも一段と細くなりまして」
白木の三宝の上に和紙を敷き、そこに並べたてられている飾り櫛やカンザシは、まさしく小人の国の女王さまのためにつくられたように小さく美しいものだった。
「これらのもの、みなこの新五郎のつくるところでございまする。櫛師としての腕前は、まことにもって、みごとかと」
「師匠より学びとった技術を生かして師匠の娘の下の髪を飾るとは殊勝な奴じゃの」
ハハ――ッと鞭兵衛、自分がほめられたように平伏すると、
「では新五郎、飾りたててみろ！」
「はい」
親指の爪ほどのべっ甲の櫛が黒い小富士の裾野を飾り、つづいて松葉かんざしが、平打ちかんざしがと、幾つも幾つも新五郎の手で黒い稲穂に、さしこまれていった。
「ア、アッ……ア、ア……」
下腹が次第に満艦飾に飾りたてられていく恥かしさに千登世が鼻の両脇をひろげて啜りあげるように呻いた。
黒々としていた秘苑が、いつしか春の光をうけて七彩の宝石のような燦めきを放つ。
その光茫に男たちが目を細めたとき、
――ム、ムウ――
豊香の花蝋燭が燃えつきたのであった。
残り火が股間を灼く激痛に、失心寸前の彼女に、「おっとっとっと……」と、とびついていったのは白豚であった。
「いくら年増でもこれじゃあ可哀想だよな」
径一寸はゆうにあろう大蝋燭をとりだし、
「しばらく出番がねえんだ。おとなしく燭台になってな」
逆手に握ったかと思うと、
――ジュ……ブ……ズウ……
なまぐさい音とともに、後頭部と肩を床につけた「だるま転がし」の姿態で豊香の肉体が転がったが、それとても、ほんのしばらく男たちの視線を惹きつけたにとどまり、
「新五郎とやら、次は」
と領田の声が、とぶ。
「次は、もちろん、こうしますので」
よこから答えた黒馬が、必死で閉じあわせている千登世の膝頭に手をあてて悲鳴をあげさせ、
「股倉を開かせて！」
あとはスウーッと、ふくらはぎへと撫でおろし、そのまま右足首を握んだかとみると、
「鋲だよ、赤狐」
「あいよ、兄貴、二つだね」
「あたりきよ」
「合点、承知のすけのすけ！」
ほだ――鋲とかき、伝馬町を始め牢内の禁具で、云わば〝足にかける手錠〟である。
それを手早く右足首にかけた赤狐は、続いてふっくらと肉ののった左足首にも枷してしまうと、
「縄をおろしな、白豚」
「あいよ」

と、このあたり鞭兵衛配下の五人の子分、寸前の呼吸の乱れもない。

白豚が滑車の縄をおろす、猿斑が台を運んでくる、吊られていた千登世が崩れるように台の上に双臀をのせる——青蛇が、

「穴沢流・開股一番！」

と叫び、黒馬と赤狐が鋲（ほだ）についている鎖を左右にひく。

「ヒ、ヒイイッ！」

絶叫があがったときには、もうすでに千登世の裸身は高さ一尺、方一尺の台の上で大股開きにされて揺れていた。

気も狂わんばかりの羞恥とは、これをいうのであろう。

高手小手に縛りあげられた女が大きく股を開かされて円卓などの上に曝されている場面は、よくグラビヤなどで見るが、残念、肝心かなめのところに〝バタフライ〟が舞い、パンティがはかされ、修正の筆が加えられ、湯文字が色あざやかにしゃむ・はーれは、むろんのこと、そのあたり一帯を覆いつくしている。

が、いま——、

千登世のはり裂けるほど左右に開かれ、しかも斜め上へと吊りあげられた股間をおおうものは何ひとつなかった。

双丘にうかぶ青い静脈。その頂の、まだ固さの残っている乳首。そして鉛をながしこまれたように脈打っている咽喉もと。

「では、初手、中の手につづきまして、奥の手の、いたぶりに移ります」

いいおわるやいなやゴクンと生唾をのみ込んだところ新五郎は、「ここをどうか御存分に鑑賞して下さいまし」とばかりに開かれきった十八の乙女の花蕊に、いまさらのように魅了されてしまっているのであろう。

魅了されているのは新五郎だけではない。

「兄貴。いつみても、このアマのあそこは」

「どうだってんだ、白豚」

「黒馬の兄貴……」

あとは、つまってしまうのを、

「キレイだとか何とか云ってみなよ。ほれ、あんなところまで見せてくれているのだぜ」

「ほ、ほんとだ！」

白豚が、のぞきこもうとしたとき、

——コトッ

かすかな音をたてて松葉カンザシが、床におちた。

「この野郎、てめえが動き廻るからだ」

「だって、兄貴」

とっさの気転で白豚が、

「この松葉カンザシは、ここを、ほれ、こうして開くために」

一寸にたりないそのカンザシを拾いあげるや、やにわに千登世の右太腿を、かき抱くようにして、ソォーッと、さし入れ、

「ね、兄貴。カンザシというものは、こ、こういうために使うものでしょう、ねえ……」

(こ、この野郎！　御老中さまの前で出すぎたことをしやがって！)

黒馬が一喝しようとしたが、一瞬早く、

「そ、そのまま……」

と、領田が制した。

「そのままにしておれ。光が、よおく奥までしみとおるて……」

シーンとなって一同が見守るなかで、領田の小指が、松葉カンザシとスレスレに、しかも対応するように触れ、

——ヒクッ……

千登世が顫えた。

春の光が木の下闇の下萌えの奥処のさらに奥にまでさしこんでキラキラと濡れた紫水晶のように、紅水晶のように照りはえた。

香ぐわしい匂いが、あたりをつつむ。

何の香りとも形容しがたい、ともかくも男心をときめかす匂いであった。

聞くところによると——

スェーデンやデンマーク、フィンランドなど冬の長い北欧の女たちは、いま千登世がそうであるように女体の奥の方まで日光浴をさせるという。光を惜しんで、つかの間の夏のそれも、ひとりでやるのは恥かしいので大多数の女たちは恋人に手伝ってもらうというのだが、これを〝サン・キッス〟とか〝サン・シャイン・キッス〟とか呼ぶ。そしてそのあと何分間か何十分間かののち、柔らかいその部分に恋人の優しいキスをうけるという。ストックホルムでコペンハーゲンでヘルシンキで金髪あま色黒色と、それぞれのヘアをなびかせながら恋人とともに暮す夏の日は、まさしくこの世の天国でもあろうか。

日本では、まだこのような行為が一般化しているとは思われない。夏のながいせいであろうか、それともまだ〝性〟を十分にエンジョイする社会環境にまで進歩発展していないせいであろうか——いずれにしても、将来の日本、このような習慣が普及しないと断言するのは短慮浅見というべきであろうよ。

とまれ、いま、千登世は、北欧の女たちのように自ら希望してではなくて、高手小手に縛りあげられて強制的に、しかも恋人ではない数人のあらくれ男たちの手によって〝サン・シャイン・キッス〟をうけさせられているのであった。

「ウ……ウ……」

少しの刺戟にもほんのちょっとの温度の変化にも、すぐ反応する敏感な部分であった。

松葉カンザシが揺れ、領田の小指が、うごめくのにつれて千登世は次第に、われを忘れた喘ぎを洩らし始めてきた。

閉じられていた唇も、なかば開いた。鼻翼は左右に、ふくらましっぱなしになった。

「オ、オ、ウ、ウウ……ン」

という奇態な呻きをあげたかと思うと、

「ヒ、ヒイイ、イ、イヤ、イヤ、アア！」

尻上りの嬌声もあがってきた。

開けはなたれた庭のかなたから舞いこんでくる微風が、太陽の光とともに、どのくらい千登世の花蕊に戯れ、また愛情をそそいだころであったろうか。

「奥の手は、嗅ぐ、舐める、吸うの三つであったの」

領田がぴったりと鷲鼻を股間にあてがい、

「よい匂いじゃ。さきほどとはちがって、透きとおった香りじゃ」

「透きとおった香りとは、またいかような」

「たとえれば、紫水晶の香いのような」
水晶を始め、宝石に匂いなどあるはずのないことを知っての領田の言葉に、元禄屋は珍しく、うなずいて、
「言い得て妙でござりまする」
「では、新五郎とやら、舐める、吸うは、余に任せてくれるであろうな」
いなとは言えなかった。蔦に油揚げを掠われたような顔を見せたものの新五郎、うやうやしく頭を下げるほかはない。
「そちは、いつでもやれるであろうが」
「そ、そのとおりにござります。どうかお気のすむまで、舐め、吸ってやってください」
頷いた領田が大きく斜め上へと吊りあげられている太腿に沿って上体をかがめ、陽の光をさえぎらぬように横から、そっと舐めた。
「イ、イヤ……」
ピクッと裸身を動かしたものの、抵抗するだけの心の余裕は、もう千登世にはない。
「お、お許し……ア、アウ！」
「おさしみのまえに土手をば、ちょびと舐め——であったの、鞭兵衛。存じておろう」
「へい、そのとおりでございます」
老中首座の口からでた卑猥な川柳に鞭兵衛を始め子分たちが、いっせいにうなずいた。
「土手とはどこのことかな、ここか、それとも、ここをいうのか、どちらじゃな」
知っているくせに、いちいち抓みあげて尋ねるのも、より千登世の羞恥を煽るためのものであろう。
うららうららの晩春の午後——領田は、いつまでも愛戯をつづけていた。
小半刻ほどもたって、もうどうにもならなくなった千登世が幼い獣が吼えるような声をふりしぼったとき、
「旦那さま。準備がととのいました」
姿を見せた一番々頭の昭吉が、待つや遅しと廊下に、ひざまずいていた。
「よい頃合じゃ。ひき出しなされ」
「はい」
と答えた昭吉が後をふり返ってポンポンと拍手を二つ——一同の好奇の視線を浴びて登場したのは工頭監物に縄尻をとられた朱房のお銀であった。

お銀の湯文字

「しろうと衆に、こんなむごいことを！　おやめなさいましな」
敷居をまたぐと、すぐ目に入った和泉・豊香夫婦と千登世の無残な姿に、お銀は声をあらげた。しかし、そのお銀自身、すでに真岡もめんの肌襦袢と紅地友禅の湯文字を身に許されているだけで、方円流女引き廻し縄をうけている身であった。
これが朱銀のお銀か、小生意気な——という鞭兵衛たちのムウッとした表情に怖じるふうもなく、
「元禄屋さま。このお銀に免じて、お二人を許してさしあげて下さいまし。あれ、あれ、もう蝋燭が、あんなに短くなっているじゃありませんか。あれでは、たまりませんよ」
豊香に向って踏み出そうとする、お銀の縄尻を工頭がグイッと引き、
「御挨拶を申しあげぬか、お銀。領田さまだぞ、御老中さまだ」
「存知あげておりますよ。だけど、御挨拶はあとさ。お銀が縛られ責められるためにやってきた以上、ほかの女には用がないはず」
「まったくじゃの」
元禄屋の目配せをうけた鞭兵衛たちは、あとで吠え面かかせてやるからなという憎悪をむき出しにしてお銀を睨みつけたが、ともかくも豊香の花蝋燭をとりさり、千登世を台から解放したあと、和泉も加えて三人を部屋の

隅に一列に並ばせた。
「これでよかろう、お銀殿」
「ほんとうは、この三人のかたに、せめて着物くらいは着せてさしあげたいのだけど……まあ、いいでしょ。あまり文句のいえる立場じゃあござんせんからね」
歯切れのよい口調で言ったかとおもうと、キラリとうるんだ眸をかがやかせて、その場にすわりこんだのだが、その所作は市村座の舞台で沢村田之助をみているようにメリハリが、きいていた。
そして、
「朱房のお銀、お招きにより、参上仕りました。今宵一夜、俎上の緋鯉にござりまする」
目八分にあげての口上にも、いささかのよどみもない。
「ではお銀殿。裸になって頂こうかの」
元禄屋も如才なく答えた。
この女に始めて出逢ったのは小石川は領田家の中屋敷、菊の花が一面に咲き乱れていた頃であった。そのとき逆剝の美女衛門たちに鵜飼いにつかわれる縄で縛りあげられ女谷流やしろべえの責めをうけていた姿は鮮烈であった。
「では、お言葉に甘えまして」
いったん縄を解かれたお銀は、仇っぽい深川崩しの髷を下げたかと思うと、ためらう色もなく半袖の肌襦袢を脱いでいく。
ほのかに〝江戸の水〟の匂いが漂い、誰かが咳払いする音が妙に高く響いた。
純白の真岡もめんの下から、あらわれたのは、まるで白鳩が二羽巣ごもりでもしているような乳房であった。
実にみごとな双丘の脹らみであり、谷あいの奥深さは見るものをひきよせて止まない。
「一段と妖艶さをましたようでございまするな。これも御寵愛の賜ものかと」
「なんのなんの、元禄屋。余とてふた月かみ月に一度」
そこまで領田がいったとき、
「月に一度でござりまする、御老中さま。今夜もまた、お召しにあずかり、お銀、光栄至極に存じ奉ります」
さわやかな声で、お銀がここで始めて〝御挨拶〟をした。
「おう、そうじゃったかのう」
とぼけて見せる領田に、「これはこれは」と合の手を入れながら元禄屋は、
「女谷流や方円流には慣れておられようが、今宵はひとつ穴沢流の縄の味を、たっぷりと賞味して頂きとうござっての。それで工頭さまにお願いして、わざわざ足を運んでいただいたわけですじゃ」
「有難きことに存じます。して」
湯文字ひとつの裸身で三つ指をつきながら自分をとりかこむ男たちを見上げるお銀に、
「羅卒の鞭兵衛、それに青蛇、黒馬、赤狐、斑猿、白豚と五人の子分たち、いずれも」
あとを言わせず、お銀、
「いずれも穴沢流の達者。今宵、妾を責め場へ追いあげ、骨の髄まで嬲り抜かではやまぬかたがたでございましょう。いかようにも」
あまりにも人をなめた言葉に鞭兵衛たちがいきりたったのも無理はなかった。
何をとばかり青縄、黒縄、赤縄、斑縄、白縄と、それぞれの愛縄を取り出すのを、軽く制した元禄屋は、
「とりあえずのう、お銀殿。これに乗ってもらいたいのじゃ」
指さされたのは豊香たちの頭上の壁にかかっている二本の青竹であった。
「なに、尋常の竹馬じゃ。裸の女が竹馬で遊ぶところが見たいと、かねがね、おもっておりました。乗ってくださるかの」

――（つづく）――

△手記▽

悩ましいゴム合羽

梅川幸子

ゴムマントの魅力

戦前から戦中、そして戦後の三十年代の半ば頃まで、雨具といえばゴム引雨具の時代でした。ゴム引防水布で作られた、さまざまの雨具、マント、レインコート、合羽、それも大人用、子供用、男物、女物と、実に色々あり、雨の日には、これらゴム引雨具のオンパレードの観がありました。現在、三十才以上の方々は、子供時代、あるいは十代の頃、どんな雨具を着ていられたか。そしてその頃、他の人は、どんな雨具を着ていられたか。きっと、ゴム引雨具があった、着たことがあると、おっしゃる方が大勢、いらっしゃるに違いありません。だったら、袖なしの、肩からスッポリと羽織って体全体を包み隠すフード（頭巾）付きの雨合羽――ゴムマントを、ご存知ですね。

先ず、大人用のゴムマントから説明しましょう。これは男物だけで、十年位前までは、よく見受けたものですが、自転車に乗って雨の中を走る人のために作られたものです。厚手の綿布の表面に黒いゴムを引いたもので、裏面は白または茶色のゴワゴワした木綿地になっています。全体に、ゆったりとガバガバするほど大きく作られ、普通サイズで着丈が一メートル十センチ、持大サイズですと一メートル二十五センチもあります。同生地で作られたフードは、襟に並んでいる四―五個のボタンでマントに取り付けられ、フードにはまくれたり、顔を強風や豪雨の際、フードがまくれたり、顔を濡らさないために、鼻と口を隠すための、マスクの役目をする小さなベルトが付いています。

このゴムマントは、メーカーや製造時期によって、いくらか細かい違いがあり、前を内ボタンで閉じるものや、あるいはスナップで閉じるもの、裾が後ろで割れているもの。あるいは、そうでないもの等、いくらかの種類があり、また、裏地（木綿地）も白いもの、茶色いもの等の違いがあります。共通しているのは、いずれも胸のところに「手出し穴」がないことで、普通マントには手出し穴が付き、子供用のゴムマントや、防寒用のマントには必ず付いているものですが、この男物ゴムマントには不思議と付いていません。

つぎに子供用（学童用）ゴムマント。小学生向きに作られたもので、男児用は、前記の男物ゴムマントのデザインを、そのまま小さくしたもので、色は黒の他に茶、緑などがありました。女児用はピンク、赤が殆どで、水

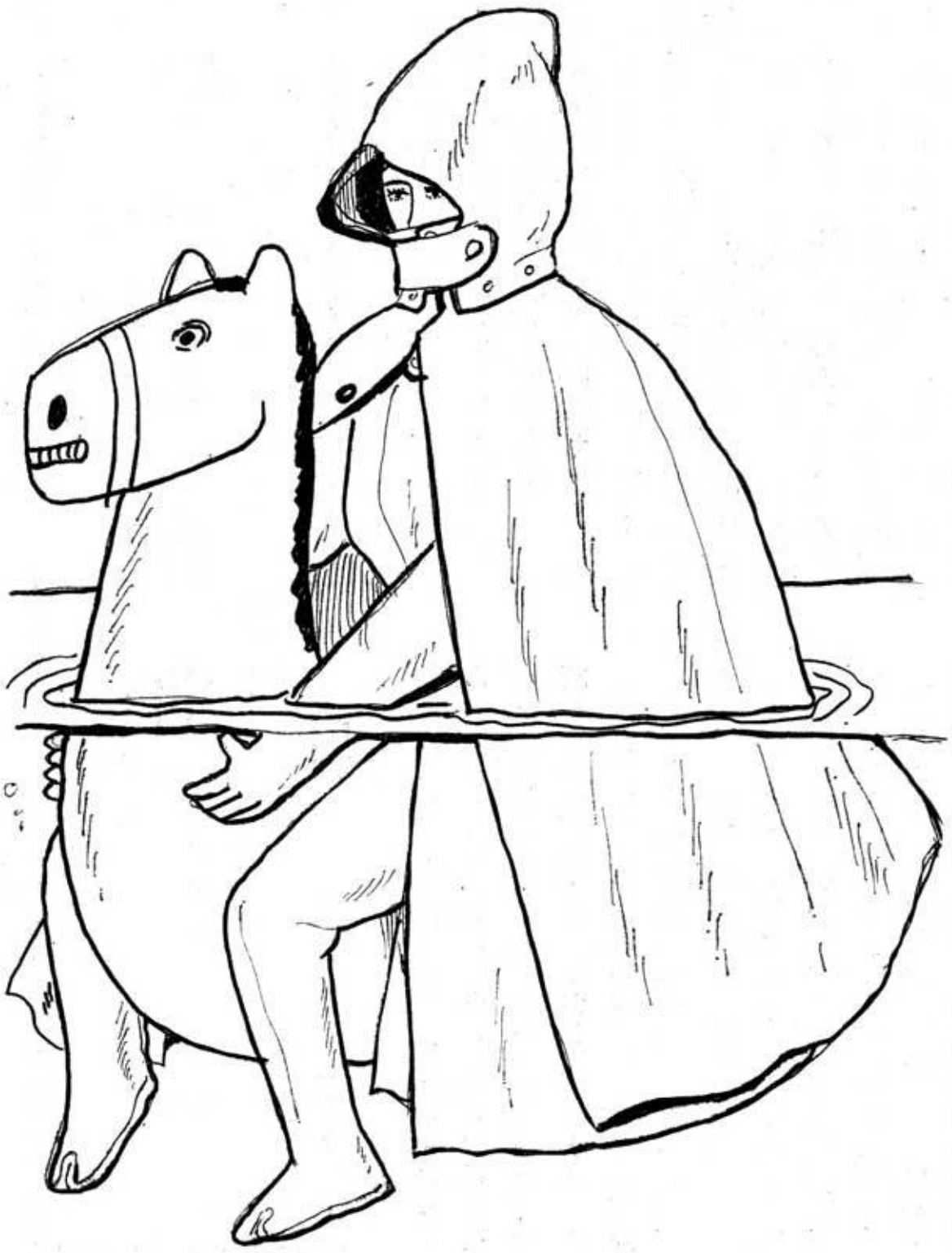
色のもありましたが、特徴は何といってもフードです。農家の女の人や、工事現場などで働いている女の人などが、頭をすっぽりと包み、飾りのヒダがたくさんにある、大きなヒサシの付いた、あのスタイルです。これと同じ形のフードが女児用ゴムマントの特徴でした。このヒサシは、普通は折返しフードをかぶり、雨の激しいときはヒサシを立てて雨を防ぐようになっています。男物ゴムマントや男児用ゴムマントと違い、フードにはベルト（マスク）がありません。これら学童用ゴムマントは大、中、小のサイズに分かれ、大サイズで着丈が八十センチ位です。

ゴムマントの魅力は、何といっても、ゆったりと体を包み隠す、優雅なシルエットのスタイルでしょう。

ゴムマント・スタイルの共通点は、エレガントとロマンチック、そしてファンタジックにあると思います。特に、それを着ている人が女性の場合、着ている人も、それを眺める人（男性、女性を問わず）も、同時に楽しめることでしょう。それに、サド、マゾ、あるいはレズッ気のある方にとっては……それを抜きにしても、まるで外国映画で、騎士道華やかな古き佳き時代の物語に出てくる女王様か、お姫様、あるいは貴婦人、魔女か、修道女のようではございませんか。

それに加えてゴムマントの魅力は、肩にのしかかる重みと、ゴム引布特有の匂いと、ヒヤリとした触感です。

フードを、ま深にかぶり、ゴム長靴をはいて豪雨に打たれるときの嬉しさ。激しく滝のようにゴムマントの表面を、たたきつける雨の音と、フードから肩、胸、背中を伝って流れ落ちる滝のような雨水が、ゴム長の足元にしぶきをあげて流れ落ち、水たまりを作り、渦を巻く。雨水が、たっぷり浸み込んで冷た



くなり、木綿の裏地は次第に雨水が不規則な地図を描いて拡がり、やがて裏地全体が、濡れた雑巾のように、冷たく重く、体にまつわりつく。肩にのしかかるゴムマントの重さ、絶え間ない雨の音と激しいしぶき、孤独、恍惚感……。

ああ、これ以上、ゴムマントの魅力を言い表わす適当な言葉が見当りません。お許し下さいませ。

私のプレイは、屋内（昼夜を問わず）または、雨のしぶく深夜の屋外での、いずれかに分かれます。いずれの場合も、身体の中に燃え上がる、抑え切れない欲望に駆られて、我身を責め苛み、身も心も歓喜の渕に沈むものでございます。

お部屋でのゴムマント・プレイ

先ず身仕度から説明致しますと、その時々で、たくさん所有するゴム衣裳の中から、好きなものを選び、色々な装束を身につけるのですが、その一例を述べてみましょう。

㈠全裸になり、腰まで届く総ゴム長靴を履き履き口についているヒモを、しっかりと結わえ、脱げないようにします。このゴム長は黒（裏は茶色）の漁業、あるいは土建用のぶかぶかした大きなものです。文数は足にピッタリ合ったものです。または、表裏とも茶色の農家の人が田植仕事の時に履いている、爪先が地下足袋のように割れていて、底も地下足袋のように平らなものを履きます。

㈡お台所で使うゴム手袋（左右一組）の指をからみ合せて折りたたみ、口にくわえ、その上からゴム引布で作った猿ぐつわ（鼻孔を開けています）を当てがい、首の後ろで縛り、それが終わると、ゴム製の海水帽をかぶり、アゴで紐を結わえ、婦人用ゴム引レインコートを着て、腰のベルトを結び、フードをすっぽりと、かぶります。

㈢その上から、総ゴム合羽を着ます。水産用のもので、表黒、裏茶色の厚い総ゴム引き、しかも着丈は一メートル二十五センチの特大で、非常に大きく、ゆったりガバガバし、袖口は水が入らないよう、アメゴムで出来ていて、手首にピッチリ喰い込むようになっております、腰には巾の広いベルトがついています。フードも大きく、しかもマスクは普通のゴム合羽と違い、巾広いマスクを左右で振り分け正面で二個のボタンで止めるようになっています。

㈣両手に肩まで届く水産用ゴム手袋をはめ、両方をゴムロープで結わえ、首の後ろから肩にかけて、ぶら下げます。

㈤その上から、前述した男物ゴムマント（これも特大の着丈一メートル二十五センチ）をすっぽりと羽織り、ボタンをキチンとはめ、フードをかぶり、フードのマスクをして、これで出来上りです。

秋とはいえ、閉めきったお部屋の中で、このようなゴム装束の重ね着をするのですからさすがに暑く、次第に汗ばんできて、素肌にまとった婦人用ゴム引レインコートが、ぐっしょりと素肌にまつわりつき、ゴム手袋、ゴム長の中にも汗がポタポタとたまり、額から出る汗が少し頭を動かすと、フードのわずかのすき間から、畳の上にしずくになって落ちます。

ゴム長の足首までである、引きずるようなゴムマントと、顔を隠すほどの大きなフード。

三面鏡に自分の姿を写して、まるでファッション・モデルのように、ゴムマントの中で色々体を動かし、しなをつくってゴムマントの様々なスタイルを、しばらく楽しみます。立ったり、座ったり、ひざまずいたり、両手を伸ばしてゴムマントを大きく拡げてみたりフレンチカンカンのように足を掲げて、ゴム

マントの裾を蹴り上げてみたり……。

汗、ゴムの匂い、ゴム引布特有の重みと、ガサガサ、ゴワゴワと擦れる音。

さて、これからプレイに移ります。

責め具としては、太い反りかえったイボイボのたくさんあるキュウリを一本と、ウィスキーの空きビン（角ビンが良い）を用意します。キュウリにコンドームをかぶせクリームを塗り、その上から肥後ズイキを巻きます。三面鏡の前の、お化粧のときに座る小さな椅子の上には角ビンを置き、これで用意が出来ました。

私は股を開いて立ちはだかり、ゴムマントの裾を持ち上げて椅子に包み隠し、ゴンマントの中では何をしているのでしょうか。ゴム合羽と婦人用ゴム引レインコートの裾のボタンを、いくつか外して裾を拡げ、中腰になりちようど角ビンの口の真上に尻が来るように身構え、ひざを少し曲げています。そして右手には例のキュウリを持ち、余った左手で総ゴム合羽の上から乳房をマッサージしながらやがて襲ってくる、とどめない欲望に、ゴムマントプレイに、身も心も歓喜に身悶え、次第に快楽の渕に沈んで行くのです。

汗とゴム引布の激しく擦れ合う音。猿ぐつわの中では、あらぬたわけた卑猥なことを口走り、ゴムマントを異様な形に起伏させ、畳の上に、けいれんしながら崩れるように座り込みます。うつ伏せに倒れ、横になり、仰向けになり、次第に静かになってから何分ぐらい経ったでしょうか。

フードを脱ぎ、猿ぐつわを外して、ひと休みし、冷蔵庫から冷えたビールを一本、出して来てジョッキに入れ、ぐっと飲み干します。ビールを飲むと短時間の後、尿意を催しますが、これは水中プレーに備えるためでございます。

ホロ酔い気げんの私は、また猿ぐつわをはめてフードをかぶり、元通りのゴムマント・スタイルになり、今度はトイレ（洋式）の便器に跨がって浣腸プレイを致します。それが終わると浴室に入り、滝のようにシャワーを浴びながら『ズブ濡れのゴムマント』を楽しみます。「この頃、お天気続きでイヤになるワ。一度、大雨が夜に降らないかしら」と天候を恨みながら人工雨で間に合せるのです。シャワーに打たれた後、ザブザブとお湯に入り、猿ぐつわを外してガブガブとゴム臭いお湯を飲みながら、湯舟の中で体を動かして、鼻、目、額、髪の生えぎわ、と湯の中に沈めます。この頃になると、さっき飲んだビールのせいで尿意を催し、我慢も限界に達しました。

首までお湯に浸かり、うっとりと目を閉じて、お湯の中で存分に放出するときの快美感は、どうでしょうか。これが屋内のゴムマント・プレイでございます。

屋外でのゴムマント・プレイ

つぎは、雨の激しく降る夜の屋外のプレイを申しましょう。

ビール一本を飲み干し、前述のゴムマントスタイルで外に出て、草が背高く生い茂った田んぼのそばの草むらに行きます。午前二時頃ですから、こんなところに人は来るはずはございません。責具としては、前述のキュリを二本、浮袋（ゴム製の普通の大きな輪形のもの、馬の形に作られた大きなもの）二コ浣腸器一式などです。

真っ暗な天地、降りしきる豪雨に打たれて泥まみれの地面に立ちはだかり、秘密のプレイに悶絶し、それが終わると水中のゴムプレイに移ります。

水中のゴムプレイをするときは、何といっても一番、大事なことは、安全な場所を探す

ことです。池や沼は川や海と違って流れがないだけに安全といえますが、急な深みのあるところでは絶対にしないこと。必ず背の立つところを探し、岸から深いところまでの道順や、どのへんまでなら安全か、あるいは、この池や沼で一番、深いところで立って、どのへんまでか、底は泥か砂利かを、よく前もって調べておくことです。

馬の形をした浮袋をふくらませて水面に置き、それに、どっかと跨がります。（水中プレイのときは猿ぐつわを外します）何しろ、このゴム装束で跨がるのですから、馬の背中まで沈み、それにゴム長に水が流れ込んで、まるで重りの役をし、そのために私は馬に跨がったまま、お腹まで水中に没してしまいます。水の中で、まるでアヒルが水を両足で掻くように、ゴム長の両足を動かし、だんだんと池の真中の深いところに進み、浮袋のセンをゆるめます。シュー、ブクブクと音がし、泡が立って、次第に馬の形が崩れ出し、馬に跨がった私は、だんだんと水中に没して行きます。

マントにくるまった西洋の女王様（あるいは、お姫様）が悪人に追われて森の中の池のそばまで逃げてくる。やがて悪人どもが迫ってくる。女王様は池の中に馬を乗り入れ、向う岸に必死になって渡ろうとするが、その池は底なしの泥沼だった。馬の激しい、いななきとともに、女王様は馬もろとも、ズブズブと水中に沈んで行く……というような風情は如何でしょうか。

お姫様の私は、胸から肩、あご、口、鼻、目、ひたいと、遂に全身、水中に没して行くのです。そして、ゴム装束の裾が水面で異様にふくらんで拡がります。

でも、この池は一番、深いところで、ちょうど私のトル三〇センチ位ですので、あごまで水面がくる程度なので安全です。

私は仰向けになって「アレー、助けて！」などと、フードのマスクの下で、か細く、つぶやきながら、ゴボゴボ、ゲボゲボと、わざと溺れ沈むのでございます。このようなプレイは何度してもスリルがあるものなのです。いったん沈んで底に足をつけて立ち、水面に顔を出すと今度は水中ダンスをいたします。水面から顔を出したり、没したり、いろいろなポーズを楽しみ、家を出るとき飲んできたビールのせいで尿意が激しくなりましたが、今にも放出しそうになるのをこらえて、岸に上がり、輪形の浮袋をふくらませ、総ゴム合羽の胴にくぐらせ（もちろん、その上からゴムマントは着たまま）、浣腸器をセットしてまた水中に入り、浮袋につかまって水中に漂いながら、浣腸プレイを行ないます。便意も尿意もガマンが限界に来て、こらえきれなくなった私は、浮袋から手を離し、ブクブクと水中に、わざと沈みます。沈みながら水中で手足を存分に伸ばし、思いきり放出するときの快美感。すぐにポッカリと浮かび上って再び浮袋にしがみつき、両足で水を掻いて浅い方へ進んで行き、浮袋を岸に放り上げ、岸に背中をもたれさせて首まで水に浸って足を投げ出して座り、いろんな瞑想にふけります。

夜が白みはじめると、そろそろ立ち上がり持ってきた品をビニールの風呂敷にしまい、家路を急ぎます。家に着くと浴室に行き、シャワーで泥水で汚れたゴム装束を洗い、そのままお湯の中に入り、お湯の中で、もう一度自慰にふけります。終わると、ゴム装束を脱いで水洗いし、よく拭いて、かげ干しにします。それから、ぐっすりと寝るのです。寝巻の代りに婦人用ゴム引レインコートをまといゴム手袋（これは普通の炊事用）をはめ、足には腰まで届くゴム長をはいて……。

――（つづく）――

懸賞応募作品——体験告白

鼻孔撮影会

佐藤光保

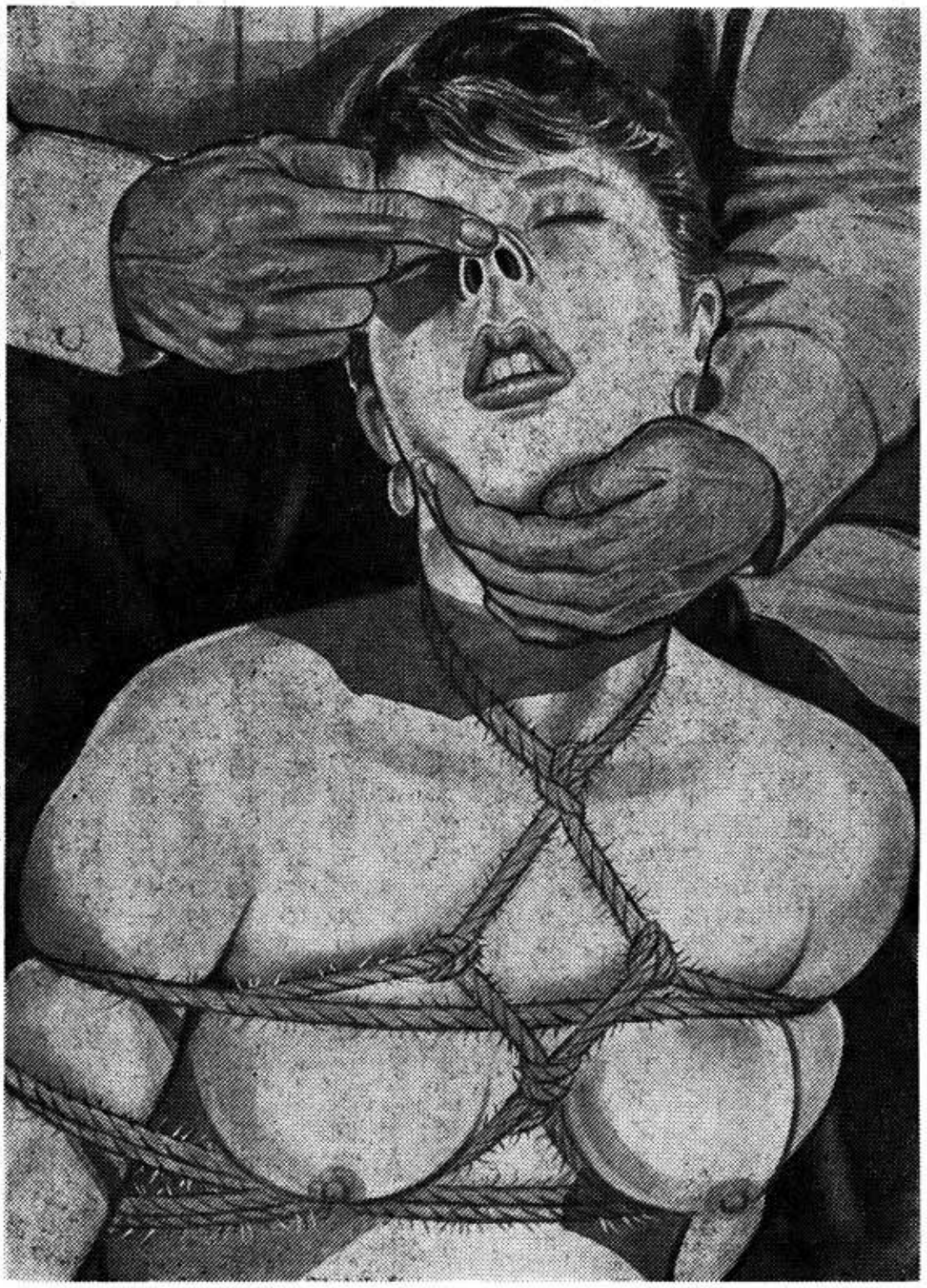
（1）

私は、美しい女性の恰好のよい鼻の孔に、自分でも異常と思える程、強い執着を持っている鼻孔マニアです。女性の形のよい鼻孔を写した写真やポスターを見たとき、私はそれが無性に欲しくなって、何が何でも、その写真を手に入れないことには気が済まないのです。それで、商店のショーウインドー等に貼ってあるポスターを、無断ではがして来てはスクラップブックに貼り、鼻孔写真のコレクションを作ってきましたが、このことは、六月号の「私のコレクション」で述べさせていただいた通りです。

女性の鼻孔を見たい、という私の特異な性向は、その後も、とどまることなく昂進してゆき、私は鼻孔写真の収集に、うき身をやつしていたのですが、やがて、このコレクションにも限界があることを悟らされました。というのは、「私のコレクション」でも述べたように、鼻孔を見せてくれるのは、ポルノ雑誌のブスな女ばかり。鼻の恰好のよい美人はめったなことでは、顔をのけ反って鼻の孔を見せてくれはしないからです。

鼻の形が整っている美人の写真を見るたびに、私は何時も、〝ああ、こんなに恰好のよい素敵な鼻なら、この人は鼻の孔も、きっと良い形をしているに違いない。この人が顔を仰向けて鼻孔を見せてくれたら、どんなに素晴しいことだろう〟などと考えるのですが、これは、しょせんは無理な注文というものです。なぜなら、慎み深い美しい女性は、顔をのけ反って、自分の鼻孔をあからさまに見せるような、はしたない真似は、決してしないものですから。

私は以前、女性週刊誌で「写真の上手な写され方」という記事を読んだ事があります。「チーズというと、口もとが愛らしく写る」とか「両目を閉じていて、合図と同時にあけると、パッチリした目に写る」等々ですが、それらの中に、「アゴを前方へ突き出したりカメラの位置が低かったりすると、鼻の孔が黒く写ってしまうので注意するように」とい



うのがありました。つまり、鼻の孔は写真に写されては、いけないもの。みだりに他人に見せてはならないもの——という考えが、どうも、女性にはあるようなのです。

女性がこのように、鼻孔に対して羞恥の感情を持ち、なるべく人に見せないように意識しているとすれば、私の好きな、鼻孔を写された写真が少ないのも、また、当然といわなければならないでしょう。

○

鼻孔写真の収集に行きづまりを感じた私は考え抜いた末、それなら、自分自身の手で女性の鼻孔写真を作ってみよう、と、決心をしたのでした。

とはいっても、それが知人にしても又、他人にしても、女性のそばに近づいて、むやみに鼻孔ばかり写す訳にもいきません。その点カメラ会社などで催すモデル撮影会なら、大勢のカメラマンの中に紛れ込んで、美しい女性モデルに近づき、遠慮なく撮影する事ができますので、撮影会に行って女性モデルの鼻孔を写してみよう、と考えたのです。

そこで、まず、鼻孔撮影用のカメラが必要になってまいります。それまで持っていたレンズシャッター付の三十五ミリカメラでは、二メートル位の撮影距離で、ほぼ全身が写ってしまい、肝心の鼻は、ケシ粒のように小さくなってしまいます。鼻だけをクローズアップで写すためには、どうしても、望遠レンズが必要になってくるのです。

私は、女性の鼻孔を写す目的のために、私にとっては大金といえる金額を投じて、新たに、レンズ交換のできる一眼レフカメラを買い求めたのでした。

アサヒペンタックスのボデーと、焦点距離九〇ミリ～二五〇ミリ変倍のズームレンズとを買いました。このレンズを最大焦点距離にすると、約二・五メートルの撮影距離で、女性の顔だけが、ファインダーの視野いっぱい

になります。さらに、コムラーテレモサ×2を使用すると、焦点距離は二倍の五〇〇ミリになって、モデルから二・五メートルの間隔をおきながら、鼻だけを超クローズアップで写すことができるのです。

また、一眼レフカメラのファインダーは透視式になっていますが、これも鼻孔を写す目的のために、L型のアングルファインダーを買い求めました。

人間の鼻孔というものは、顔面の下方に向いて開いていますので、正面の眼の高さから相対した場合には、殆ど見ることができないものです。ですから、鼻孔を写すためには、立っているモデルにできるだけ近づいて、カメラを、地上スレスレに低く構えなければなりません。こんな極端なローアングルになりますと、透視ファインダーを覗くのは殆ど不可能になってしまいますが、アングルファインダーを使いますと、比較的、楽にファインダーを見ることができるのです。

つぎにフィルムですが、五〇〇ミリの望遠レンズを使いますと、手ブレを防ぐために、シャッターは五〇〇分の一秒できらなければなりません。また、テレモアを使う関係から絞りをF11位に絞る必要があります。そのため、超高感度を要求されますので、フィルムはトライXを使います。それでも、なお光量が不足しますので、その日の天候にもよりますが、カメラのASA感度を八〇〇～一六〇〇にセットします。こうして撮影したフィルムを、自宅で増感現像するのです。

(2)

郊外の某遊園地で、カメラ会社主催による大撮影会が行われました。私は、カメラその他、鼻孔撮影用具一式を詰めこんだギャジットバッグを肩にかけ、美女の鼻孔を撮影する喜びと愉しさに胸をふくらませながら、撮影会場へと出かけたのでした。

今日の出演モデルは、東映の映画女優八人の他、ファッションモデルが約二十人。いずれも十八才位から二十五、六才までの、ピチピチとした美しい女性ばかりで、ミニスカート、マキシ、パンタロン、或は着物など、思い思いの装いを凝らしています。

でも、モデル達の華麗なファッションも、若々しく伸びやかな肢体も、私にとっては、実は、どうでもよいことなのです。なぜなら私の撮影の目的は、彼女たちの鼻孔だけなのですから――。

定刻十時。遊園地の真ん中にある野外ステージの舞台の上に、モデル全員が並んで、司会者がモデルの紹介をはじめました。

私がモデル撮影会に出るのも、今日が三回目で、鼻孔を撮影する要領も大分、判ってきたのですが、それには、このモデル紹介の時が一番、大切なのです。というのは、三十人近くのモデルが広い会場に散ってしまいますと、ただ、むやみに歩き廻っても、鼻の形のよいモデルを探し当てることは、到底、困難になってしまうからです。それで、このモデル紹介の時に、美しい鼻のモデルを何人か選んでおいて、その女性の鼻孔だけを、重点的に撮影するのです。

いずれがアヤメ、カキツバタと並ぶモデルの顔を見比べて、慎重に鼻選びをした結果、今日は、五番、十六番、二十四番のモデルを撮影することに決めたのでした。

紹介が終わったモデルは、撮影指導員と、番号のプラカードを持った係員の三人が一組となって、広い遊園地の中に、思い思いの方向に散ってゆきます。大勢のカメラマン達もモデル嬢の後ろから、ゾロゾロとついて行きました。

○

私はまず、十六番のモデルから撮影するこ

とにしました。

着物を、キッチリと着こなしたこの女性はまるで、日本画から抜け出してきたような美人です。面長な顔立ちに切れ長な涼しい目。蕾のように可愛い唇。そして、私の撮影の目的である鼻は——。スッキリと高く通った鼻筋。肉のうすい、繊細な感じの、形のよい鼻翼。そして、縦に細長く伸びている二筋の、柿の種のような鼻の孔が魅力的でした。

モデルは、日本庭園まで歩いて行くと、石灯籠の前に立って撮影ポーズをとりました。

カメラマンの人数が多いので、係員は地面に半径二メートル位の円を描いて、その中に入らないように注意をします。私は、すばやくモデルの側面の一番、前にしゃがみこみ、地上スレスレの低い位置から、思いきりローアングルで、カメラを構えました。

ファインダーを覗きながら、慎重にピントを合せていきますと、ボヤケていたモデルの顔が、次第にハッキリと浮きあがって来ました。次に、ズームリングを廻しますと、顔はグッと近くに引き寄せられます。リングをいっぱいに廻して、焦点距離を五〇〇ミリにすると——。アアー、あの柿の種のような美しい鼻孔が、ファインダーの視野いっぱいに拡大されたのです。

私は、胸をドキドキさせながら、フィルムを巻き上げる操作も、もどかしい思いで、矢つぎ早にシャッターを押しました。

モデルの周囲を、幾重にも囲んでいるカメラマン達からも、驟雨のようにシャッターの音が響きます。

「モデルさん、眼線（メセン）ちょうだい」

「もうちょっと、上を向いて」

「モデルさん、こっちの方も向いてよ」

周りじゅうから掛けられる声に、モデル嬢は、にこやかな笑顔を向けながら、さまざまなポーズを作ってゆきます。

ここで、女性の鼻を撮影する場合の、カメラの角度について、私の考えを少し、述べてみたいと思います。

一、正面。顔写真といえば、この正面から写した真顔が普通であり、最も多いようです。顔全体の特徴をよくとらえていますが、鼻の美しさから見た場合、鼻孔は殆ど見えません。平面的で立体感に乏しいので、私はあまり写しません。

二、側面。外国のコイン等に刻まれているプロフィールですが、日本人は一般に鼻が低いためか、外人のように、横顔の美しい人は少ないようです。鼻根部から鼻先部に至る、まっすぐな鼻梁の線の美しさを最大限にとらえられますが、鼻孔表情の美しさのわからないのが欠点です。

三、下側。顔の真下から写した場合で、鼻の孔が、丸見えに写ります。八の字形に、二つ並んだ鼻孔を余さずとらえるこの角度は、鼻孔の美しさを最大限に表わしてくれますが、惜しいことに、鼻筋や、鼻翼の美しさは判りません。

四、斜上方。両目の間から豊かに隆起し、鼻頭に至る鼻梁の美しさ、優しい丸味をおびた鼻頭。フックラと柔らかそうな小鼻などを立体的にとらえられますが、鼻孔は全く見えません。肉づきの豊かな、恰好のよい小鼻からそれに囲まれているであろう美しい鼻孔を、想像するだけである。

五、斜下方。この角度からですと、鼻孔がすべて、あからさまに見え、その上、高い鼻梁の美しい線も、鼻頭や鼻翼の美しさも同時に見ることができます。柔らかそうな小鼻に囲まれた、恰好のよい鼻孔。そして、つややかな凝脂に輝く鼻柱（左右の鼻孔を隔てている肉）の向う側には、もう一つの鼻孔がわずかに窺える——。けだし、この角度は、女の鼻

の美しさを、最も立体的に、余す所なくとらえることのできる角度だと思うのです。

○

いきおい、私はモデルの側面にかまえて、斜下から鼻孔を狙う構図が、もっとも多くなるのです。

モデルが頭をまっすぐにしている時は、斜下から覗くこちら側の鼻孔は、大きく、あからさまに見え、鼻柱の向う側にもう一つの鼻孔がわずかに窺える程度ですが、頭を向う側に傾けると、ちょうど顔の真下から見たように、二つの鼻の孔が、こちら向きに丸見えになります。周囲のカメラマンから注文されるままに、モデルは、しきりに頭を動かして、ポーズを変えます。すると、その動きに応じて、斜下方から覗きあげる鼻孔は、さまざまな角度を描き、微妙に変化してゆくのです。私は、その美しい鼻孔の変化に、異常な神経を刺激して、ジッと息をつめ、モデルがチラッと鼻孔を見せる瞬間をとらえては、す早くシャッターを押すのでした。

（3）

十六番の女性の鼻孔を、充分に撮影しつくした私は、その場所を離れて、次のモデルを探そうとしました。

その後、カメラマンの数はグンと増えて、とにかく凄い人です。私の後ろには、幾重にもカメラマンの人垣ができていて、外へ抜けて、ようやく人垣の輪から出ると、早速、次のモデルを探し始めました。今度は、五番か二十四番のモデルなのですが、どちらも、なかなか見つかりません。

広い園内を、グルグルと歩き廻るうちに、池に沿った藤棚の下に、五番のモデルがいるのを、ようやく見つけて、私は、人垣の輪の中に、もぐり込みました。

この女性は、体が小柄で、ファニーフェイスというのでしょうか。ポチャポチャとした丸顔の、見るからに愛くるしい顔立ちをしています。色は抜ける程白く、チンマリと小さくて可愛い、それでいて形の整った鼻をしていました。鼻筋が少し寸づまりに軽く反り、鼻先がクッと上向き加減で、形のよい二つの鼻孔から上唇に流れる線が、チャーミングです。特に、上向き加減の卵形をした可愛い鼻の孔が、すごく魅力的でした。

鼻孔は下方に向いて開いているので、正面から相対した場合には、あまり見えないものですけれども、この女性ならば、顔を正面から見た場合でも、上向いた二筋の鼻の孔が、前から、よく窺えることであろう。

私のカメラは、このモデルの好もしい鼻孔を、執拗に狙い続け、つぎつぎとシャッターを切っていったのです。

○

このモデルは、体は小柄ですが均斉のとれた素晴しいプロポーションの持主です。美事に発達したバスト。キュッと細くくびれたウエスト。そして、ミニスカートが、よく似合う、かもしかのような足をしていました。

私以外のすべてのカメラマンは、この美しい脚線美や、可愛らしい顔を撮影しているに違いありません。また、それが、通常の人間の通常の欲望ではないかと思われます。しかし、私の興味の中心は、もっぱら、この女性の鼻なのです。仮に、このモデルが、一糸も纏わない生まれたままの姿になったとしても私は、その裸体美よりも、彼女の鼻孔美の方を撮影し続けることであろう。

それにしても、女性の顔の中央部に隆起している肉体の一部分が、何故、これほどまでに、私の心を惹きつけてやまないのであろうか。このように、女性の鼻孔にばかり執着し憧憬を感じる私は、鼻フェチストというので

あろうか——。

○

やがて、時刻は正午近くになりました。

撮影会は、十時から正午まで午前の部を行い、中食休憩の後、午後一時から三時まで行われるのが普通なのです。係員が、

「間もなく正午になりますので、午前中の撮影は、ソロソロ終わらせていただきたいと思います。最後に接写をご希望の方は、近くに寄ってアップで撮って下さい」

と言いました。

それまで、三メートル程の間隔を取られていたカメラマン達は、待ちかねたように、ワッと、モデルの近くに殺到します。小柄なモデルの体は、その人の波にのまれて、忽ち見えなくなってしまいました。

「アレー、助けて！」

人の渦の真ん中から、モデル嬢の悲鳴が聞こえて来ます。

「押さないで下さい……。押さないで」

係員は、必死になって制止をしています。

すでに望遠レンズで、充分に接写を済ませている私は、そんな状況を、少し離れた小高い場所から眺めていました。

モデルの真近に近づいたカメラマン達は、彼女の顔スレスレにカメラを近寄せて、盛んにシャッターを切っています。中には、接写レンズを使っているのであろうか、カメラを片手に持って、モデルの顔の前に突き出し、顔にレンズを付けるようにして、鼻の孔を接写している人もあります。そんな光景を眺めながら、大勢の中には、私と同じように、女性の鼻孔に興味を持つ人もいるのだろうか？などと思いました。

（4）

——午後一時。撮影再開です。モデル達が中食休憩をしていた大食堂から、プラカードを先頭に、モデルが一人ずつ、出て来ました。出口の両側は、ギッチリと人の波で埋めつく

され、人垣にはさまれた狭い通路を、モデルは一列になって通って行きます。

やがて、私のお目当ての、二十四番のモデルが出て参りました。

この女性は、無名のファッションモデルですが、なかなかの美人です。目はパッチリと大きく見ひらき、花の蕾のような、あどけない唇。そして、私が最も関心を持つ鼻の形の美しさは、どうであろうか！　スッキリと高く、肉が程よくついた、素晴しく形の整った鼻を持っています。

「これは、すごい。すばらしい鼻だぞ」

私は、すばらしい獲物を見つけた興奮に、ワクワクする胸を押えながら、モデルの後ろについて行きました。

モデルは、広場の中央にある大噴水の縁石の上に立って、ポーズを作ります。私は例のように、モデルの横側に思いきったローアングルで構え、ファインダーを通して、改めて彼女の顔を見ました。

この女性は、日本人にしては彫りの深い顔をしています。鼻の高さは、日本人より外人に近いくらいで、理想的な角度でクッキリと隆起し、横から見た場合、眉の間、つまり鼻根部から鼻先部まで、精巧な造り物のように一直線に走っています。そして先端は、ふくよかに肉づき、優美な丸みを微妙に描いているのです。また、色の白い小鼻は、ふっくらとした肉づきで適度にひろがり、それに囲まれた鼻孔の、なんともいえない優美な形状はまさに、造化の神の傑作とでもいいたい程の美しさです。

「ウーン、すばらしい！　何という、美しい鼻の孔なんだろう！」

私は、背筋に戦慄が走るのを覚えました。私はシャッターを押すのも忘れて、しばらくの間、ファインダーの視野いっぱいに広がった美しい美孔を、ウットリと見つめておりました。

私の構えている位置が、モデルの側面なので、私の存在はあまり目立たないのですが、それをよい事にして、私はモデルの女性の鼻孔を、不遠慮に、のぞき込んでいたのです。モデルが顔を右へ向ければ、その鼻を追ってカメラも右へ、左へ向ければカメラも左へ、望遠レンズは執拗にモデルの鼻孔を追い続けます。おそらく、この女性は、こんなに近々と自分の鼻孔を見られていよう等とは、夢にも考えていないことでしょう。

それにしても、こうして、顔の下側から見上げていますと、女性の鼻孔というものは、エロチックというか、何か、凄くセクシャルなものが感じられるように思います。故谷崎潤一郎氏が「鼻は淫猥なものである」と、いみじくも言われたのを、ずっと以前、何かの本で読んだように記憶しております。当時はまだ、鼻孔などに興味がなかったので、どうして鼻が淫猥なのか、こまかい事は忘れましたけれども、今、こうして至近距離からのぞきこむ女性の鼻孔には、何ともいえない強烈なエロチシズムがあるように思いました。

○

やがてモデルは、噴水池の縁石から降りて来て、芝生に腰をおろしました。そして、撮影指導員に介添されて、両手を組んで頭の下に当てると、芝生の上に仰向けに、長々と横たわったのです。大勢のカメラマンは、地面に横たわっているモデルの周囲を、グルリと囲みました。

スワ！　今こそ——。私は躍りあがりたい気持を抑えながら、ことさら、モデルの足の方に回り、足元にしゃがんでカメラを構えました。つまり、私は彼女の顔を、足元から逆向きに、のぞいたわけです。美しい彼女の顔の美のポイント。最大の魅惑の凝結である恰

好のよい鼻の孔は、今や、完全に私の真正面にさらされたのです。

胸を躍らせながら、ファインダーを覗きますと――オオ！　そこには、官能を揺さぶる美しい二つの鼻の孔が、五〇〇ミリの望遠レンズにグーンと引き寄せられて、ファインダーの視野いっぱいにクローズアップされていたのです。綺麗な凝脂に輝きながら、形よい左右の鼻孔を隔てている鼻柱。暗い鼻腔の奥にひそむ、神秘的な陰影！　いかにも呼吸をしているかのような、胸に迫る、なまなましさ！　こきざみに震え、ヒクヒク動いたように見える立体感！　それは、まさに、神秘な鼻孔美の極致でした。

私は気を取りなおして、丸見えになった二つの鼻孔を狙って、機関銃のように続けざまに、シャッターを押し続けたのでした。

○

今日は、ほんとうに幸運であった。こんなに美しい鼻の女性に、三人も巡り会えようとは考えてもいなかった。私は、三人の美しい女性の鼻孔を、堪能するまで観賞したうえ、用意して行った三十六枚撮りフィルム五本をすべて消費してしまったのです。

もちろん、こんなに鼻孔ばかり写したフィルムなど、町のカメラ店に持って行くわけにはいかないので、DPも自分でやります。そのため、引伸機などの暗室用具も、一通り揃えました。アップで撮影した女性の鼻孔を、さらに、キャビネ版ぐらいにまで引き伸ばして焼くのです。

これがカラー写真ですと、ほんとうに申し分ないのですが、現在のところ、自宅でのカラープリントは困難ですので、白黒写真で我慢するほかはありません。しかし、暗室で、女性の美しい鼻孔をプリントする時の楽しさは、又格別で、思わず時間のたつのを忘れ、ときには、暁方までプリントに熱中してしまうこともあるのです。

こうして、私のアルバムには、他人には見せられない、秘密の、女性の鼻孔ばかりの写真が次第に増えていったのです。

――（おわり）――

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売！

一月分	1冊	六〇〇円（送共）
三月分	3冊	一八〇〇円（送共）
半年分	6冊	三六〇〇円（送共）
一年分	12冊	七二〇〇円（送共）

郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八暁出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず〝現金書留〟にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代六〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回発送の際、明細を雑誌に添附致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。